

津寺(加茂小・体育館)遺跡

—吉備中枢地における集落遺跡の発掘調査報告—

2009年3月

岡山市教育委員会

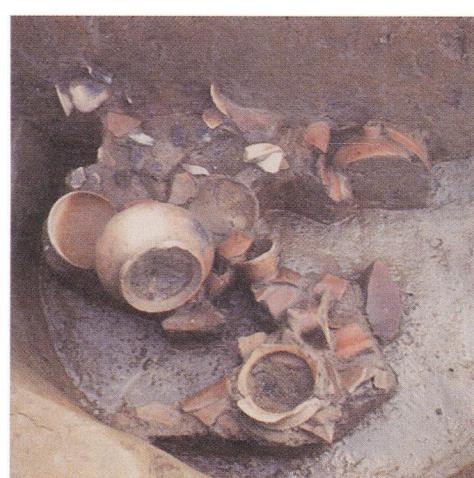


津寺（加茂小・体育館）遺跡 空撮

（堀家純一氏撮影）



竪穴住居 12



P275 土器出土状況

序

古代に「吉備」といわれた地域の中心地に位置する岡山市には、数多くの遺跡が存在します。その中には、墳丘の全長が350mにも達し、全国で第4位の規模を有する造山古墳や、地方では極めて希な凝灰岩製の壇上積基壇を備えた賞田廃寺、7世紀における激動の東アジアの歴史を示す大廻小廻山城跡などがあり、日本の歴史を語る上で無視できないすばらしいものが含まれています。まさに真の「吉備路」を内包している市といえるでしょう。

津寺（加茂小・体育館）遺跡は、岡山市立加茂小学校の体育館建設に伴って発掘調査をいたしました。この遺跡は昭和62年に同校の校舎建設に伴って発掘調査されており、多大な成果を上げました。さらに北側に位置します山陽自動車道のインターチェンジ建設の際に調査されました津寺遺跡の成果と合わせますと、古代の吉備中心部における集落遺跡の実態が明らかになったといえます。今回の発掘調査では、中世から弥生時代後期までの遺構や遺物が多数出土しており、津寺（加茂小・体育館）遺跡が、広範囲に広がる大規模な集落であったことを検証することができました。

本報告書は、津寺（加茂小・体育館）遺跡で出土した遺構や遺物の内容をまとめたものです。発掘調査現場での発掘作業から始まり、調査された遺構の記録作成、出土遺物の洗浄や製図などの数々の作業段階を経て発掘調査報告書を刊行することにより、体育館建設事業に端を発しました記録保存事業は完了することになりました。今後は、岡山市民の貴重な文化資源となります出土遺物の管理と活用をしっかりやっていきたいと思っております。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 山脇 健

例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成4年8月1日から平成5年7月29日にかけて実施した、岡山市立加茂小学校体育館建設事業に伴う、岡山市津寺517の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は草原がおこなった。
3. 遺物の実測およびトレースは、木村真紀、山元尚子、石井亜希子がおこない、写真撮影は西田和浩がおこなった。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。
6. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

卷頭図版

序

例言

目次

第Ⅰ章 位置と環境 1

第Ⅱ章 調査の経過 8

第Ⅲ章 遺構と遺物 12

I. 13世紀後半～15世紀 遺構面	12
II. 12・13世紀前半 遺構面	16
III. 7・8世紀 遺構面	29
IV. 古墳時代後期 遺構面	33
V. 古墳時代中期 遺構面	45
VI. 弥生時代後期末・古墳時代前期 遺構面	54
VII. 弥生時代後期中葉 遺構面	70
VIII. 出土遺物観察表	101

第Ⅳ章 結語 112

1. 津寺（加茂小）遺跡の遺構の変遷	112
(1) 中世後半：15世紀前後	
(2) 中世前半：13世紀前後	
(3) 7・8世紀	
(4) 古墳時代中・後期	
(5) 弥生時代後期末～古墳時代前期	
(6) 弥生時代中期末～後期中葉	
2. 弥生時代後期から古墳時代初頭の足守川流域の集団関係	122
(1) 墓の様相	
(2) 集落の様相	
(3) 墓と集落からみた地域構造	

図版

報告書抄録

挿入図目次

図 1 津寺(加茂小)遺跡の位置	1	図35 溝 2・3 断面図(1/60)	31
図 2 周辺遺跡分布図	2	図36 溝 2 出土遺物(1/4)	32
図 3 八幡神社遺跡出土特殊器台(1/3)	4	図37 溝 3 (1/60)・出土遺物(1/4)	33
図 4 調査区位置図(1/2500)	9	図38 古墳時代後期遺構配置図(1/200)	34
図 5 調査区北壁 断面図(1/80)	10	図39 墓穴住居 2 (1/60)・出土遺物(1/4)	35
図 6 13世紀後半～15世紀 遺構配置図(1/200)	13	図40 墓穴住居11(1/60)・出土遺物(1/4)	36
図 7 建物 1 (1/60)・出土遺物(1/4)	12	図41 墓穴住居17(1/60)	37
図 8 建物 2 (1/60)・出土遺物(1/4)	14	図42 墓穴住居17出土遺物(1/4・1/3)	38
図 9 建物 3 (1/60)	14	図43 墓穴住居20(1/60)・出土遺物(1/4)	38
図10 建物 3 出土遺物(1/4)	15	図44 溝 4・5 断面図(1/60)・ 出土遺物(1/3・1/4)	39
図11 P 320(1/60)	15	図45 P 124(1/30)・出土遺物(1/4)	40
図12 12・13世紀前半遺構配置図(1/200)	17	図46 P 128(1/30)	41
図13 建物 4 (1/60)	18	図47 P 130(1/30)	41
図14 建物 5 (1/60)	18	図48 P 136(1/30)	42
図15 建物 6 (1/60)・出土遺物(1/4)	19	図49 P 138(1/30)	42
図16 建物 7 (1/60)	20	図50 P 140(1/30)	42
図17 建物 8 (1/60)	20	図51 P 140出土遺物(1/4)	43
図18 建物 9 (1/60)・出土遺物(1/4)	21	図52 P 145(1/30)	43
図19 塀(1/60)	22	図53 P 147(1/60)	43
図20 溝 8 断面図(1/60)	22	図54 P 147出土遺物(1/3・1/4)	44
図21 溝 8 出土遺物(1/4)	23	図55 P 150(1/30)・出土遺物(1/4)	44
図22 P 116(1/30)	23	図56 P 152(1/30)	45
図23 P 116出土遺物(1/4)	24	図57 古墳時代後期包含層出土遺物(1/3)	45
図24 P 163(1/30)・出土遺物(1/4)	24	図58 古墳時代中期遺構配置図(1/200)	46
図25 P 170(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)	25	図59 墓穴住居12 (1/60)	48
図26 P 195(1/30)・出土遺物(1/4)	26	図60 墓穴住居12出土遺物 1 (1/4)	49
図27 P 198(1/30)	26	図61 墓穴住居12出土遺物 2 (1/4・1/3)	50
図28 P 198出土遺物(1/4)	27	図62 墓穴住居13(1/60)・ 出土遺物(1/4・1/3)	51
図29 P 233(1/30)・出土遺物(1/4)	27	図63 墓穴住居14(1/60・1/30)・ 出土遺物(1/4)	52
図30 P 236(1/30)	28	図64 墓穴住居16(1/60)・出土遺物(1/4)	54
図31 P 237(1/30)・出土遺物(1/4)	28	図65 弥生時代後期末・古墳時代前期 遺構配置図(1/200)	55
図32 P 258(1/30)・出土遺物(1/4)	29		
図33 12・13世紀前半包含層出土遺物(1/4)	29		
図34 7・8世紀遺構配置図(1/200)	30		

図66	竪穴住居3(1/60)・出土遺物(1/4)	56	図101	溝13出土遺物1(1/4)	91
図67	竪穴住居4(1/60)・出土遺物(1/4)	57	図102	溝13出土遺物2(1/4)	92
図68	竪穴住居6(1/60)・出土遺物(1/4)	58	図103	溝13出土遺物3(1/4・1/3)	93
図69	竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/4)	59	図104	P 133(1/30)・出土遺物(1/4)	93
図70	竪穴住居15(1/60)	60	図105	P 234(1/30)・出土遺物(1/4)	94
図71	竪穴住居15出土遺物(1/4・1/3)	61	図106	P 235(1/30)	94
図72	竪穴住居19(1/60)・出土遺物(1/4)	62	図107	P 254(1/30)・出土遺物(1/4)	95
図73	竪穴住居22(1/60)・ 出土遺物(1/4・1/3)	64	図108	P 255(1/30)・出土遺物(1/4)	96
図74	竪穴住居23(1/60)	65	図109	P 260(1/30)・出土遺物(1/4)	96
図75	竪穴住居24(1/60)	65	図110	P 274(1/30)・出土遺物(1/4)	97
図76	建物10(1/60)	66	図111	P 275(1/30)	97
図77	溝12断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	67	図112	P 275出土遺物(1/4)	98
図78	溝15(1/60)・出土遺物1(1/4)	68	図113	P 276(1/30)・出土遺物(1/4)	98
図79	溝15出土遺物2(1/4・1/3)	69	図114	P 278(1/30)・出土遺物(1/4)	99
図80	井戸1(1/60)・出土遺物(1/4)	70	図115	P 301(1/30)・出土遺物(1/4)	99
図81	弥生時代後期中葉遺構配置図(1/200)	71	図116	P 313(1/30)・出土遺物(1/4)	100
図82	竪穴住居5(1/60)・出土遺物(1/4)	72	図117	P 314(1/30)	100
図83	竪穴住居9(1/60)	73	図118	弥生時代後期中葉包含層 出土遺物(1/3)	100
図84	竪穴住居9出土遺物(1/4)	74	図119	中世後半(15世紀前後)遺構配置図	112
図85	竪穴住居21C(1/60)	75	図120	中世前半(13世紀前後)遺構配置図	114
図86	竪穴住居21B(1/60)	76	図121	7・8世紀遺構配置図	115
図87	竪穴住居21A(1/60)	77	図122	古墳時代中・後期遺構配置図	117
図88	竪穴住居21出土遺物(1/4・1/3)	78	図123	弥生時代後期末～古墳時代前期 遺構配置図	119
図89	竪穴住居25(1/60)・出土遺物(1/4)	79	図124	弥生時代中期末～後期中葉 遺構配置図	120
図90	溝11・12・13断面図(1/60)	80	図125	校舎調査区溝11出土土偶(1/2)	121
図91	溝11最上層出土遺物1(1/4)	81	図126	校舎調査区溝13出土特殊器台(1/3)	121
図92	溝11最上層出土遺物2(1/4)	82	図127	足守川下流域の集落遺跡・墓分布図	123
図93	溝11最上層出土遺物3(1/4)	83	図128	足守川流域の弥生墓	125
図94	溝11最上層出土遺物4(1/4・1/3)	84	図129	足守川流域の墳丘墓から 古墳への変遷	127
図95	溝11上層出土遺物1(1/4)	84	表1	足守川下流域における 集落遺跡の竪穴住居数	130
図96	溝11上層出土遺物2(1/4)	85	表2	竪穴住居の密度時期別推移	131
図97	溝11上層出土遺物3(1/4)	86			
図98	溝11上層出土遺物4(1/4)	87			
図99	溝11下層出土遺物1(1/4)	88			
図100	溝11下層出土遺物2(1/4・1/3)	89			

第Ⅰ章 位置と環境

津寺(加茂小)遺跡は近世の干拓の結果、岡山平野の中央に位置することとなった。現在は岡山市域に含まれているが、幕末頃は東西の両加茂村に分かれていたが、明治9年に合併して加茂村となった。明治22年には加茂村、津寺村、新庄上村、新庄下村が合併して賀茂村となり、昭和30年には高松町に入り、昭和46年には岡山市に編入合併された。近年までは田園風景が広がっていたが、南側に新幹線やそれに沿う都計道路の建設がおこなわれ、北側には高速道路のインターチェンジが建設されたことにより、交通の利便性が格段に向上了。そのため、急速に宅地化が進行しており、市街地のベットタウンとしての景観になってきている。

本州島の西側を東西に伸びる中国山地の南側には、標高300~600mのなだらかな隆起準平原が広がっている。津寺(加茂小)遺跡は足守川流域に属する。足守北側の丘陵部の地形は谷部の解析がよくすすみ、流路もかなり蛇行している。足守以南の足守川は、現在は岡山市今保で笛ヶ瀬川に合流して児島湖に流入しているが、かつては庭瀬の辺りで縄文海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。流路についても日畠丘陵の東側に接して流れているが、現地形の高低差や、水田畦畔の形状などから、かつては吉備津神社の南側で大きく弧状に曲がりながら南流していたと推定される。流路延長は24.4kmで、高陣山に水源を発する。足守周辺では流路傾斜は急なため、周囲の山居部では扇状地の発達が顕著であるが、高松から吉備津にかけては自然堤防と後背湿地が列状に並ぶ氾濫平野が主体となっている。したがって、足守周辺の集落遺跡は扇状地上に位置する場合が多いが、高松から吉備津周辺は平野の自然堤防である微高地上に位置する場合が多く、複数の微高地にわたって、同時期の遺跡が形成されている場合も多い。旧石器時代の遺物は塗木薬師遺跡(島崎ほか1993)、甫崎天神山遺跡(宇垣ほか

1994)、菅生小学校裏山遺跡(中野ほか1993)、吉備津杉尾西遺跡(柴田・安川2003)で出土しているが、高梁川や足守川などの中小河川が形成した沖積平野に遺跡が認められるようになるのは縄文時代からで、矢部奥田遺跡(高畠ほか1993)や真壁遺跡(村上1987)では早期の押し型文土器が出土している。しかし、継続的に遺跡数が増加するようになるのは後期ぐらいからで、南溝手遺跡では多くの遺物が出土し、そのなかにはイネの糲圧痕のある土器片も含まれている(平井ほか1995)。縄文時代におけるイネの出土例は続出の觀があり、さらに年代も遡っている。イネが列島にいつ渡來したのかは重要な問題の一つではあるが、弥生時代との関係を考えると、大規模な集団編成への契機を生じる可能性の高い水田稻作と、イネの渡來とは別次元の問題と考え

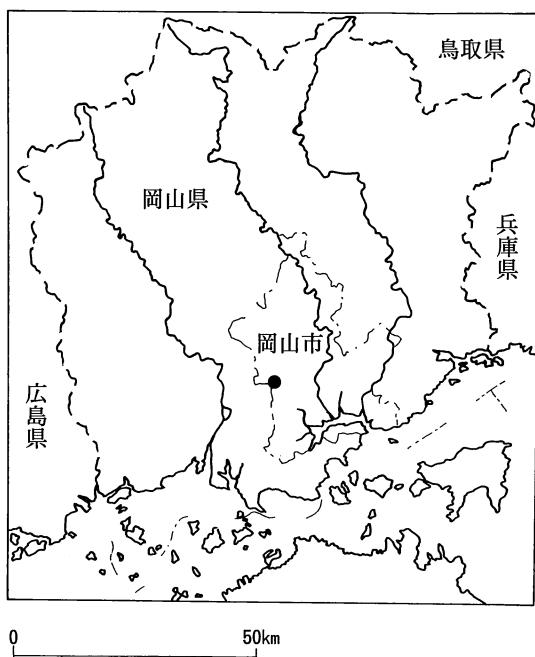


図1 津寺(加茂小)遺跡の位置



- | | | | | | | |
|------------|---------|-----------|----------|----------|----------|--------|
| ①津寺(加茂小)遺跡 | ⑤矢部南向遺跡 | ⑨立田遺跡 | ⑬上東遺跡 | ⑯八幡神社遺跡 | ㉑小盛山古墳 | ㉕惣爪廃寺 |
| ②津寺遺跡 | ⑥東山遺跡 | ⑩高松城下層遺跡 | ⑭王墓山遺跡群 | ⑰中山茶臼山古墳 | ㉒佐古田堂山古墳 | ㉖神力寺廃寺 |
| ③加茂A遺跡 | ⑦吉野口遺跡 | ⑪高塚遺跡 | ⑮楯築墳丘墓 | ⑱尾上車山古墳 | ㉓造山古墳 | ㉗大崎古墳群 |
| ④加茂B遺跡 | ⑧加茂政所遺跡 | ⑫川入・中撫川遺跡 | ⑯鯉喰神社墳丘墓 | ㉐矢藤治山墳丘墓 | ㉔真城寺裏山古墳 | |

図2 周辺遺跡分布図

た方が妥当と思われる。

弥生時代にはいると、遺跡数は増加する。岩倉遺跡・東山遺跡・川入遺跡(正岡ほか1974)では、前期の遺構・遺物が検出されている。特に東山遺跡では微高地部上ではあるが、たわみ状に低くなっている部分に水路を掘削して水田を形成しており、百間川遺跡群で検出されている前期水田の様相と似ている(中野ほか1995)。南溝手遺跡では朝鮮半島との関係が推定される松菊里型の竪穴住居も検出されている(平井ほか1995)。高梁川流域の真壁遺跡でも前期全般の遺構や遺物も検出されている(村上1987)。しかし、検出される遺物や遺構の量は多くなく、この時期はそれ程大規模な集落は形成されていないと考えられ、集落の基盤は微高地周辺の可耕しやすい比較的小規模な水田であったと思われる。中期の前半についても新邸貝塚(近藤1953)や、高松城下層遺跡(高橋2000)など新たに遺跡が形成されるものもあるが、基本的な様相は前期と変わらない。旭川流域では、中期中頃から複数の微高地に平行して大規模な集落が形成されている。それらは拠点集落であったと思われる。しかし、当流域では中期後半に集落規模がやや大きくなる傾向はあるものの、後期になるまではそのような集落は形成されていない可能性が高い。

中期末になると、平野部周囲の丘陵に多数の遺跡が形成される。丘陵部において弥生土器の散布地として認識される遺跡のほとんどがこの時期である。足守川中流域の標高87mの小丘陵である甫崎天神山から、南の丘陵部を縦走した山陽自動車道の建設に伴う調査でも、該期の集落が多数検出されており(宇垣ほか1994)、標高46mの王墓山丘陵でも集落の一端を検出している(間壁ほか1974)。これらの集落は数棟の竪穴住居と掘立柱建物で構成された小規模なもので、山裾部に発達した小扇状地上の水田を基盤としていたと考えられる。当地域の平野部周辺には小規模な扇状地の単位がいくつかあり、それらを基盤とする水田の広がりは、地形により規定されるものの、水田経営はある程度自立的におこなわれていたと思われる。このような集落形態は津山市沼遺跡の発掘調査で抽出された水田経営の基本単位とされる「単位集団」(近藤1959)に相当する。このような集団がどの段階の水田経営までを主体的におこなっていたのかは不明だが、各単位に高床倉庫と考えられる建物が付属することから、それを次年度の種糲を保有している倉庫と考えると、田植え(種蒔き)は主体的におこなっていた可能性が高い。単位集団が明確になるのは中期末からである。それ以前でも、竪穴住居がいくつか集まった単位によって構成された集落はあるものの、倉庫と竪穴住居数軒が強固に結びついた単位集団によって構成された集落は認められない。おそらく、中期末以前の竪穴住居数軒の単位というものは、水田稻作遂行といった生産関係を第一義的な目的として結ばれた単位ではなく、血縁原理を中心に結ばれていた単位ではないかと推測される。そのため大規模な集落であっても、各単位にはその単位を維持するための生産基盤はなく、集落の周囲に展開する集落全体で取り組む水田経営が失敗すると、集落そのものの崩壊へと直ちに結びつくものであった。おそらく旭川西岸の沖積平野に形成された当地における中期中葉の最大規模の集落である南方遺跡は、中期末になって、急速に解体したのもそのためであろう。中期末の集落は、血縁関係主体の単位であったものが、水田経営のための労働編成を主な目的とした単位に変化したといえる。そのため、そういった単位集団の形成や、維持のためのイデオロギー的な支柱としてこの時期に多く出土する分銅形土製品が用いられたのではなかろうか。またこの時期は、土器の文様の中に銅鐸や平形銅劍と共通する文様が顕著になる。単位集団間、あるいはより広い集団間の相互関係を成立、維持させるために青銅製の祭器が用いられるようになったのではなかろうか。単位集団が広く展開する背景には、小規模集団を維持するための相互扶助のネットワーク

が不可欠であったと考えられる。多くの場合、集落とは離れた場所に青銅製の祭器は埋納されている。これは青銅製の祭器が特定の集落に属するものでなかったということであり、それがイデオロギー的な支柱となっていたネットワークも、特定の集落を中心とした求心的な構造でなかったことを示している。

後期になると、平野部周囲の丘陵裾部にあった集落が一斉に消え、平野部にいくつかの大規模な集落が出現する。高塚遺跡(岡本ほか1990)・津寺遺跡(高畠ほか1998)・矢部南向遺跡(江見ほか1996)・東山遺跡・上東遺跡(伊藤ほか1974)などである。それらの集落の内部には豎穴住居数軒からなる単位の存在が指摘(高畠ほか1998)されている。これは中期末に明確となった単位集団と考えられ、自立的な単位集団によって、後期の集落は構成されているといえる。具体的に示すと、中期末の集落は後期になると廃絶しているが、中期末の集落が発展した小扇状地部の水田は後期になっても維持されており、それが後期の集落内部における単位集団の存立基盤であったといえる。その一方で、集落の位置する平野部における大規模な水田開発が集落構成員全員の協業によっておこなわれたと考えられる。維持と発展といった2つの性格を備えた水田形態の現出によって、後期の集落は安定的な拠点集落へと変遷したといえる。ところが、同一流域内における複数の拠点集落間には、水田經營のための用水や広域流通物の確保に関して利害の対立が生じやすく、それが軋轢へとつながっていく。それは高塚遺跡のように、銅鐸を独占する集落が認められることによって具現化される。軋轢の結果、後期中葉になると高塚遺跡や矢部南向遺跡のように、遺構・遺物が集中する集落と、そうでない集落、さらに廃絶する拠点集落に分かれる。矢部南向遺跡の背後には、弥生時代においては、最大規模クラスの墳丘墓である復原全長が80mにも達する楯築墳丘墓(近藤1992)が築かれ、古墳祭式の原点の一つともいえる特殊器台・壺の祭式も成立する。足守川流域の平野部は特定集落、特定首長を中心とした求心的な構造に変化したのであろう。この構造は、かなり広範囲の地域の集団を結集したであろう巨大前方後円墳や、多量の舶載鏡を副葬する古墳が築かれる古墳時代の集団関係と極めて共通する点が多かったと考えられる。求心的な首長の墳丘墓は長さ約40m、幅約32mの長方形の墳形である鯉喰神社墳丘墓(近藤1991)や、全長36mの前方後円墳である矢藤治山墳丘墓(古墳)(近藤ほか1995)がある。ただし、矢藤治山についてはいわゆる纏向型前方後円墳(寺沢1984)に比定される可能性がある。

墳丘墓以外でも特殊器台が認められる。

発掘調査では土壙墓に伴う例もある。津寺(加茂小)遺跡の北側の丘陵部に位置する八幡神社遺跡でも特殊器台(図3)が採集されている。文様帶と間帯部分で、文様帶部分は残存状態があまり良くない。外面表面には丹塗りが明瞭であり、内面はヨコからナナメ方向のヘラケズリがあり、透かし穴は巴形と三角形である。間帯には浅い沈線がめぐっている。胎土は茶褐色のいわゆる特殊有の胎土である。文様は大きくは向木見型で、その細分型式のあたご山型(宇垣1992)に相当する。八幡神社遺跡では、現況の地

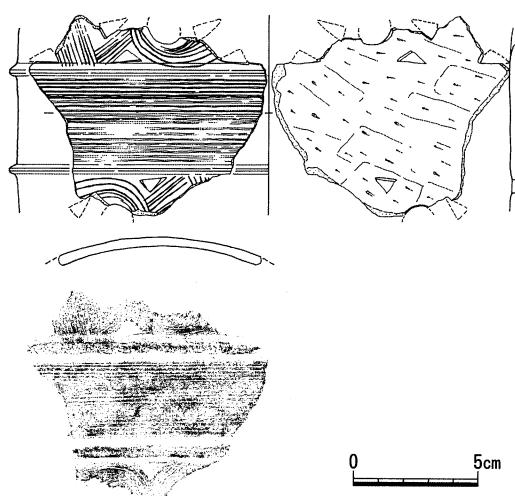


図3 八幡神社遺跡出土 特殊器台 (1/3)

形を見る限り墳丘墓の存在は確認できない。「高松城水攻め」時に陣として使用されたことから、旧地形は改変されているものの、大規模な墳丘墓の存在は想定できない。墳長が10m前後の小規模な墳丘墓か、もしくは土壙墓に伴っていた可能性が高いと思われる。

古墳時代前期になると、特殊器台形埴輪、もしくは撥形に開く前方部を有する前方後円墳は2基存在するが、いずれも全長が50m未満の規模である。楯築墳丘墓以来、求心的首長墓の規模は段階的に縮小しており、それと歩調を合わせるように、後期中葉に廃絶、縮小した集落が後期末以降拡大を始める。古墳時代前期中葉における集落の変化はまだ明確に把握できていないが、同期の古墳であると考えられる中山茶臼山古墳(近藤1986)、尾上車山古墳(水内1986)の全長が100mを越える大型古墳であることから、再び求心的な構造が強化されたと考えられる。しかも2墳とも臨海性であり、中山茶臼山古墳が行燈山古墳(伝崇神陵古墳)の1/2相似形(草原1993)であることからも、畿内政権や瀬戸内海航路などの地域外の要因によってなされたことが推測される。

古墳時代前期末には、大型古墳の築造は内陸へ移動し、しかも円墳(小盛山古墳)(草原1995)となるが、中期初頭の次世代の首長墓である佐古田堂山古墳(西川1986)は前方後円墳である。次の首長墓と考えられる造山古墳については全長が350mにも達することから、吉備の大首長(西川1964)、大王の后(水野1986)、倭の大王(出宮1993)など、様々な位置づけがなされている。造山古墳は吉備の地域史、あるいは『古事記』・『日本書紀』で描かれている大王の存在形態、つまり、大王が1人しかいなかつたのか、それとも複数いたのかという点などを追求するためのキーポイントになるものであろう。また、高塚遺跡や津寺遺跡からは朝鮮系の遺物や、カマド付きの竪穴住居が検出されており、さらに造山古墳の前方部の正面に位置する榎山古墳からは陶質土器が採集されている(島崎1982)。大型古墳・巨大古墳の動向は、朝鮮半島との関係とも密接であったといえる。榎山古墳の周囲には5基の古墳が築かれており、造山古墳と卑近な関係であったことがうかがわれる。そのうち方墳の造山第2号墳(安川2000)、帆立貝型前方後円墳の造山第4号墳(安川1998)では、周囲の発掘調査がおこなわれている。

5世紀末～6世紀初頭には、顕著な古墳の築造は停止する。これは「吉備の反乱伝承」に反映されるように、政治的な動向の反映とする考え方と、生産力に起因するという考え方(根木1996)がある。この時期は、大規模な集落が廃絶したり、小規模集落が随所に出現しており、集落の動向にも画期を見出すことができる(草原2000)。おそらく地域首長の没落といった政治的要因だけではなかったと考えられる。

古墳時代前期になっても、平野部では津寺遺跡のように多くの竪穴住居が重複して検出されているような様相が続いており、大規模な集落が引き続き形成されている。そのなかには、窪木薬師遺跡(島崎ほか1993)や、吉野口遺跡(草原1997)のように、鍛冶をおこなう集落も認められ、千引き遺跡(武田1999)などのような製錬遺跡と結びついて、原料鉄の生産から鉄製品の製造までを地域内で完結的におこなっている様相がうかがわれる。中期に築かれた全長40mの小規模な帆立貝式古墳である隨庵古墳の副葬品中には鍛冶道具があることから(鎌木ほか1965)、当地域の鉄生産は後期ほど数は多くないかもしれないが、中期にもある程度独自におこなっていた可能性は否定できない。

6世紀になると古墳の築成は大きく変化する。大型古墳の築造は途切れて、6世紀後半のこうもり塚古墳(全長100m)(葛原1979)の前後は築かれていらない。6世紀前半の中小規模の古墳は、すりばち池2号墳(高田ほか1993)、三輪山第6号墳(西川1963)などがあるが、それ程多くない。6世紀後半になると、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳が周囲の丘陵部に多数築かれており、三井谷古墳群・大崎

古墳群(小郷ほか1994)のように群集墳を形成する古墳群もいくつかある。高梁川西岸の西団地遺跡群(村上ほか1991)では後期古墳群と重なって製鉄関係の遺構が多数検出されており、また、大崎古墳群でも炭窯と推定される焼土が確認されていること(小郷ほか1994)などは、当地域に多数築かれた後期古墳の基盤を考える上で示唆的である。また、当地域における古代前期での寺院建立の最盛期は白鳳時代であるが、この時期には「吉備式瓦当文」、「水切り瓦」といわれる特徴的な形態をした軒丸瓦が用いられている。前者は備中国の氏寺に、後者は備中国、備後国、安芸国、出雲国の氏寺に分布している。ともに氏寺を建立した主体者である在地首長層間のつながりを示しており、特に「吉備式瓦当文」の分布は集中的であり、強固な連帶関係が存在していたと考えられる。官衙関連の遺跡は川入遺跡(正岡ほか1974)、津寺遺跡(高畠ほか1993)などで、前者は築地塀と平城宮式系瓦、後者は規則的な掘立柱建物群とそれをかこむ二重の溝が検出されている。ただし川入遺跡の築地塀については、最近の発掘調査の結果、築地塀でない可能性が高くなつたが、規模の大きな総柱建物で構成された倉庫群(河田・安川2002)や銅印の鋳型や多量の綠釉陶器が出土(岡田ほか2004)していることから、官衙であることは間違いない(草原2005)。また寺院とされていた矢部廃寺は、出土した瓦と地名の考証から山陽道の駅家に推定されている(伊藤1986)。同様に巨大な心礎の残存している惣爪廃寺は、古代の山陽道を挟んで北側に「幸利神社」があり、これを地名から都宇郡衙であるとすると、美作の久米廃寺(粟野1973)のように郡衙に付属する寺であることも考えられる。このほか吉備中山の山塊では海獸葡萄鏡の出土も伝わっており、出土地付近から同時に須恵器も出土していることから終期末古墳が存在したと推定されている(水内1975)。当地域では切り石を用いた終期末古墳はほとんどなく、現在確認されている横穴式石室の中には終末期古墳が含まれていると思われる。

古代末から中世前半の集落遺跡の調査例は多く、当地域の微高地上を調査した際には、12世紀末～14世紀ぐらいの時期の柱穴が密集して検出されることも稀ではない。津寺遺跡(正岡ほか1994)や三手向原遺跡(草原2001)では、区画溝を伴う建物群も検出されている。吉備津神社の南に位置し、方形の掘がめぐる中世の館跡である伝賀陽氏館跡の周囲にも、館の方向と同じ地割りが分布している。その地割りの中に位置する東山遺跡の発掘調査では14世紀に地割りと同じ方向の溝が掘削されており、柱穴列の方向もそれに平行していることが確認されている。これら中世集落の内部にみられる小区画は、在地秩序が自立的に形成されてきているということを示しており、近世の城下町にみる画一的な町割とはかなり隔たりがあるが、それへとつながる要素の1つである可能性も推定される。

引用文献

- 宇垣匡雅 1992 「特殊器台・壺」『吉備の考古学的研究』(上) (株) 山陽新聞社
 近藤義郎 1953 「備中新邸貝塚」『古代学研究』 8
 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』 6－1
 西川 宏 1963 「備中三輪山第6号墳」『古代吉備』第5集
 西川 宏 1964 「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』
 鎌木義昌ほか 1965 『総社市隨庵古墳』総社市教育委員会
 粟野克己 1973 「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 4
 間壁忠彦ほか 1974 「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』 10
 正岡睦夫ほか 1974 「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
 水内昌康 1975 「吉備中山の古墳」『吉備中山総合調査報告』岡山市教育委員会

- 葛原克人 1979 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35
- 島崎 東 1982 「備中榎山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』3
- 寺沢 薫 1984 「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』六 吉川弘文館
- 伊藤 晃 1986 「矢部遺跡」『岡山県史』考古史料
- 近藤義郎 1986 「中山茶臼山古墳」『岡山県史』考古史料
- 西川 宏 1986 「佐古田堂山古墳」『岡山県史』考古史料
- 西川 宏 1986 「造山古墳」『岡山県史』考古史料
- 水内昌康 1986 「尾上車山古墳」『岡山県史』考古史料
- 村上幸雄 1987 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編
- 近藤義郎 1991 「弥生墳丘墓の成立と展開」『岡山県史』原始古代
- 村上幸雄ほか 1991 「水島機械金属工業協同組合西団地遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9
- 近藤義郎 1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 草原孝典 1993 『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 島崎 東ほか 1993 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
- 高田明人ほか 1993 「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13
- 高畠知功ほか 1993 「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82
- 出宮徳尚 1993 「吉備津彦伝承考－非吉備政権論への史料的検討」『古文化談叢』第30集 九州古文化研究会
- 中野雅美ほか 1993 「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81
- 小郷利幸ほか 1994 「岡山市足守地域史研究(2)」『古代吉備』第16集
- 宇垣匡雅ほか 1994 「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89
- 平井泰男ほか 1994 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100
- 近藤義郎ほか 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 草原孝典ほか 1995 「小盛山古墳」『古代吉備』第17集
- 水野正好ほか 1982 「弥生から古墳時代へ」『発掘が語る日本史』4 近畿
- 根木 修 1996 「古墳づくりの時代」『岡山県の歴史』ぎょうせい
- 江見正己ほか 1996 「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- 草原孝典 2000 「吉備の古墳群」『季刊考古学 古墳群を考える』47
- 草原孝典 1997 「吉野口遺跡」岡山市教育委員会
- 高畠知功ほか 1998 「津寺遺跡」5 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
- 安川 満 1998 「造山第4号古墳」岡山市教育委員会
- 武田恭彰 1999 「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15
- 岡本寛久ほか 2000 「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- 安川 満 2000 「造山第2号古墳」岡山市教育委員会
- 草原孝典 2001 「三手向原遺跡－中世土師器窯と集落遺跡の発掘調査報告－」岡山市教育委員会
- 河田健司・安川 満 2002 「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報1 2000(平成12)年度』
- 柴田英樹・安川 満 2003 「吉備津杉尾西・奥田遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2 2001(平成13)年度』
- 扇崎 由ほか 2003 「伝賀陽氏館跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2 2001(平成13)年度』
- 岡田 博ほか 2004 「川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 4
- 高橋伸二 2000 「高松城三の丸跡発掘調査概報」岡山市教育委員会

第Ⅱ章 調査の経過

岡山市加茂の市立加茂小学校の体育館の建設事業が設定された。計画地の北側にある校舎の建築工事に伴う発掘調査では、濃密な遺構が検出されており、計画地でも同様の状況であることが予想された。そのため計画地が埋蔵文化財包蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け、記録保存による事前の行政的処置の必要な旨の試掘調査に関する結果を担当課である岡山市教育委員会施設課に伝え、その実施に対する両者の連絡・協議を要請した。文化財課と施設課で協議を重ねた結果、平成4年度から記録保存を行うことで合意に達した。発掘調査は平成4年8月1日に着手し、平成5年7月29日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第98条2第1項に基づく「埋蔵文化財調査の通知」が提出された。発掘調査面積は1,200m²である。

その後、平成5年5月21日(金)には、発掘調査現地説明会を行い、約150名の参加があった。

発掘調査組織

発掘調査主体者 奥山 桂

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）
(故) 西原礼之助（岡山市文化財保護審議会委員長）
(故) 西川 宏（山陽学園教諭）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（岡山市文化財保護審議会副委員長）

発掘調査担当者 青山 淳（岡山市教育委員会文化課長）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課長補佐）
根木 修（岡山市教育委員会文化課係長）
神谷正義（岡山市教育委員会文化課主任）
(調査員) 草原孝典（岡山市教育委員会文化財保護主事）
(経理員) 沼 智恵（岡山市教育委員会文化課主事）

発掘調査現場作業員 (故) 青木敏男 板野輝男 榎 頤司 (故) 大溝 神 (故) 小西 原
佐々木龍彦 長門卓正 中山政太郎 難波俊一 (故) 則武福市
(故) 蜂谷由太郎 横田順一 (故) 大森ヨシ子

発掘調査現場事務員 戸田三枝子

出土物整理 木村真紀 石井亜希子 山元尚子

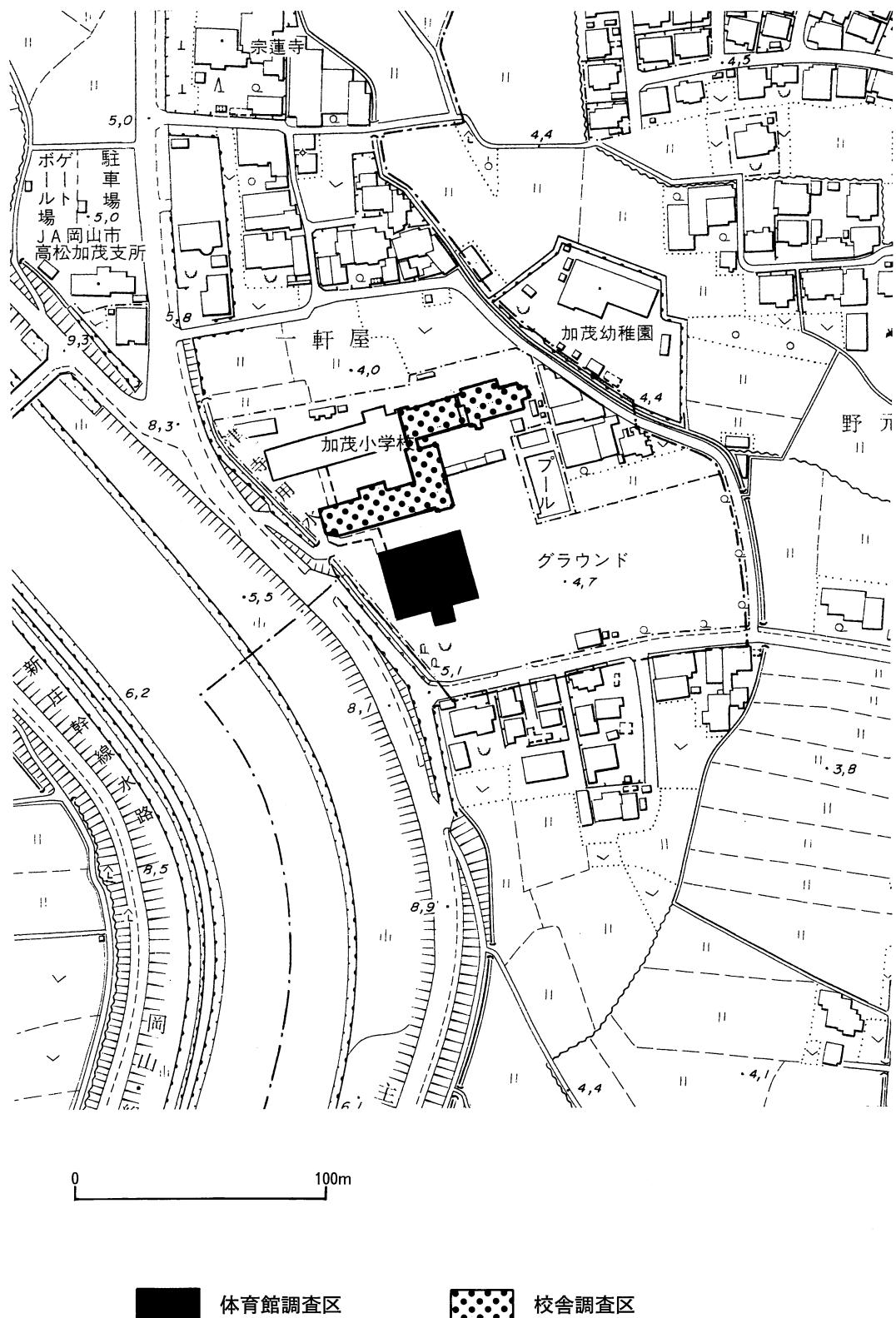


図4 調査区位置図 (1/2,500)

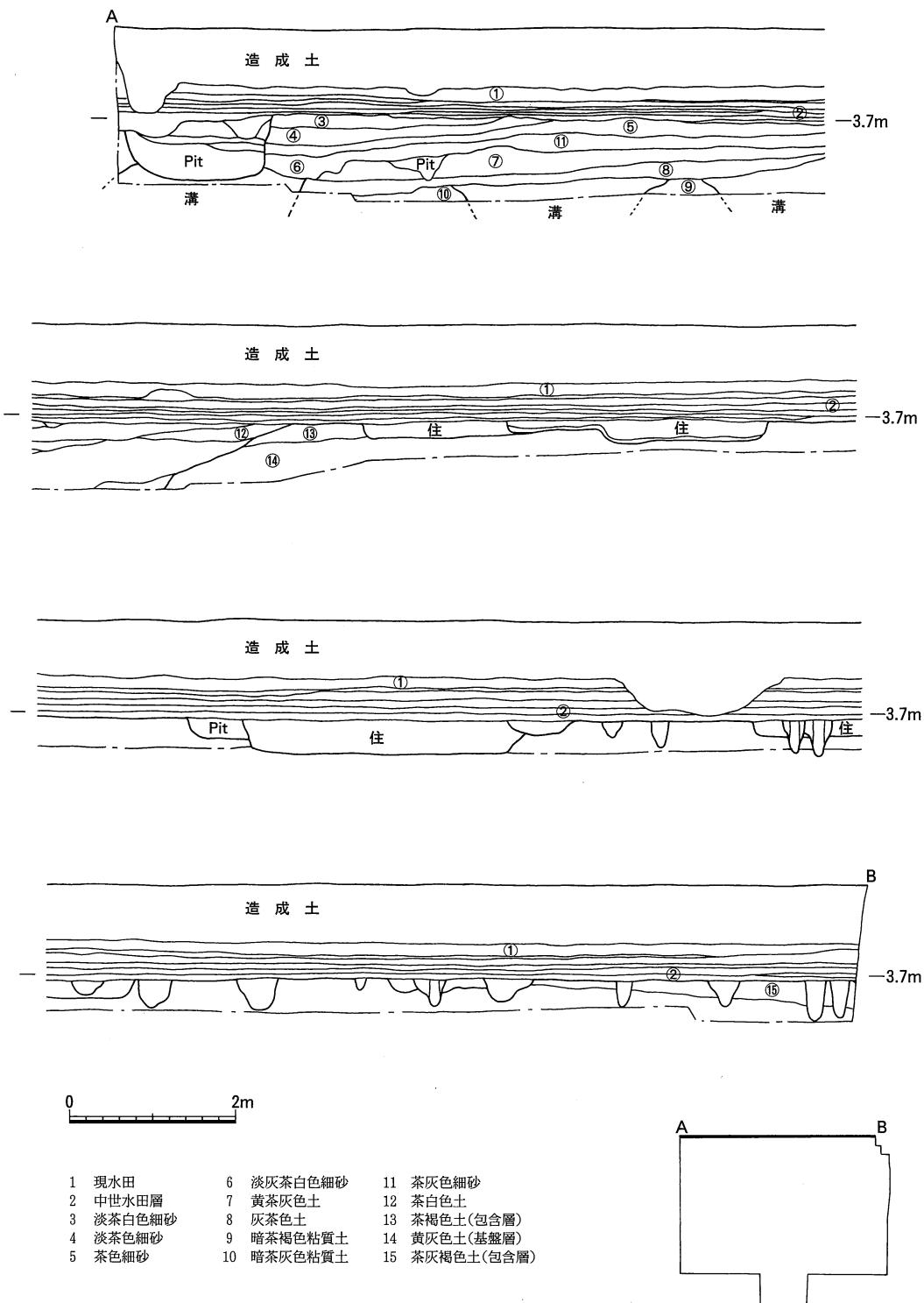


図5 調査区北壁 断面図 (1/80)

調査にあたり、対策委員会の先生方には多大なるご指導・ご助言をいただいた。また、伊藤晃、鈴木景二、武田恭彰、中野雅美、平井典子、弘田和司、山元敏裕の諸氏には諸処のご教示、ご助言をいただいた。諸処にご助勢くださった方々に深謝する次第である。

経過と概要

造成土や現代水田の耕土については重機によって除去した。中世後半の水田層(②層)が調査区全体に広がっていたが、洪水砂等の間層がないため、微高地基盤層上面まで掘り下げて遺構検出したところ、水田畦畔が検出された。同時期の掘立柱建物も検出されており、北側の校舎建設に伴う調査(以下校舎調査区)では同時期の遺構が検出されていないことから、該期の集落域が南側にあったことが確認された。該期以降は、調査区の大半が微高地(⑭層)となり、中世前半から弥生時代後期までの遺構が重複して検出された。本来的に微高地基盤層のレベルが高かったため、包含層の残存状況は良好ではなく、調査区西端や東端において、斜面堆積状で(⑯・⑰層)検出されたのみであった。中世後半以降のかなり大規模な水田開発の結果であろう。

校舎調査区では、とくに古墳時代後期の竪穴住居が数多く検出されており、複雑に重複している。同様の状況が当調査区へも続いていると推測されていたが、該期の遺構は少なかった。むしろ中心は弥生時代後期中葉から古墳時代前期にかけてであった。さらに5世紀末から6世紀初頭の竪穴住居もまとまって検出されており、該期の遺構が少ない校舎調査区とは対照的な様相といえる。

津寺(加茂小)遺跡の北側には、高速道路建設のために調査された津寺遺跡が存在し、極めて広面積の調査であることから、集落遺跡の構造を知ることができる。さらに、周辺部における道路建設や立会調査などの成果から、津寺遺跡と津寺(加茂小)遺跡とは別の微高地に形成されている可能性が高い。隣接する微高地での集落遺跡として比較すると、古墳時代後期の様相は共通するものの、それ以外の時期の遺構については、時期や密度等に相違がある。津寺遺跡では、古墳時代後期の集落は、微高地の低位で竪穴住居が密集する様相であり、高位は希薄である。校舎調査区と体育館調査区の差はこれに対応する。弥生時代後期中葉では、津寺遺跡では殆ど遺構が形成されなくなる。津寺(加茂小)遺跡では、校舎調査区では土壙墓等の墓域があり、体育館調査区では居住域が形成されている。密度が高いわけではないが、集落として存在しているといえる。このような点は、該期の集落遺跡を研究する上で、重要な視点を提供することになるといえる。

弥生時代中期末の時期は、校舎調査区で微高地の中央付近を掘削する大規模な溝が検出されており、微高地周辺の水田開発が飛躍的に進んだことを示している。しかしながら、体育館調査区では該期の遺構は検出されておらず、近辺の集落は校舎調査区で検出されているように、それ程広がらない規模の集落であったと考えられる。該期の開発が大規模な集落を母体としてすすんだわけではないことを示しているといえる。

発掘日誌（抄）

平成4年 8月 1日	発掘調査開始
11月 13日	発掘調査対策委員会開催
1月 20日	加茂小学校小学6年生見学
平成5年 5月 21日	現地説明会開催
5月 26日	加茂小学校小学5・6年生見学
7月 27日	発掘調査対策委員会開催
7月 29日	発掘調査終了、発掘機材撤収。

第三章 遺構と遺物

I. 13世紀後半～15世紀 遺構面（図6）

調査区の南東コーナー付近を中心に、約20m四方には水田層が認められず、それ以外は平均して約0.05mほど低くなっている。さらに水田層が広がる。調査区の北東付近では、水田層除去後に耕作痕と考えられる小溝がまとまって検出された。小溝と該期の微高地端部の方向性は一致しており、さらにそれと検出された建物の方向性も極めて近似値を示す。この時期の水田開発と建物は一体的な関係にあることも推測される。以下、検出された遺構と遺物の詳細について説明する。

建物1（図7）

調査区南東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。柱間は1間×3間で、棟方向はN-15°-Wである。遺構検出面のレベル高は、3.9m付近で、柱穴の掘り方は径0.2m前後である。柱痕跡の認められる柱穴からすると、0.1m前後が柱径と考えられる。床面積は14.1m²である。

柱穴の掘り方には土器が含まれており、いずれも小片であったが、北西隅の柱穴Paから出土した土師質土器小皿(1)と亀山焼の甕胴部片(2)のみが図化できた。13世紀前半の時期である。

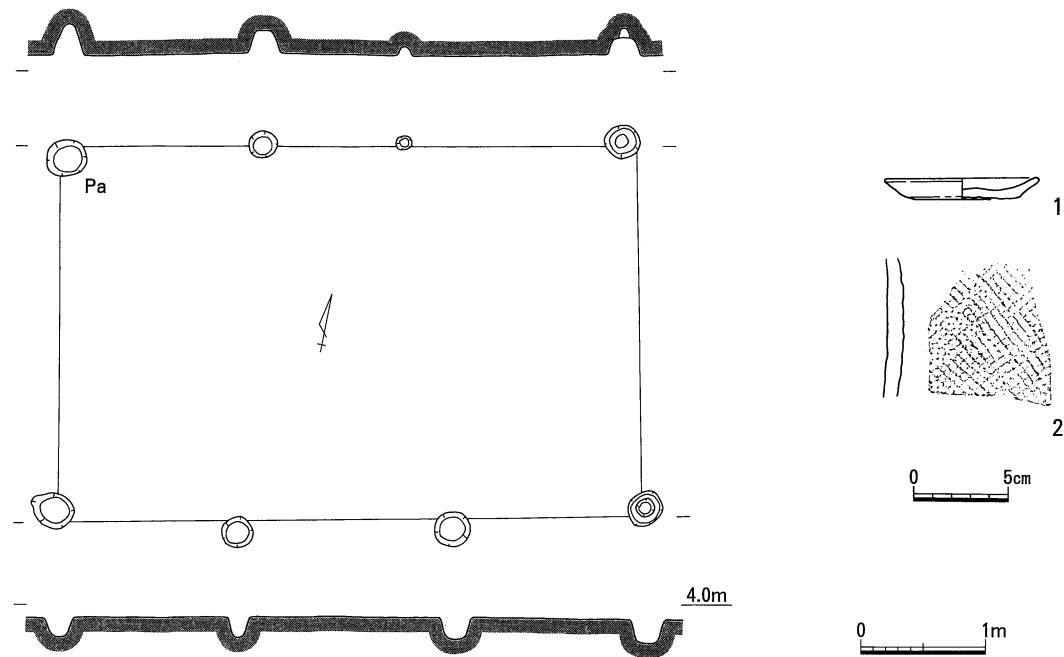


図7 建物1（1/60）・出土遺物（1/4）

建物2（図8）

調査区南東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。柱間は1間以上×3間で、棟方向はW-18°-Sである。ただし、塀等の柱穴列である可能性もある。遺構検出面のレベル高は3.9m付近で、柱穴の掘り方は、径0.3m前後である。柱痕跡の認められる柱穴からすると、0.1m前後が柱径と考え

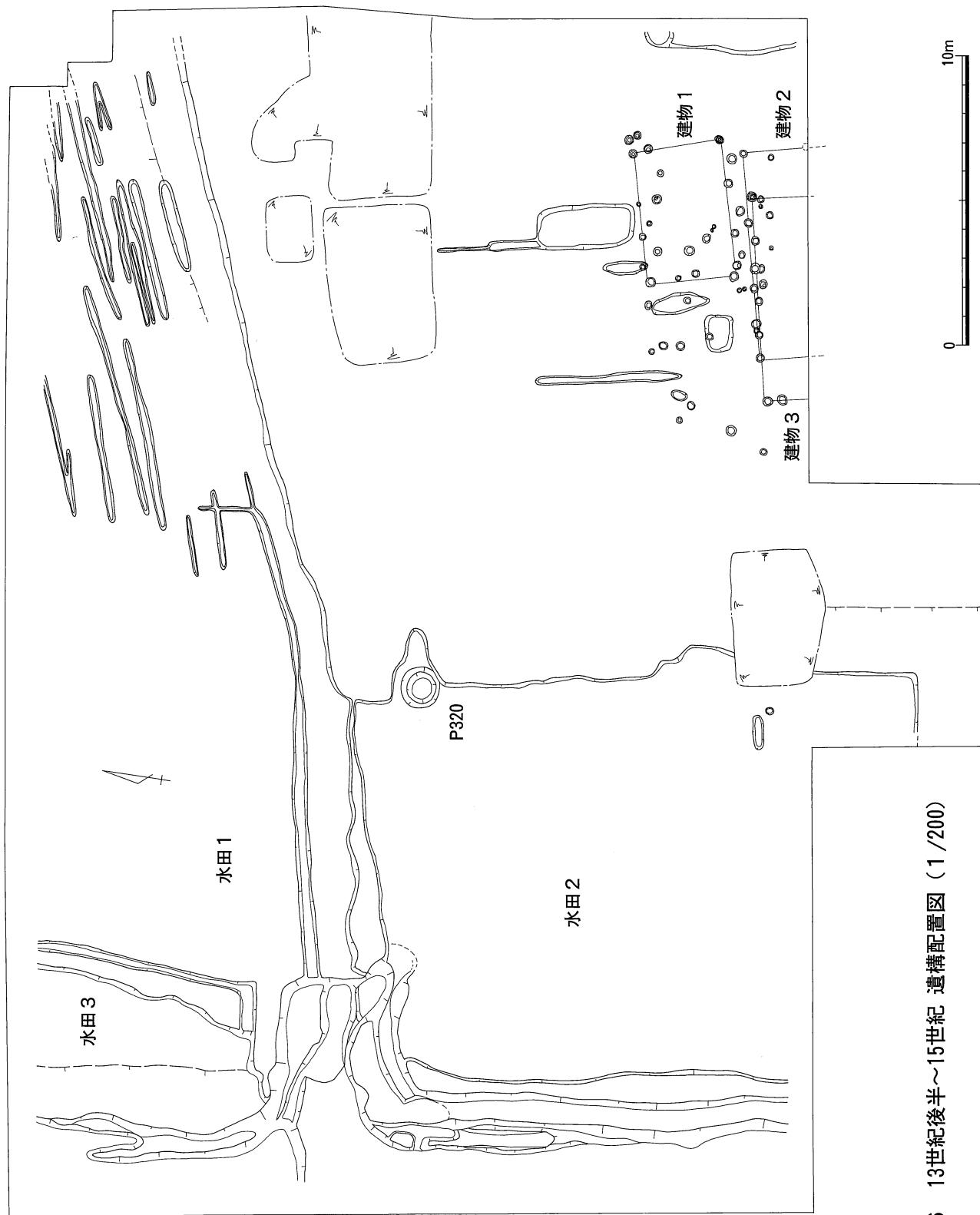


図6 13世紀後半～15世紀 遺構配置図（1/200）

られる。東端の柱穴 P a には小礫が 1 点含まれており、柱の側面を支えるために入れられたものである。建物の南側が調査区外へ出るため全形は不明であるが、柱間が建物 1 よりも長いスパンであることから、建物 1 よりも規模の大きな建物であった可能性が高い。

東端の柱穴 P a には土師質土器碗(3)が 1 点含まれており、P b からは古墳時代前期の土師器鉢(4)の破片が含まれていた。後者については、下層遺構からの混入であり、前者の時期は法量等の特徴から 13世紀後半である。

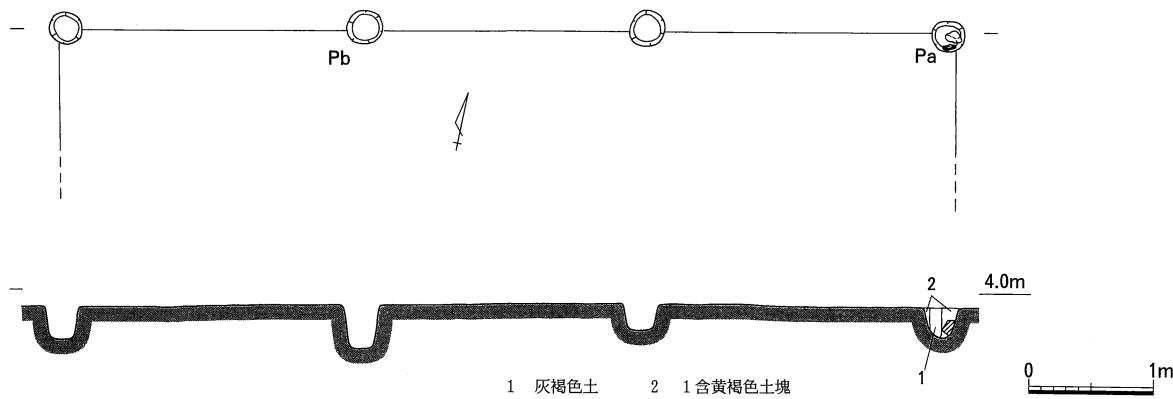
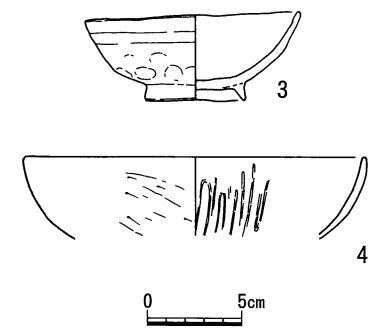


図8 建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

建物 3 (図9・10)

調査区南東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。柱間は 1 間以上 × 5 間で、棟方向は W-10° - S である。ただし、塀等の柱列である可能性もある。遺構検出面のレベル高は 3.9m 付近で、柱穴の掘り方は、径 0.2~0.3m 前後である。東端の柱穴には柱痕跡が認められ、それからすると、0.1m

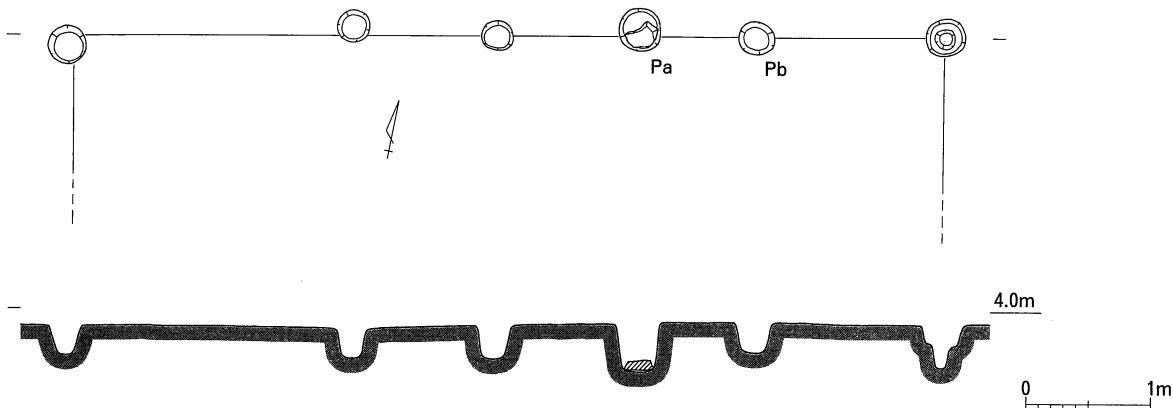


図9 建物3 (1/60)

前後が柱径と考えられる。P aには平石が底部に置かれており、柱を支える根石と考えられる。建物の南側が調査区外へ出るため全形は不明であるが、桁行の長さが建物1よりも長いことから、建物1よりも規模の大きな建物であったか、もしくは馬小屋のような梁間よりも極端に桁行の長い建物であった可能性が考えられる。

各柱穴から土器が出土したが、小片のものが大半で、図化できたのはP a、P bから出土したもののみである。P aから出土した土師質土器碗(5)は完形で、柱穴の東側の埋土中位付近で出土していることから、柱を埋める途中に入れられたものと考えられる。P bから出土した土師質土器碗(6)は、口縁部付近が欠損しているものの高台付近は完存している。柱穴の中央付近で出土したことから、柱を抜き取った後に混入、もしくは埋められたものと考えられる。時期は法量等から13世紀後半である。

P 320 (図11)

調査区の中央付近で検出された土壤で、微高地部分と水田部分との境に位置することから、野井戸のような性格であったと推測される。遺構検出面のレベル高は3.7m付近で、最深部は遺構検出面から0.8mである。長径1.4m、短径1.3mのやや長楕円形に近い平面形を呈し、検出面から約0.2m付近で若干断面形の角度が変わり、二段掘り状の形態となる。底面はやや緩やかなカーブを描きながらも平坦に近い形状である。埋土は1層で、水田層と極めて近いものであった。出土遺物は土師質土器の小片が若干出土したのみであった。

水田 (図6)

検出された水田は、畦畔に区画された水田1～水田3までの3面である。水田1と水田2のレベル高は殆ど一致しており3.7m付近である。両水田の間は、幅1.2mほどの幅広の畦畔によって区画されており、畦畔の両側には幅が0.5～1.0mで、深さが水田面から0.05mほどの小溝が認められる。小溝は、西側に向かって若干レベル高が低くなっている部分に接続する。この部分の西側と調査区西端部分のレベル高は一致しており、この部分を低い水田とするよりは水路であったと考える方が妥当である。しかしながら、調査区の端部であることから、この部分の調査は極めて断片的であり、詳細については明らかにできなかった。ただ、水路であるとすると、方形部分は水路から東へ張り出した水口であった可能性が高い。水田2は、一部調査区外へ出るが、調査区中央南端で検出された直角に近い角度で曲がり、そのまま直線的に西側の畦畔に取り付くとすると、水田区画の面積は256.5m²となる。

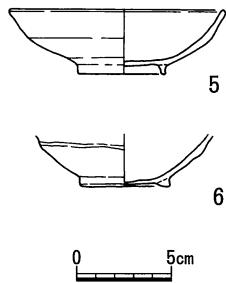


図10 建物3 出土遺物 (1/4)

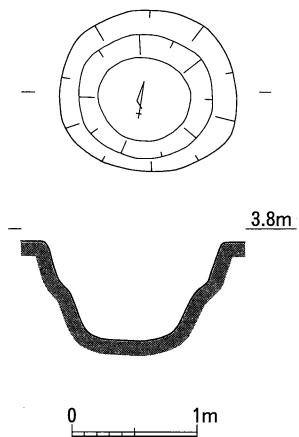


図11 P 320 (1/60)

水田3は、水路に面した細長い形状の水田であり、旱魃等の際の危険防止を意識した低位部に位置する水田であった可能性がある。しかしながら、耕土は湿田であったことを示すような還元状態ではなく、水田1や水田2と殆ど変わらない。

今回検出された水田は、洪水砂等によってパックされた状態ではなく、残存している水田層を水平を意識して掘り下げたところ、微高地基盤層やその上面に形成された包含層を削りだした畦畔を検出したものである。したがって確実に当時の水田景観を示しているとはいえない。例えば、水田耕土を用いた畦畔があったとすると識別できていない可能性が高い。しかしながら、畦畔の方向と耕作痕と推測される小溝の方向と一致することや、該期の微高地基盤と水田層との境の方向が一致することからも、直線的な水田畦畔の方向性についてはかなり蓋然性が高いと思われる。ただ、現況で検出された畦畔が示すような比較的大区画に近い形状の水田景観であったかどうかについては、この水田層の埋没した状況からも断言できるものではない。

II. 12・13世紀前半 遺構面（図12）

調査区の北端と南端付近で遺構が検出された。いずれも掘立柱建物と土壙等の遺構が認められるところから、それぞれが1つの居住単位といえる。両単位の間、調査区中央付近に空間地が認められるが、これについては、微高地の比較的高所に相当することから、水田として利用されていたとは考えられない。北側の単位については、調査区北側に隣接する発掘調査成果と照合すると、該期の柱穴等が多数検出されていることから、南北50mほどの集住単位が想定される。そして15mほどの空閑地を挟んで別の集住単位か、もしくは北側の集住単位に付属する子村的な単位があるという景観が想定される。おそらく、14世紀以降に北側が水田化される一方で、南側の単位は持続していることから、前者の景観であった可能性が高いように思われる。

南側の単位については、少し興味深い状況がある。それは調査区南端に掘立柱建物があり、その北西側を隠すような塀と思われる柱穴列があり、柱穴列の途絶えている北東部分に墓が検出されていることである。墓は単独で存在していることからも、南側の単位に付属する屋敷墓であり、しかも建物の北東、則ち鬼門方向に位置するのである。屋敷墓が、屋敷地の所有が固定化されていないため、その所有権を主張するための根拠であるという歴史的意義付けからすると、この墓は、北側の単位を意識しているとともに、鬼門方向という陰陽道の思想も意識していたということになる。北側単位の端部に、完形の土師質土器碗と小皿がまとめて出土したP116が検出されたことも示唆的である。南側の単位との境を意識した儀礼がおこなわれたことを示しているように思われる。そうすると、南北の両単位は同時に存在し、その存在形態を極めて良好に止めている遺構であるともいえる。以下、検出された遺構と遺物の詳細について説明する。

建物4（図13）

調査区の北東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。北と東部分は調査区外へ出るため全形は不明である。柱間は1間以上×2間以上である。ただし、塀等の柱列である可能性もある。遺構検出面のレベル高は、3.7m付近で、柱穴の掘り方は、径0.1~0.25m前後である。柱痕跡が認められる柱穴があり、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。

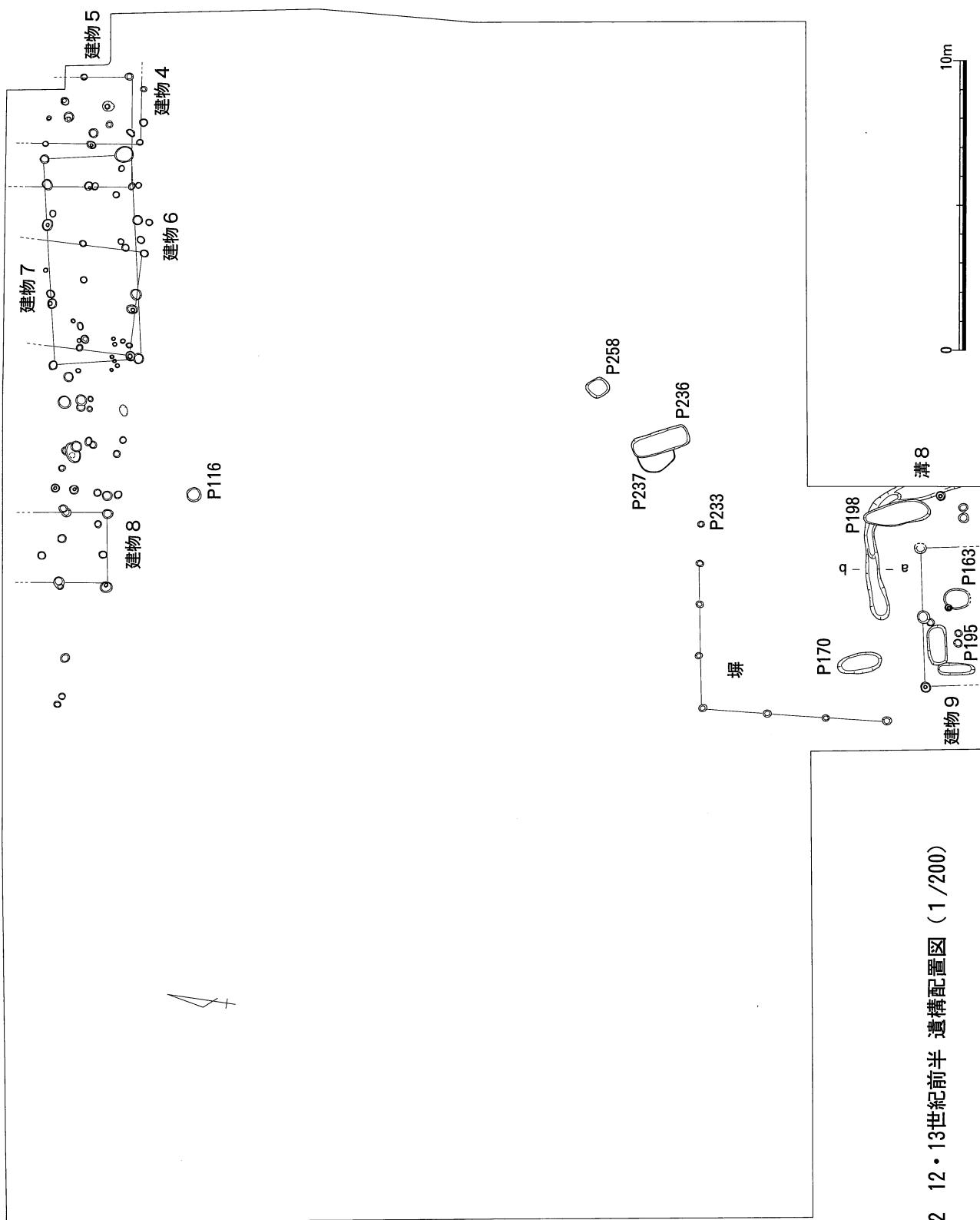


図12 12・13世紀前半 遺構配置図 (1/200)

各柱穴の埋土には土器の小片が含まれているが、図化できるほどのものはなかった。14~15世紀の水田層を除去後に検出されたことや、12世紀と推測される掘立柱建物の方向と一致することから、12世紀の遺構と考えられる。

建物 5 (図14)

調査区の北東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。北半部分は調査区外へ出るため全形は不明である。柱間は2間×2間以上である。棟方向はN-20°-Eである。遺構検出面のレベル高は、3.7m付近で、柱穴の掘り方は、径0.2~0.4m前後である。棟持ち柱の平面形が不整形であり、柱が抜き取られた可能性が推測される。柱痕跡が認められる柱穴があり、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。また北東端部で検出された柱穴には、柱穴片側に偏在して角礫が入れてある。

各柱穴の埋土には土器の小片が含まれているが、図化できるほどのものはなかった。14~15世紀の水田層を除去後に検出されたことや、12世紀と推測される掘立柱建物の方向と一致することから、12世紀の遺構と考えられる。

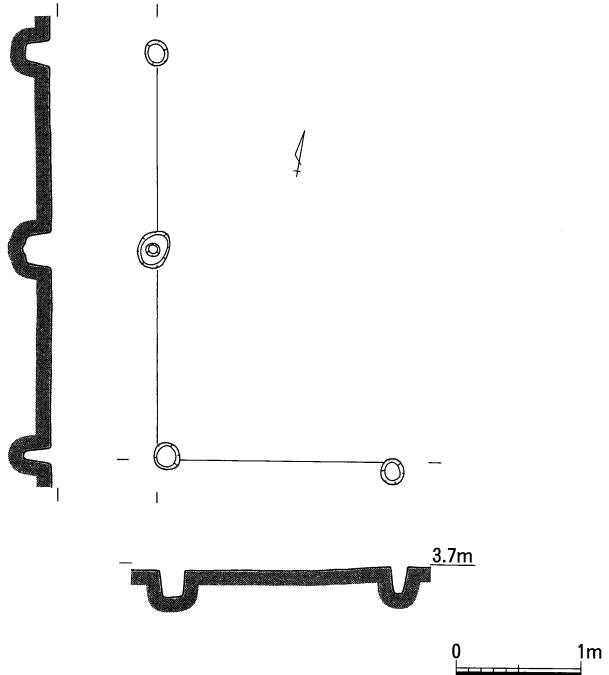


図13 建物4 (1/60)

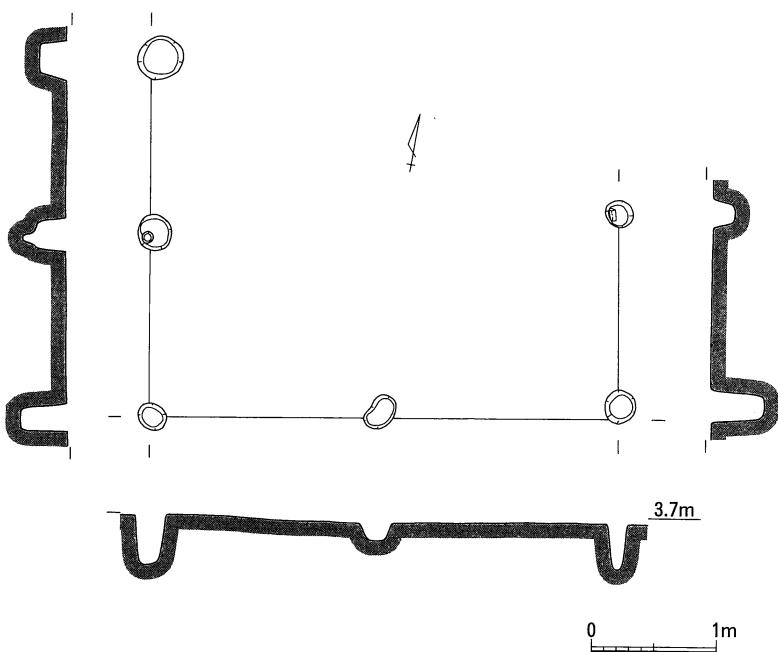


図14 建物5 (1/60)

建物 6 (図15)

調査区北東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。柱間は1間×3間で、棟方向はN-20°-Wである。床面積は、21.15m²である。遺構検出面のレベル高は、3.7m付近で、柱穴の掘り方は、径0.3m前後であるが、南東コーナー部の柱穴については、径が0.7mと規模が大きい。柱穴埋土を掘り

下げている過程では明確にできなかつたが、柱を抜き取った抜き取り穴が重複している可能性も考えられる。柱痕跡のある柱穴が2個検出されており、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。

各柱穴埋土には土器の小片等が含まれているが、図化できたのはP aの埋土から出土した土師質土器小皿(7)と土師質土器鍋(8)だ

けである。土師質土器小皿(7)は完形であり、意識的に入れられた可能性がある。

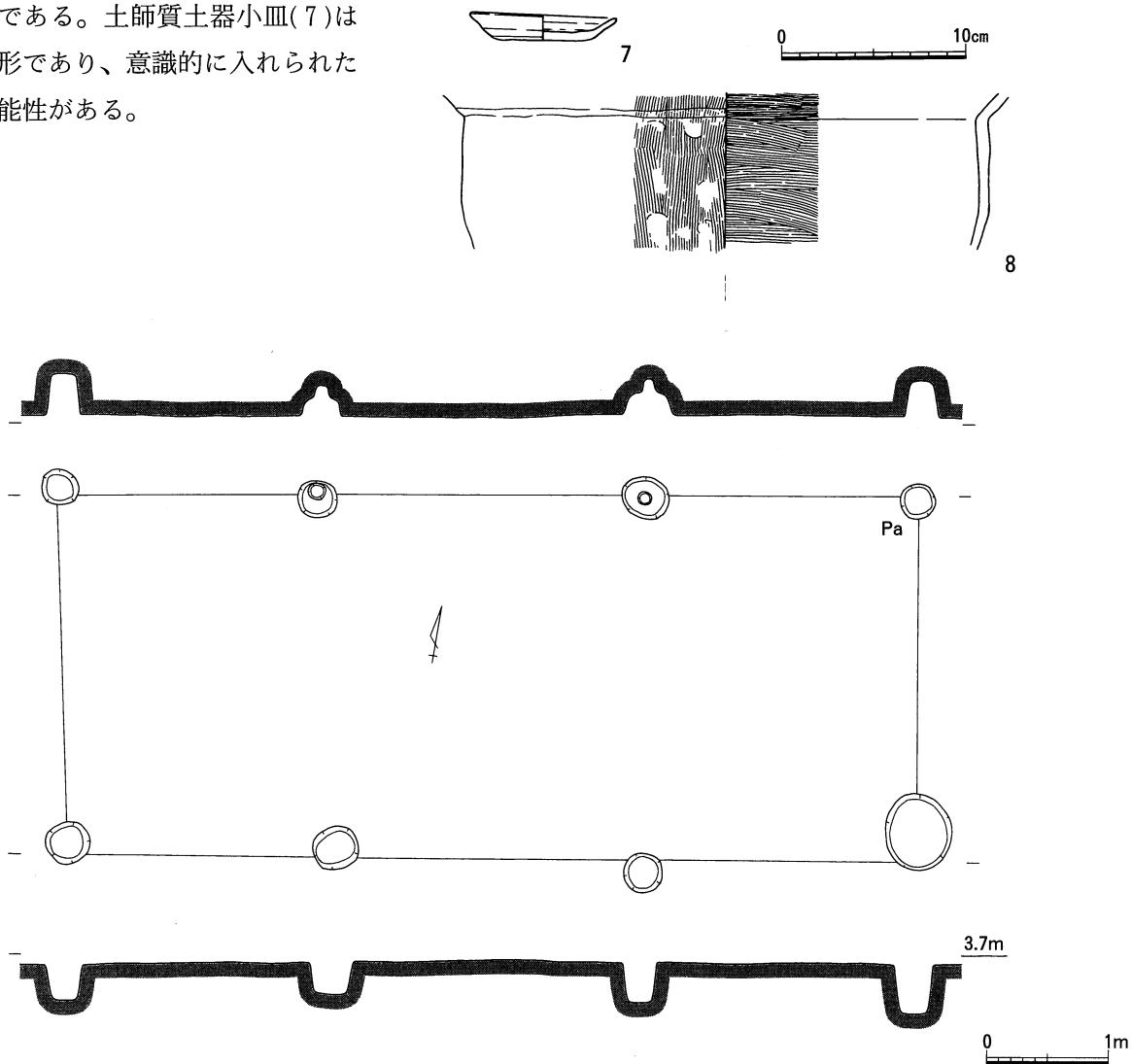


図15 建物6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

建物7 (図16)

調査区の北東コーナー付近で検出された掘立柱建物である。北半部分は調査区外へ出るため全形は不明である。柱間は2間×1間以上である。棟方向はほぼ正方位である。遺構検出面のレベル高は、3.6m付近で、柱穴の掘り方は、径0.2~0.3m前後である。柱痕跡が認められる柱穴があり、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。断面形からすると、柱穴の底部を柱径部分のみを掘り下げたものと、柱全体を掘り下げたものがある。柱径のみを掘り下げたものと柱全体を掘り下げたもののレベル差はそれほど顕著でない。調査区北側で検出された建物群については、若干南へ軸方向を振る傾向があり、そういう視点からでは、建物7は他の建物と少し方向性が異なるともいえる。しかしながら、中世における集落の調査例からすると、館跡等の特別な遺構でない限り、同一集落内での建

物の軸方向については、かなり偏差が認められる場合が大半であり、むしろ建物7と他の建物との方向性の差は、極めて僅少なもの範疇に入るるものともいえる。建物7と他の建物の差については、方向性以外の差はほとんど認められないこともそのことを示しているように思われる。

各柱穴の埋土には土器の小片が含まれているが、図化できるほどのものはなかった。14~15世紀の水田層を除去後に検出されたことや、12世紀と推測される掘立柱建物の方向と一致することから、12世紀の遺構と考えられる。

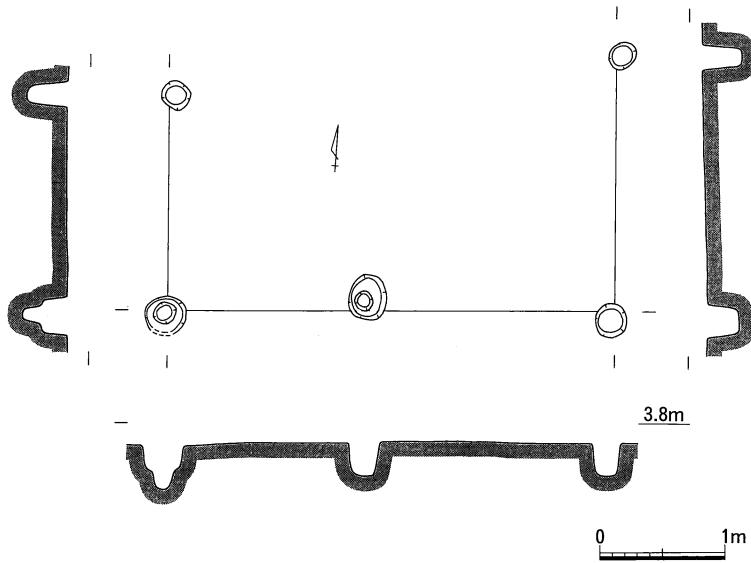


図16 建物7 (1/60)

建物8 (図17)

調査区の北端中央部付近で検出された掘立柱建物である。北半部分は調査区外へ出るため全形は不明である。柱間は1間×1間以上である。棟方向はN-10°-Wである。遺構検出面のレベル高は、3.6m付近で、柱穴の掘り方は、径0.3~0.4m前後である。柱痕跡が認められる柱穴があり、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。また、北西部の柱穴は柱を抜き取られた痕跡が明瞭である。断面形からすると、柱穴の底部を柱径部分のみを掘り下げたものと、柱全体を掘り下げたものがある。柱径のみを掘り下げたものと柱全体を掘り下げたものとのレベル差はそれほど顕著でない。調査区北東コーナー付近では、方向性を共有する建物が重複して検出されており、その西端に位置する。断片的ではあるが、梁間の規模を比較する限り、小規模であり建て替えもない。重複している部分に主屋があり、その脇屋的な性格が推測される。

各柱穴の埋土には土器の小片が含まれているが図化できるほどのものはなかった。14~15世紀の水田層を除去後に検出されたことや、12世紀と推測される掘立柱建物の方向と一致することから、12世紀の遺構と考えられる。

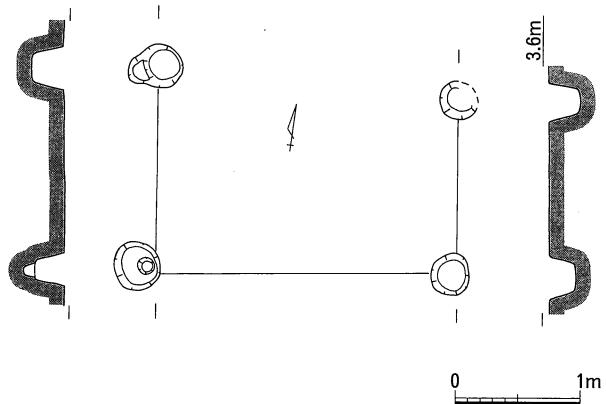


図17 建物8 (1/60)

建物9(図18)

調査区の南端中央部付近で検出された掘立柱建物である。南部分は調査区外へ出るため全形は不明である。柱間は2間×1間以上である。北東コーナー付近を中心としてL字形に、幅0.5m、深さ0.05mほどの浅い溝がめぐっており、北側には建物の北西コーナー付近を意識したと考えられる平面L字形の塀が検出されている。これらのことから、建物9は柱穴が3個しか検出されていないが、梁間4.7mの規模の建物であると考えられる。そうすると、建物9は、調査区内で検出されている建物の中では最も規模が大きいものといえる。棟方向はN-10°-Wである。遺構検出面のレベル高は、3.9m付近で、柱穴の掘り方は、径0.3~0.4m前後である。柱痕跡が認められる柱穴があり、それからすると、0.1m前後が柱径と考えられる。検出面からの深さは0.6mもあり、塀等の柱穴と比べると、極めて深く、他の建物と比べても深い傾向にある。また、北西部の柱穴は柱を抜き取られた痕跡が明瞭である。断面形からすると、柱穴の底部を柱径部分のみを掘り下げたものと、柱全体を掘り下げたものがある。柱径のみを掘り下げたものと柱全体を掘り下げたものとのレベル差はそれほど顕著でない。

柱穴埋土からは比較的多くの土器片が出土しており、図化できたのは、P aから出土した土師質土器碗底部片(12)、P bから出土した須恵質こね鉢(13)、P cから出土した土師質土器鍋(9・10)、土師質土器碗底部片(11)である。

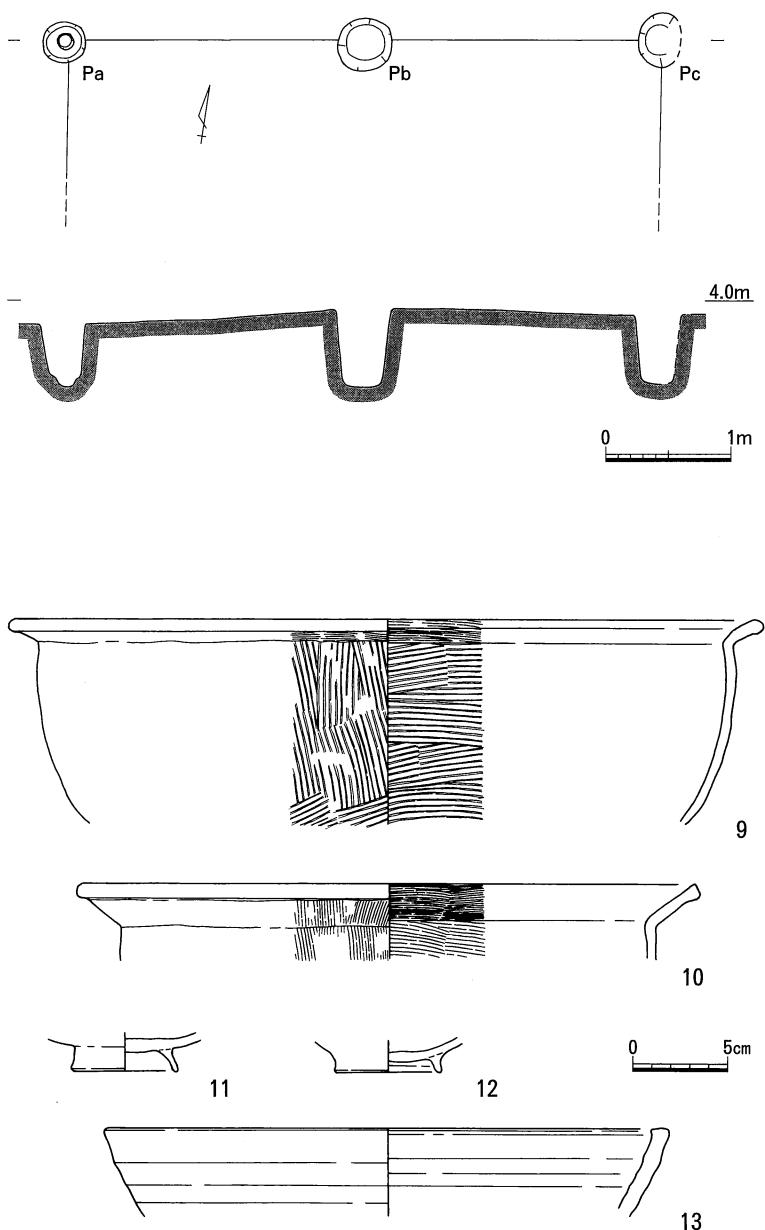


図18 建物9(1/60)・出土遺物(1/4)

塀 (図19)

建物9の北西コーナー付近を意識した位置で検出された柱穴列で、建物9の目隠し塀と推測される。L字形の平面形で、北側の東西方向は3間の柱間、西側の南北方向も3間の柱間である。遺構検出面3.7m付近で、北西コーナー付近については上面の掘削が及んでいることから、3.5m付近となる。柱穴の径は、0.2m前後である。出土した遺物は土師質土器の小片が僅かであったが、建物9に伴う目隠し塀であると考えられたことから、12世紀の時期とした。

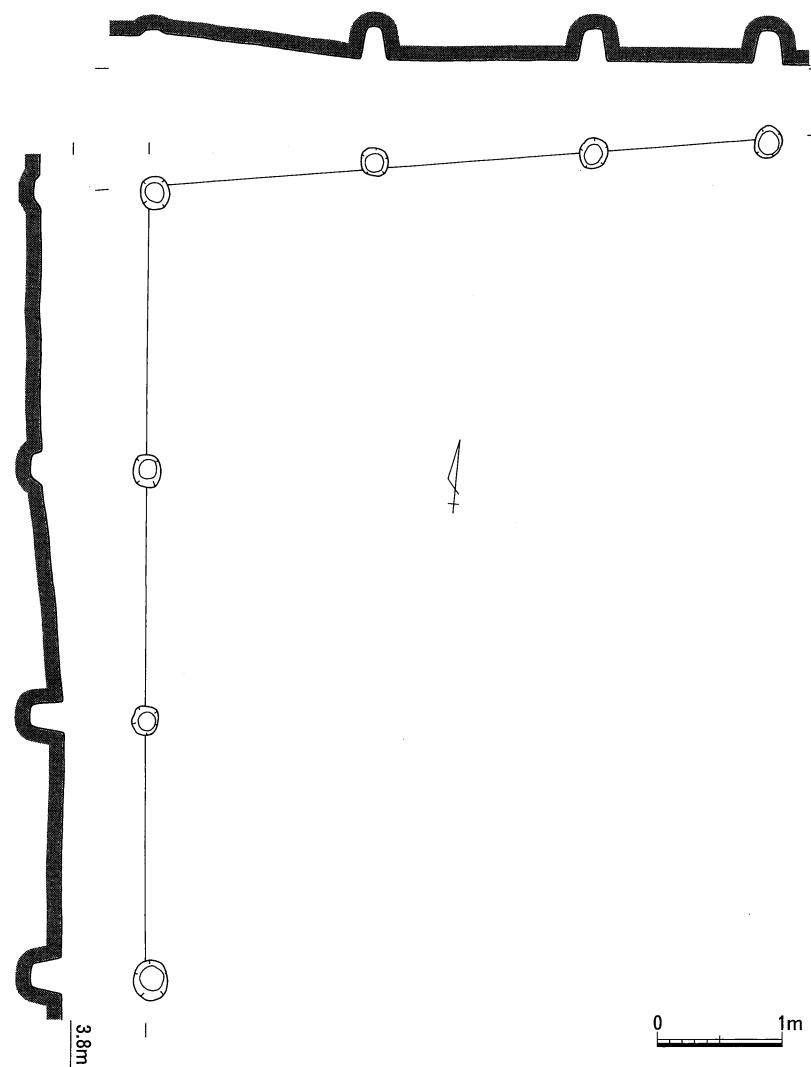


図19 塀 (1/60)

溝8 (図12・20・21)

調査区中央南端で検出された溝で、建物9の北東コーナー付近を区画する溝である。幅0.3m内外で、遺構検出面は3.9m付近である。深さは、検出面から0.1mの部分と、0.15mの部分がある。コーナー付近が一段深くなっている。埋土は一層で、焼土や炭等が含まれるような状況ではなかった。

遺物はそれ程多くないが、コーナー付近からまとまって出土した。図化できたのは、土師質土器椀(14~16)で、とくに(14)は約1/3ほど残存していた。また、土師質土器鍋(17)も出土しており、胴部下半にはススが付着していた。

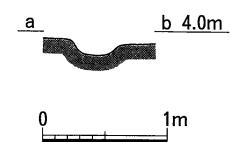


図20 溝8断面図 (1/60)

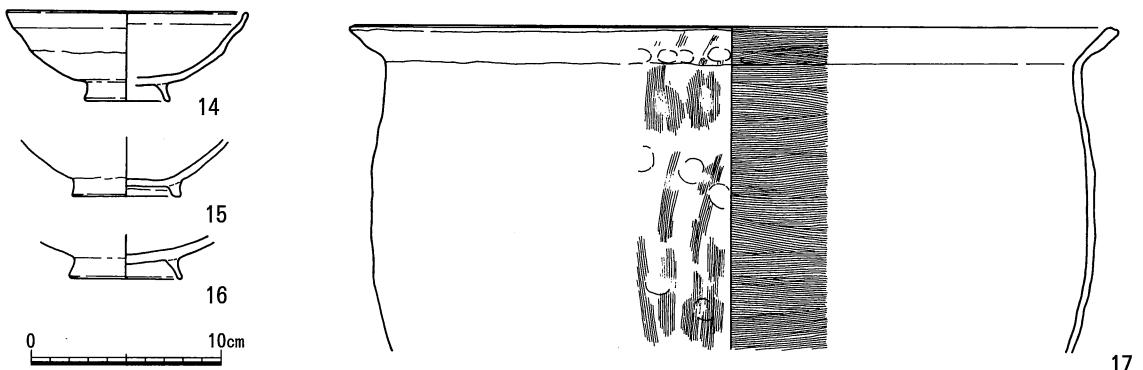


図21 溝8 出土遺物（1/4）

P116（図22・23）

調査区中央北端付近で検出された土壤で、調査区北側の建物群の南端に位置する。建物8の南東コーナー付近の南側に位置するようにも見えるが、P116以南に中世の遺構が存在しない空間があって建物や土壤等の遺構が認められるようになることから、北側建物群の南端を画する位置を意識しているように思われる。それは、出土した遺物の状況からも推測されるものである。まず、遺構の平面形は、径0.5mの円形で、遺構検出面は3.5m付近である。断面形はU字形で、底面には若干凹凸が認められる。断面の土層観察の結果、土壤を掘削した後、淡灰色土で若干埋没、あるいは埋めた上で土器を置いている。遺構最深部は、検出面から0.2mである。遺物出土状況から、遺構中央付近に土師質土器小皿を積み重ねて置き、その周囲の三方に土師質土器碗を置いている。埋没後に中央に積み重ねられた小皿がくずれて一部碗と重なる状態で出土した。遺構の北側で出土した小皿の底部が上面を向いており、南側から北側に向かってくずれた結果といえる。小皿の出土状態をみると、小皿は2ないし3つの群に分かれて積み重ねられていたようである。そうすると、出土した小皿の数から推測すると、1群について小皿を6～7枚程度積み重ねていたことになる。さらに、痕跡は認められなかったが、土器がある程度規則的にまとまっていることから、折敷のようなものに置かれていた可能性が考えられる。以上のような土器の出土状況は、土器を廃棄した結果とは考えられず、遺構の存在している位置関係からも地鎮のような祭祀的な用途に使われた遺構であったと考えられる。

出土した土師質土器碗(18～20)は白色胎土で、口径14.2～14.9cm、器高5.0cm前後である。土師質土器碗(19)の内側及び、(20)の高台外面付近には黒斑が認められる。いずれも外面はナデもしくはヨコナデで調整されており、ヘラミガキは認められない。土師質土器小皿(21～39)も白色胎土で、口径7.9～8.8cm、器高は1.0～1.5cmである。底部外面は全てヘラ切りである。ただ、内面についての調整では、中央付近に不整方向のナデをおこなうものと、おこなわないものがある。

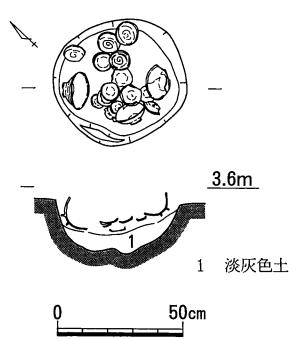


図22 P116 (1/30)

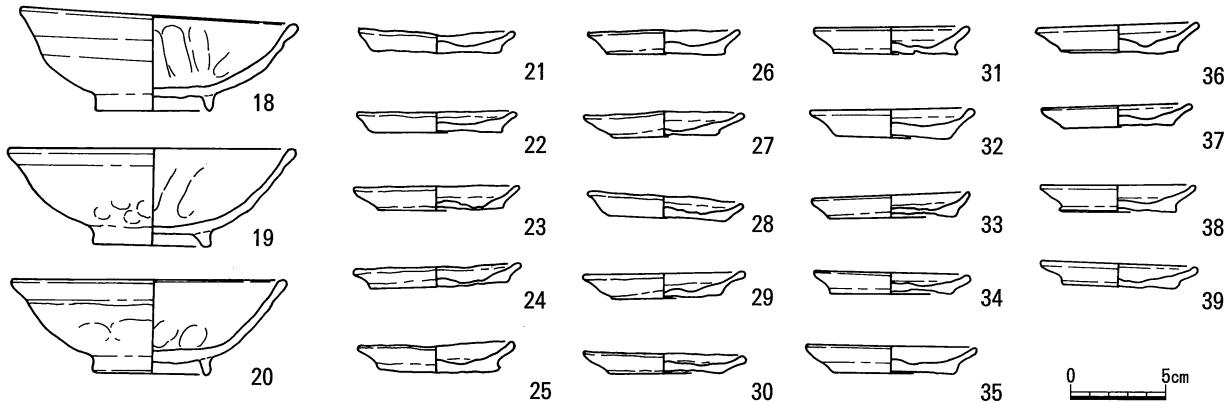


図23 P116 出土遺物 (1/4)

P163 (図24)

調査区南端で検出した土壙で、長径0.9m、短径0.7mの小判形の平面形を呈する。遺構の断面形は台形で、底部は比較的平坦となっている。遺構検出面は3.9m付近で、最深部までの深さは検出面から0.2mである。埋土は3層あり、ブロック的な堆積状況であることから、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は全て底面から浮いた状態で出土した。破片が主体であるが、完形に近い小皿(43)が南端付近で出土した。P163は建物9と重なる位置関係にあるが、両者における有機的な関係の有無については不明である。ただ、付近には長楕円形もしくは小判形を呈する土壙が幾つかあり、それらは、その平面形から墓であることも推測される。つまり、散発的ではあるが、中世の墓域を形成していた可能性が推測されるのである。そうすると、P163もその一部で、土壙墓ということも考えられる。ただし、人骨等は検出されなかった。また、棺痕跡等も検出されなかった。

出土遺物は、破片を中心である。図化できたのは、土師質土器碗の口縁部片(40・41)と高台付近の破片(44)、土師質土器小皿(42・43)である。土師質土器碗の口縁部の残存部分がそれ程大きくないこ

から、法量的に明確な裏付けはとれないが、建物9に伴うと考えられる溝8から出土した土器と大差がない時期といえる。当遺跡の北に位置する三手遺跡では、土壙墓群伴う位置関係にある建物が検出されており、小堂と墓といった関係も想定される。当調査区南群の建物と土壙についても同様の可能性も推測される。

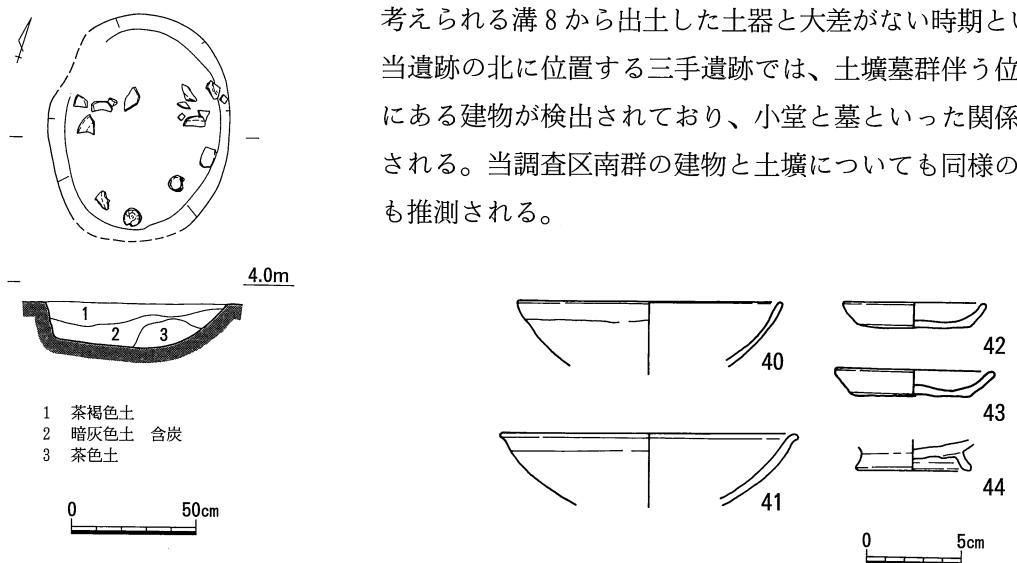


図24 P163 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P 170 (図25)

調査区南端で検出された土壌で、長径1.5m、短径0.7mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は、3.8m付近で、遺構最深部の深さは検出面から0.2mである。断面形は台形で、底面は平坦となっている。埋土は2層であるが、特徴的な堆積状況ではない。土器の小片と角礫、及び鉄鎌が遺構の中央付近から出土した。鉄鎌は完形であり、副葬された遺物であると考えられる。したがって、遺構の平面形及び断面形から墓である可能性が高い。しかしながら、埋土中には人骨等は検出されなかった。また棺痕跡等も検出されなかった。

出土した鉄鎌(M 1)は完形で、緩やかなカーブを描いて屈曲し、両刃をつける。目釘穴は認められない。土器は全て小片で、図化できたのは、土師質土器椀の口縁部の小片(45)である。法量等は不明であるが、口縁端部に強いヨコナデを施すことややや肥厚気味におさめることからも、時期的には12世紀後半頃前後の時期に推測される。

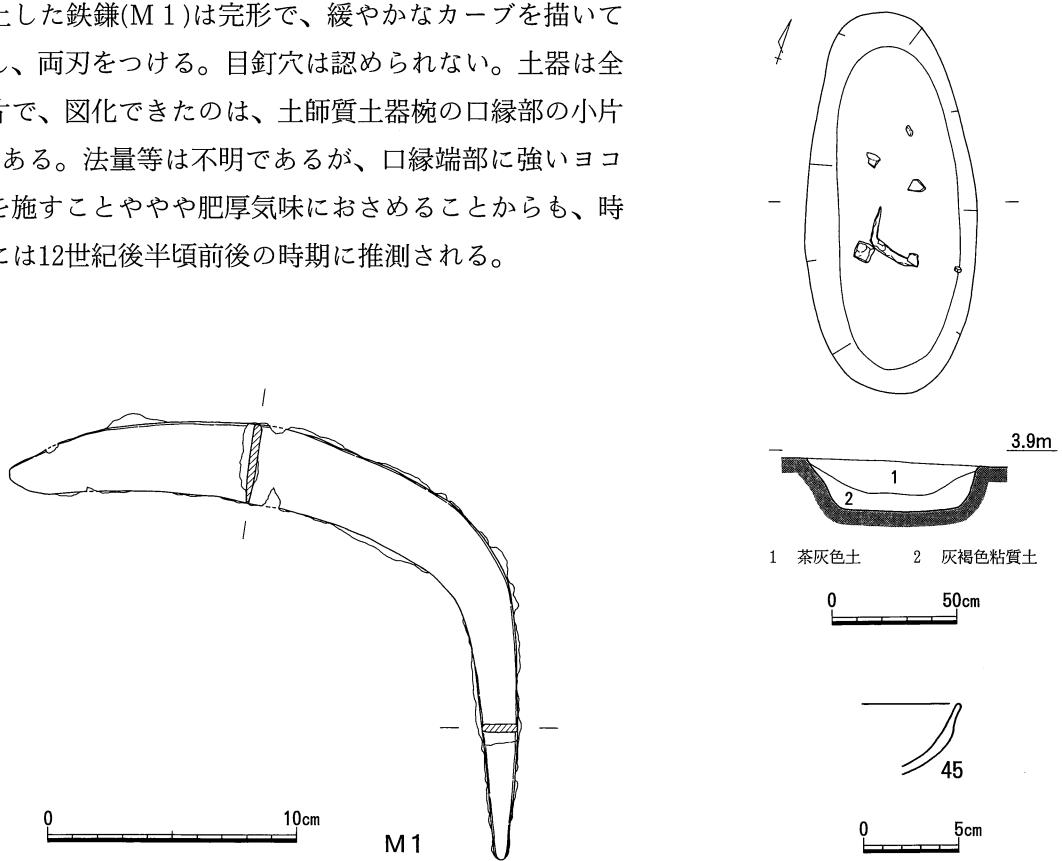


図25 P 170 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

P 195 (図26)

調査区南端で検出された土壌で、上面は現代のゴミ穴で削平されており、南端の一部以外は底面付近のみが残存しているだけであった。復元的にみると、長径1.2m、短径0.4mの数値が得られる。遺構検出面の最高部は、3.7m付近である。南端部の様相から、断面形は緩やかな台形で、底面は平坦である。深さは、遺構検出面から0.2mである。埋土は断片的ながら4層が確認でき、ブロック的な堆積状況であることから、人為的に埋められたことを推測させられる。南端から、完形の土師質土器椀が2つ重ねて、断面傾斜の角度と平行した状態で出土している。ただし、埋土中からの出土であり、枕等に利用されていたのではなさそうである。土師質土器椀の北側の遺構底面付近から歯骨片が出土した。おそらく埋葬した際に、顔の上面に土師質土器椀を重ねて置いていた可能性が推測される。遺構の形状や歯骨が出土したことにより、墓であると考えられる。

出土した遺物は、重なって出土した土師質土器碗(46・47)以外はなかった。いずれも白色胎土で、口径はそれぞれ14.6、14.8cmで、高さは5.4、5.5cmである。いずれも内側には重ね焼き痕が認められる。(47)の内側には、シダ類の植物を押しつけ、その圧痕をヘラ状工具で強調している。他に例がないため比較しようがないが、圧痕だけではないことから、文様としての意識がうかがわれる。それと葬送に用いる器具としての関係も想像されるが、明確ではない。

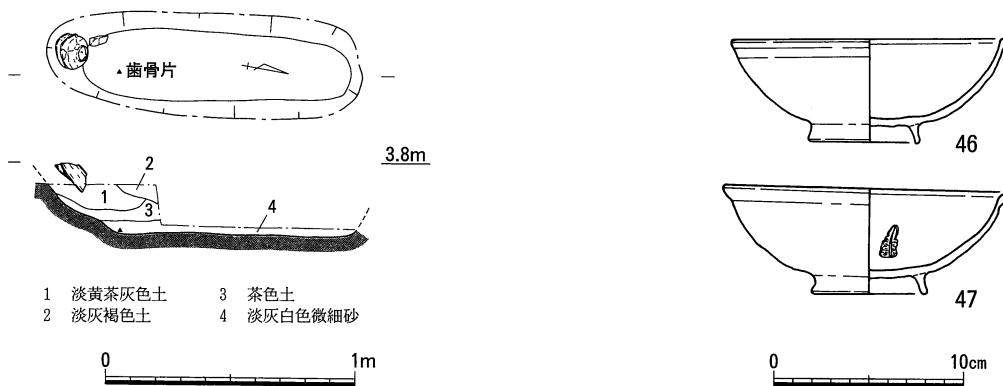


図26 P195 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P198 (図27・28)

調査区南端で検出された土壤で、建物9の北東コーナー付近を意識した溝8を削平して掘削している。長径2.4m、短径0.7mで、長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は4.0m付近で、断面形は緩やかなカーブを描く。遺構検出面付近から中央部に向かってやや低くなる傾向で検出された。しかしながら、いずれも遺構底面から浮いた状態で出土している。完形の土師質土器皿(50)が遺構の中央付近から出土した以外は、いずれも小片である。底面付近からは全く遺物は出土しなかった。長楕円形の平面形から墓である可能性が推測されるが、骨等や棺痕跡は検出されなかった。

出土した遺物のうち、図化できたのは、土師質土器碗(48・49・56・57)、土師質土器皿(50)、土師質土器小皿(51～55)、土師質土器

鍋(58～60)である。完形は土師質土器皿(50)と土師質土器小皿(51)のみである。出土した土師質土器碗は残存部分が少ないと想定される。法量的な根拠が弱い。しかし土師質土器皿の口径と土師質土器碗の口径が、極めて近い数値であることが確認されており、そうすると土師質土器皿(50)の口径である13.6cmほどの数値が考えられる。

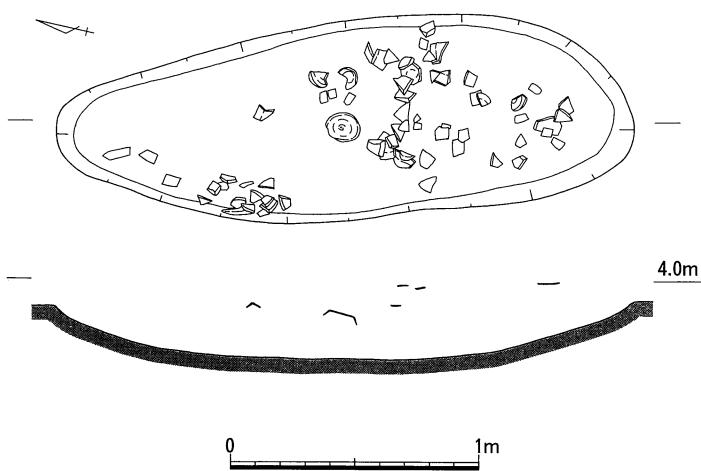


図27 P198 (1/30)

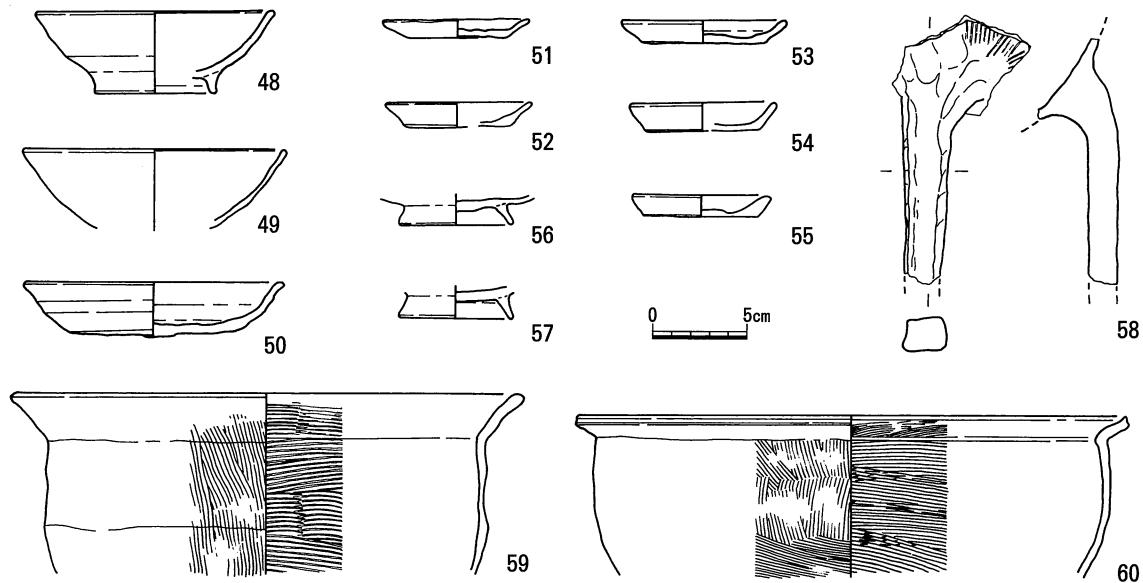
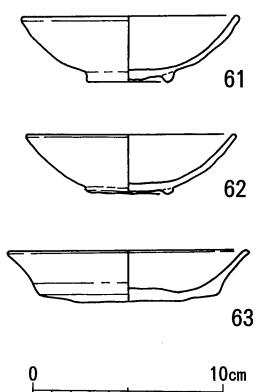
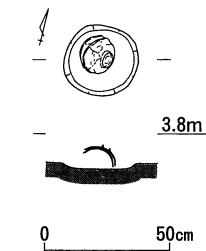


図28 P198 出土遺物 (1/4)

P233 (図29)

調査区中央南半で検出された土壙で、塀の東端柱穴の延長に位置する。径0.3mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.6mで、検出面からの深さは0.05mほどである。遺構検出面よりも上面で土器が出土し、土師質土器碗が伏せた状態で重ねられていることから、遺構内であると推測され、精査した結果、柱穴状の遺構が検出された。塀の延長であると想定したが、断面形が緩やかな傾斜であることなどや、遺構の中央に土器が入っていることから、柱穴ではないと判断した。しかしながら、塀の柱穴の間隔と同じ間隔の延長に位置することから、塀と極めて密接な関係があるように思われた。しかしながら、出土した土器の年代観からすると、溝8の時期よりも新しくなる。溝8は、塀に伴う建物9に伴うと考えられることから、P233と塀は異なる時期の遺構といえる。むしろ、P233の北東に土壙墓があり、時期的にも整合することから、墓に関係する遺構であると推測される。

出土した土器は、土師質土器碗(61・62)が2点、土師質土器皿(63)が1点であり、いずれも重ねてあった。土師質土器碗(61)の口径は11.5cm、土師質土器碗(62)の口径は11.0cm、土師質土器皿(63)の口径は12.4cmである。土師質土器碗は白色胎土で、土師質土器皿は橙色胎土である。土師質土器碗(62)の内側見込みと外面高台内側に黒斑が認められる。

図29 P233 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

P 236 (図30)

調査区南半で検出された土壙で、その形状から土壙墓と考えられる。しかしながら、人骨等は残存していなかった。長さ2.1m、幅0.8mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、断面形は箱形である。埋土は2層で、遺物は検出面から土師器の小片が出土した。

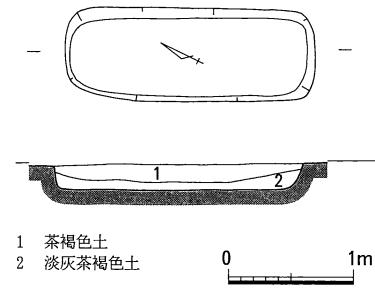


図30 P 236 (1 / 60)

P 237 (図31)

調査区の南半で検出された土壙墓である。東側の上面はP 236によって削平されている。長さ1.2m、幅1mのやや西側に突出するような長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、深さは0.85mである。底面は平坦である。遺構検出時に土師質土器楕(64・65)の2点が出土した。遺構中央付近であり、いずれも完形に近いことから、供献された土器と考えられる。断面土層をみると、埋土掘り下げる時には検出することはできなかったが、柱穴状の落ち(①・②層)があり、その位置も遺構中央部であることや、出土した土器の位置と極めて近いことから、木製の墓標等が立てられていた可能性も推測される。①・②層以外の埋土は、ブロック状の堆積状況であることから、埋められた状況を示している。採集埋土である⑤層から人骨が出土した。人骨はかなり劣化していたが、横臥屈葬であることが観察された。埋土を詳細に観察したが、木棺等の痕跡を示す木質等は残存していなかった。しかしながら、底面が平坦であることと、断面が直立で箱状を呈する部分が観察されることから、木棺で埋葬されていた可能性が高いと思われる。

出土遺物は、上層で出土した土師器楕(64・65)のみで、埋土からは土器の微細な小片以外は出土しなかった。

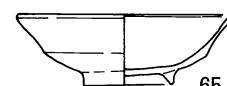
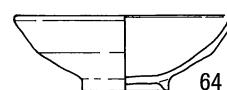
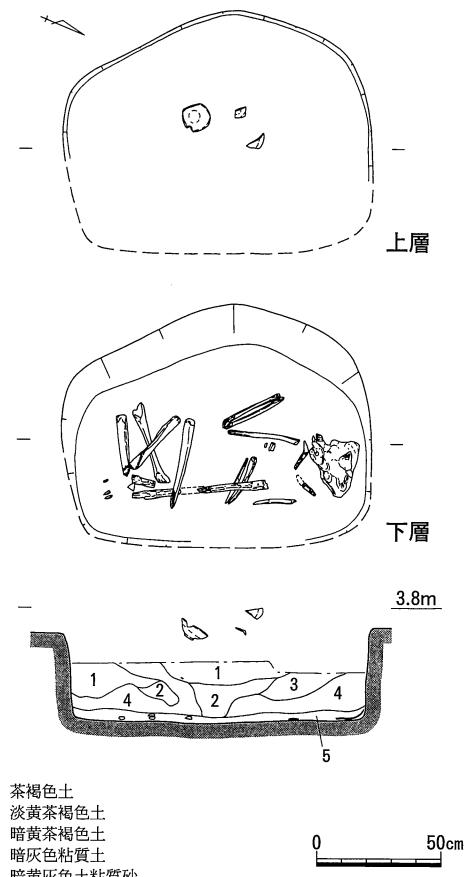


図31 P 237 (1 / 30)・出土遺物 (1 / 4)

P 258 (図32)

調査区中央やや東よりで検出された土壙で、一辺0.6mの隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、検出面からの深さは0.4mである。断面形は台形で、中央付近が若干深くなっている。深くなっている部分の平面形は不整形である。埋土は1層である。棺痕跡等は観察できなかった。また骨等も出土しなかった。しかしながら、土壙墓であるP 237に近接し、さらに副葬と推測される土師質土器碗も出土していることから、当遺構も墓である可能性が推測される。墓であったとするならば、遺構の深さがP 237と比べると深いことや、方形の平面形を呈することから、座棺で埋葬されたことになると思われる。

土師質土器碗(66)は、遺構の南端の遺構検出面付近で出土した。口径が14.8cm、器高が5.4cmである。白色胎土で、体部外面に黒斑が認められる。

12・13世紀前半包含層出土遺物 (図33)

中世前半の時期に相当する包含層は殆ど認められず、後の水田開発によってかなり削平を受けていると考えられる。したがって、古墳時代や弥生時代の遺物の量と比較すると、中世に属する遺物の量は少ない。また、中国製磁器等の特色ある遺物も少なかった。そのなかにあって、調査区の南端付近での遺構精査時に、東播系のこね鉢(67)、白磁合子(68)、白磁碗(69)が検出された。当調査区の北側の校舎建て替えの際におこなわれた調査では、白磁碗を副葬した土壙墓が検出されている。当調査区の南端では土壙墓が検出されており、さらにその土壙墓の上面附近から供献された土器が出土している。包含層から出土した白磁合子や白磁碗についても、同様に付近の墓に供献されていたものである可能性が推測される。東播系のこね鉢についても、当調査区においては1点しか出土していないことから、ある意味、限定的な範囲での使用語句となるが、希少性の高いモノと考えられなくもない。したがって、墓の副葬等に用いられたとも推測される。

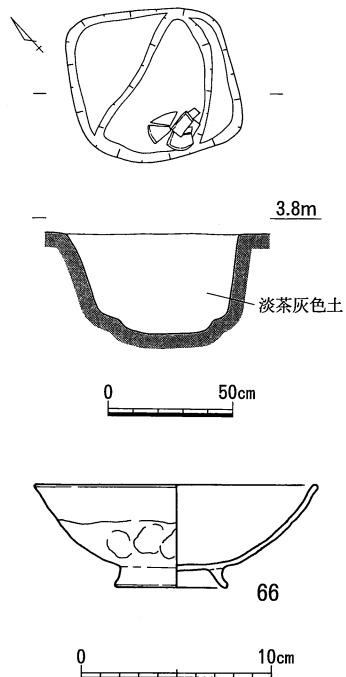


図32 P 258 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

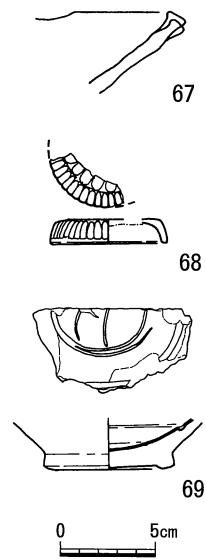


図33 12・13世紀前半
包含層 出土遺物 (1/4)

III. 7・8世紀 遺構面 (図34)

当調査区の北側に位置する校舎建設に伴う発掘調査では、7・8世紀の掘立柱建物の柱穴が多数検出された。いずれも方形の掘り方であり、比較的規模が大きいことから、官衙的な性格の建物群であることも推測される。当調査区の北約400mにある津寺遺跡では、南北118.3m、東西89.1mの2条平

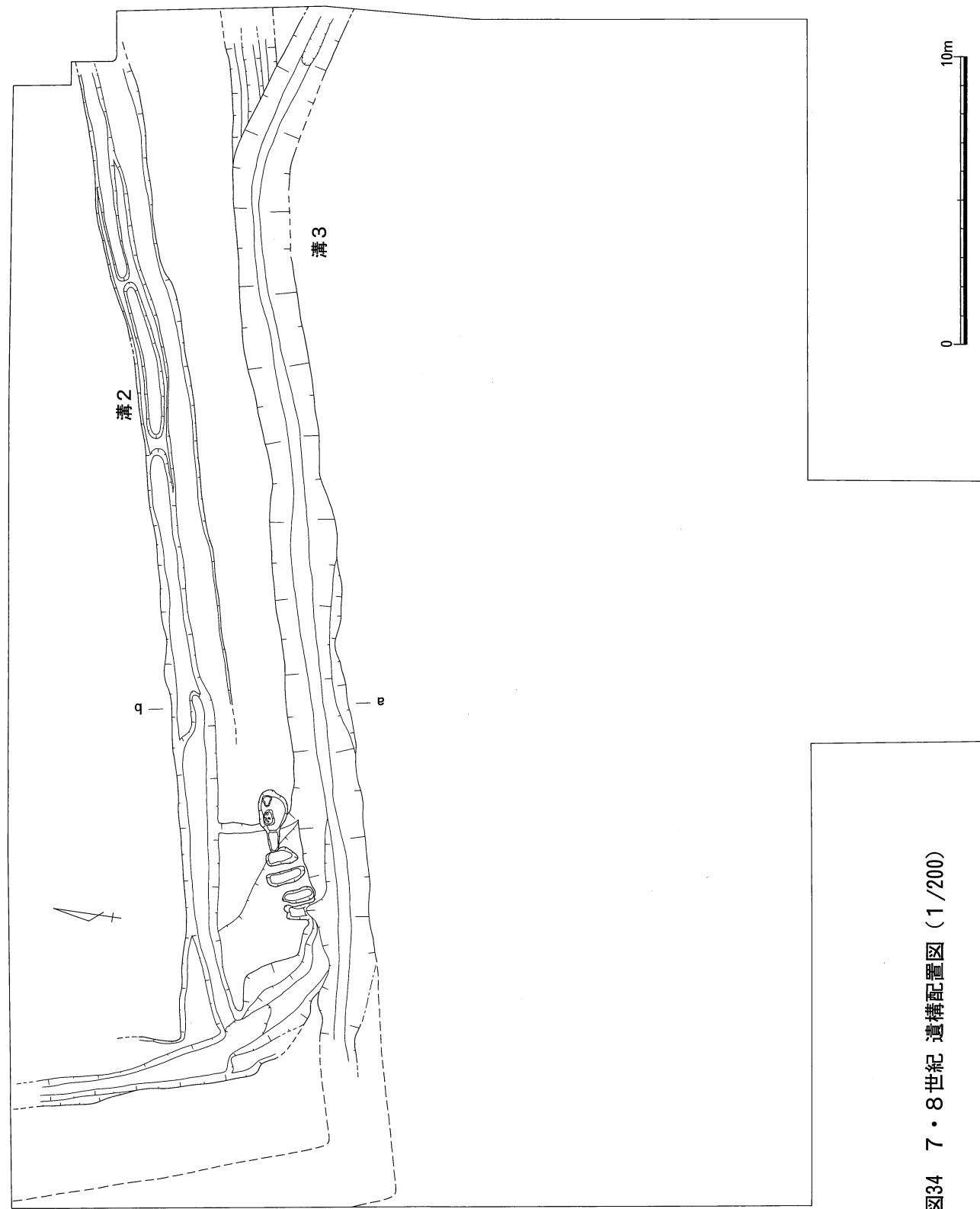


図34 7・8世紀 遺構配置図 (1/200)

行の溝間に区画された中に掘立柱建物群が検出されており、それらは「コ」の字形に配置されているとまではいかないが、方形区画に規定された規則的な配置をしている。官衙的な遺構といえる。当調査区の北側校舎部分で検出された柱穴は、数は多いものの、規則的な配置をとるとは言い難い。ただし、当調査区を含めてみてみると、該期の柱穴の分布は限定的のようである。どのような建物になるかといった点では不明瞭な部分も多いが、集中的に柱穴が分布していることや、出土遺物に銅製帶金具があることなどから、一般的な集落というよりも官衙的要素を含んだ性格であった遺跡であるという見方ができた。当調査区では該期の柱穴は全く検出されず、また出土した遺物の量も少なかった。生活域からは若干距離があるような状況であった。遺構精査の結果、調査区の北半で2条平行する東西に直線的に延びる溝が検出された。調査区の北西付近で直角に近い角度で北に屈曲している可能性が高く、何らかの区画を意図した溝であると考えられる。

溝2（図34～36）

調査区北半で検出された溝で、その南側で検出された溝3と約2.5mの間隔をおいて東西に平行して掘削されている。遺構検出面は3.7m付近で、検出面も溝3と同じであるが、埋土の観察からも、最終的に両溝は同時に埋没している。溝2の幅は約1.0mで、南側外側に幅約0.5～0.8mのテラス状の若干低い平坦部分が認められる。溝底部は平坦ではなく、間隔は不規則であるが凹凸が認められ、全体的にみると、5～10mの端部が丸い溝が連結している形状である。巨視的にみると直線的であるが、微視的にみると幾つかの単位の小溝が連結していることによって生じる不連続部分が観察される。掘り上がり状態の溝は、その溝の最終形態であることは当然であるが、不連続部分については8～10mほどの比較的規則的な間隔であることから、溝を維持していたときに生じた掘り直し等の痕跡とはいえないようと思われる。溝を掘削した際に生じたもので、あえて踏み込んで推測すると、溝掘削の担当部分の単位を示しているように思われる。溝底部が凹凸のある構造であり、通水目的の一般的な用水路とは考えられないことから、掘削単位の痕跡が明瞭な状況が生じたのではなかろうか。

埋土に含まれる出土物はそれ程多くない。図化できたのは、須恵器の高杯(70・73)、壺(71)、甕(75)、杯(74)、土師器皿(72)である。特筆すべき遺物としては、平瓦(76)と博(77)がある。平瓦(76)は、須恵質で焼成は堅緻、表は平行タタキ、裏側には布目が明瞭である。博(77)は、方形のレンガ状の形状を呈し、須恵質の焼成である。上面にはヘラ状工具でナメ方向にナデた痕跡が明瞭にのこる。平瓦、博とも1点しか出土しておらず、その性格や、付近にそれらを使用した建物や施設があったかどうかについては、よくわからない。しかしながら、直線的な溝に埋没している点からも、付近に関係する遺構が存在する可能性は高いようと思われる。

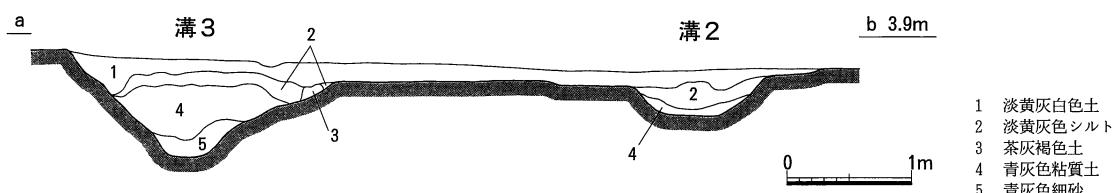


図35 溝2・3 断面図（1/60）

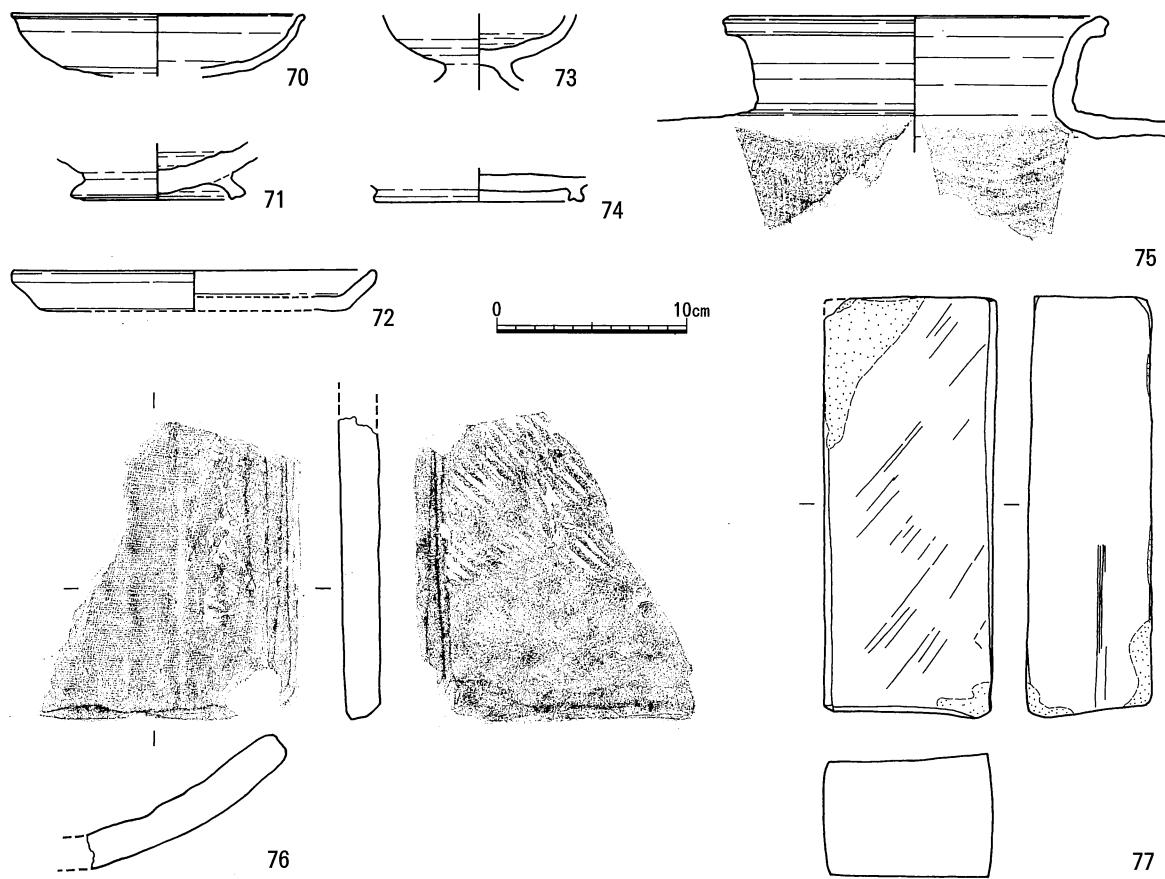


図36 溝2 出土遺物 (1/4)

溝3 (図34・35・37)

調査区北半で検出された東西方向の溝である。溝2と平行であり、埋土を観察した結果でも最終的には同時に埋没していることから、同時に機能していたと考えられる。ただし、溝3は異なる形状で、底面も一定であり、用水路的な機能を目的とした通水も可能な溝である。溝3南側の検出面は3.8mで、北側は3.6mである。溝2と溝3に挟まれた約2.5m部分については、若干低くなっている。津寺遺跡で検出された二重に廻る区画溝については、溝間に築地塀が存在していたと想定されているが、溝2と溝3間における埋土を観察する限り、そのような堆積土層は認められない。また津寺遺跡における区画溝については、内外の両溝とも極めて類似する形態である。この点も溝2・3と異なる様相といえる。溝3の規模は、幅約2.0m、深さは検出面から0.8mであり、断面形は全体的にV字形であるが、底面が幅約0.2mほど平坦になっているので、厳密には角度の急な台形とでもいうべき形状である。調査区の東端部では溝幅が1.5mとすぼまる傾向になり、さらに南側にカーブする部分とそのまま直線的に延びる部分とに分かれる。埋土の切り合い関係からすると、直線的な部分が埋没した後に南側にカーブする部分を新たに掘削したと考えられる。また西端については溝2と連結する分岐溝が存在する。分岐した後の溝は、溝幅が狭くなるようにもみえるが、上面は中世の遺構によって削平を受けており、本来的には同様の幅で続いていたと考えられる。

溝2と溝3に挟まれた部分の西端は、微高地端部とも重なることから、徐々に低くなる傾向がある。

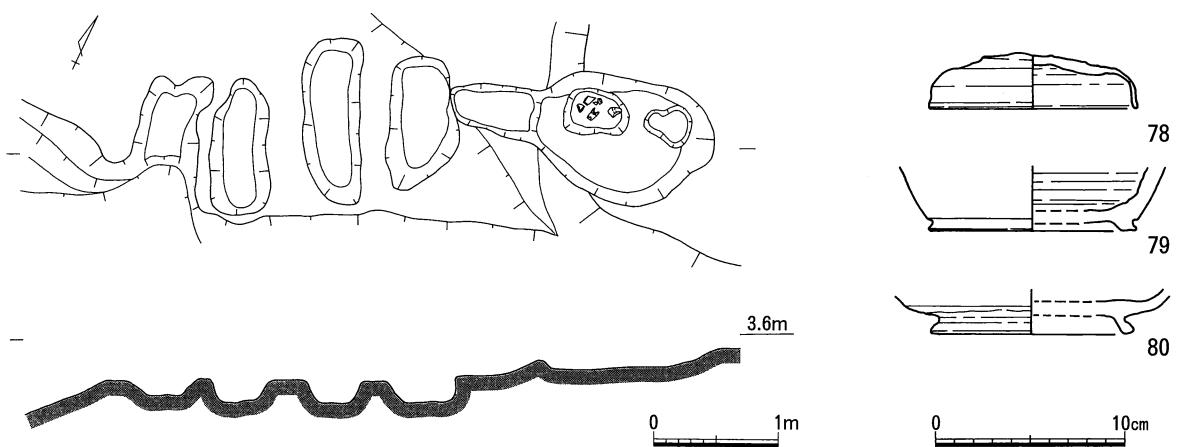


図37 溝3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

その傾斜部分で、不整形の土壙状の遺構が並んで検出された。それらの埋土は溝3の最終埋土(①層)と同じである。おそらく溝2・3と同時に機能していた遺構であると考えられる。土壙の規模は、長さ1.0~1.4m、幅0.5m前後のものが4、長さ2.1m、最大幅1.0mのものが1である。遺構検出面は3.3~3.5m付近である。深さは検出面から0.1~0.2mである。遺構の性格については明確でないが、敢えて類似する遺構としては、柵状遺構と称される不整形土壙が幾つも並んだ遺構が相当する。この遺構は、断面図を見る限り柵を構成する柱穴のような形状とはなっていない。それ程深くなく、不整形に近いものが多い。そのため、柵ではなく、丸太等を敷設した道の痕跡であるという考えがある。遺構の形状からすると、妥当な解釈と思われる。そうすると、当遺構についても、溝3の底面に降りるための階段的な木道あるいは木の階段の痕跡という可能性があるよう思われる。同様の例がないため、比較することはできないが、溝3の規模が比較的大きいことと、通水の機能を期待された溝であり、その機能維持のためには溝内に降りての浚渫作業等が想定され、そのために必要な遺構であったと推測されるのである。

遺構の規模が大きさに反比例して出土した遺物の量は少ない。とくに④・⑤層からは全く遺物が出土しなかった。溝が機能している間には、遺物が入り込む余地がない程に管理が行き届いていた感を受ける。遺物はすべて②層から出土し、そのうち図化できたのは須恵器短頸壺蓋(78)、杯身(80)、壺(79)である。遺物の傾向としては、溝2よりも古い傾向が認められるが、埋土の状況からや、溝2から出土する遺物の時期の大半が溝3の出土遺物の時期である。

IV. 古墳時代後期 遺構面 (図38)

当調査区の北側に位置する校舎建設に伴う発掘調査では、該期の竪穴住居が密集して検出された。同様の様相は、津寺遺跡でも認められる。ところが、当調査区では該期の竪穴住居は4棟だけで、しかも散在的に分布している。調査区北端には、おそらく掘り直し痕跡と推測される何處かの切り合い関係のある東西方向の溝がある。それは、北の竪穴住居密集地区とを画する溝のように思われる。津寺遺跡では、竪穴住居がまとまる群単位を囲むように溝があり、それらがまとまってさらに大きな

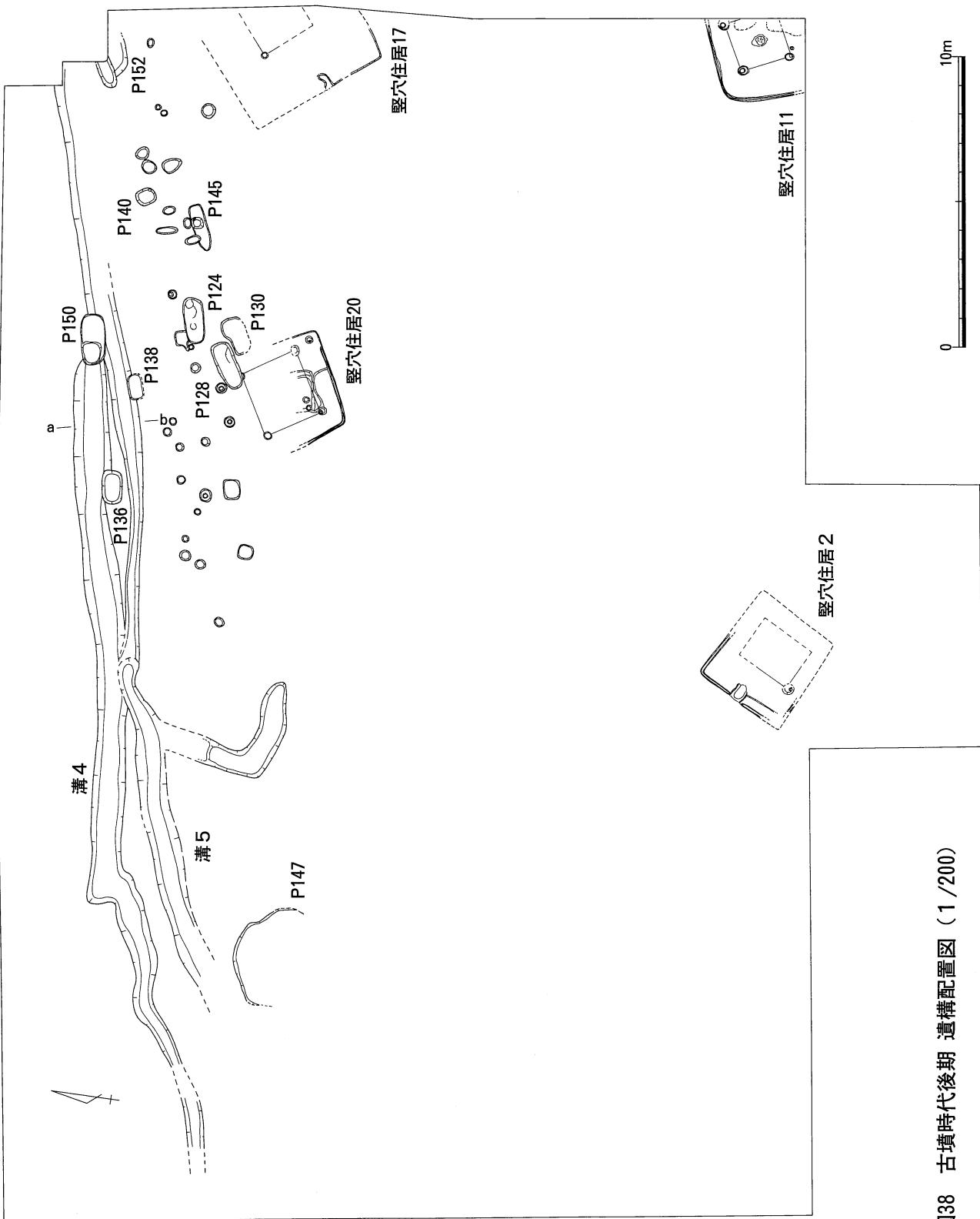


図38 古墳時代後期 遺構配置図 (1 / 200)

群を構成している。当溝についても同様である可能性が推測される。

一部は埋没した溝の埋土上面から、あるいは一部は溝に沿って長楕円形の平面形を呈する土壤が幾つか検出されており、人骨等は残存していなかったが、遺構の形状から集落内で埋葬された墓ではないかと推測される。それらの分布状況をみると、幅が6.0mで列状に並ぶ傾向がある。

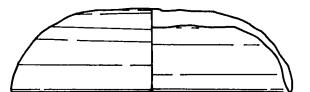
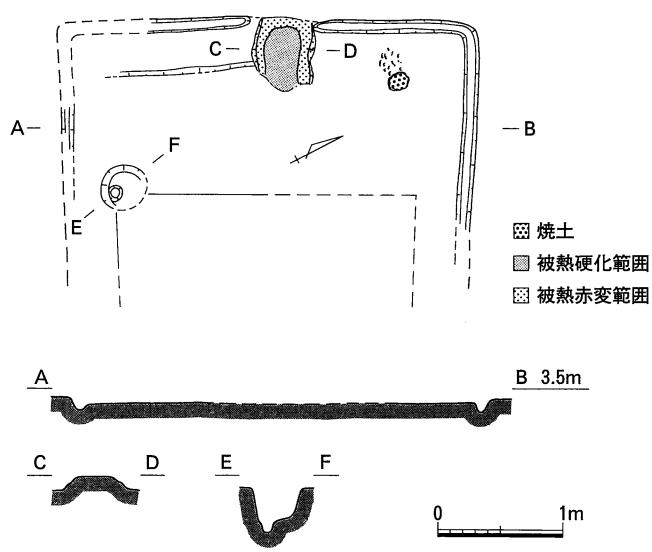
以下、検出された遺構と遺物について説明する。

竪穴住居2（図39）

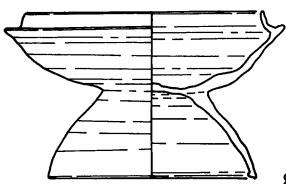
調査区南半で検出された竪穴住居である。南側は現代のゴミ穴によって削平されており、全形は不明である。残存している部分から、一辺3.3mの規模で、方形のプランと考えられる。遺構検出面は3.4m付近で、床面までの深さは検出面から0.1mである。南西部の壁から0.4mの位置までは、壁に平行して床面から約0.03mほど低くなっている。壁に沿って0.1m前後、床面からの深さは約0.05mの壁体溝が認められる。西側中央付近で壁体溝が幅0.5mほど途切れており、その部分にカマドが付属する。カマドの上面は削平されていたが、残存部は地山を削りだしている基底部で、被熱部分の色彩変化を見る限り、幅0.1mのU字形の袖部と燃焼部が復元される。燃焼部については、0.1mほど床面から上がっている。

カマドの東側床面には径0.2mほどの円形の焼土面があり、西側には焼土面から派生したと推測される炭片が散布している。焼土面の性格を明らかにするような遺物等は検出されていないが、津寺遺跡、赤田遺跡、津島江道遺跡では床面に鍛冶炉を伴った6世紀後半の時期の竪穴住居が検出されており、当焼土面も同様の性格である可能性が推測される。

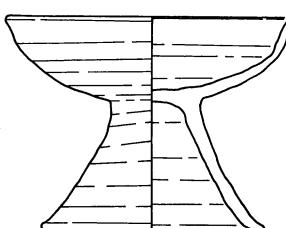
柱穴については、南西コーナー付近に対応する位置で径0.4mの円形の柱穴が検出されている。柱穴内の南側では径0.1mの柱痕跡



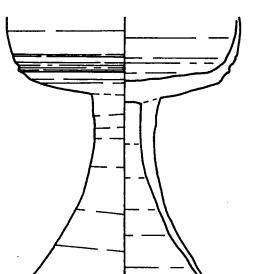
81



82



83



84

図39 竪穴住居2（1/60）・出土遺物（1/4）

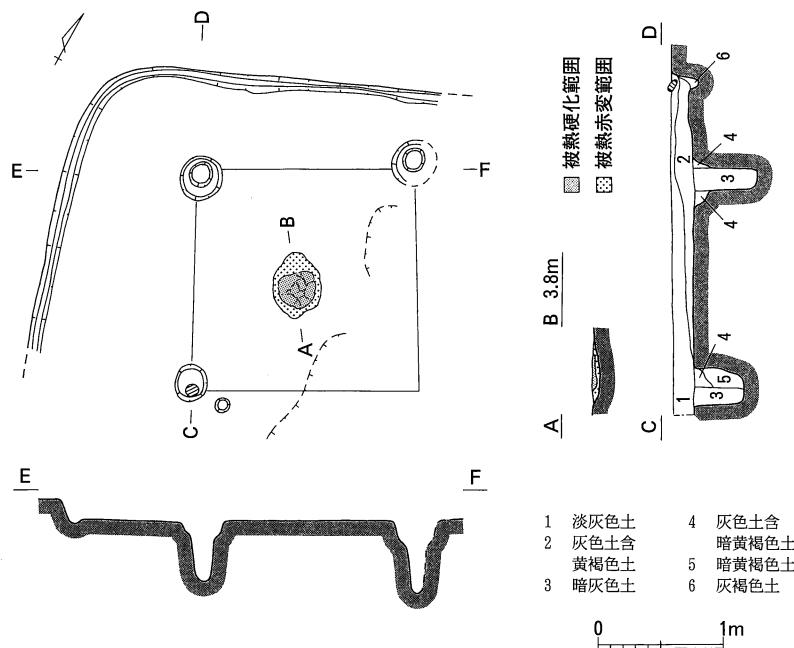
があり、柱痕跡は床面から0.4mの深さまで掘削されている。この柱穴は、検出面が床面であることや、住居コーナー付近に対応することから、当住居の柱穴になるものと考えられる。

出土遺物はカマドの正面の床面から若干浮いた位置から出土した。須恵器杯蓋(81)、須恵器有蓋高杯(82)、須恵器高杯(83)は完形であり、まとまって出土したことから、意識的に埋没された可能性がある。須恵器高杯(84)は、柱穴の北側付近の埋土中から出土した。上端部と下端部は欠損しているが、その他は完形に近い残存状態であり、これも一連の遺物と考えられなくもない。時期的には全て6世紀末の時期といえる。

竪穴住居11（図40）

調査区南東コーナー部で検出された竪穴住居で、その南側や東側は調査区外へであるため全形は不明である。検出された部分からみると、一辺2.4m以上の方形の平面形が推測される。北側については壁と平行する間隔で2つの柱穴が検出されている。柱穴と北側壁部との距離は0.5mほどであることから、南側の柱穴の南0.4mの位置に南側壁部があると想定すると、南北幅は3.1mほどとなる。同じく、西側壁部から西側の柱穴の距離をみると、1.0m前後である。そうすると、東側柱穴から1.0mの位置に東側壁部を想定すると、東西幅は4.0mほどということになる。つまり、 $3.1 \times 4.0\text{m}$ の規模が推測される。

遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.15mである。埋土は基本的に2層である。床面は基本的に平坦であるが、東半は若干凹凸が認められる。極めて微妙な凹凸であり、掘削された痕跡とはみられない。壁に沿って幅0.1m前後の壁体溝がめぐっている。深さは床面から0.1m前後である。平面的・断面的に観察しても、貼り床等は認められなかった。地山が比較的硬質であり、貼り床等の措置は必要なかったのではなかろうか。



住居中央の床面付近では、径0.4mの円形に焼土面が形成されている。焼土面は、径0.5m、深さ0.1mの皿状に掘りくぼめ、内側に粘土を充填している。中央付近は径0.3mの範囲で、高熱で

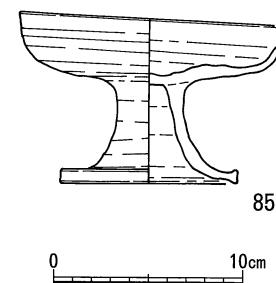


図40 竪穴住居11（1/60）・出土遺物（1/4）

あったことを示す硬質の焼土面が形成されている。焼土面周囲から鉄滓が出土しており、焼土面周囲の埋土を洗浄して微細な鉄片等を選別するような手続きはとっていないが、その形態から鍛冶炉と推測される。カマドについては、調査した範囲では検出されなかった。時期的な点から、どの辺かにカマドが付属している可能性は高く、おそらく調査区外の東側か南側に付属していると考えられる。

比較的埋土の残存状態が良好にも関わらず、出土した遺物の量は少なかった。図化できた須恵器の高杯(85)が1点と、土師器の小片のみであった。高杯(85)も口縁部は半分ほど欠損しており、脚部についても1/3ほど欠損している。いずれも床面から浮いた埋土中から出土した。時期は6世紀末である。

堅穴住居17 (図41・42)

調査区北東コーナー付近で検出された堅穴住居で、東半は調査区外へ出ることや、調査区内の部分についても古代の遺構等によって削平されていることから、検出された南東部分を手掛かりとして全形を推定している。それによると、一辺2.4m以上、推定5.1mの方形の平面形を呈し、南西壁部にカマドが付属する。ただし、カマドの大半は削平されており、東側の袖部のみが残存していた。カマドは基盤層とよく似た土層で構築しており、全体が被熱により赤化もしくは硬化している。袖部は、壁部から0.6mまで検出できた。カマドは大半が削平されており、燃焼部等は確認できなかった。

遺構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは0.12mである。床面には貼り床等は認められなかった。柱穴は、南西コーナー部に対応すると推測されるピットが検出された。径0.2mで、深さは床面から0.5mである。柱痕跡等は検出されなかった。堅穴住居北半の壁部は削平されていたことから検出できなかつたが、想定している範

囲に平坦面が認められることから、床面が残存していると考えられる。それらを含めた床面上で鉄滓と鉄斧が検出された。他の遺物については埋土中で出土したが、図化できたもの以外は土師器の小片が3点ほどしかなく、全体として出土した遺物の量は少なかった。

出土した鉄斧(M2)は鋸化が甚だしいが、鍛造鉄斧と判断される。鉄鎌(M3)は、柳葉形で茎部は先端部が欠損している。須恵器杯蓋(86)は小片のため径等は不明で、土師器甌(87・88)は同一個体と推測されるものである。時期を推定できる手掛けりはそれほど多くないが、須恵器杯蓋(86)から、6世紀末から7世紀前半の頃と推測される。

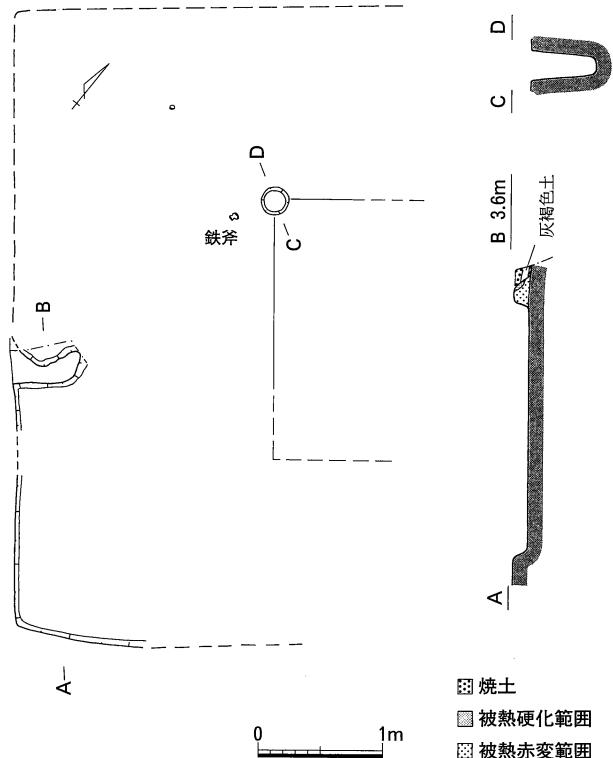


図41 堅穴住居17 (1/60)

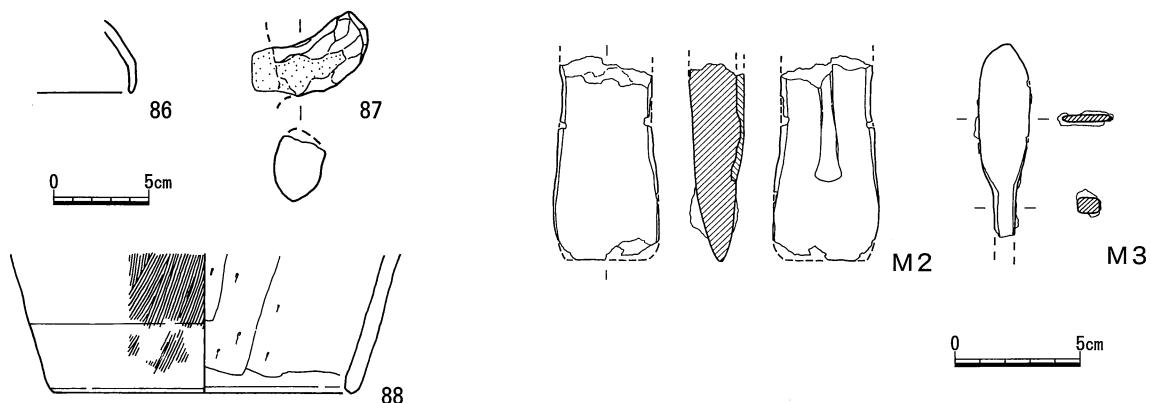


図42 壇穴住居17 出土遺物 (1/4・1/3)

壇穴住居20 (図43)

調査区中央北側で検出された壇穴住居で、北半は古代の遺構等で削平されているため全形は不明である。ただし、柱穴が4つ検出できていることから、その配置と検出できた壁部との位置関係からある程度全形を推定できる。まず、東西幅については3.5m、南北幅については、南側の柱穴と壁部との距離が0.6m前後であることから、北側の柱穴から0.6mの位置に壁部があるとすると3.6m前後の規模ということになる。したがって方形に近い平面形であると推測される。カマドの有無については不明であるが、付属していたとすると南側以外の壁部であるといえる。遺構検出面は、3.6m付近で、床面までの深さは0.2m、中央部は一段さがっており、その部分は検出面から0.3mの深さである。断

片的にしか残存していないが、一段低くなっている部分は、一辺1.5mの方形の平面形を呈しているようにみえ、その縁部には幅が約0.2m前後、高さ約0.02mほどの高まりが認められる。ただし、高まりの上端は凹凸があり、安定的に高まりを形成しているのではない。

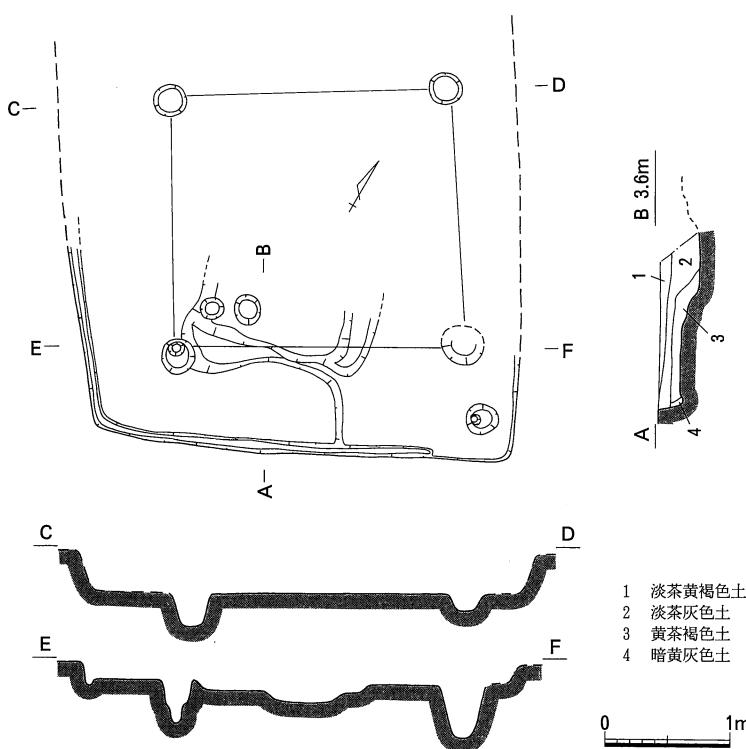


図43 壇穴住居20 (1/60)・出土遺物 (1/4)

南側と西側の壁に沿って幅約0.06m、床面からの深さが約0.05mの壁体溝が検出されている。南側のコーナー付近では途切れており、全周するものではないようである。

出土遺物は、埋土の残存状態が比較的良好であるにも関わらず極めて少なかった。図化できたのは、須恵器杯蓋(89)、須恵器杯身(90)、弥生土器の長頸壺の小片(91)だけであった。いずれも全形をうかがえるほどには残存していなかった。時期は、須恵器杯身(90)の特徴から7世紀前半頃と考えられる。

溝4・5 (図38・44)

調査区の北端で検出された東西方向の溝である。巨視的には2本の溝が切り合っているようにもみえるが、微視的には3~4本ほどの溝が切り合っているようにもみえる。同じ地点で同規模・同方向の溝が複数掘りなおされており、しかも直線的であることや、これらの溝を境にして竪穴住居の検出密度が変わることから、住居域を画する溝の可能性が推測される。竪穴住居数棟を囲む溝が津寺遺跡でも検出されている。津寺遺跡の場合は、竪穴住居の密集地に幾つかの区画のための溝がめぐってお

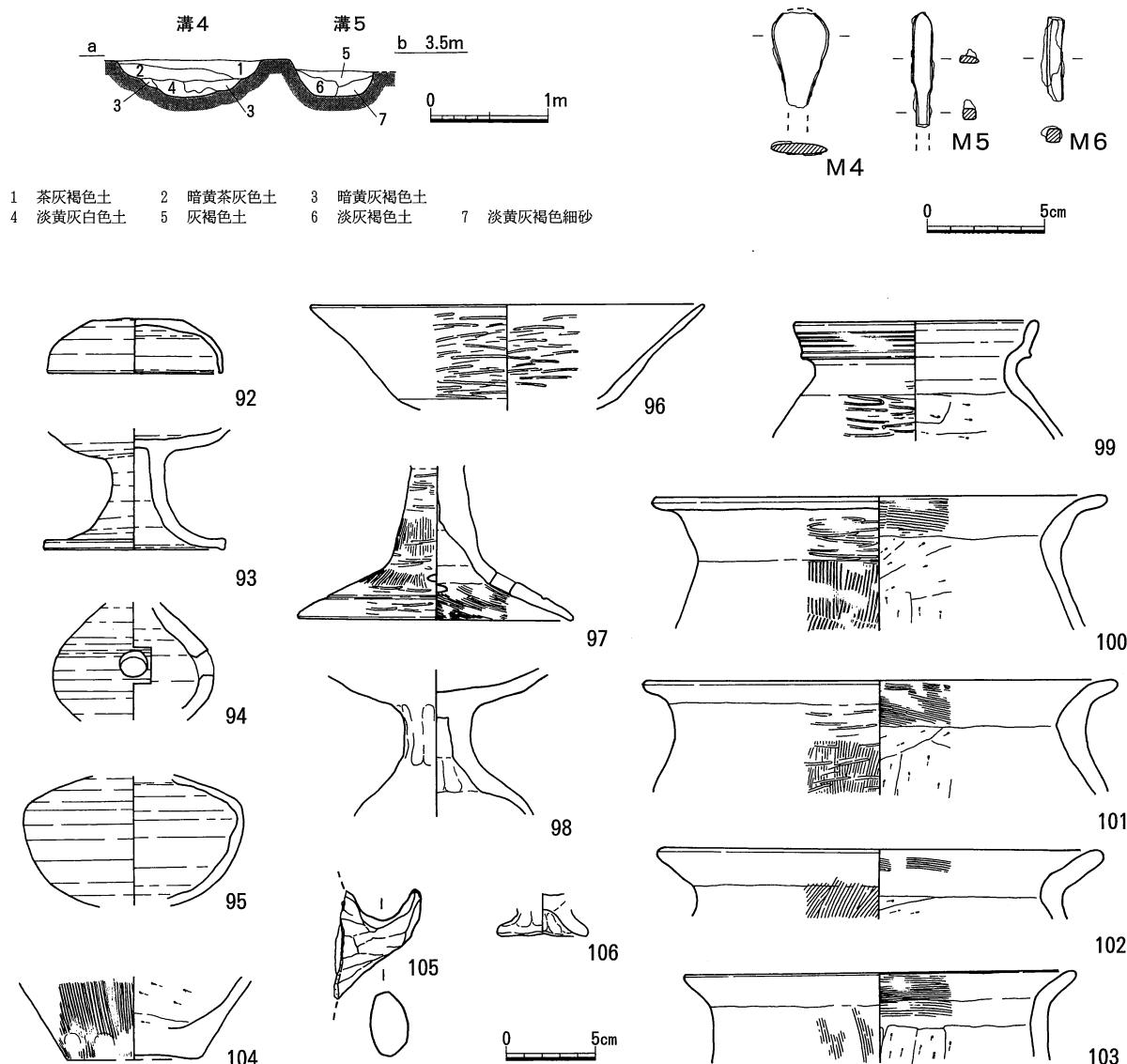


図44 溝4・5断面図 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

り、言い換えると、溝で区画された竪穴住居群が複数まとまっているということになる。区画は、竪穴住居が認められない部分や存在の希薄な部分との境にもめぐらされていることから、今回の調査区もちょうどそのような部分に相当する可能性が推測される。

溝の幅は、いずれも0.6~1.2mの幅で、全体としては直線的ということになるが、個別的には振幅のある溝のようにもみえる。途切れ途切れに掘削された溝が総体的に区画溝になることは、当地の古代の官衙に見られる溝でもあることから、質的な違いは大きいとは思われるが、その初源的な掘削原理といったものは、6世紀後半以降における住居群の区画溝からつながるものであるのかもしれない。

遺構検出面は、3.4m付近で、溝4の深さは検出面から0.3m、溝5の深さは検出面から0.3mである。いずれも僅かなレベル差であるが、西側に傾斜しているようである。埋土は数層に分かれるが、とくに溝5についてはブロック的な堆積であり、埋められた可能性が推測される。おそらく、同時に2本の溝が存在していたのではなく、溝4と重複しない部分は、溝4を掘削した際に、それまで存在していた溝5を埋めたのではないかと推測される。つまり、1本の溝を少なくとも2回は掘りなおしているといえる。

出土遺物は、須恵器杯蓋(92)、同高杯(93)、同甌(94)、同壺(95)、土師器甕(100~103)、同甌もしくは甕の把手(105)、同高杯(98)、弥生土器高杯形土器(96・97)、同底部(104)、同製塩土器(106)である。弥生土器は混入であり、須恵器・土師器の時期幅が比較的限定されることから、それらの示す6世紀後半から7世紀初頭の時期が溝の時期と考えられる。土器以外の出土遺物としては、鉄器と鉄滓がある。鉄滓は少量であるが、鉄器は3点で、鉄鎌(M4・5)が2点、鉄鎌の茎と推測されるもの(M6)が1点出土した。

P 124 (図45)

調査区北東部で検出された土壙である。長さ1.6m、幅0.7mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5m付近で、最深部は遺構検出面から0.3mである。断面形は箱形を呈しており、底面については若干凹凸が認められるものの、総体的には平坦である。遺構検出面では、土器の小片及び小礫が分布しており、小規模ながら土器溜まりを形成していた。しかしながら、須恵器の小片や鉄滓が含まれるもの、大半は弥生土器や古墳時代初頭の土師器であり、包含層の二次的な堆積である可能性が高い。ただし、土層観察や遺構検出時には確認できなかったが、遺構上面には盛り上げた小規模な墳丘

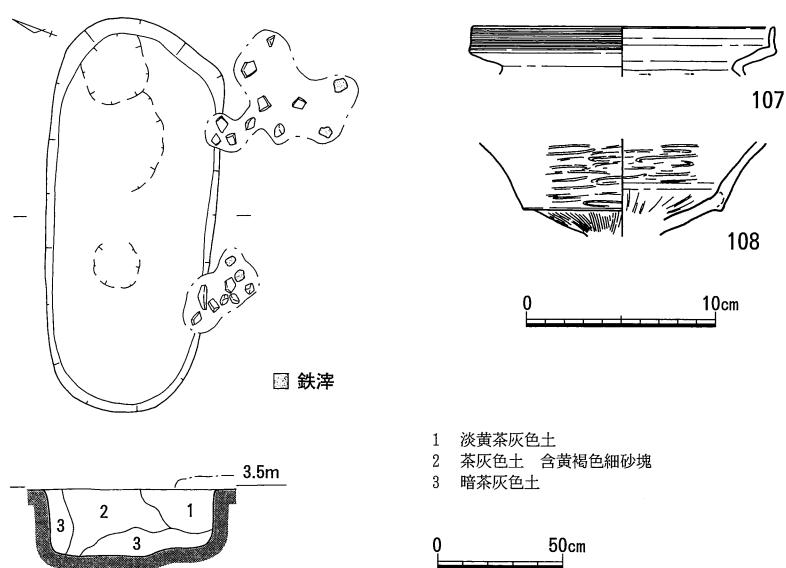


図45 P 124 (1/30)・出土遺物 (1/4)

状の高まりがあり、その痕跡、もしくは識別できたのが土器片等であった可能性も推測される。

遺構の形状が箱形であり、土層断面を観察する限りブロック状の堆積状況であることから埋められたことが推測され、墓である可能性が考えられる。しかしながら、骨等は出土しなかった。周辺には軸方向を共有する土壙がまとまっており、それらをまとめて土壙墓群としてとらえることができるのかもしれない。副葬品等も検出されなかった。

出土遺物の大半は、遺構検出面で出土したもので、埋土中からは須恵器の小片と土師器の小片が数点出土したのみであった。図化できたのは、古墳時代前期初頭の土師器甕(107)、弥生時代後期末の高杯(108)の2点のみであった。いずれもP124の時期を示すものではない。須恵器の小片は甕、もしくは壺の胴部小片で、時期を限定する根拠は少ないが比較的厚手であり焼成もそれほど良好でないことから、6世紀後半前後の時期と推測される。

P128 (図46)

調査区中央北東で検出された土壙である。長さ1.7m、幅0.7mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.4m付近で、最深部は遺構検出面から0.15mである。断面形は箱形を呈しており、底面については若干凹凸が認められるものの、総体的には平坦である。埋土は5層あり、ブロック状の堆積を呈する。遺構の形状や土層堆積状況から埋められたことが推測され、墓である可能性が考えられる。しかしながら、骨等は出土しなかった。周辺には軸方向を共有する土壙がまとまっており、それらをまとめて土壙墓群としてとらえることができるのかもしれない。副葬品等も検出されなかった。堅穴住居20を削平しており、堅穴住居と土壙墓群の切り合い関係を示すものといえる。

出土遺物はほとんどない。埋土中から土師器の小片が若干出土したのみであった。図化できなかったが、出土した土器片は甕の胴部片であり、比較的器厚が厚く、外面のタテハケも粗いこと、大粒の砂粒が認められることや周辺で検出された遺構との関係から、6世紀後半以降の時期と推測される。

P130 (図47)

調査区中央北東で検出された土壙である。長さ1.3m、最大幅0.75mで、南半は古代の遺構によって削平されているが、残存部から推測すると、全体としては長方形の平面形で、東半が若干拡張されているような形状と推測される。遺構検出面は3.4m付近で、断面形は台形を呈し、底面は平坦である。深さは遺構検出面から0.1mである。埋土は1層であるが、黄灰色細砂に茶灰色土が塊状に含まれ

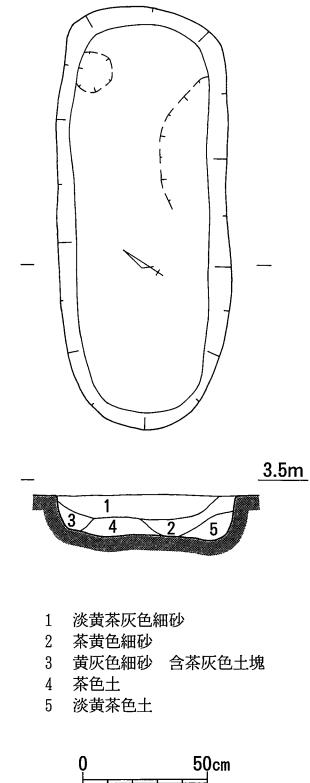


図46 P128 (1/30)

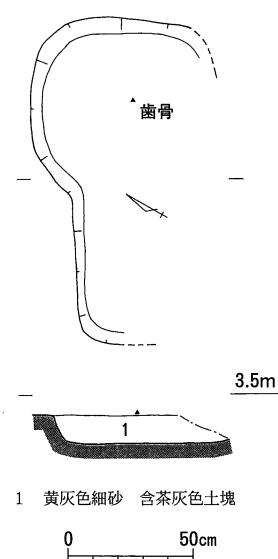


図47 P130 (1/30)

ており、埋められた状況を示す埋土といえる。埋土には土師器の小片が含まれるものとの時期を明らかにするものではない。ただ、遺構検出面付近で、遺構東端から人間の歯骨が1点出土した。P128を意識している配置であることや長軸方向が一致することから6世紀頃の時期と推測され、竪穴住居20をP128が削平していることからも、6世紀後半以降の時期と考えられる。

P136（図48）

調査区中央北端で検出された土壙である。長さ1.2m、幅0.7mで、小判形の平面形を呈する。遺構検出面は3.4m付近で、断面形は台形である。底面は平坦である。遺構検出面から底面までの深さは0.3mである。埋土は2層が確認された。副葬品等の遺物や人骨等は検出されなかったが、長軸方向が東西であることから、若干距離があるものの、土壙墓群の一部と考えてよいと思われる。P136は溝4が埋没した後に掘削されている。溝4・5の性格が竪穴住居群を区画するものであるということと、土壙墓のなかには竪穴住居を削平しているものがあることは、遺構の切り合い関係で見る限り矛盾はない。竪穴住居及び竪穴住居群としての土地利用の後に墓地として利用されたのだといえる。

時期は、溝4との切り合い関係から7世紀初頭以降といえる。

P138（図49）

調査区中央北端で検出された土壙である。長さ0.9m、幅は南側の上端が削平されていることから厳密な数値ではないものの約0.6mほどと推定される。小判形に近い平面形を呈する。遺構検出面は3.4m付近で、断面形は台形である。遺構検出面から底面までの深さは0.3mである。遺物は出土しなかったが、若干離れてはいるものの、長軸が東西方向であることから、土壙墓群の一部であると考えられる。時期は、溝5を削平していることから、7世紀初頭以降で、古代の溝に一部削平されていることから、8世紀までは降らないと考えられる。

P140（図50・51）

調査区北東コーナー寄りで検出された土壙である。一辺0.6mの隅丸方形の平面形を呈する。断面形は台形である。遺構検出面は、3.5m付近で、最深部の深さは検出面から0.2mである。検出面付近で、南東コーナー付近から古墳時代初頭の壺(109)が出土したが、埋土からは土師器甌の把手(110)も1点出土した。把手の特徴からすると、古墳時代初頭までは遡らない。周辺で検出された長方形もしくは小判形を呈する平面形ではないが、一連の遺構である可能性が推測される。

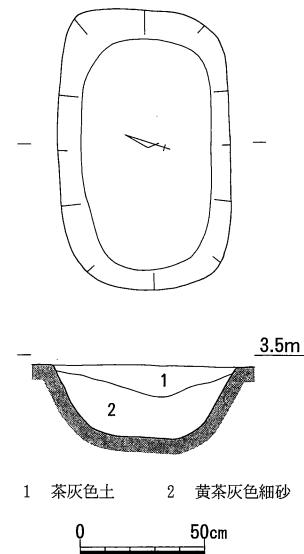


図48 P136 (1 / 30)

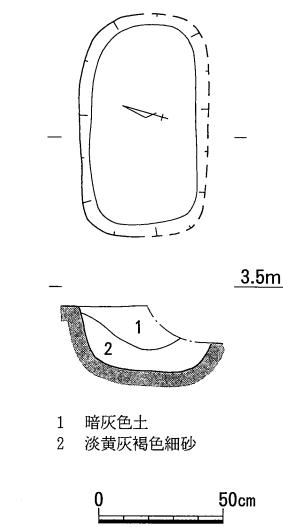


図49 P138 (1 / 30)

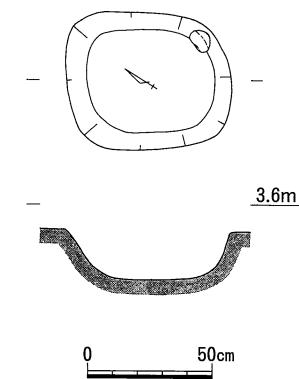


図50 P140 (1 / 30)

P 145 (図52)

調査区北東コーナー付近で検出された土壌である。長さ1.6m、幅0.5mの長楕円形、もしくは一方の先端が三角形状の、長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5m付近である。中央やや東よりでは径0.4mのピット状に窪む部分が検出された。その部分を除くと検出面から0.2m前後で、ピット状に窪む部分については0.4m前後である。土層断面での観察では、遺構全体の埋土である①層とピット状の埋土である②層とが平行して窪む堆積であったことから、同一遺構内の可能性を考えて掘り下げたが、堆積土層は明確に異なっていた。したがって、柱穴状のピットの上面を削平して土壌が掘削されたと考えられる。骨や副葬品等は出土しなかったが、周辺の土壌ともほぼ長軸方向が一致することから、土壌墓群の一部と考えられる。

P 147 (図53・54)

調査区北西コーナー付近で検出された土壌で、微高地に端部の近い部分に位置する不整形な窪みのような形状である。微高地端部側については、なだらかな傾斜部分と融合してしまっており、全体としては段状遺構の形状を呈する。ただし、北側における遺構端部についても、不整形な形状であることから、人為的に掘削された遺構という形状を呈していない。検出された遺物の分布状態をみても、遺構地端部側である西側に向かって堆積している様相が認められる。遺構検出面である3.3m付近にできた不整形な窪みで、そこに土器等が堆積したというのが実態ではないかと推測される。出土した土器についても、その大半が小片であり、しかも古墳時代初頭の時期の土器や須恵器が混在して出土した。図化できたものは、甕(113～118)、壺(119)、鉢(111・112)だけで、全て古墳時代初頭の時期のものである。須恵器は甕もしくは壺の胴部の小片ばかりで、図化できるものはなかった。それらは器壁が比較的厚く、焼成もそれは

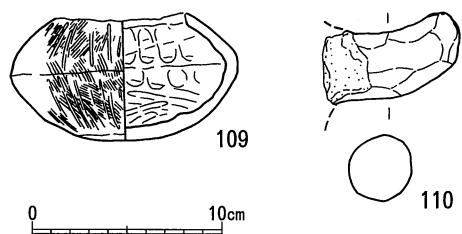


図51 P 140 出土遺物 (1/4)

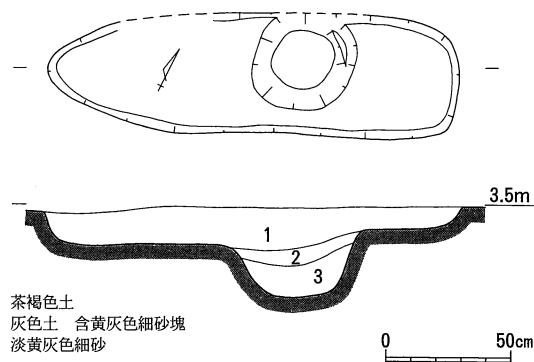


図52 P 145 (1/30)

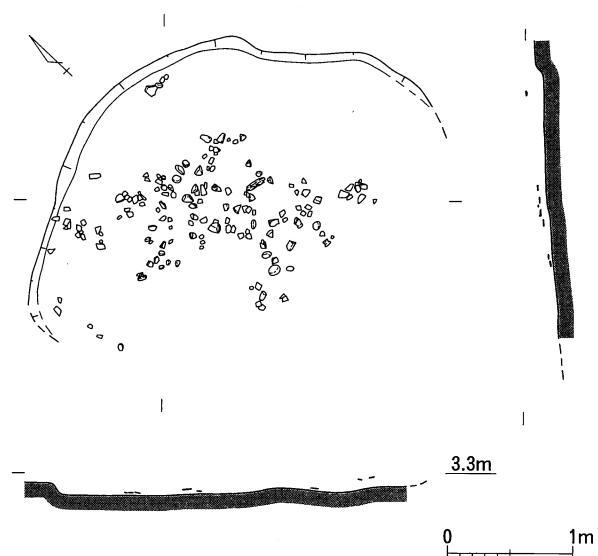


図53 P 147 (1/60)

ど堅緻ではないことから、6世紀後半前後の時期と推測される。土器のほかに土錘(C 1)も1点出土している。中央に焼成前の穿孔があり、片面の縦方向と中央横方向に紐を通す溝が認められる。全体としては紡錘形の形状を呈する。この土錘は、古墳時代初頭の時期と考えられる。

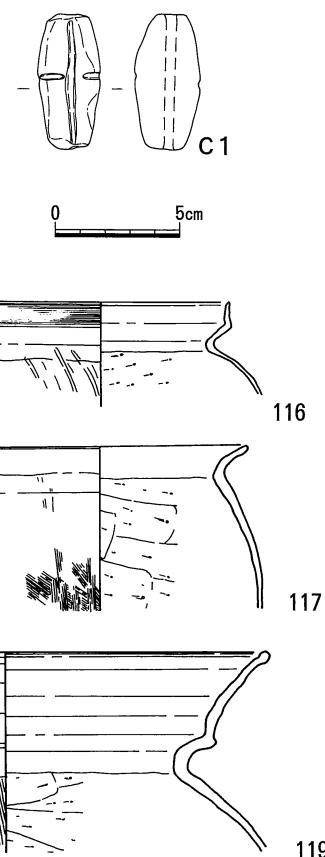


図54 P147 出土遺物 (1/3・1/4)

P150 (図55)

調査区北東付近で検出された土壙である。長さ1.7m、幅0.8mの小判形の平面形を呈する。溝4・5が埋没してから掘削されている。遺構検出面は3.3m付近で、最深部の深さは検出面から0.05mほどである。西側端部では、一辺0.8mほどに隅丸方形の平面形で若干窪んでいる。全体として遺構の残存状態がそれほど良好でなかったことや、窪んでいる段差についても僅か0.01mほどであったことから、その窪みが別の遺構であるのかどうかについては明確にできなかった。断面形は台形で埋土は1層のみであった。

出土遺物は遺構検出面でまとめて出土した。図化できたのは、中央やや北よりで検出された須恵器杯蓋(120)のみで、他は須恵器と土師器の小片のみであった。当遺構の時期は、出土した遺物の時期と溝4・5を掘削していることから、7世紀前半の時期といえる。

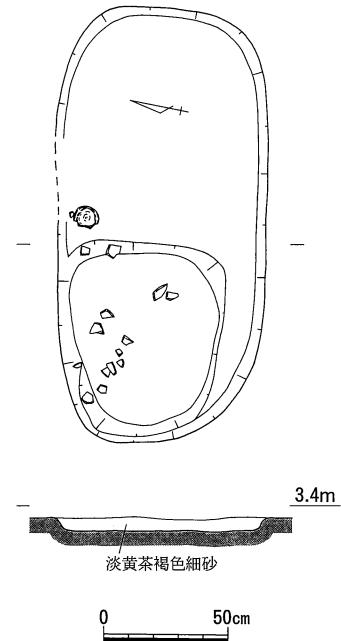


図55 P150 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P 152 (図56)

調査区北東コーナー付近で検出された土壙である。遺構検出面は3.5m付近である。遺構が調査区外へ続くことから、詳細な状況を把握することは難しいが、2つの土壙が切り合っている可能性が高い。つまり、幅0.5m、長さ1.0m以上の長楕円形の平面形である土壙が、幅0.6m以上の土壙を掘削していると推測されるのである。しかしながら、両遺構に対応する埋土を観察する限り、極めてよく似ており、近接する時期の遺構であることが推測された。掘削している方の土壙については、断面形が台形であり、深さは検出面から0.2mで、掘削された方の土壙は、断面形がU字形で、深さは検出面から0.2mである。骨や副葬品等は出土しなかったが、2つの土壙が切り合っていると考えると、少なくとも一方の土壙の長軸方向は周辺の土壙の長軸方向と比較的近い方向であることから、それらと一体にとらえることのできる土壙墓群の一部と推測される。

古墳時代後期包含層出土遺物
(図57)

遺構検出時に刀子の一部(M 7)が出土した。

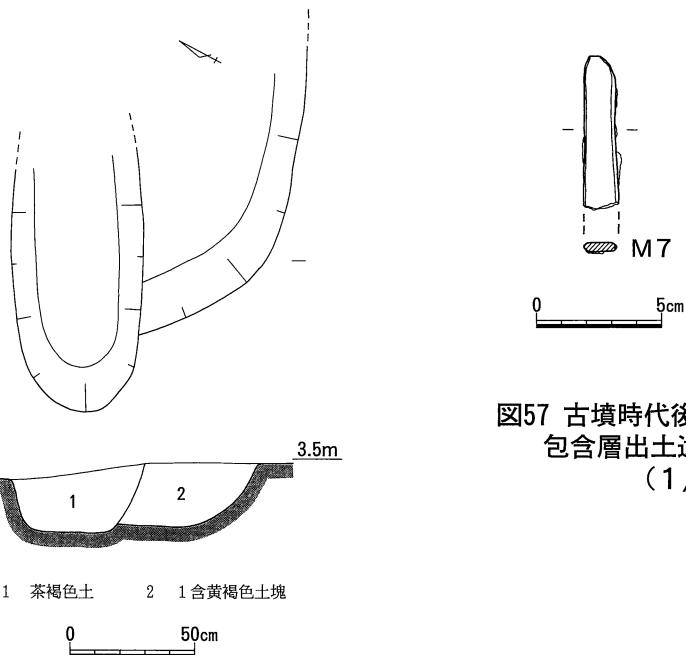


図56 P 152 (1/30)

図57 古墳時代後期包含層出土遺物(1/3)

V. 古墳時代中期 遺構面 (図58)

古墳時代後期とほぼ同じ検出面で、5世紀末から6世紀初頭の時期の竪穴住居が4棟検出された。一部切り合っているものの、全て北側にカマドが付属しており、規則的なあり方を示す。時期的に近接していたことと、検出された竪穴住居が1つの単位であり、その単位内における規定としてカマドの付設位置が北であったということなのではないかと思われる。北側の校舎建築部分での発掘調査区では、該期の竪穴住居は数棟のみであり、古墳時代後期の竪穴住居の錯綜した検出状況と比べると、かなり閑散とした集落景観となる。津寺遺跡の集落景観をみると、古墳時代中期と後期の集落景観は異なっている。中期においては強固な微高地部に数棟の竪穴住居がまとまる単位が散在的に分布しているが、後期になるとむしろ微高地の低位部に集中して竪穴住居が形成される。さらに幾つかの単位を区切る溝が認められる。中期の集落景観が弥生時代以来の集落景観に近いものであったが、後期になると極めて集約的に住居単位が存在するようになるようである。当調査区におけるあり方も基本的には津寺遺跡と同様と考えてよい。つまり、足守川流域での集落パターンの典型を示す例といえる。

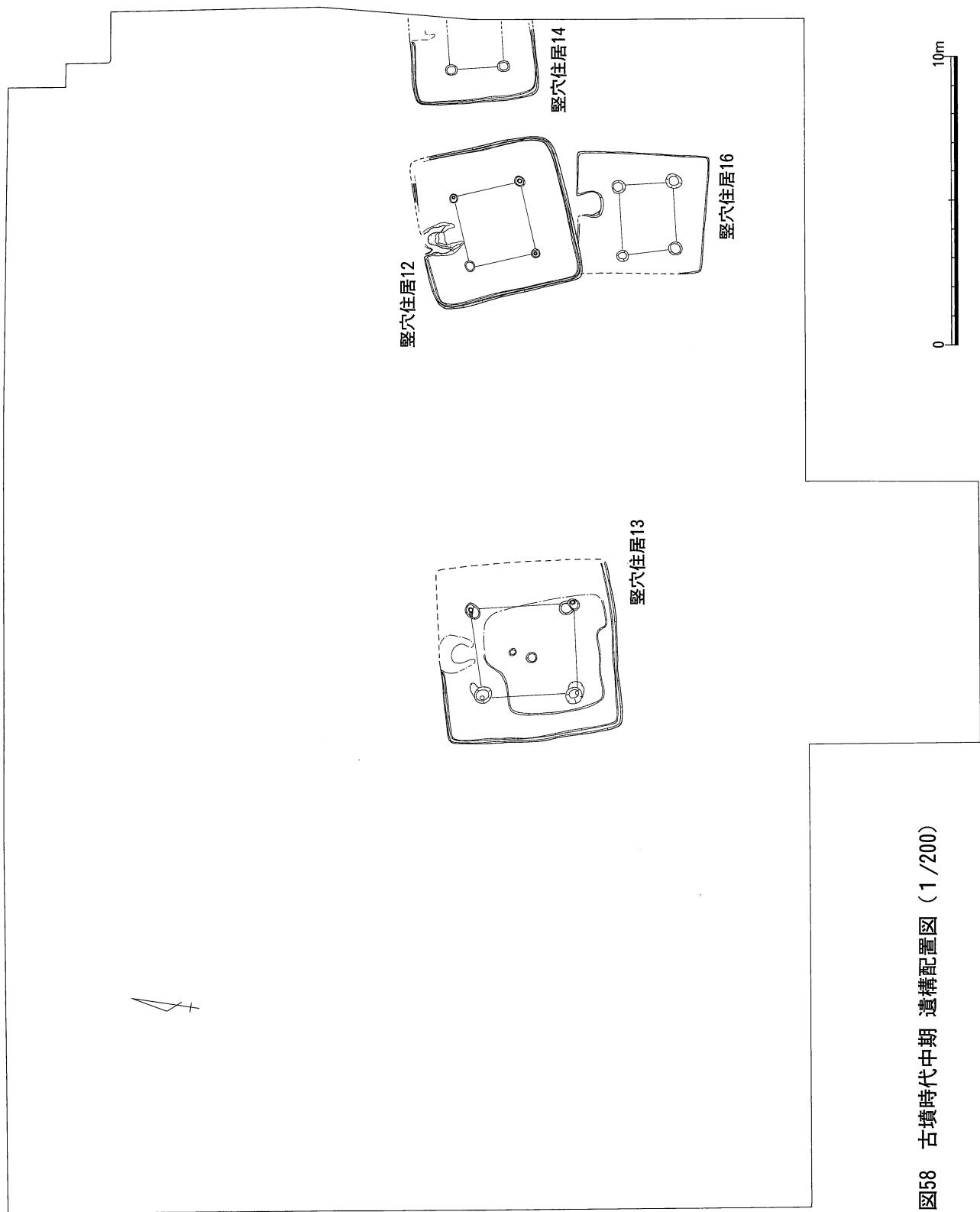


図58 古墳時代中期 遺構配置図（1/200）

竪穴住居12（図59～61）

竪穴住居12は、調査区東側で検出された竪穴住居である。検出面で焼土や炭が多量に認められ、とくに焼土が塊状であることから、焼失住居であることが推測された。遺構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは0.3mである。一辺が5.3mの正方形に近い平面形を呈する。検出時には、材の炭化したもののが若干認められていたが、埋土を掘り下げた状況では、検出時以上の炭化材は残存していなかった。

ただし、焼土については北西コーナー付近から南東コーナー付近にかけてまとまって検出された。それらは床面から浮いた状態で出土していたり、床面付近まで達するように堆積したものもある。崩れ落ちた状態であると理解すると、壁等に用いていた粘土が、焼失するに際して焼土化したものであろうか。床面の中央付近は被熱により焼土化した部分がある。これも焼失にあたって形成されたようにもみえるが、径0.2～0.4mほどの範囲により高温で被熱したことをうかがわせる焼土面が5ヶ所存在する。住居の中央付近であることから、単に焼失する際に形成されたと考えるよりも、鍛冶炉等の火所の痕跡であると考えることが妥当のように思われる。

カマドは、北側の中央付近に付属している。残存状態が良好であり、煙道部分も確認することができた。煙道は、径0.1m、長さは0.5mである。カマド本体は、土層断面を観察すると、微妙な差はあるが、3層に分離できる。それらをカマド構築土層の差であるとすると、まず袖部分を含めた基底部分をつくり、その後に上部と燃焼部の上面を構築している。2段階の構築過程には、基底部構築後の乾燥期間等が反映されている可能性があるようと思われる。中央部には支石に用いられた河原石が立った状態で残存している。その周囲からは土師器の高杯や手すくね土器がまとめて出土しており、ある種の祭祀がおこなわれていたことがうかがわれる。カマドの周囲からは、土師器甕が3個体出土しており、煮沸具として用いられていたものと推測される。

柱穴は4つが検出されており、いずれも径0.35m前後で、径0.15m前後の柱痕跡が認められる。柱間は2.4m前後におさまるものであり、正方形に近い柱間となる。柱痕跡は、焼土化したものまでは認められない。外周に幅0.06mの壁体溝がめぐっている。柱穴や壁体溝は複数認められないことから、建て替えはなかったといえる。

出土した遺物の量は比較的多く、焼失時において持ち出すことのできなかった状況を反映させているともいえる。ただし、カマドの中における遺物の出土状況をみると、日常的な状況とはいえない。日常的な環境の中で、カマドに関する祭祀中に火災が発生したという状況であろうか。この点については、焼失家屋にもかかわらず出土遺物が少ない事例があることと、対象させて検討する余地があると思われる。

出土した遺物は、カマド内で出土したものが土師器高杯(130・131)、手すくね土器(121～126)、土玉(C 2)である。カマド周囲からは土師器甕(137～139)、土師器甌(142)である。他は、床面から出土したが、弥生土器(134・141)も含まれている。弥生土器は混入であろう。須恵器の時期から5世紀末から6世紀初頭の時期である。土師器の時期についても矛盾はない。

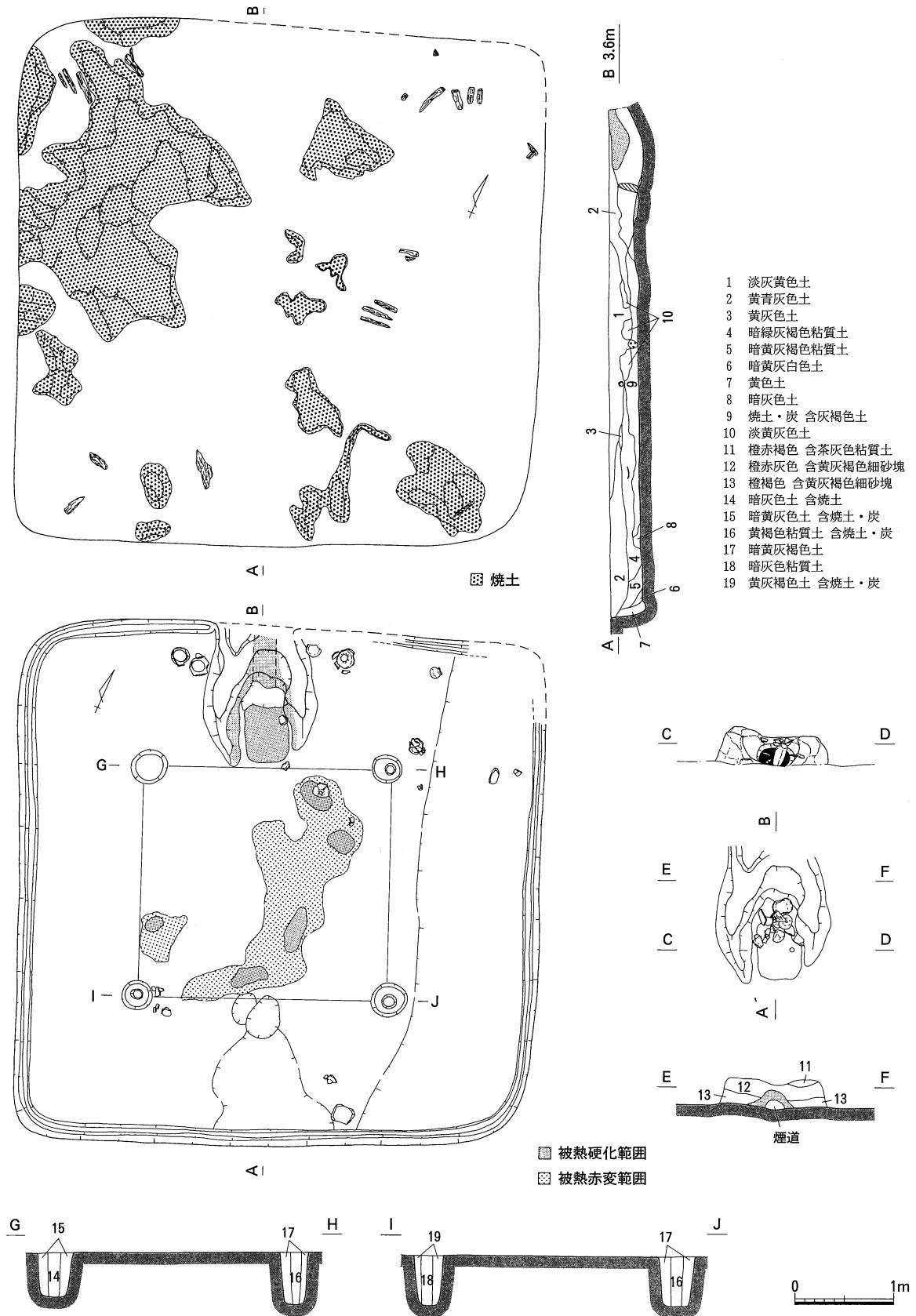


図59 縱穴住居12 (1/60)

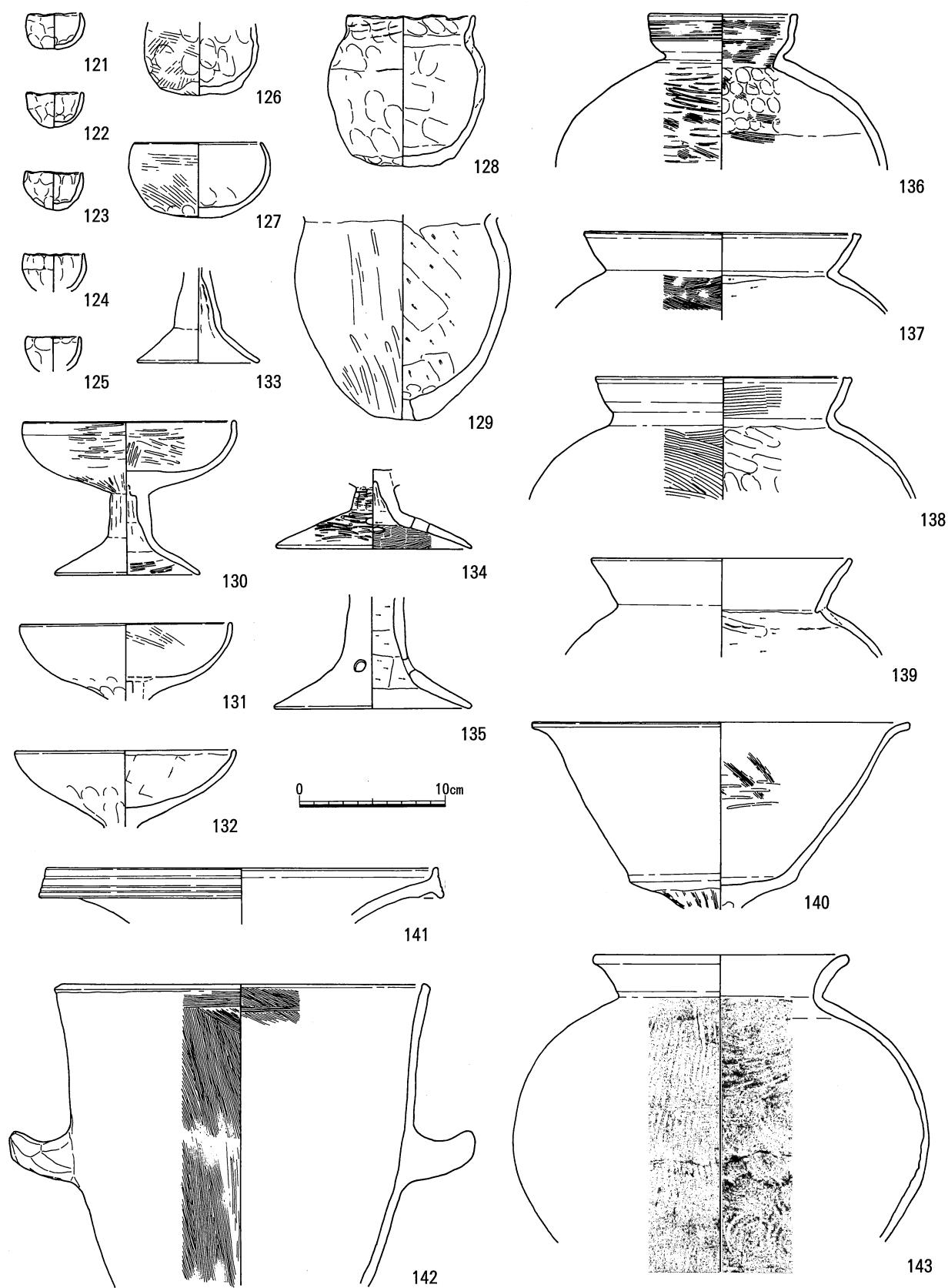


図60 積穴住居12 出土遺物1 (1/4)

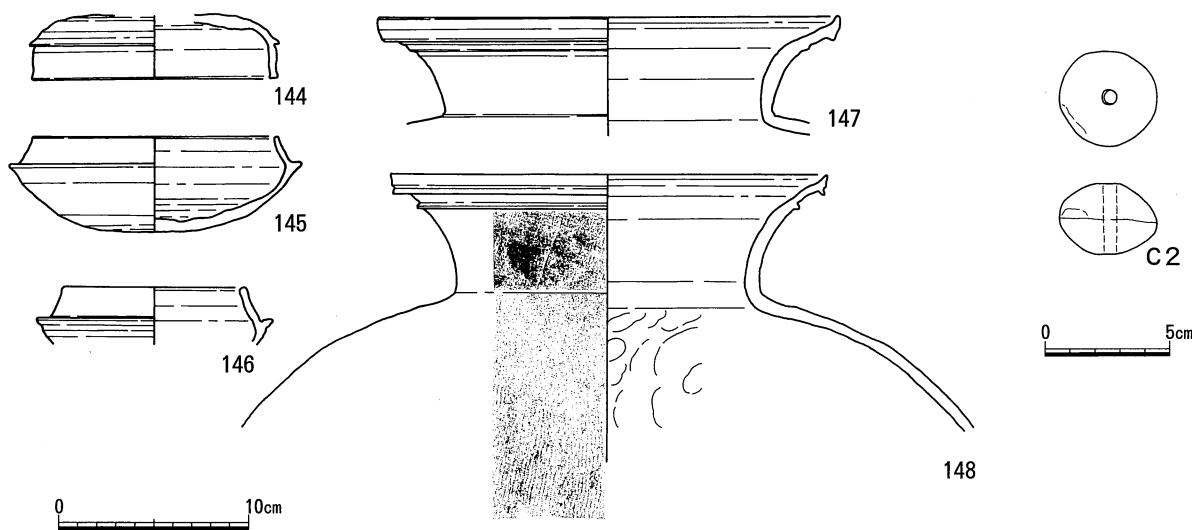


図61 壇穴住居12 出土遺物2 (1/4・1/3)

壇穴住居13 (図62)

調査区中央付近で検出された壇穴住居である。北東コーナー付近と東側の端部については残存していないが、一辺6mの方形の平面形と推測される。遺構検出面は3.4m付近で、床面までの深さは0.2mである。北側の中央付近にカマドが付属する。カマドの上面は削平されており、燃焼部の下面のみが明確であり、袖部については、基盤層と極めてよく似た土層(①層)が輪郭状に分布している。燃焼部からは土師器高杯の破片がまとまって出土しており、この状況は壇穴住居12と似ている。ただし、当住居のカマド部分は残存状態が良好でないことから、明確でない部分が多い。

床面は、中央部が3.6m四方に0.06mほど若干高くなっている、壇穴住居構築の際に削り出して整形したものである。作業台的な機能を意識していたのであろうか。中央付近に長さ0.6m、幅0.3mほどの焼土面があり、それらと関係しているのかもしれない。ただし、鉄滓等の出土はなく、この焼土面の性格については、明確ではない。

柱穴は4つ検出された。径0.4~0.6mで、深さは床面から0.4~0.6mである。柱痕跡から、径0.25mほどの柱であったことがうかがわれる。礎板等の痕跡は認められなかった。柱間は、東西方向が6.0m前後、南北方向が3.3~3.6mである。中央には径0.3mの柱穴が検出されており、これは焼土面に接している。棟持柱の機能を有していたのであろうか。

壁体溝は、カマドに接する位置で途切れており、カマド付設後に掘削されたものといえる。幅0.18m前後外郭をめぐっており、掘り直し等も認められないことや、柱穴も4つしか認めないことから、建替え等はおこなわれなかったと考えられる。

出土した遺物の大半はカマドからであるが、いずれも小片であり、全形のわかるものはない。図化できたものは、土師器高杯の口縁部(149・150)の2点のみである。口径の大きいもので、5世紀末から6世紀初頭の時期のものと考えてよい。このほかに、埋土から砥石(S1)が1点出土している。白色で、上面と側面の2辺について使用しており、断面が凹面形をしている。きめの細かい材質であり、仕上げ用の砥石であろうか。

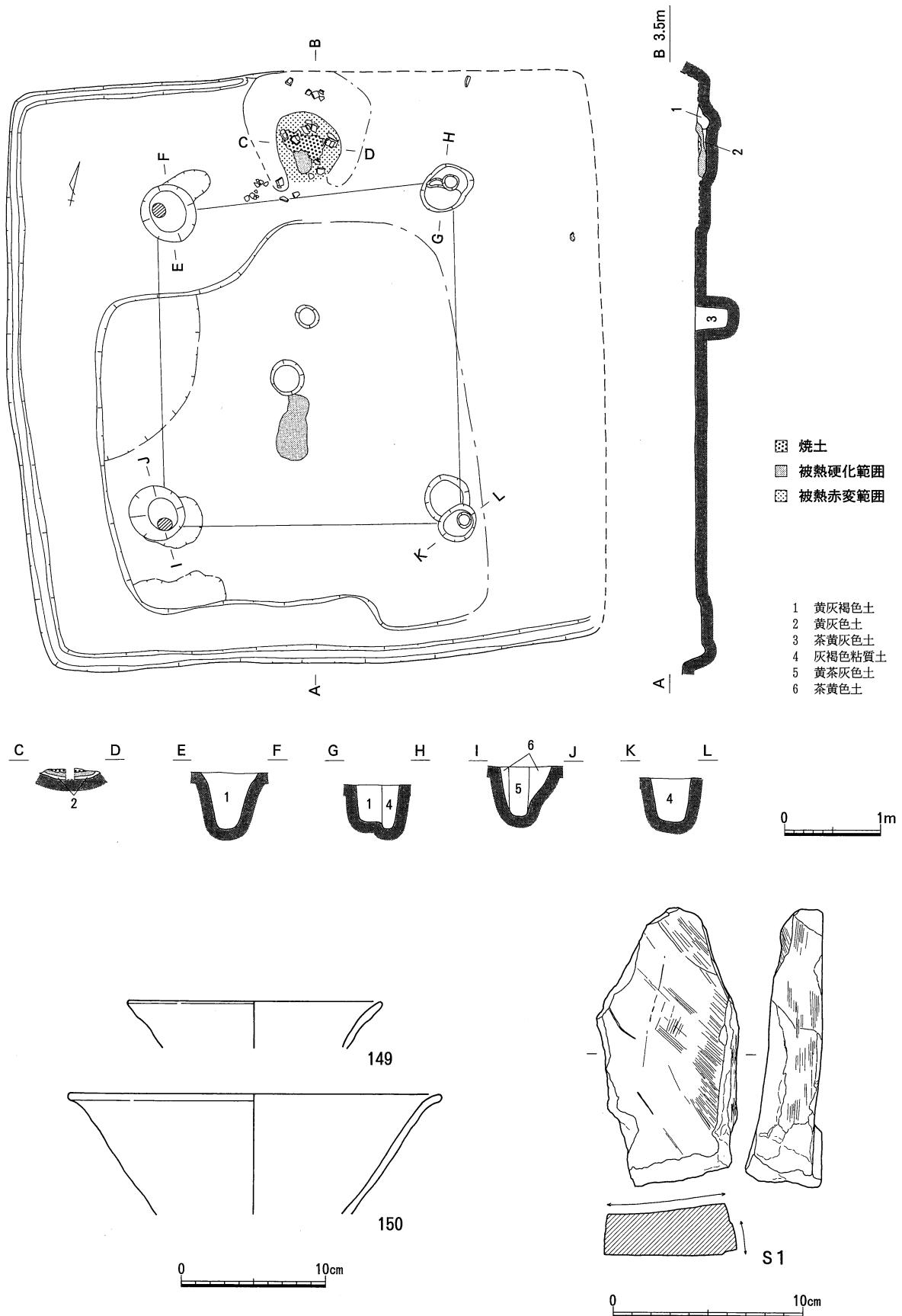


図62 坑穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居14（図63）

調査区の中央東端で検出された竪穴住居である。東半については調査区外へ出るため全形は不明である。西側の一辺が4.2mであり、柱穴との関係や、カマドが中央付近に付設していると想定すると、やや東西方向が長い平面形が推測される。遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.2m前後である。

カマドは北側に付設しており、上面が削平されていることや、調査区の端部であることから、明確に把握することができなかったが、僅かな痕跡から、基盤層を削り出すか、もしくは基盤層とよく似た土層によって構築されていたと考えられる。燃焼部を示す痕跡もそれ程顕著ではなく、床面が径

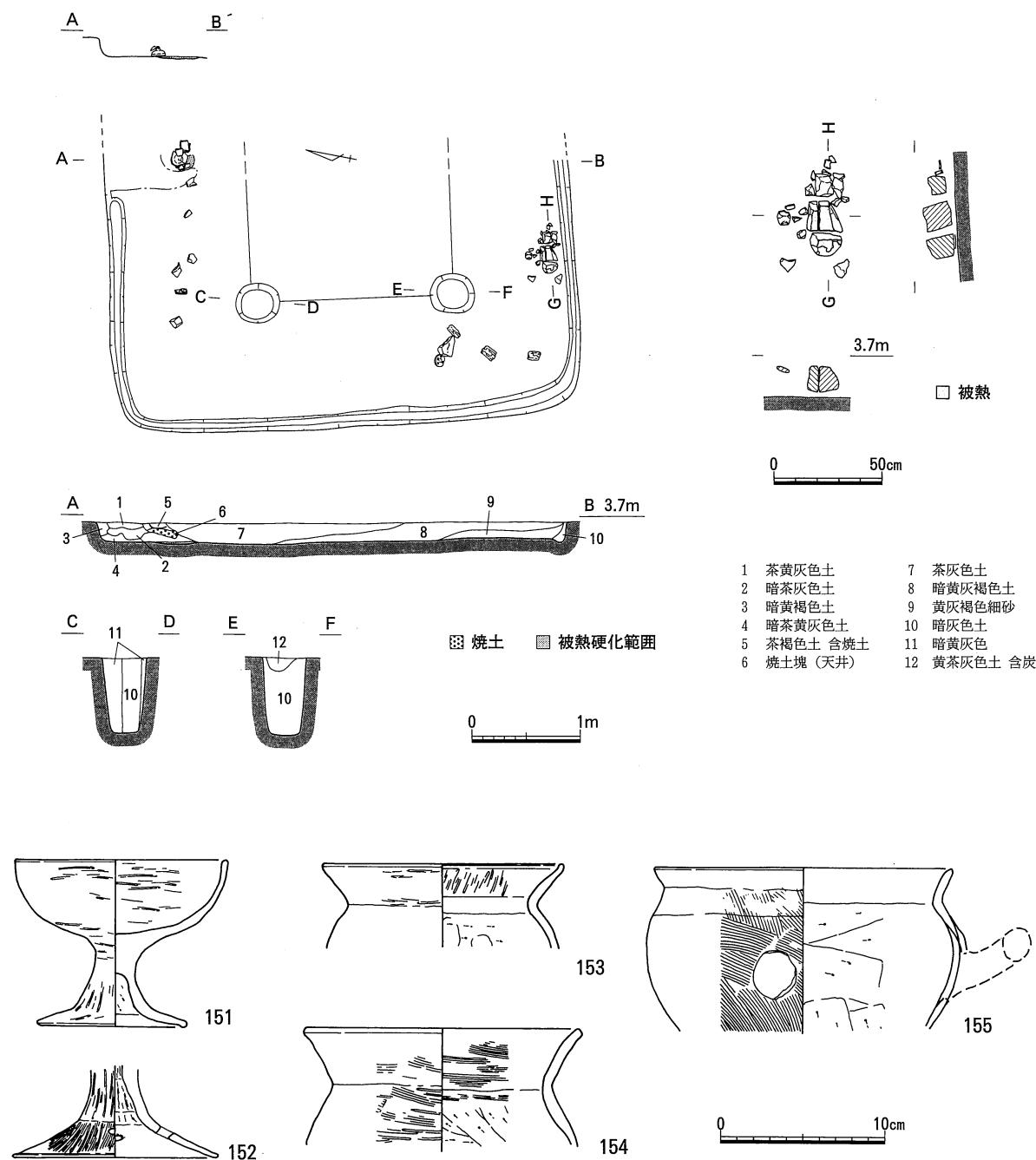


図63 竪穴住居14（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）

0.15mほど焼土化している部分がそれと考えられた。燃焼部の北端では、土師器高杯の完形品が倒置されている状態で出土している。竪穴住居12・13でもカマドの燃焼部から土師器高杯が出土しており、共通している。竪穴住居14から出土した高杯は、被熱痕跡等ではなく、支柱石の替わりに使用されたものではない。やはり何らかの祭祀に用いられたのではなかろうか。焼失した家屋にも認められることから、この集落、もしくはまとまって検出された竪穴住居が構成する単位が共通してカマドに高杯を置くような祭祀をおこなっていたのではないだろうか。その際に1棟の竪穴住居が焼失してしまったということになる。ただし、焼失していない竪穴住居にも高杯が残されていることから、この祭祀後にカマドは使用されなかったという解釈もできる。つまり、この集落、もしくは単位が竪穴住居を廃絶する際の祭祀としてカマドに高杯を置き、その後1棟については何らかの理由で焼失したというものである。竪穴住居における日常的な祭祀や、あるいは廃絶時の祭祀などは、よくわかっていないことが多い、当住居におけるカマド内高杯についてもその一端を示している可能性を指摘しておきたい。

柱穴は2つ検出されており、径0.35m前後、深さは0.7m前後である。北側の柱穴には柱痕跡が認められ、径0.18mの柱径が推測される。竪穴住居の西辺と平行するように並んでおり、おそらく調査区外の柱穴と合わせて方形の柱配置であったことがうかがわれる。南北方向の柱間は1.8mである。

壁体溝は竪穴住居の外周に沿ってめぐっており、幅が0.18m前後である。カマド付近で途切れており、カマド付設後に掘削されたことがうかがわれる。壁体溝は複数なく、柱穴も2つだけであり、当住居も建て替えはされなかったといえる。

出土した遺物のうち、土器についてはカマド及びその周辺からのみ出土した。そのほか住居の南端から安山岩の石塊が出土したが、これは長さが0.4m前後、幅0.2m前後で、被熱のために脆弱化して剥離しており、出土した状態で碎けてしまった。被熱後に置かれたのか、もしくは被熱される状態の作業台として用いられたのかはよくわからないが、極めて脆弱な状態であることから、被熱後持ち込まれた可能性は少ないようと思われる。調査区内ではその痕跡は明瞭ではなかったが、当住居内で火を用いる作業に使われた作業台の可能性の方が高いと考えられる。

出土した土器は、カマド内から出土した土師器高杯(151・152)、カマドの西側から出土した土師器甕(153・154)と土師器把手付鉢(155)である。高杯の形態から5世紀末から6世紀初頭の時期といえる。

竪穴住居16（図64）

調査区中央東端で検出された竪穴住居である。北西コーナー付近は竪穴住居12によって削平されている。南北4.5m、東西4.0mの方形の平面形を呈する。北側の中央やや東寄りにカマドが付属している。遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは0.1m前後である。

カマドは、上面が削平されているが、燃焼部の残存状態は比較的良好であった。そのため燃焼部の中央では河原石を立てた支柱石が残っており、土師器の高杯が倒置して被せてあった。土師器の高杯には被熱痕跡はなく、カマド使用に伴うものではない。おそらく、周囲の住居と同様に、何らかの祭祀をおこなった痕跡と推測される。カマドの本体は、竪穴住居を掘削する際に、径0.9mほど、高さ0.1m以上の範囲を削り残して基礎としている。燃焼部の中央部は、若干窪んでおり、最深部に支柱石がたてられている。したがって燃焼部と住居の床面との間には若干段差が生じている。

柱穴は4つ検出されており、径0.5m前後、深さは0.6m前後である。柱痕跡が認められる柱穴があり、それによると柱径は0.25m前後である。柱間は、東西方向が2.4m、南北方向が1.8mである。

壁体溝は検出されなかった。柱穴は4つだけであり、建て替え等は認められない。

出土遺物は土器の小片が若干出土したのみで、図化できたのはカマドから出土した土師器の高杯(156・157)のみである。時期は、出土した土器と竪穴住居12との切り合い関係から5世紀末から6世紀初頭といえる。

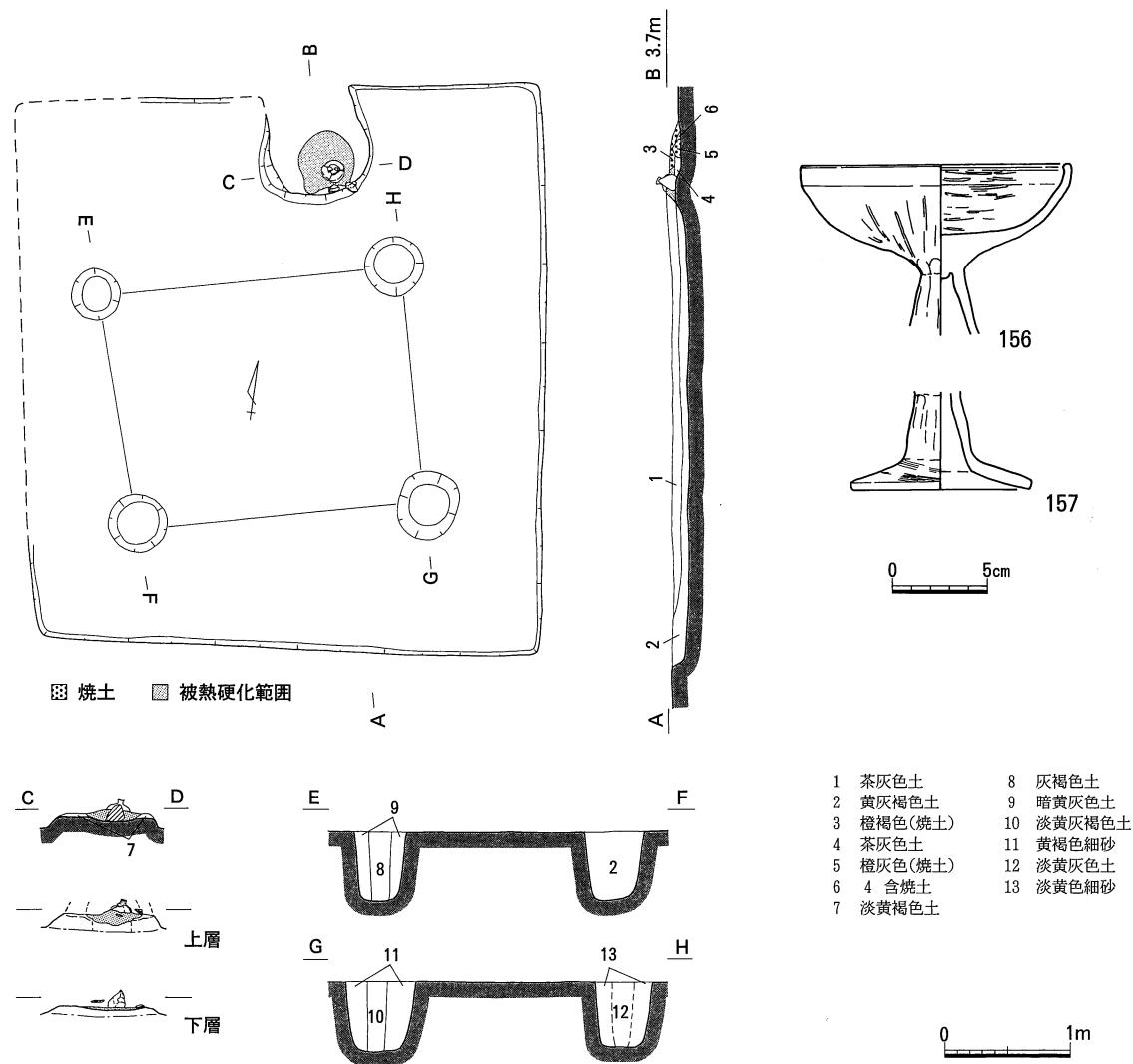


図64 竪穴住居16 (1/60)・出土遺物 (1/4)

VI. 弥生時代後期末・古墳時代前期 遺構面 (図65)

調査区全体で竪穴住居が検出された。平面形は、方形もしくは隅丸方形である。一辺が3.0m未満の小規模な住居も含まれている。竪穴住居の分布状況をみると、散在的であるが、ランダムではない。数棟の竪穴住居が切り合っている単位と竪穴住居1棟の単位が、6.0~7.0mほどの距離で分布している。つまり、継続性の高い住居単位とそうでない住居単位とが混在していると理解される。継続性の高い単位の存在は、各住居単位に付属する宅地という概念もできてきていることを示しているように

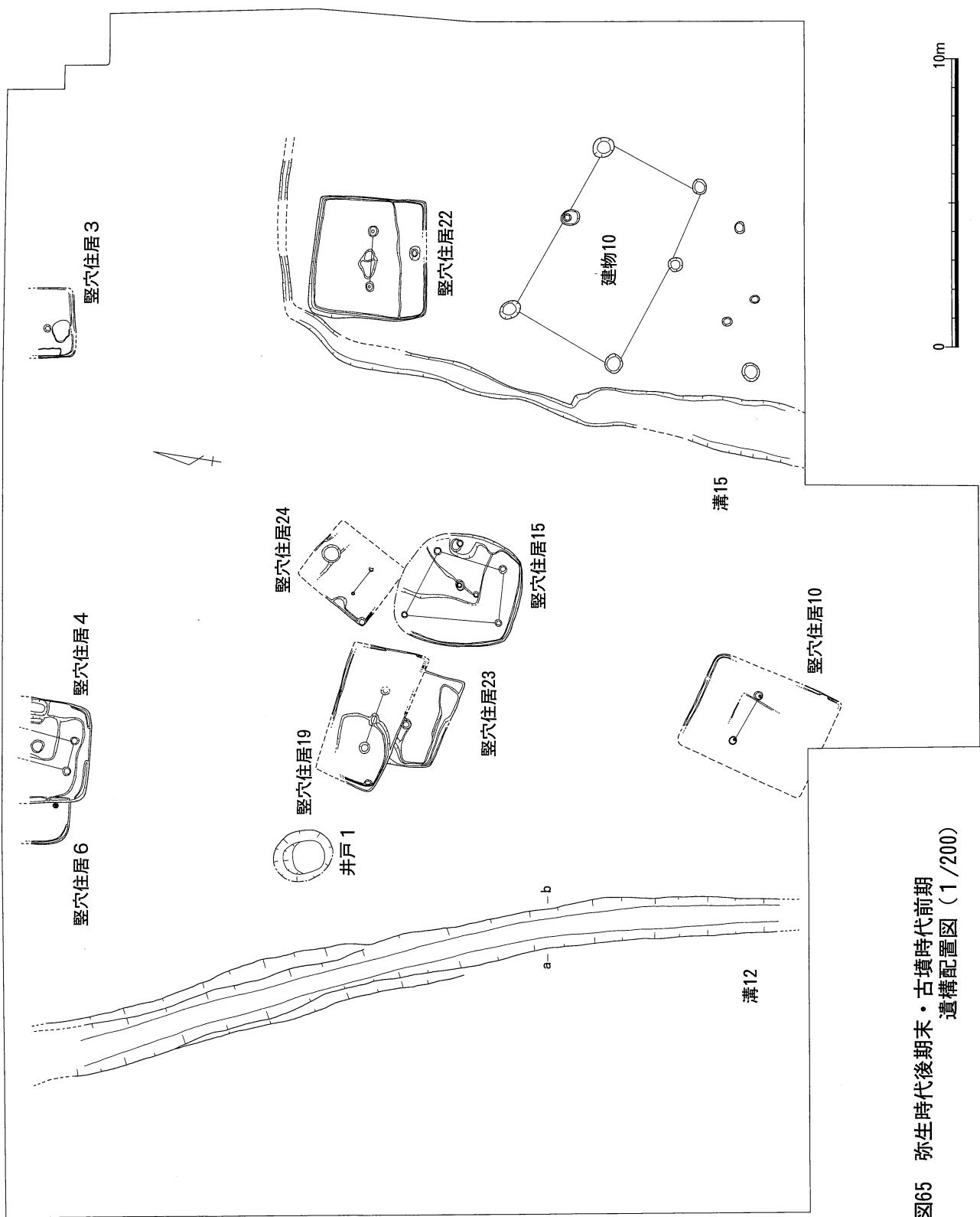


図65 弥生時代後期・古墳時代前期
遺構配置図 (1/200)

思われる。

竪穴住居のほかに溝で区画されたのではないかと推測される部分もある。溝の規模はそれほど大きくないが、矩形に曲がる部分を検出していることから、方形区画である可能性もある。区画内と推測される部分には、掘立柱建物があり、区画との方向性は整合しないが、区画の存在を妥当なものと考える根拠の1つになると思われる。

竪穴住居3（図66）

調査区北東端部で検出された竪穴住居である。北半は調査区外となることから、全形は不明である。南端については、長さが2.4mの規模で、方形の平面形を呈する。住居の中央では柱穴が1つ検出されているが、全体的なバランスから、2本柱である可能性が高い。遺構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは0.15mである。西側と南側の壁に沿って壁体溝が検出され、幅は0.06～0.18mである。埋土の土層断面を観察する限り東側の壁に沿って幅0.06mの板痕跡が認められる。

床面南端中央部では長さ0.6m、幅0.3mの焼土面があり、さらにその東側には長さ0.2mほどの焼土面がある。そのほか床面には炭片が散在している。住居の規模からしても、焼土面は大きすぎる。工房的な使用も推測されたが、それを示す根拠となるような遺物は出土していない。ただ、焼土面の周囲から甕形土器の破片が出土している。このことは、炊飯に用いられた可能性を示唆しているように考えられる。同様の竪穴住居は、弥生時代中期から後期前半の集落から比較的多く検出されている。炊飯専用の竪穴住居の存在は、竪穴住居が炊飯の単位となっていないことも示しており、その有り様がこの時期まで認められることの妥当性については、厳密な検討を要するところである。しかしながら、竪穴住居3の性格については、その大きさや検出状況から、炊飯に用いられた可能性が高いようと思われる。

出土遺物は、床面から出土した甕形土器が2点(158・159)である。いずれも下半は欠損しているが、それは意識的に割られたのではないと考えられる。時期は弥生時代後期末である。

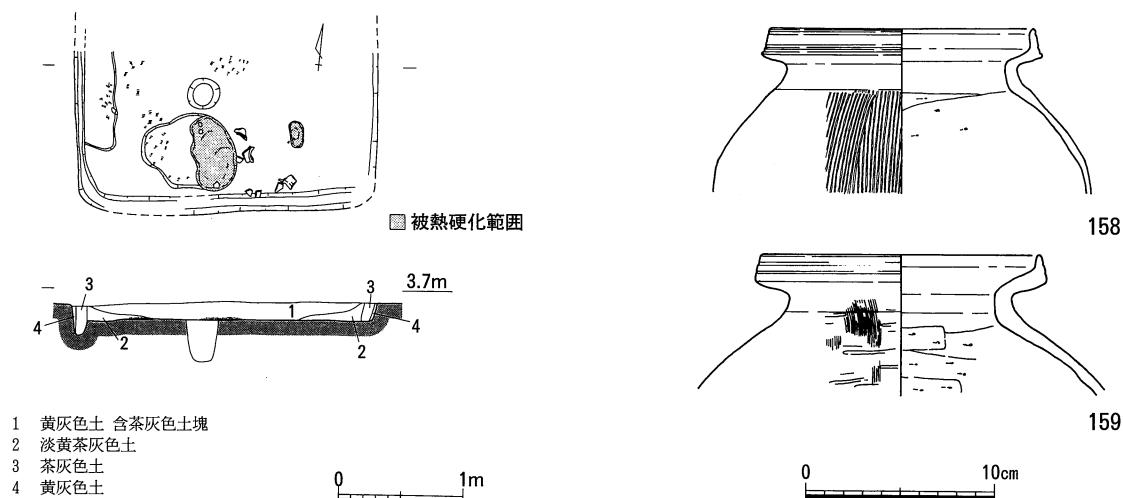


図66 竪穴住居3（1/60）・出土遺物（1/4）

堅穴住居4（図67）

調査区中央北端で検出された堅穴住居である。北半は調査区外であることから全形は不明であるが、一辺3.3mの方形の平面形を呈すると考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、床面までは検出面から0.12m前後である。ただし、床面は平坦ではなく、調査区内では幅0.8mで、平面L字形に0.05mほど高くなっている。いわゆるベット状遺構といえる。中央東寄りにかけて一辺1.5mの方形の平面形に低くなる部分があり、その部分には炭の分布が顕著である。さらに中央付近が径0.4m、深さ0.05mほど窪むことから、焼土の形成は認められなかったが、炉、もしくは炉の縁辺であると推測される。ただ、円形に窪む部分には細砂が認められ、焼土の形成しにくい土層が分布している。意識的に細砂を入れていた可能性が高い。さらに円形の窪みの縁辺には、長さ0.2mほどの河原石が床面上で検出されており、被熱痕跡もあることから炉の支脚に用いられた可能性も推測される。おそらく、炉を「コ」の字形に囲むようにベット状遺構があり、その炉には河原石を用いた支脚を備えていたと考えられる。

ベット状遺構は、基盤層を削り出して整形している。炉の正面には、住居壁部と接して一辺0.9mの方形に窪む部分が付属しており、若干窪む程度の深さであり、断面形の傾斜も緩やかであることから、住居への出入り口の痕跡である可能性が推測される。検出時の観察では、窪みに炭層が流入するのではなく、むしろ炭層を切っている。ただし、土層断面でも検討したが、異なる遺構の切り合い関係は認められず、堅穴住居内での有り様を示していると考えられる。炉使用の間に窪みを何度も掘り直したのである。それは窪みの底面においても微妙な凹凸が認められ、掘り直された結果であると考えられる。しかしながら、掘り直しの痕跡は土層断面には反映されていない。このことは、この窪

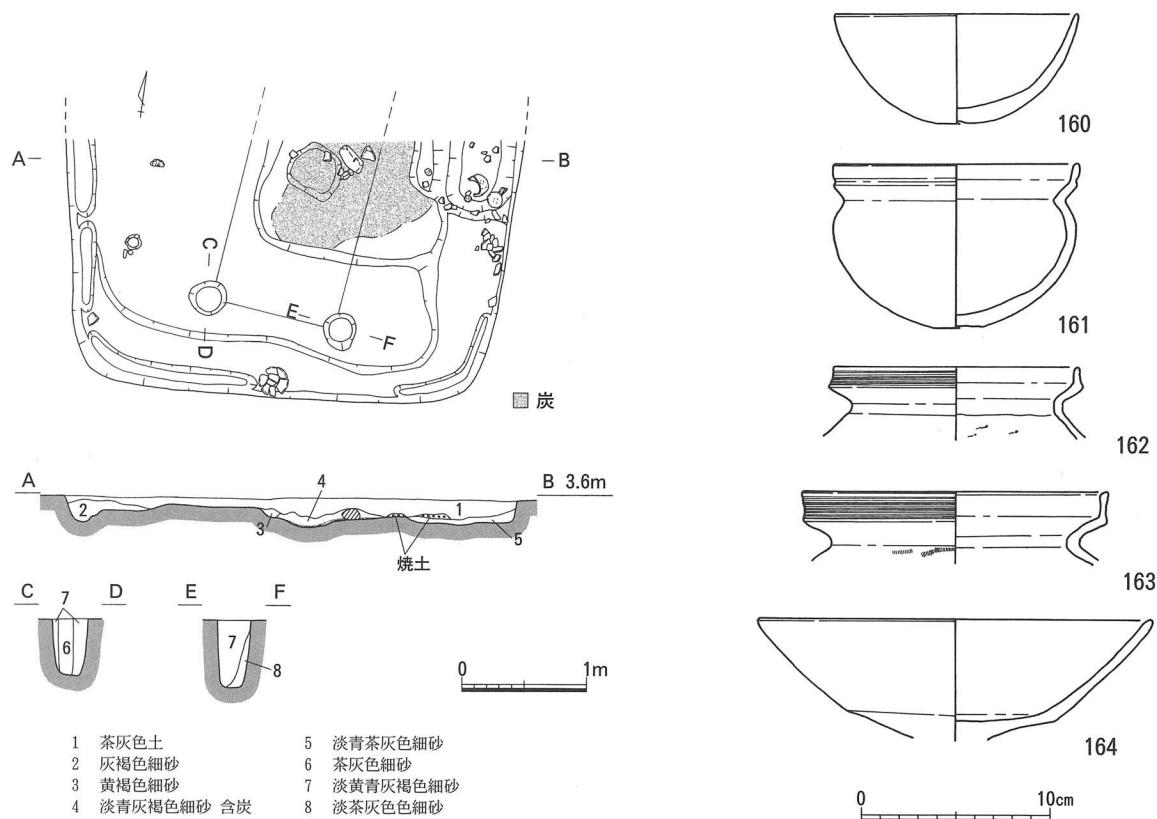


図67 堅穴住居4（1/60）・出土遺物（1/4）

みが住居使用中はオープンであったということを示している。おそらく、住居の出入り口に設定された梯子等を設置するための窪みであったと推測される。

壁部に沿って幅0.2m前後、深さ0.1m弱の壁体溝が断続的にめぐっている。炉正面の窪み部分については、土層断面を検討したが、壁板に対応する痕跡は認められなかった。

また、柱穴は2つが検出されており、いずれも径0.3mほどで、柱痕跡が認められる柱穴があり、それから柱径は0.1m前後といえる。深さは、検出面から0.5m前後である。柱穴や壁体溝には複数の切り合い関係がないことから、住居の建て替えはなかったと考えられる。ただし、柱穴の配置を現況で検出された柱穴の位置から方形の配列を想定しているが、バランス的によくない。4本柱ではなく、5本柱などの多角形の柱配置である可能性もある。

出土物は土器のみであり、炉の正面の窪みからは鉢(161・160)が、南側壁中央付近に接して高杯(164)が、西側のベット状遺構の中央付近からは甕(162・163)が出土した。いずれも床面、もしくは床面付近の位置である。時期は古墳時代前期初頭である。

竪穴住居6（図68）

調査区中央北端で検出された竪穴住居で、東側は竪穴住居4によって削平されており、北半は調査区外であるため全形は不明である。ただし、検出された壁部と柱穴の配置から、一辺が4.5mほどの方形の平面形を呈すると推測される。遺構検出面は、3.6m付近で、床面までの深さは検出面から0.12mである。残存部分を見る限り床面は平坦である。

南西コーナー付近では、幅0.12mで若干窪む程度の壁体溝が検出されている。壁体溝は竪穴住居4と同様に断続的である。柱穴は2つ検出され、想定される住居の壁と平行する配置関係が推測される。径は0.18mで、深さは検出面から0.3mである。いずれにも柱痕跡があり、それから径0.1mほどの柱であるといえる。西側の柱痕跡は0.03mより掘り下げており、東側の柱穴については認められない。柱穴や壁体溝については、複数の遺構の切り合いは認められず、この住居の拡幅等はおこなわれなかつたといえる。むしろ、竪穴住居4に建て替えられた可能性が推測される。

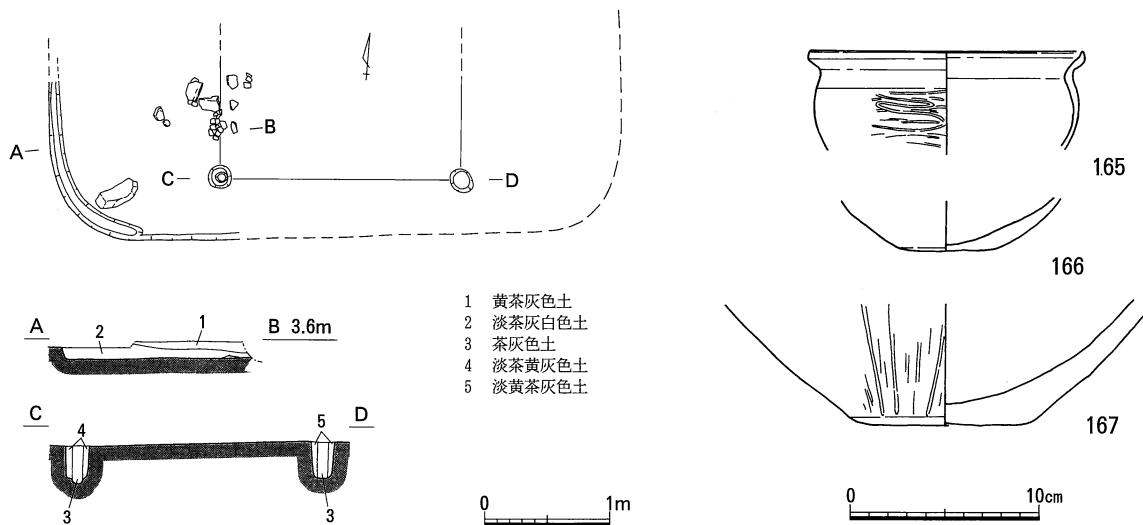


図68 竪穴住居6（1/60）・出土遺物（1/4）

調査できたのは、本来の住居の1/6程度であるが、床面付近からは土器が比較的まとまって出土した。さらに長さが0.36mもある角礫もあり、被熱痕跡も認められることから、この角礫も竪穴住居4同様に、炉の支脚等に用いられた可能性がある。

出土した土器のうち図化できたのは、鉢形土器(165)と壺形土器と鉢形土器の底部(166・167)だけである。いずれも床面付近から出土したものである。時期は弥生時代後期末である。ただし、底部は丸底をかなり意識しているようであり、限りなく古墳時代前期初頭に近い時期と推測される。

竪穴住居10（図69）

調査区の中央南端で検出された竪穴住居である。かなり削平を受けていることから全形を明確に把握することはできないが、短辺3.6m、長辺4.8m程の規模と推測される。遺構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは0.1mほどである。ただし、断片的ではあるが、床面には凹凸が認められる。壁面から1.4mの幅で中央から0.04mほど高くなっている、いわゆるベット状遺構である。北東コーナー付近でL字形の平面形で追跡でき、基盤層を削り出している。貼り床等は認められない。

壁体溝は壁に沿って一条認められる。幅0.12m、床面からの深さは0.06mである。南東部では壁体溝が途切れている。

柱穴は2つ検出された。いずれも径0.3mほどで、径0.1mほどの柱痕跡が認められる。深さは床面から0.5mである。住居南端は明確でないことから、2本柱であるのかどうかについては明確ではないが、想定される規模の住居であるとすると、2本柱の可能性が高い。

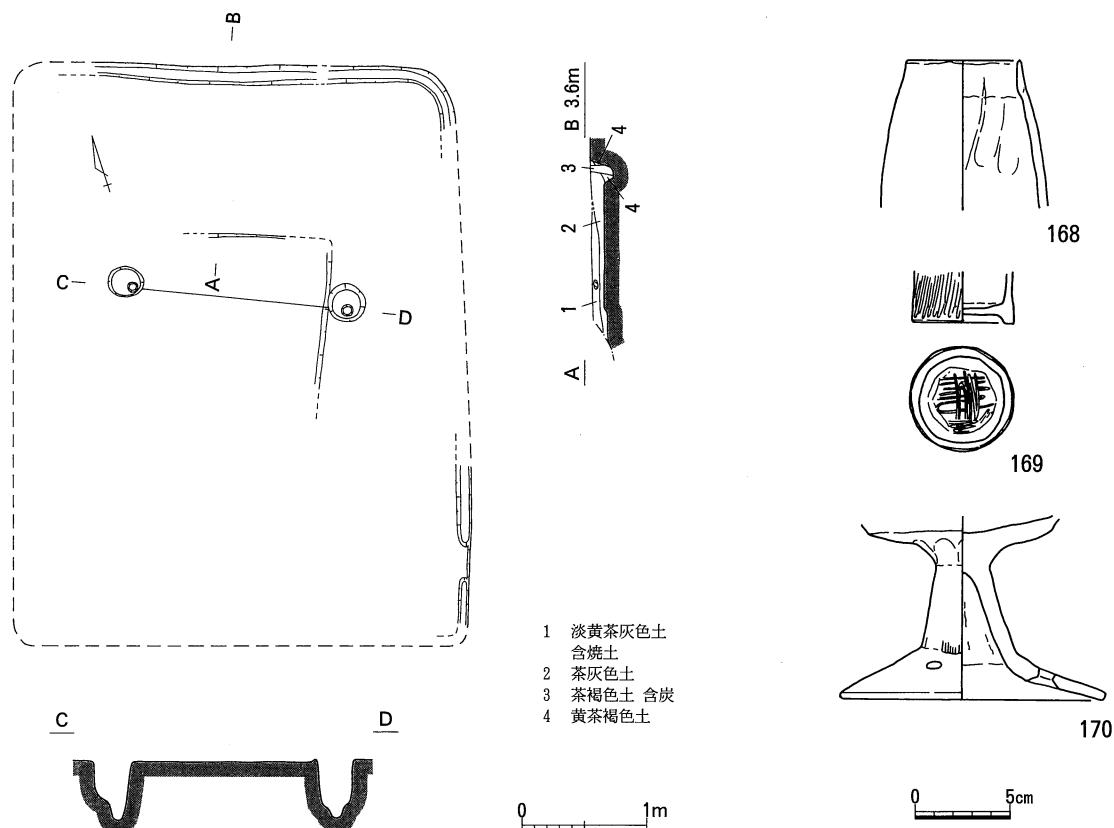


図69 竪穴住居10（1/60）・出土遺物（1/4）

出土遺物は埋土から出土した土器のみである。図化できたのは、口縁部に向かってすぼまる形態の鉢もしくは壺形土器(168)、同じく直線的に口縁部へと向かう器形の底部(169)、高杯(170)の脚部である。(168・169)は弥生土器である可能性が高いが、(170)については古墳時代前期初頭の時期でよい。

竪穴住居15 (図70・71)

調査区中央で検出された竪穴住居で、建て替えが認められる。建て替えは、拡幅をおこなわず、ほぼ同じ平面形で、床面を貼ることによっておこなわれているのが1回と、若干東に拡幅しているのが1回である。当初の竪穴住居（竪穴住居B-1）は、長辺が4.0m、短辺が3.8mほどの隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.4m付近で、床面までの深さは0.3mである。壁体溝は幅が0.2～0.3mほどで、深さは床面から0.1mである。壁体溝は、東側で2重になっており、東側に1度拡幅されたことを示している。拡幅された住居（竪穴住居B-2）は、長辺が4.0mとなる。床面のレベル高に

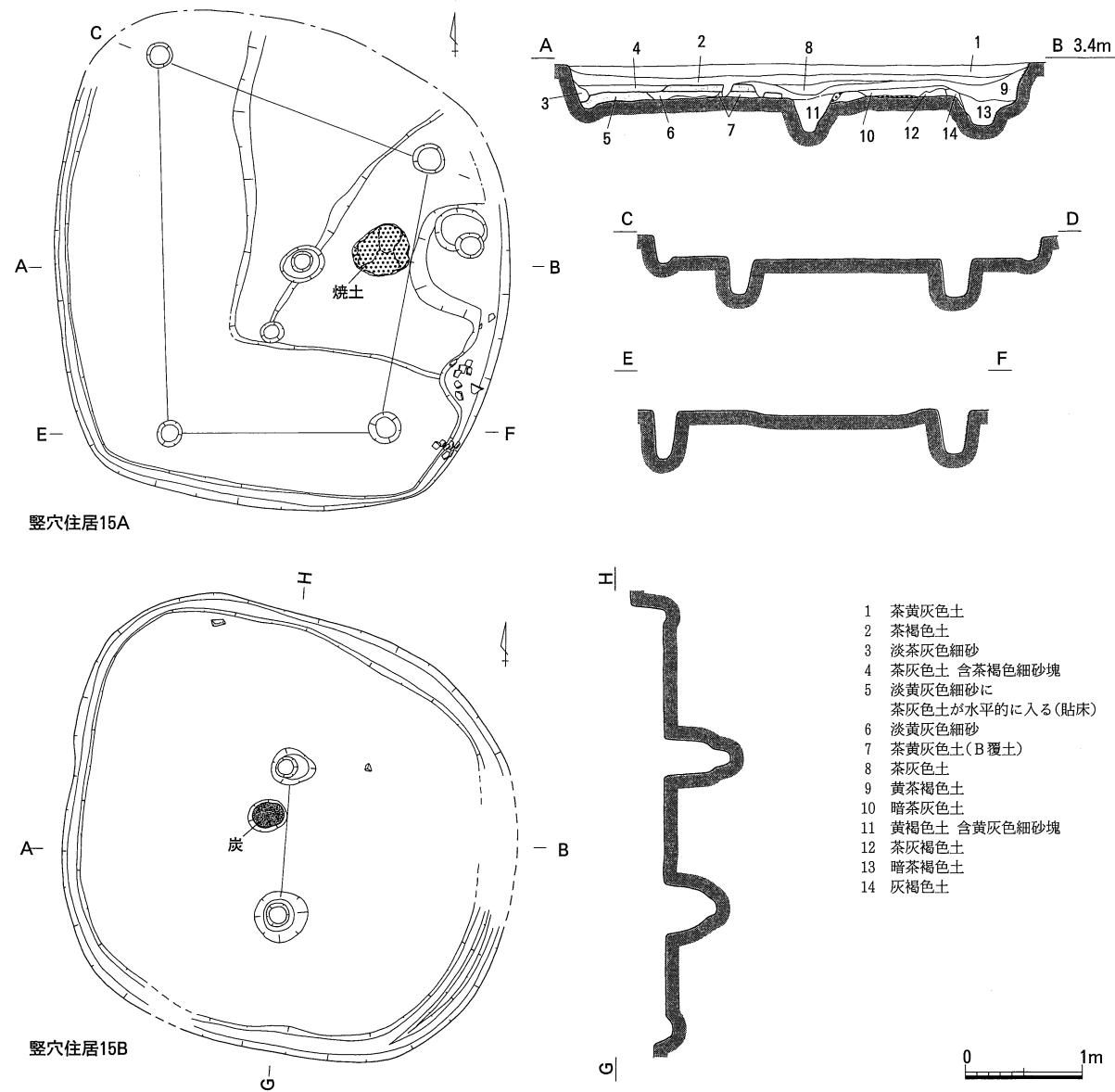


図70 穫穴住居15（1/60）

については竪穴住居B-1と等しい。壁体溝の規模も同じである。

柱穴は2つ検出されており、中央やや北寄りに径0.3m、深さ0.3mの被熱痕跡のある中央ピットが検出された。柱穴は、径0.4~0.5m、深さは0.5~0.6mである。径0.1~0.15mの柱痕跡が認められる。柱穴はこの2つしか検出されておらず、しかも中央付近に位置することから、2本柱の柱構成であったといえる。また壁体溝に拡幅が認められるにもかかわらず柱穴の建て替えは認められないことから、住居全体に手を加えるような拡幅ではなかったと考えられる。2本の柱穴を結んだラインの西側に中央ピットがあり、その東側を拡幅している。中央ピットは炉と推測されることから、炉は住居の出入り口よりもやや距離を置く場合も想定される。つまり拡幅されている部分は、炉から最も距離のある部分ということになり、出入り口が設定されていたと考えられるのである。つまり、竪穴住居B-2における拡張は、出入り口の修繕的なものであったと推測されるのである。

竪穴住居Aは、竪穴住居Bの床面に貼床をおこなっている。貼床の厚さは、厚いところで0.1mもある。貼床のおこなわれた床面は水平ではない。最も高いのは、住居の西半から南端にかけてで、平面形がL字形を呈する部分であり、いわゆるベット状遺構である。ベット状遺構以外の部分は、一辺が2.2mの方形の平面形で、床面はわずかに北西部部分が低くなっている。この部分の中央には径0.5mほどの焼土面があり、炉床と考えられる。炉の東側は一辺0.8mの隅丸方形で低くなっているが、その部分には径0.5mほどの柱穴があり、その掘削のために掘り窪められたものであろう。この柱穴は、ほかの柱穴とはバランスが悪い位置にあるが、補助的な柱であったのかもしれない。

壁体溝は、幅が0.1mで、深さは床面から0.05mほどであった。拡幅の痕跡は認められないが、東側については不整形になる傾向がある。北側の上端については削平されて明確ではない。

柱穴は8つ検出されたが、その配置から4本柱であると推測される。ほかの柱穴については、埋土上面からの掘削ではないことから、補助的な柱穴等である可能性が考えられる。主柱穴の径は0.2m、深さは0.3~0.4mである。一見、柱配置はアンバランスのようではあるが、住居の平面形と相似形になっており、住居の平面形に規定された配置ということといえる。

出土遺物はそれほど多くなく、竪穴住居Aの床面付近から土器片が出土し、竪穴住居Bの床面からは砥石(S 2・3)が2点出土した。砥石は2点ともよく使用されており、(S 2)は白色系、(S 3)は青色系の石材である。埋土からは土器の小片が出土したのみである。出土した土器のうち図化できたのは、甕(171)、壺形土器(172)だけである。(171)は古墳時代前期初頭、(172)は弥生時代後期中葉の長頸壺の口縁部片である。

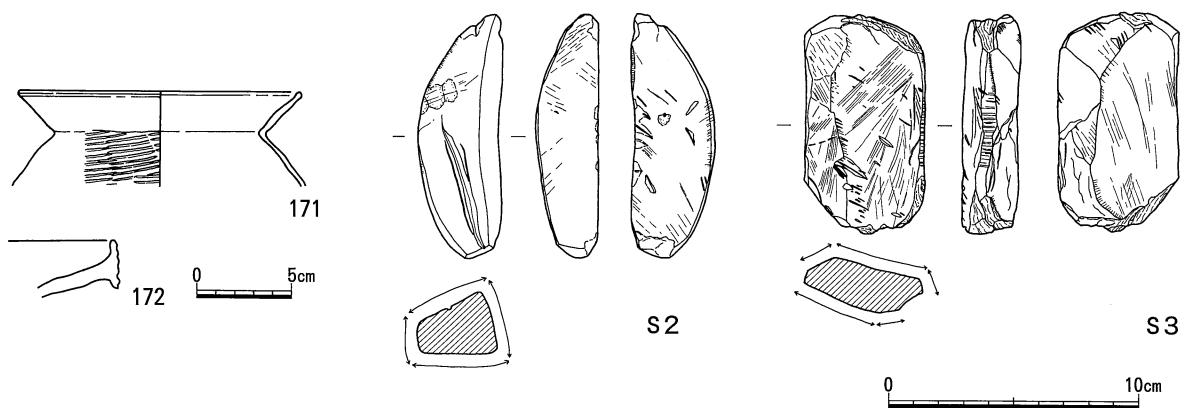


図71 竪穴住居15 出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居19（図72）

調査区の中央付近で検出された竪穴住居である。長辺5.0m、短辺2.5mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5m付近で、床面までの深さは、検出面から0.3mである。住居の西側では長辺が2.2m、短辺が2.0mの隅丸方形の平面形で0.05mほど低くなっている。南半では壁帶溝も認められる。極めて面積が小さく、かつ柱穴も認められないことから、直ちにこの部分を拡張前の竪穴住居とはできない。中央ピットに壁帶溝と想定した溝がとり付くように見えることから、中央ピットからの排水溝で、西側の床面が低い部分については、むしろ高くなっている周囲がベット状遺構であるという解釈が妥当と考えられる。

幅0.1m前後、深さ0.03mほどの壁帶溝が部分的に途切れながらも住居周囲をめぐっている。住居外周をめぐる壁帶溝については重複もないことから、住居の建て替えはなかったと考えられる。南西コーナー付近の床面には、長さ1.8m、幅0.5mの範囲でやや不整形気味の平面形に炭が分布している。明瞭な焼土面は伴っていない。この炭面の北側では、長さ0.3m、幅0.2mの平石が床面で検出されている。この平石には被熱痕跡は認められないが、何らかの作業に用いた台石である可能性は高く、炭との関連性も伺える。ただし、工具や鉄滓等は出土していない。

柱穴は2つ検出されており、中央付近にまとまるところから2本柱の柱構成であったといえる。柱径は、0.3~0.35m、深さは0.2mである。柱痕跡は認められない。2つの柱穴を結んだラインのほぼ中央に長辺0.5m、短辺0.2m、深さ0.2mのピットがあり、顯著な炭や焼土等は認められなかつたが、中央ピットと考えてよい。

出土遺物は、埋土から土器の小片が若干出土した以外に、床面から高杯形土器(173)が出土した。脚部が若干欠損している以外はほぼ完形である。表面には赤色顔料を塗布した痕跡も認められる。弥生時代後期末の時期である。

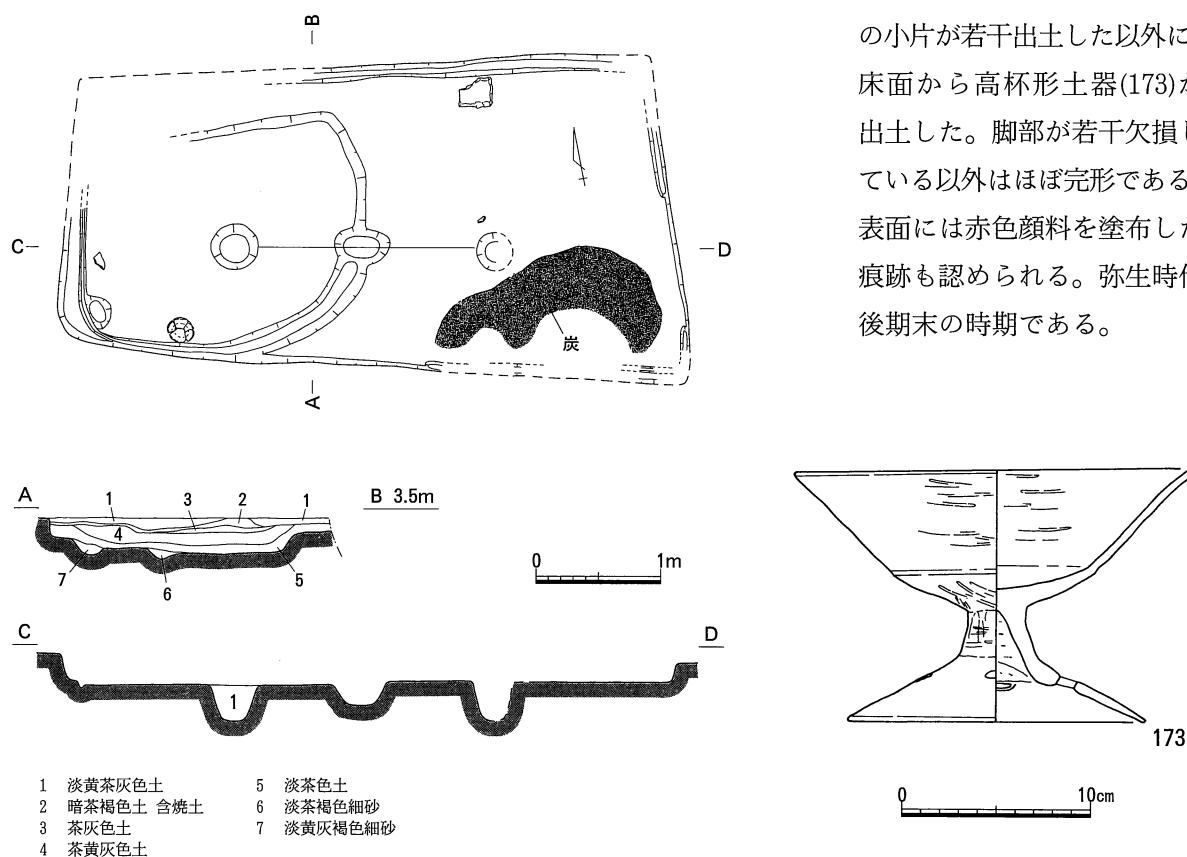


図72 竪穴住居19（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居22（図73）

調査区中央西より検出された竪穴住居である。一辺4.0mの方形の平面形を呈する。東半についてはコーナー部がほぼ直角に曲がる整った形状であるが、西半はやや外開き気味の角度となる。遺構検出面は3.3m付近で、床面までの深さは検出面から0.3mである。南側の中央壁部が若干掘削を受けているが、その他の残存状態は良好である。幅0.1～0.3mの壁体溝がめぐっているが、拡幅等を示す複数の壁体溝は認められない。壁体溝に相当する土層断面を観察すると、幅が0.1m前後の壁板の痕跡が観察される。

床面については、基本的には平坦であるが、南半1/3ほどは0.03m前後の段差が認められる。そのため北半の2/3はベット状遺構であるともみられるが、明確でない。南壁中央部に沿って長径0.5m、短径0.4mの長楕円形を呈する土壙があり、この土壙の周辺には床面に土器の破片が認められ、それらの土器片が土壙中に落ち込む状態で出土している。つまり、この住居が廃絶して埋没していく段階では、この土壙は埋められた状態ではなかったといえる。この土壙の機能については、住居南壁の中央に沿っていることや、住居使用時に開けられていた状態であったことから、住居に入り口にするための梯子を据えるために設定された土壙であると推測される。したがって、この住居の入り口を意識して南半1/3には低い段差を設けていると考えられる。

柱穴は住居中央付近で2つ検出された。壁体溝にも重複がないことから、この2つが当住居の柱穴と考えてよい。2本柱の柱構成といえる。柱穴の径は0.35m前後、深さは床面から0.5m前後である。柱穴の検出時には径0.1mの柱痕跡が認められた。柱穴間の距離は、1.5mである。柱穴間には長径1.0m、短径0.7mの長楕円形の平面形を呈した土壙が検出された。土壙の断面形をみると、東半において径0.4mのやや不整形気味の円形の平面形で深くなっている。この部分の上面からは土器片が出土したが、焼土や炭の堆積は顕著ではない。周囲についても焼土化している部分は観察されないが、位置的な関係から、当住居の中央ピットであると考えられる。

床面から土器等の遺物のほかに長さ0.4m、幅0.3m前後の角礫が4点出土した。相互の配置に目立った規則性は認められないが、住居の北東付近にいずれも存在している。いずれも上面が平坦であり、被熱痕などの使用痕跡は観察されないが、作業に用いた台石である可能性が高い。この住居からは4点も砥石が出土しており、他の住居と比べるとその集中度は特異といえる。鉄滓等の直接的にその作業内容を示すような遺物は出土していないが、工房的な性格を有していたとも推測される。ただし、工房に特化された住居ではなく、台石がまとまる住居北東の1/4ほどの部分が作業をおこなう空間であったというのではないだろうか。

出土した遺物は大半が床面付近から出土しており、この住居が廃絶した後は暫く住居の周囲では生活に用いられなくなった状態となっていたことを示しているように思われる。図化できたのは、入り口付近で出土した土器のうち甕(174・175)、短頸壺(178)、製塩土器(176・177)である。中央ピットの上面からは鼓形器台(179)が出土した。短頸壺(178)と鼓形器台(179)は、いずれも表面にベンガラを塗布している。出土地点は異なるが、両器種はサイズ的にもセット関係で用いられていた可能性が推測される。砥石は4点(S 4～7)が出土しており、いずれもきめの細かい白色の石材を用いている。表面はオーバーハング気味になっており、よく使用されている。出土した土器の時期は古墳時代前期初頭から中頃である。

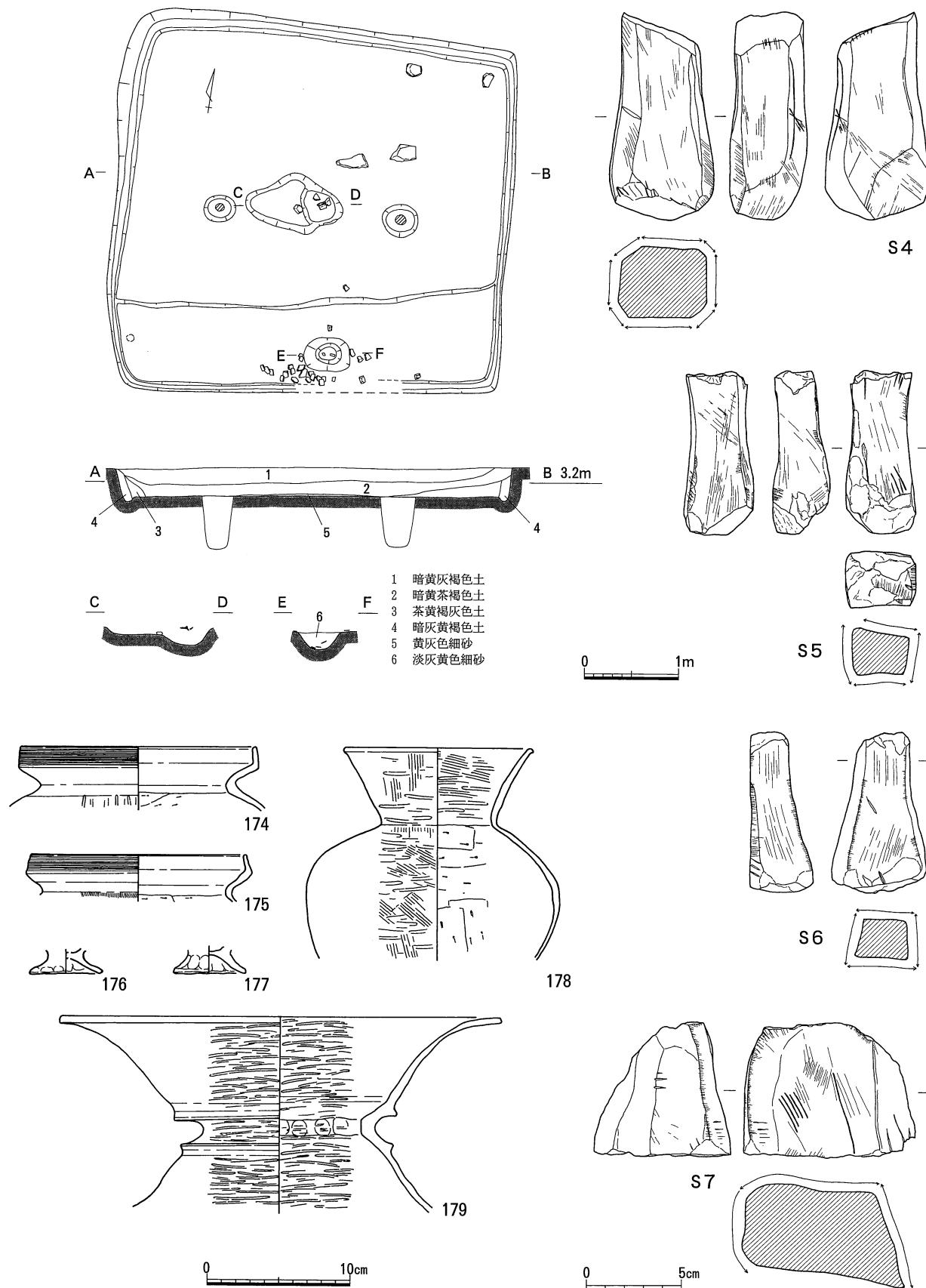


図73 壇穴住居22 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居23（図74）

調査区中央付近で検出された竪穴住居である。北半を竪穴住居19によって削平されており、全形は不明であるが、残存している南側から一辺3.3m以上の規模を有する方形の平面形を呈する竪穴住居である。遺構検出面は3.4m付近で、床面までの深さは0.1mほどであるが、部分的に深くなっている。ベット状遺構が存在している可能性がある。そうすると、検出面からの深さはベット状遺構の上面までの深さとなり、下面までの深さは0.15mである。ベット状遺構の平面形を、北側にそのまま検出遺構を折り返すとするならば、西側に対して「コ」の字形になる。つまり中央西端が一段低くなるという平面形と推測される。

壁体溝は、幅0.2m前後であるが、南東のコーナー付近で広がってやや不整形気味となる。北半が削平されていることから、詳細については不明な点が多いが、壁体溝は全周はしていないようである。ただし、他の住居と同様に途切れながら全周している可能性はある。

住居の中央付近で柱穴が2つ検出されている。南側が若干大きく径0.3m、北側が若干小さく径0.2mである。深さは、検出面から0.4m前後である。2本柱の柱構成である可能性が高く、南側の柱穴と同様の距離で北側柱穴と北側の壁間の距離があるとすると、南北の規模は3.7m前後ということになる。

出土遺物は、甕の胴部片が若干出土しただけである。詳細な時期については明らかにはできないが、器壁も薄いことから古墳時代前期の範囲に含まれると考えられる。

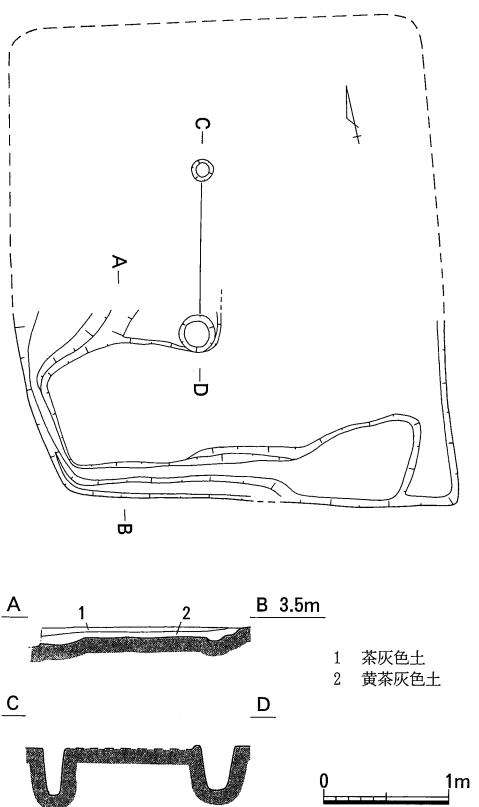


図74 竪穴住居23 (1 / 60)

竪穴住居24（図75）

調査区の中央付近で検出された竪穴住居である。大半が後世の削平を受けているが、南西コーナー付近や北側の壁部が一部残存していた。そのため南北は3.0m前後と推測される。かなり小規模な住居のようである。遺構検出面は3.2m付近で、床面までの深さは0.1m前後であるが、断片的ながらも床面には凹凸があり、他の住居同様にベット状遺構がある可能性がある。

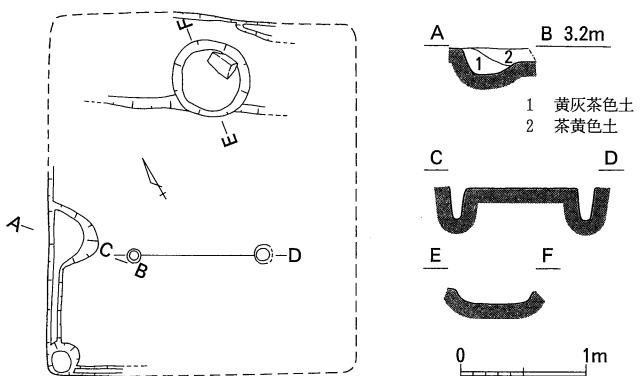


図75 竪穴住居24 (1 / 60)

壁体溝は南西コーナー付近で検出されており、幅は0.1m前後であるが、柱穴状にコーナー部分は広がっていたり、北側では不整形に広がり完結している。深さは床面から0.05mほどである。北側でも壁体溝が一部検出されており、その部分も完結していることから、途切れながら全周している可能性が高い。

柱穴は2つ検出された。径は0.1m前後で、深さは床面から0.3mである。柱穴間は0.9mである。柱穴間の中央北側に径0.6mの円形の土壙が検出された。深さは床面から0.1m前後である。角礫が1点埋土中から出土したが、ほかに遺物は出土しなかった。機能についてはよくわからないが、柱穴間の中央部を意識していることから、住居に伴うと考えてはよい。例えば、住居への出入り口の床面に何らかの意味をもって掘られたものといったことも推測される。

出土遺物は、土器の小片が若干出土したのみである。詳細な時期は明らかにできないが、薄手の甕胴部の小片が認められることから、古墳時代前期に属する時期と推測される。

建物10（図76）

調査区南西コーナー付近で検出された掘立柱建物である。建物の北側及び西側を溝15が矩形にめぐっており、溝によって区画された空間に建てられている可能性が高い。遺構検出面は3.5～3.6m付近で、6つの柱穴によって構成される。桁行6.6m前後、梁間4.0m前後で、床面積は27m²である。柱穴は径0.5～0.6mで、深さは0.5m前後である。中央北側の柱穴には柱痕跡があり、底面から0.1mほど掘り下

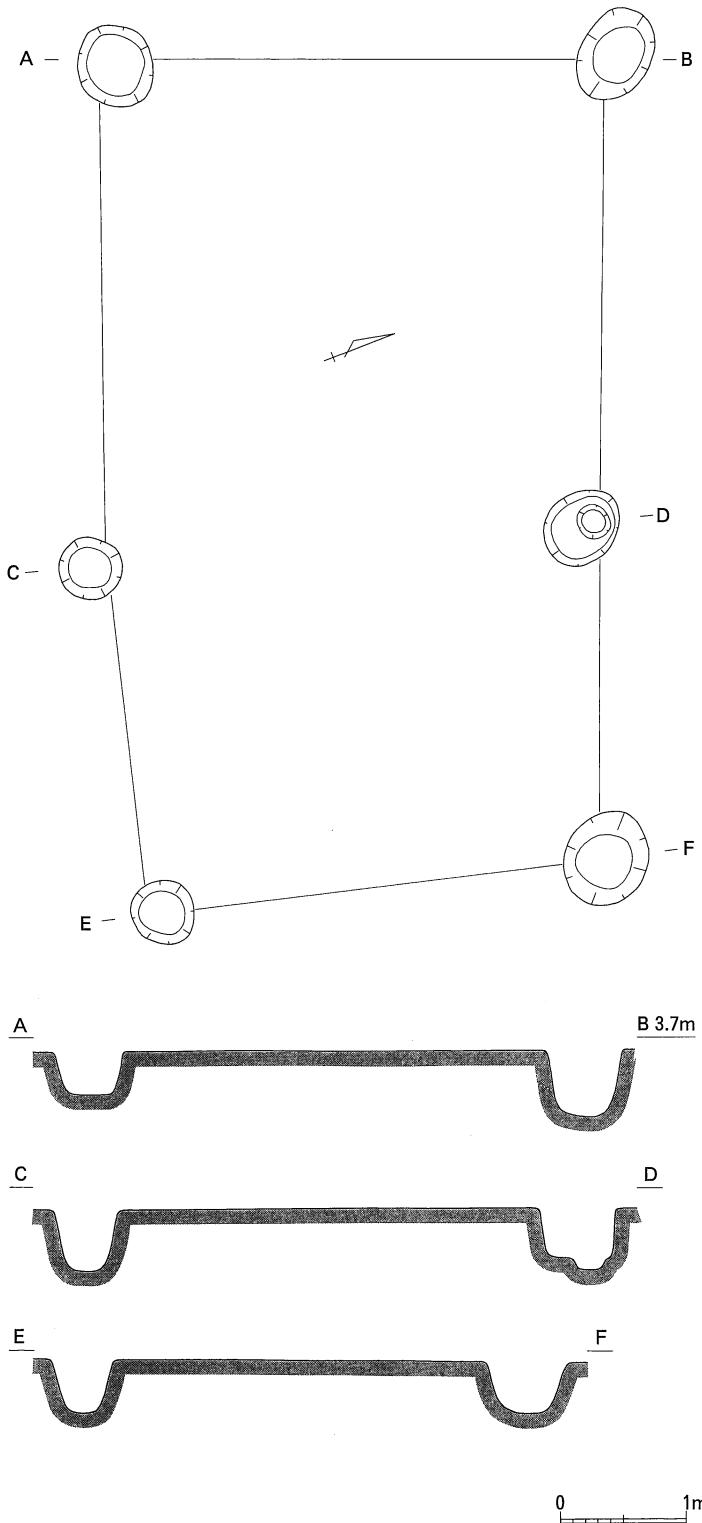


図76 建物10（1/60）

げている。径は0.2mである。この建物に用いられた柱の規模を示している。

柱穴埋土に含まれる遺物は極めて少なく、土器の小片が数点のみであった。それらは薄手で内面にヘラケズリの観察される甕の胴部片が認められ、古墳時代前期の時期に属すると考えられる。

溝12（図65・77・90）

調査区の西側で検出された溝である。微高地端部に位置する。微高地縁辺に掘削された水田への給排水を目的とした水路であると考えられる。ただし、溝以西における低位部では水田遺構及び水田層は確認されていない。遺構検出面は、2.7m付近である。深さは検出面から0.3m前後である。断面形はU字形を呈する。

埋土からは土器が出土しているが、図化できたのは、手すくね土器(180)、鉢(181～183・185)、壺(184)のみである。ほぼ平行して弥生時代後期中頃の溝も掘削されており、そのため同期の土器が含まれている。量的にも同期の土器が多いが、弥生時代後期末の土器も含まれており、同期前後に埋没したと考えられる。

溝15（図65・78・79）

調査区南東コーナー付近で検出された溝である。矩形にめぐる北西コーナー部を検出した可能性が高い。溝幅は残存状態に影響されてか微高地基盤のレベル高が高くなる北側にいくにつれて細くなる。南側では幅が1.8m、北側では0.3mまで狭まる。遺構検出面は3.6m付近で、深さは検出面から0.2m前後である。ただし、埋土における遺物の検出面は、3.5m付近で、遺構の形状を把握できたのは、周囲を掘り下げてからであった。当初は土器溜まり状の遺構である可能性を考慮したが、精査の結果、溝であることを確認した。

遺物は、検出遺構の南側に広がる平面形の部分のみに集中する傾向が認められる。上面は削平されていることから、完形に復元できる遺物はなかったが、口縁部が完形に復元できる個体も幾つか認められることから、廃棄された結果というよりも、何らかの目的で形成されたものと推測される。おそらく祭祀的な性格であったのではないかと推測される。

壺(186～189)は、e-fの断面ライン前後にまとまる傾向がある。器種の配置を意識して投棄している可能性が推測される。壺以外の器種としては、高杯(190・191)、鉢(192)、甕(195～197)、長頸壺(193・

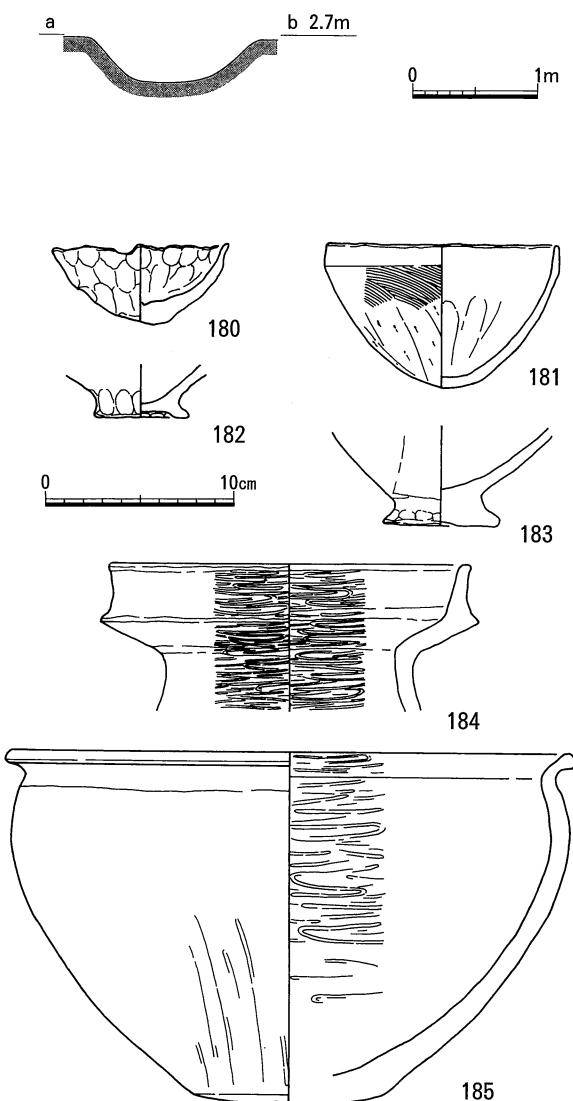


図77 溝12断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

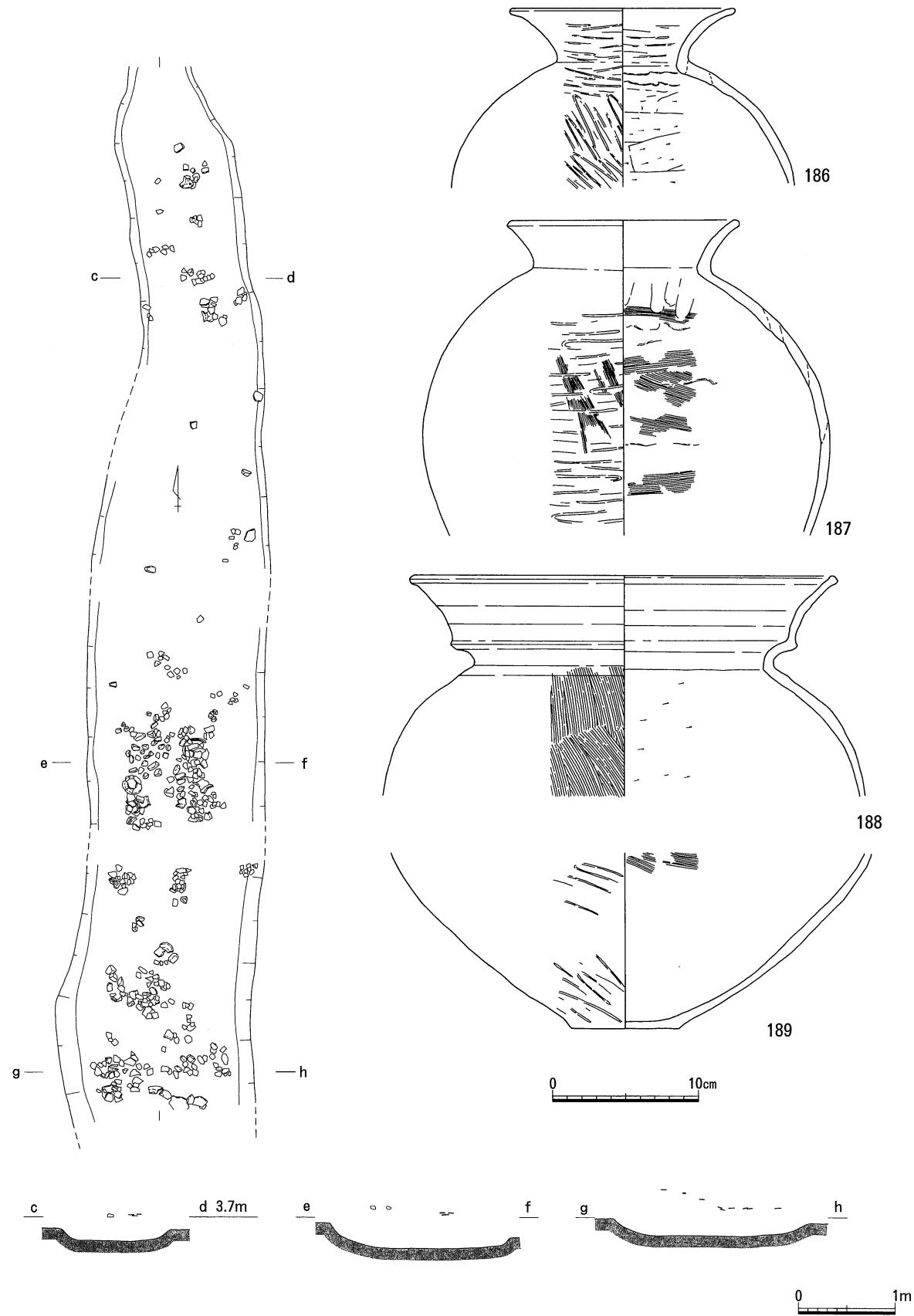


図78 溝15 (1/60)・出土遺物1 (1/4)

194)がある。それらは器種としてのまとめりは認められなかった。また、小片ではあるが白色の石材を用いた砥石片(S 8)も出土している。出土した土器は古墳時代前期初頭の時期である。

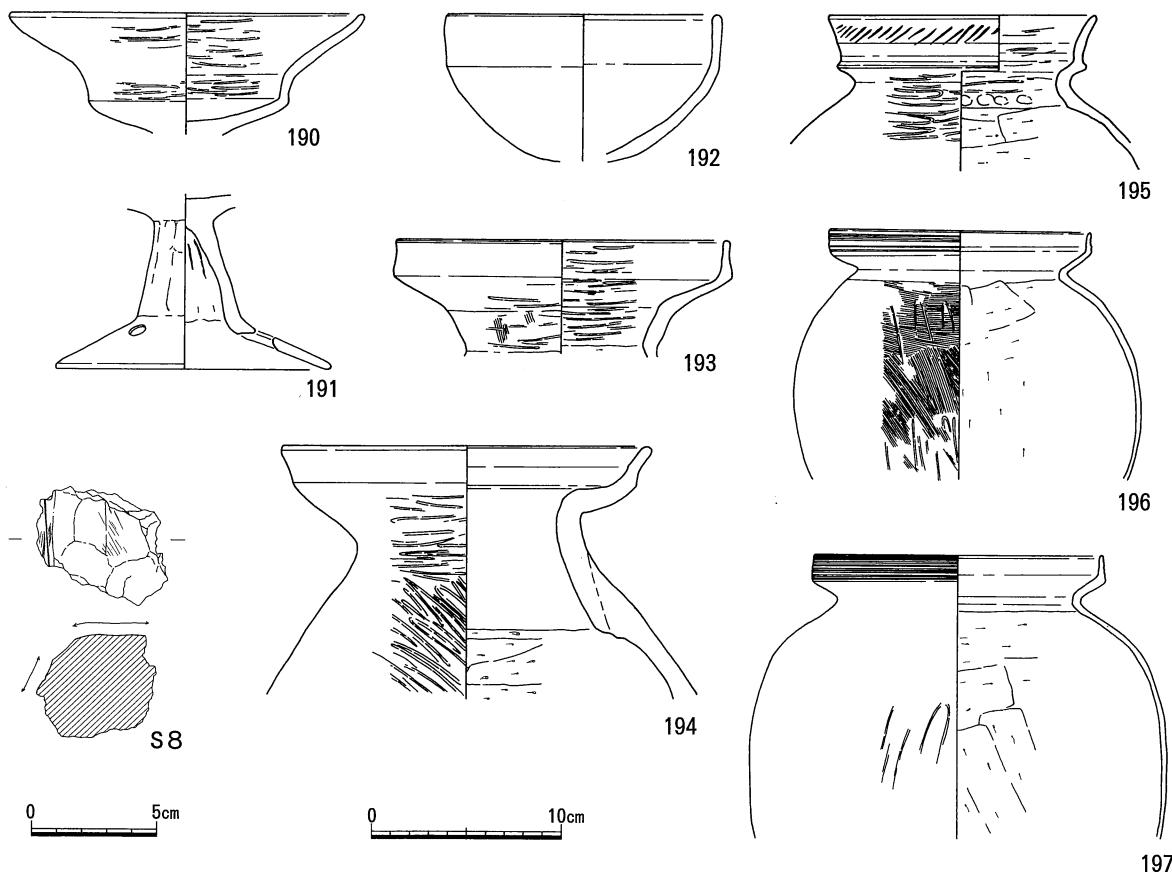


図79 溝15 出土遺物2 (1/4・1/3)

井戸1 (図80)

調査区中央西側で検出された井戸である。遺構検出面は3.2m付近で、深さは検出面から1.3mである。検出面から0.8mの位置で北側に段ができる、さらに0.4m下がって底面となる。ただし、湧水と壁面の崩落が激しくなったことから、底面全体を明確には確認できなかった。平面形は長径2.0m、短径1.7mの長楕円形を呈する。一段低くなる部分の平面形は、一辺1.0mの隅丸方形を呈する。埋土は5層確認でき、低くなる部分の上についてはレンズ状に堆積(①~③層)していることから、自然に埋没したことが推測される。遺物は含まれていなかった。以下については(④・⑤層)、南側からの埋没をうかがわせるような斜め方向の堆積状況である。第④層からは土器と炭がまとまって出土した。炭については、井戸の壁部にまとまる傾向があり、ある程度の量が投棄されたようである。土器については小片ばかりであり、廃棄された結果であることが推測される。ただし器種については甕が主体であり、図化できてはいないが胴部片も含まれている。しかしながら、破片の数からすると、完形あるいは完形に近い個体は含まれていなかったようである。

出土した遺物については、古墳時代前期初頭の時期の甕(198~204)と、弥生時代後期末の時期の甕形土器(206・207)、壺形土器(208)、底部(205)があり、(208)については混入と考えられる。

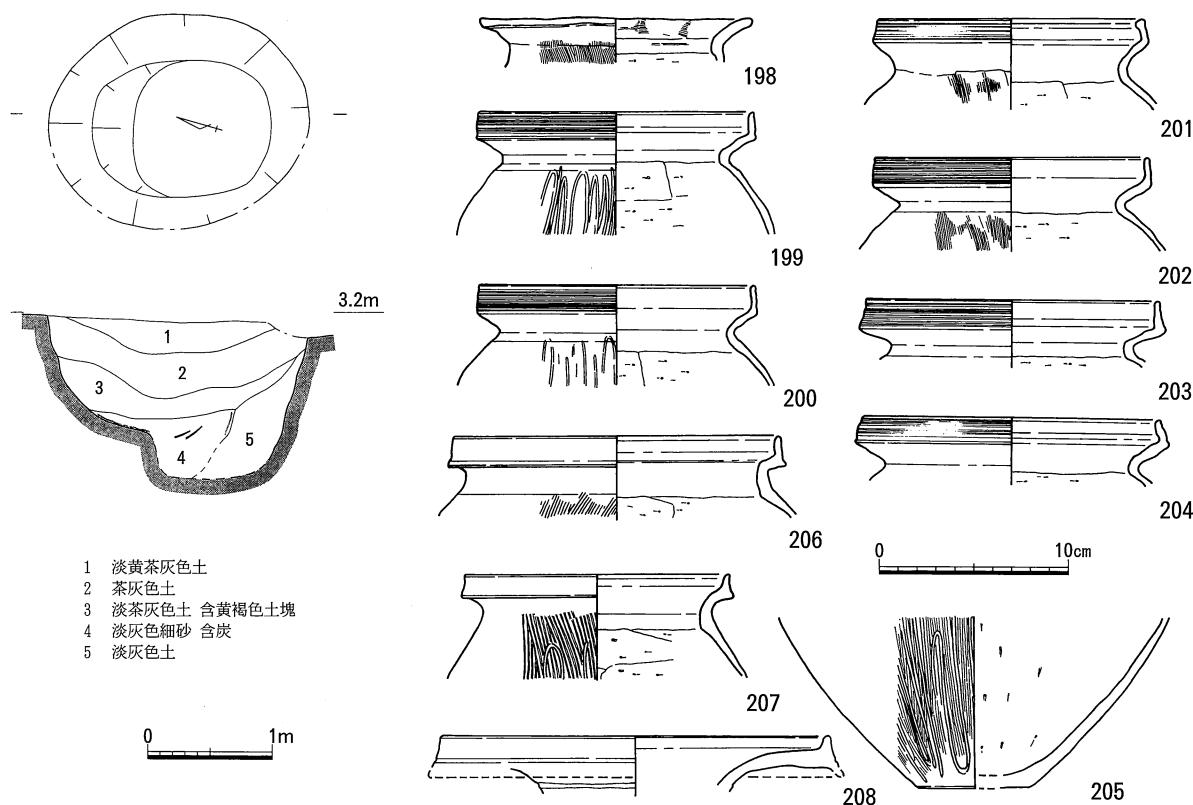


図80 井戸1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

VII. 弥生時代後期中葉 遺構面 (図81)

当該時期の遺構は、少ないながらもコンパクトにまとまる傾向が見られる。調査区の中央付近に等間隔で竪穴住居が南北に並んでいる。調査区中央で検出された竪穴住居は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての時期の竪穴住居と重なっていることから、わかりにくくなっているが、切り合い、もしくは拡幅によって最も規模が大きくなっている。北側の校舎部分での発掘調査では当該時期の遺構は極めて少ないとから、竪穴住居数棟で構成されるそれほど規模の大きな集落が存在していた可能性が高い。津寺遺跡でもこの時期には集落が著しく縮小、もしくは廃絶に近い状況となる。そのため、津寺遺跡の中では、比較的当該時期の遺構がまとまる地点といえる。集落景観としては、津寺遺跡の北東に位置する立田遺跡が近い様相である。立田遺跡は後期中葉の1時期だけ集落が形成されたもので、遺構の切り合いもあまり見られないことから、存続時期も限られたものであったと考えられる。津寺遺跡の南東に位置する吉野口遺跡でも同様のあり方を見る事ができる。立田遺跡や吉野口遺跡と当遺跡のあり方は、後期中葉において、同種の集落がある程度普遍的に分布していた可能性を推測させられる。

ただし、こういった集落を、規模の大きな母村に対する子村といった単純な位置づけはできない可能性がある。それは、津寺(加茂小)遺跡では、校舎部分の調査で特殊器台片が出土しており、さらに吉野口遺跡でも幾何学模様を施した器台片が出土していることである。後期後半になると、首長権が

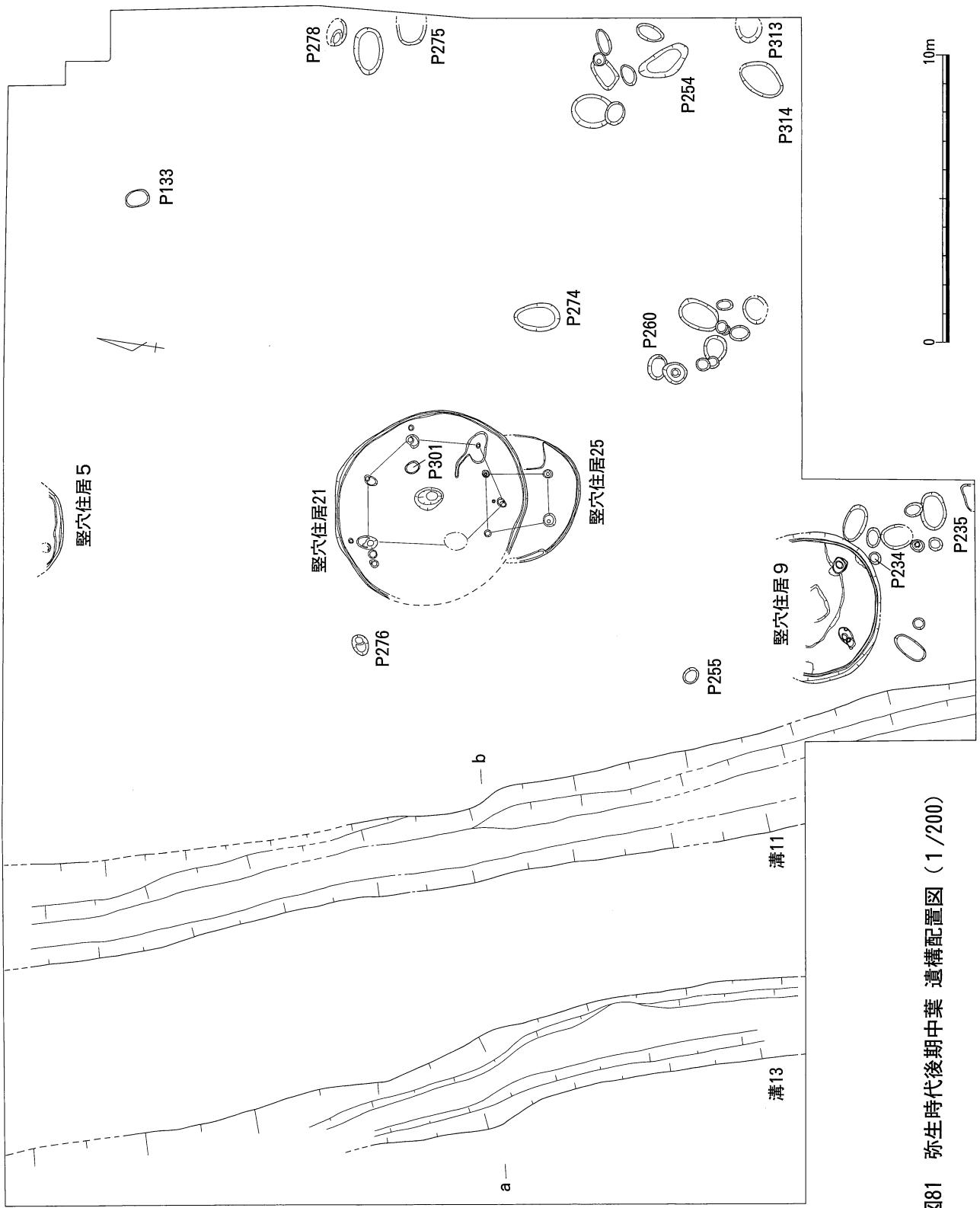


図81 弥生時代後期中葉 遺構配置図 (1/200)

著しく伸張し、そのため首長に対する埋葬儀礼が莊厳化していく。その儀礼の主役の1つが特殊器台である。特殊器台は、該期の大規模集落からも出土しており、その点からも大規模集落の従属的集落として単純に考えるわけにはいかない。結論的な推測をすると、該期の集団関係は、集落単位の結合関係を解き明かすだけでは解明できない性格を有しているのだと思われる。その点を加味しながら該期の集落の再検討が必要である。

竪穴住居5（図82）

調査区中央北端に位置する竪穴住居である。大半が調査区外に出るため全形は不明であるが、円形もしくは隅丸方形の平面形で、検出部から径もしくは一辺2.8m以上の規模といえる。遺構検出面は3.6m前後で、床面までの深さは0.4mである。壁に沿って幅0.2m前後の壁体溝がめぐる。深さは床面から0.08mである。東側の埋土中に炭層がまとまる部分があるが、埋土全面に広がるのではなく、断面観察でも住居埋没の過程で流入している。住居廃絶後に廃棄された炭と考えられる。西側の壁に接して径0.3mの柱穴が検出され、径0.1mの柱痕跡も確認できる。住居の中央付近では黃灰色土を貼った貼床が認められる。

出土した遺物は、住居の床面付近で検出された土器片のみで、炭が比較的多く含まれる部分もあるにも関わらず埋土からはほとんど出土しなかった。土器片は小片となっており、図化できたのは、高杯形土器の脚部(209)、鉢形土器(210)のみである。

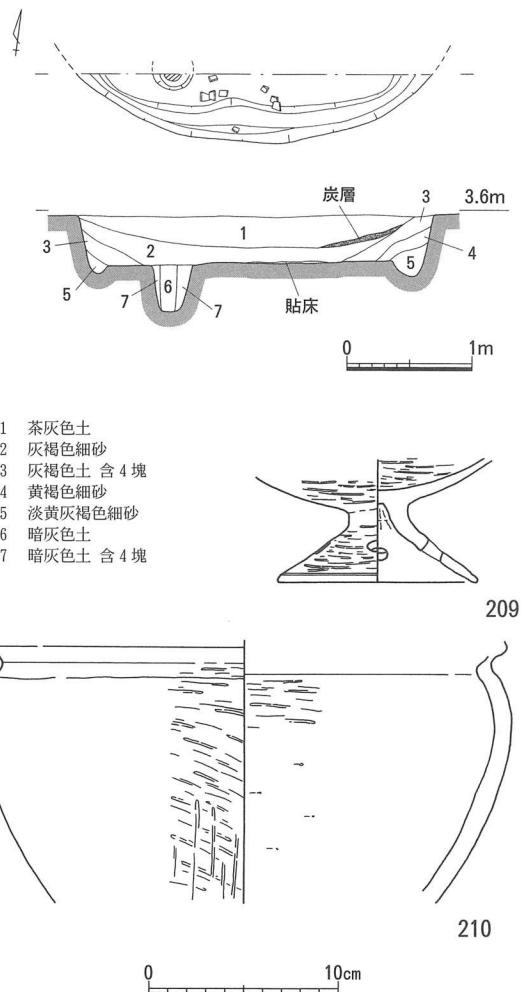


図82 竪穴住居5（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居9（図83・84）

調査区中央南端で検出された竪穴住居である。北半は現代のゴミ穴によって削平されているが、径5.3mの円形の平面形と考えられる。遺構検出面は3.7m付近である。床面までの深さは0.6mである。検出時から焼土塊がまとまって出土しており(図83検出面)、炭等も多く含まれることから、焼失家屋であることが予想された。さらに、焼土塊の東側では土器片がまとまって出土しており、焼失後の窪み(①層)に投棄されたものと考えられる床面付近まで掘り下げるとき、焼土塊と炭化材の埋没状況をとらえることができた。焼土塊は、住居の中央付近は径1.2mほどに分布しない部分があり、その部分をめぐるように、径3.2mの範囲に分布する。つまり住居の中央付近に径3.2mの範囲でドーナツ状に分布する。炭化材は径5.1~5.15mの範囲で放射状に分布している。焼土塊と炭化材は、焼土塊が先に

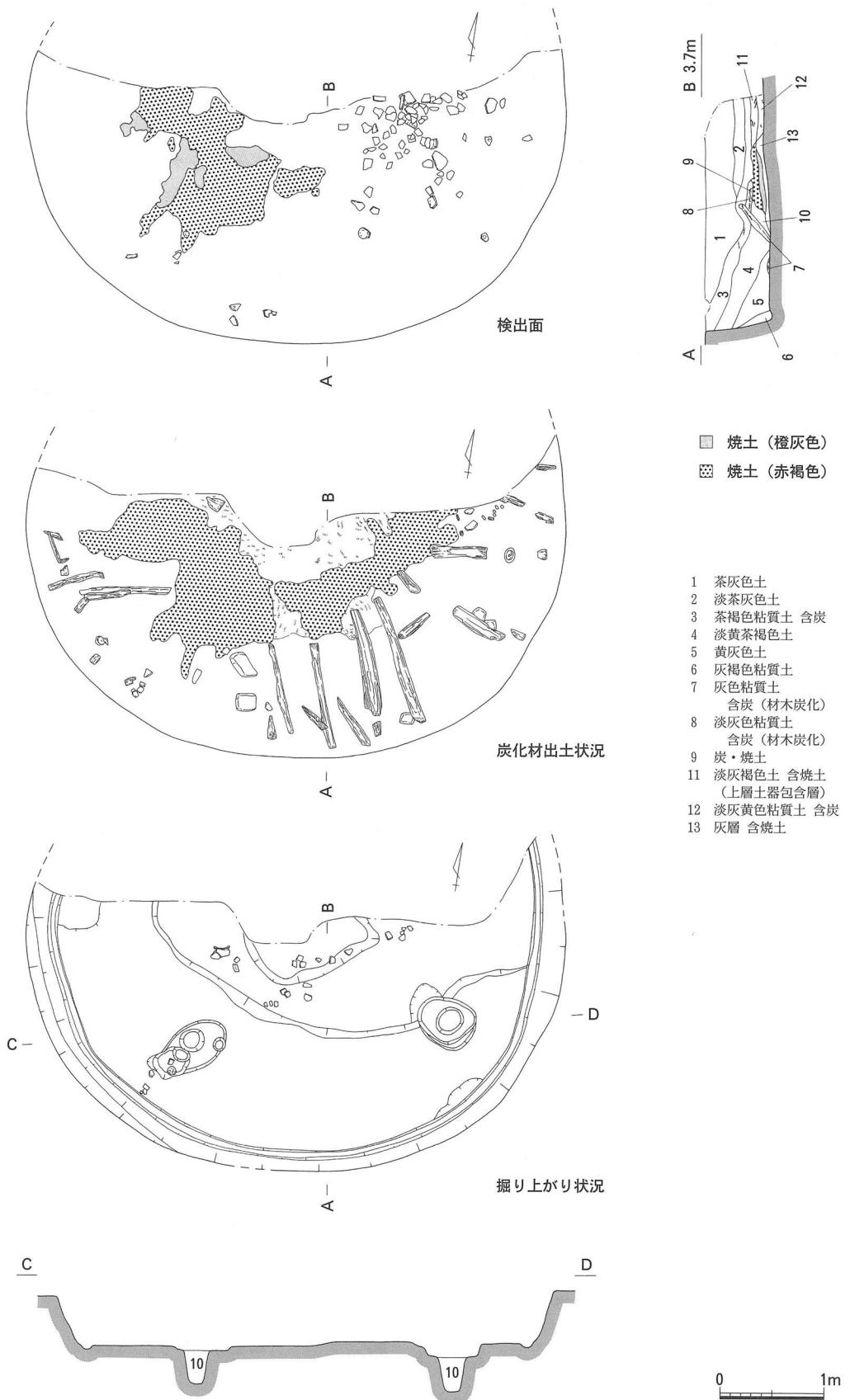


図83 積穴住居9 (1/60)

床面付近に落ちた後に炭化材が倒れ込んでいる。焼失の際、最も早く焼け落ちるのが屋根材だとすると、検出された焼土塊は屋根の上面に用いられていたことが推測される。

床面まで掘り下げたところ、住居の中央付近が径1.2m、深さ0.05mほど窪んでおり、検出はできなかったが、中央ピットが存在していた可能性が推測される。壁部から1.5mの範囲でも深さが0.05mほど低くなっている、中央ピットをめぐってドーナツ状の高まりがあるような形状となる。

柱穴は2つ検出されている。短径0.4m、長径0.6m前後の浅い掘り方があり、中央に0.25m前後の柱穴がある。掘り方は不整形な部分があるが、掘り直し等はおこなわれていない。壁体溝も掘り直しは認められないことから、住居の拡幅等はおこなわれなかつたといえる。2つの柱穴間は2.6mあり、推測される住居の規模からすると、4本柱である可能性が高い。壁体溝の幅は0.12m前後である。深さは床面から0.05m前後である。西端部分の壁際に幅及び長さ0.3mの若干の高まりが認められる。北側が削平されていることから、住居周囲までのびるベット状遺構になるのか、入り口などに対応する若干の高まりになるのかは不明である。

出土遺物は土器のみであり、いずれも破片である。そのため、日常的な生活の最中に焼失したのではなさそうである。土器の出土位置としては、遺構検出面で出土したものが大半であり、床面中央と

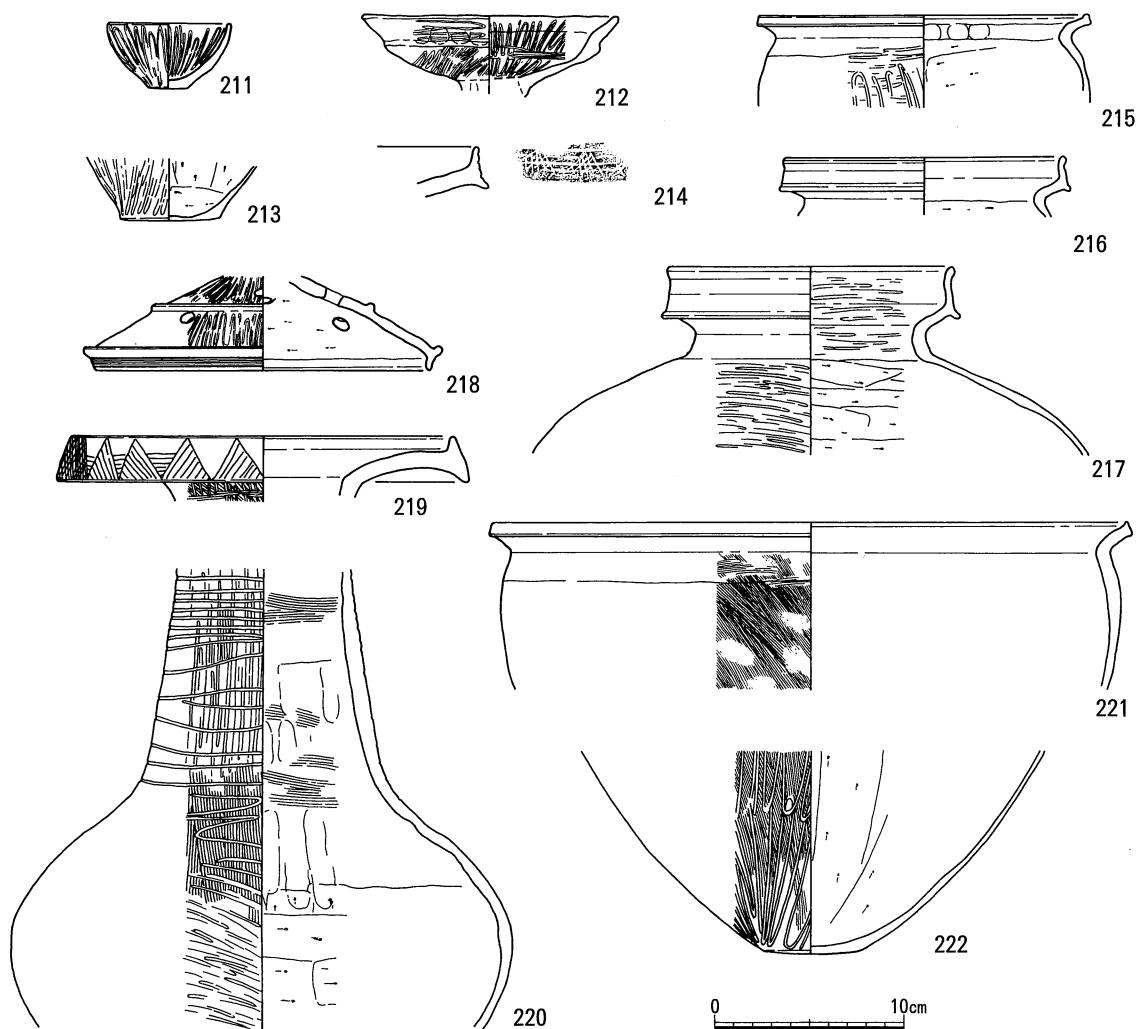


図84 積穴住居9 出土遺物 (1/4)

西側の柱穴埋土から出土したものがある。床面および柱穴埋土から出土した土器は、とくに小片が多く、図化できたのは、床面中央付近から出土した甕形土器(216)だけである。しかしながら、検出面でまとまって出土した土器との時期差はない。検出面で出土した土器については、小片のものが多く、明確なことは言い切れないが、特定の機種に偏る傾向もなく、さらに特殊器台や特殊壺などの特異な器種も認められない。ただ、装飾高杯形土器(218)が1点認められるが、一般的な土器と同じ胎土である。ただし、表面は細かい单位でヘラミガキをおこなっており、脚端部に施された沈線もシャープである。この1点の土器をもって特殊な祭祀がおこなわれたことを示すものではないとも考えられるが、そういう祭祀のおこなわれた一端を示している可能性は残されている。あるいは集落内祭祀に用いられた土器であるかもしない。

竪穴住居21（図85～88）

調査区中央で検出された竪穴住居である。3回の拡幅が認められる。最初の竪穴住居はCで、検出できた壁体溝から径4.0m前後の円形の平面形が推測される。壁体溝は幅が0.15mで、深さは0.05m前後である。柱穴の規模は不均等で、径0.2m前後が2つ、径0.8~1mが1つ、径0.5mが1つである。検出面は2.9m前後である。南東コーナーの柱穴については、土壌状の形状であり、その後住居が拡幅していることから、柱を抜き取って再利用した際の抜き取り痕跡も含まれている可能性がある。4本柱で、柱間隔は2.0m前後である。柱痕跡の認められる柱穴からすると、柱径は0.1m前後である。中央からやや東へ寄る位置に径0.2mのピットがあり、深さは検出面から0.2mで、埋土は炭である。Cの中央ピットであると考えられる。

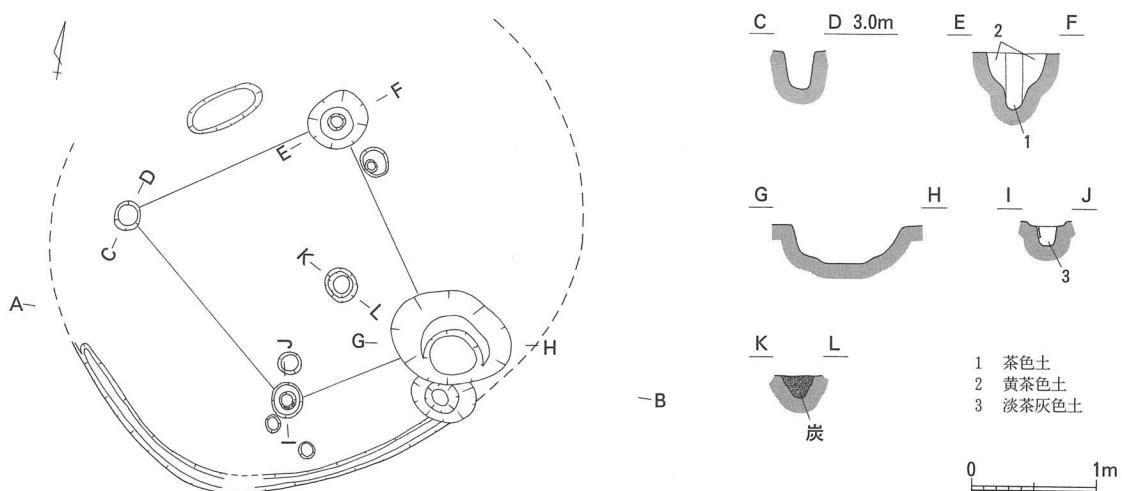


図85 穂穴住居21C (1/60)

Cを拡幅したBは、径6.0mの円形に壁体溝がめぐる。壁体溝の幅は0.2m前後で、深さは検出面から0.05mである。柱穴は径0.2～0.3mの規模で、深さは検出面から0.5m前後である。柱穴には柱痕跡が認められるものがあり、柱径は0.1m前後である。柱は住居外周に沿って6本あり、比較的安定した六角形を呈する。柱間は2.0～2.5mである。北東の柱穴から南西の柱穴を結んだライン上に柱穴が2つ並んでおり、棟持柱であると推測される。棟持柱の間隔は、2.0mである。住居の中央付近には

長さ1.8m、幅1.0mの範囲に炭が分布しており、Aの中央ピットがこの炭層の北側に位置することから、Bの中央ピットは削平、もしくは再利用されたものと推測される。

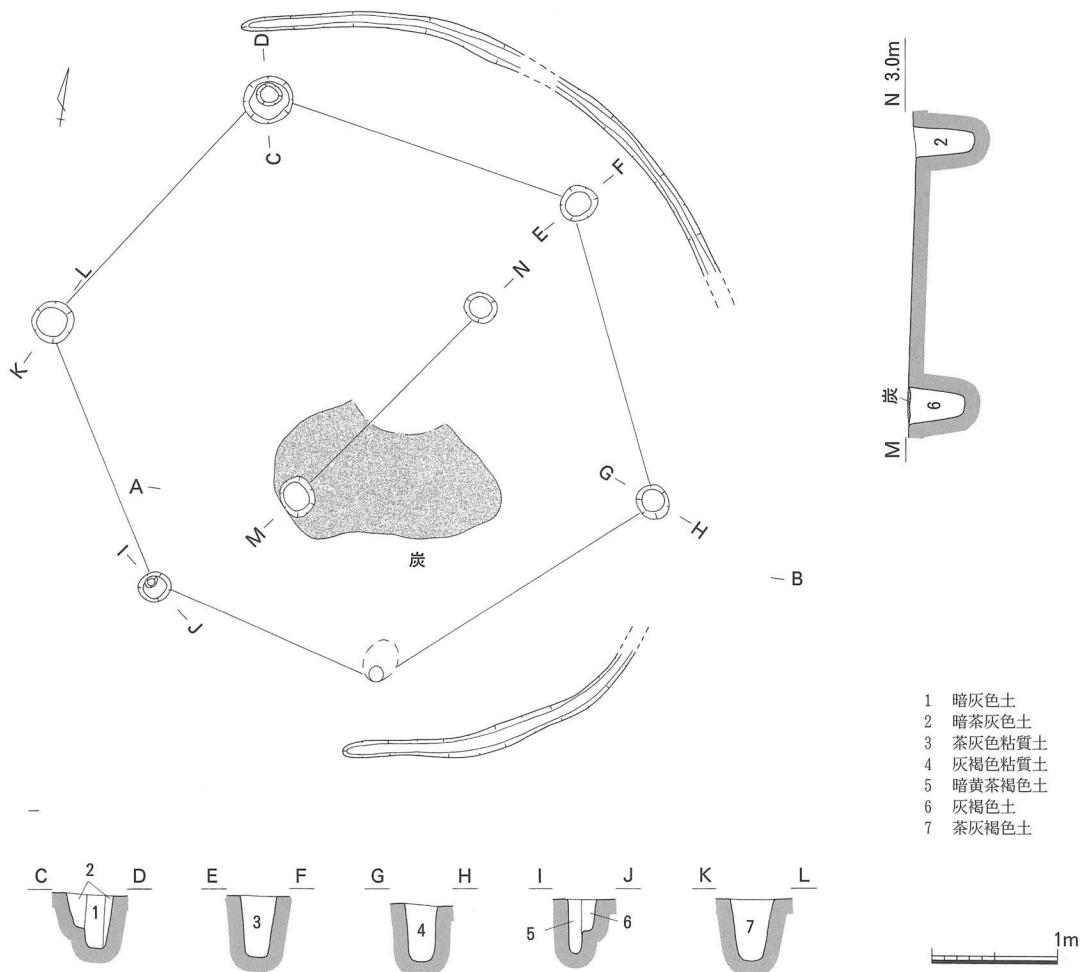


図86 穫穴住居21B (1/60)

Bを拡幅したAは、径6.7mの円形の平面形で、床面の面積的には最初の住居と比較すると3倍近くになっている。上面での検出レベル高は、3.45mである。外周にそって壁体溝がめぐっている。壁体溝は、幅が0.2m前後で、深さは0.05mである。柱穴は6本で、いずれも住居中央に向かってのびる長楕円形の平面形を呈する。長軸0.3~0.7m、短軸0.2~0.5mと規模にはばらつきがある。柱痕跡のあるものが多く、それらは径0.1m前後で掘り方の規模からすると整った傾向にある。柱穴は、さらに一段柱部分を掘り下げる傾向がある。南端の柱穴については、柱の底に平石を置いている。住居の中央には径1.3mの範囲に炭層が分布し、その中央に長径1.0m、短径0.8mの長楕円形を呈するピットがあり、埋土のなかに炭層が形成されている。いわゆる中央ピットである。

埋土は、検出面から0.5mもあり、比較的残存状態が良好であるが、出土した遺物の量はそれ程多くはない。床面付近から鉄器(M 8~10)が3点出土している。接合はしないものの、同一個体である可能性が高く、鉈と考えられる。さらに埋土からは砥石(S 9)も出土している。キメの細かい白色系の石材であり、表面は使用痕跡が顕著である。本来は方形、もしくは長方形の形状であったものと考

えられる。ただし、被熱痕もあり、二次的に廃棄されたものである可能性が高い。土器は小片のものが大半であり、図化できたものも断片的である。甕形土器(223～225・227)はいずれも埋土から出土したが、甕(226)のみは古墳時代前期の時期である。同期の住居と一部重複しており、その際の混入と考えられる。同じく混入と推測されるものが壺(234)で、これも古墳時代前期である。ほかについては弥生時代後期中葉の時期でまとまる傾向があり、一連の拡幅された住居の時期を示している。

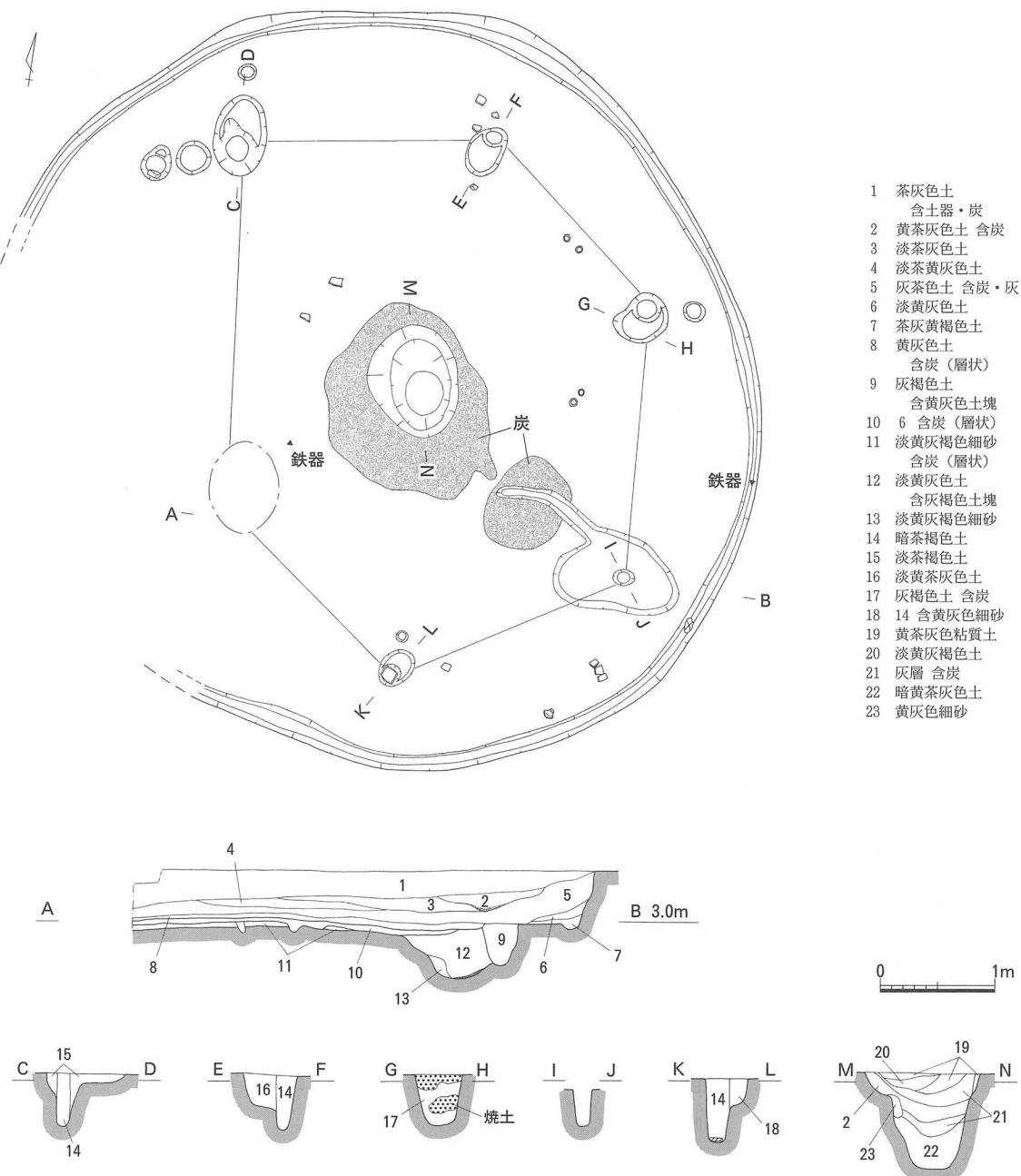


図87 積穴住居21A (1/60)

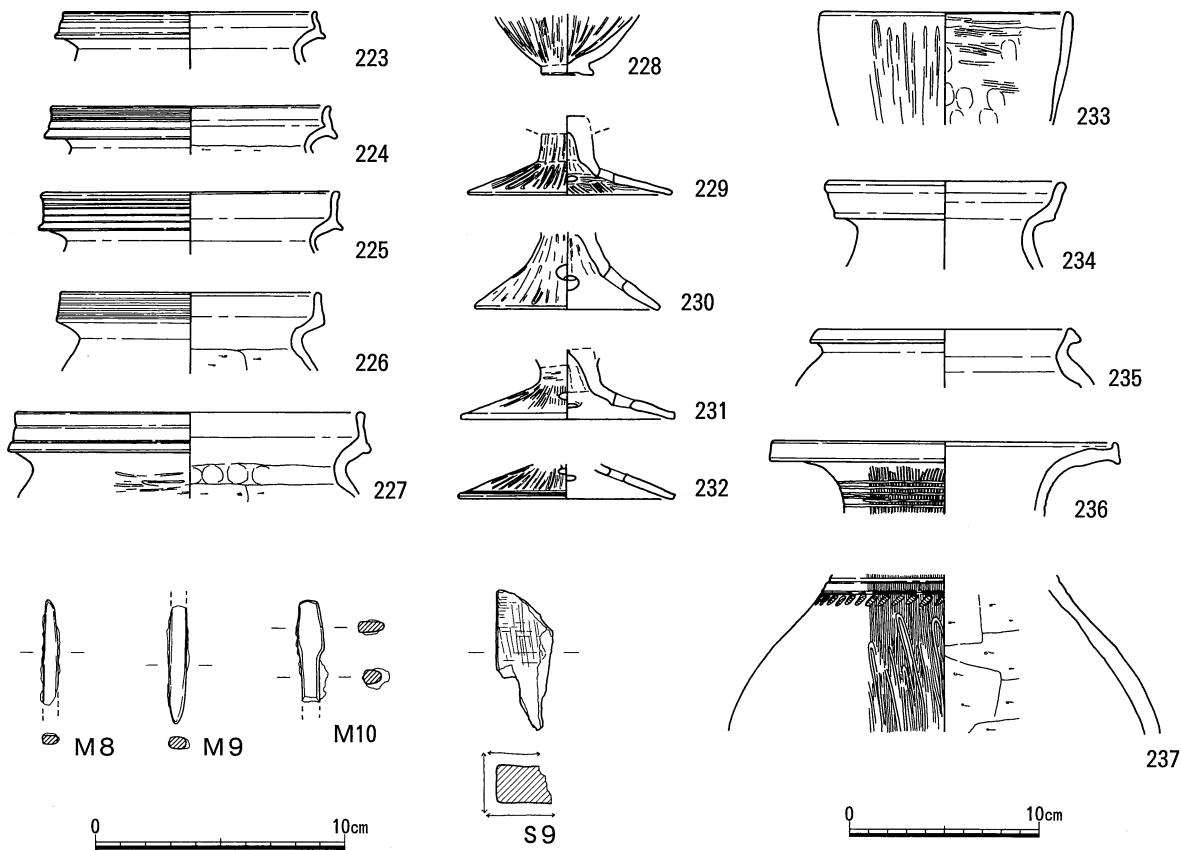


図88 壇穴住居21 出土遺物（1/4・1/3）

壇穴住居25（図89）

調査区中央付近で検出された壇穴住居で、北半については壇穴住居21によって削平されている。残存部分から径4.4mの円形の平面形を呈すると推測される。遺構検出面は3.3m付近で、床面までの深さは検出面から0.3mである。壁にそって壁体溝が検出されており、幅0.2~0.3m、深さは0.05m前後で、北半については若干段差が認められる。段差については、埋土も連続しており、掘り直し等の痕跡とは考えられず、住居の拡幅等は壁体溝のあり方からは考えられない。

柱穴は4つ検出されており、北半の2つについては、上面を壇穴住居21によって削平されていることから、下半のみが僅かに残存していた。南半の柱穴は、東側が径0.3m、西側が径0.4mで、径0.1mの柱痕跡が認められる。深さは床面から0.5m前後である。北半の柱穴はいずれも径0.2m前後、深さは検出面から0.3m前後である。検出面のレベル高は3.1m前後である。

床面東側については、壁体溝が広がり、壁部から幅1mほどの床面が低くなっている。住居北半の床面がどのような構造であったのかは削平されているため不明であるが、西側の床面が東側と比べて高くなるような形状であった可能性もある。つまり、どのような形状になるのかはよくわからないが、ベット状遺構が存在していた可能性がある。

埋土中から若干土器片が出土している。床面上からは遺物の出土は認められなかった。図化できたのは3点のみで、甕形土器(238・240)と鉢形土器(239)である。いずれも後期中葉の時期であり、削平を受けた壇穴住居21との時期差はない。同一時期のなかで壇穴住居25が壇穴住居21へ建て替えられ、

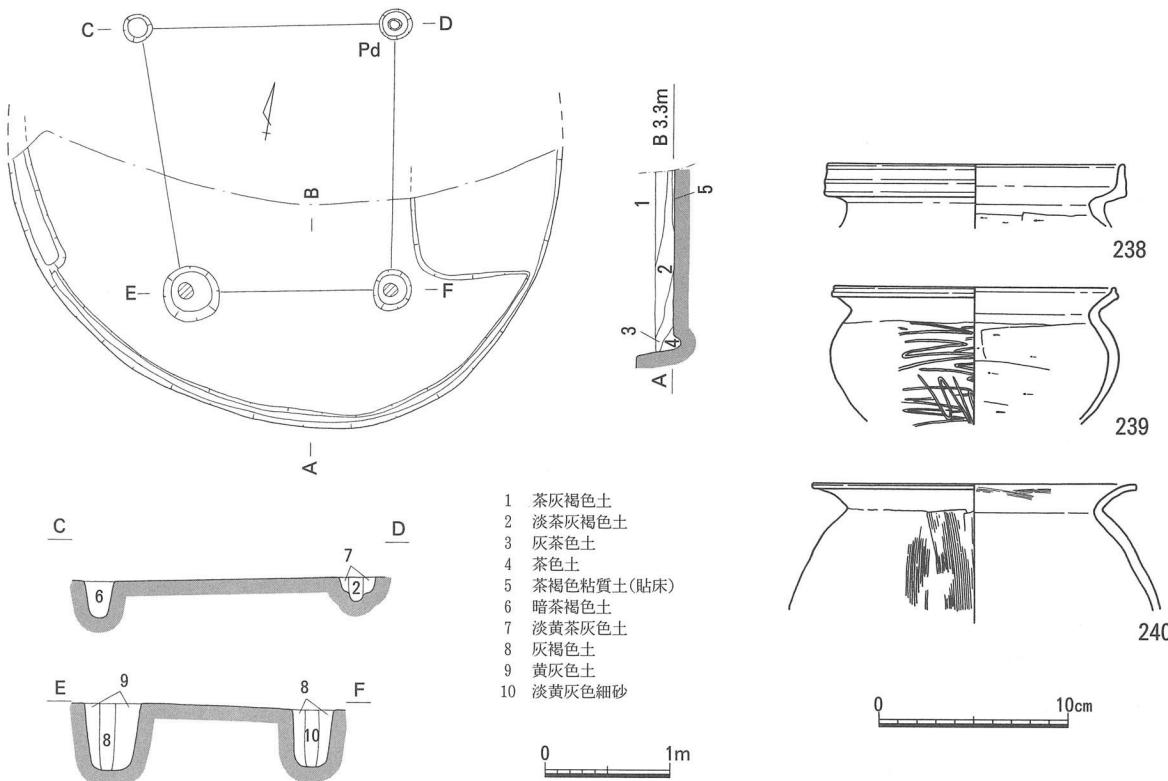


図89 竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4)

さらに2回の拡幅がおこなわれたということになる。このことは、弥生時代後期中葉の絶対年代の時期幅が長いのか、もしくは竪穴住居の安定度が飛躍的に高まったため、同一位置での建て替えや拡幅がおこなわれるようになったことを示している。土器編年観からすると、後期中葉のみをことさら長く考えることはできないように思われる。おそらく後者の可能性が高いと考えられる。

溝11（図81・90～100）

調査区の西側で検出された溝である。微高地の端部に位置する。微高地の縁辺をめぐる用水路であったと考えられる。埋土を掘り下げる段階では、古墳時代前期の時期と考えていたが、埋土土層の断面を検討した結果、弥生時代後期に埋没していき、溝の大半が埋没した後に形成された溝状の窪みに古墳時代前期の土器が比較的多く投棄されたことが判明した。古墳時代前期に同じ場所に浅い溝を掘り直した可能性もあるが、該期に対応する土層が皿状になることや(⑯～⑰層)、土器が微高地端部の斜面から低位部にかけて広がる分布を示すことから、溝11の埋没過程で生じた窪みに古墳時代前期の土器が斜面堆積状に埋没していたと理解される。斜面堆積状での出土遺物については、VI節で説明すべきであるが、ある意味一連の遺構と捉えられることから一括して説明する。なお、弥生時代後期中葉の溝に対応する遺物は溝11下層出土遺物、古墳時代前期の遺物は溝11上層と最上層出土遺物として扱う。

微高地基盤層は、3.4m付近から2.4m付近まで急激に下がる。検出面での幅は3.2mで、溝底面は0.6mの平坦面となる。断面形は台形となる。最高所からの深さは1.2m前後である。下層埋土は⑯～⑰

層で、そのうち㉖層から最も多く出土した。しかしながら、土器溜まり状といえるほどの出土状況ではなく、用水路としての役割が終了した後、埋没していく最初の段階で土器が流れ込んだと解釈される。㉖層よりも上層には遺物が殆ど含まれていない。

遺物が含まれるようになるのは、㉒層よりも上層からで、この部分については、⑪・⑯層に含まれる遺物と⑯～㉒層に含まれる遺物とに分けて取り上げた。前者については最上層、後者については上層出土遺物とした。

最上層出土遺物のうち、後期に属するのが壺形土器(241・242・244・246・250・251)で、高杯形土器(263～270)、鉢形土器(275・276・289)、器台(291・302・304)である。器種は網羅的である。特定の機種に偏る傾向はあまり認められないが、讃岐系の壺形土器(246)も含まれている。ほかに、壺形土器(244)の頸部付近には、図形の全容はよくわからないが線刻が施されている。外来系の土器は、古墳時代前期のものほど顕著となっていく。壺(247)は播磨系、甕(256・257)は讃岐系、注口土器(281)と器台(282)は山陰系である。畿内系としては、甕(260・280)があるが、これについては胎土は地元に近い特徴を有する。一般的な土器のほかに特殊器台(303)が1点出土している。綾杉文の一部と推測され、立坂型と考えられる。同種の特殊器台は校舎調査区でも出土している。時期的には、高杯形土器(270)や壺形土器(250・251)と同じといえる。ほかに、手づくりね土器(271～273)が出土している。甕(323)は、「く」字形の口縁部をもち、砲弾形の胴部で、底部には焼成前穿孔がある。製塩土器(292・297～300)も

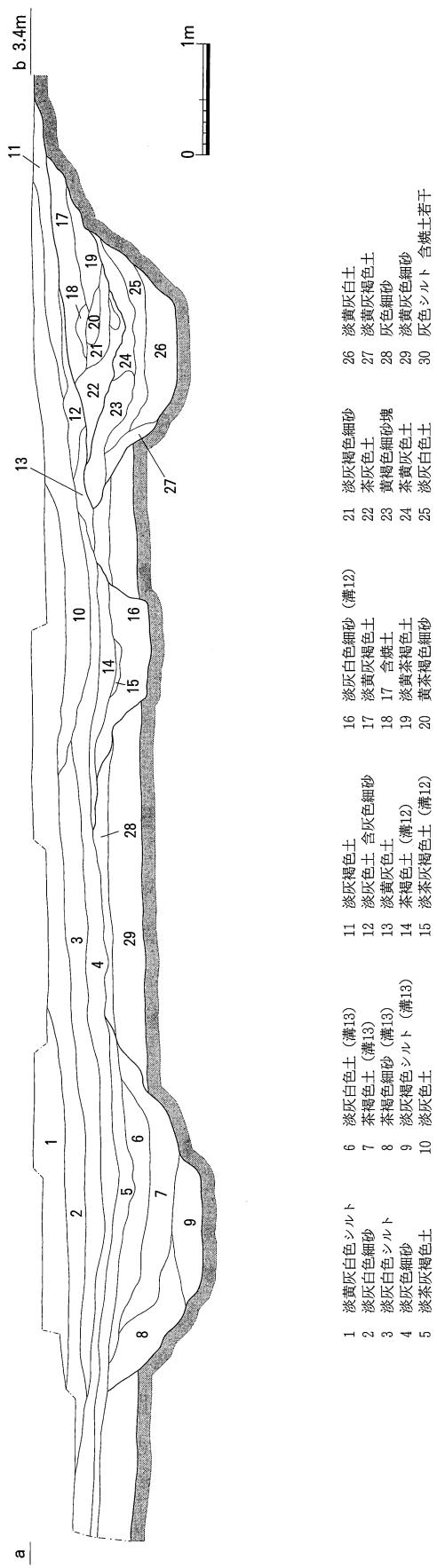


図90 溝11・12・13 断面図（1/60）

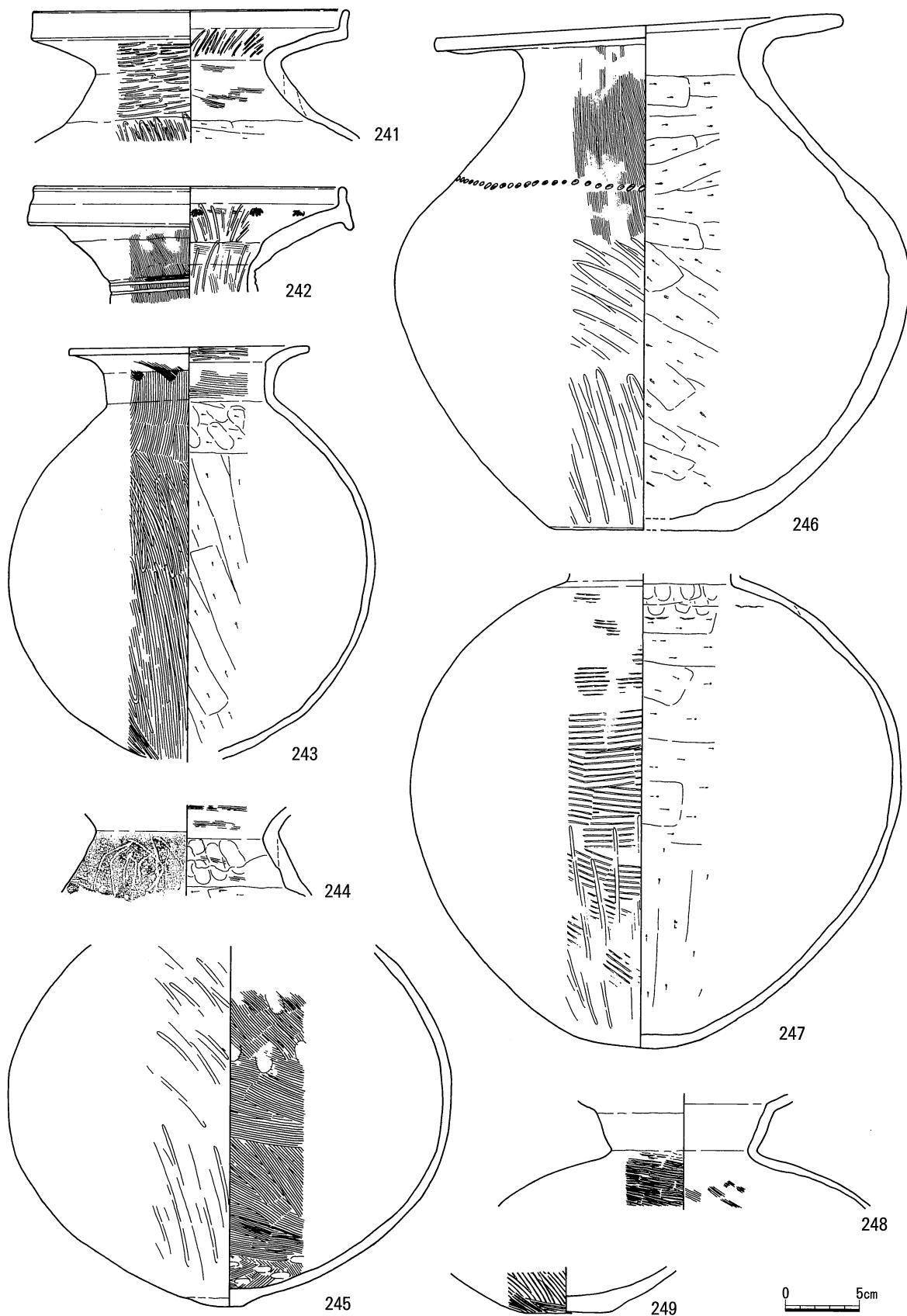


図91 溝11最上層 出土遺物 1 (1/4)

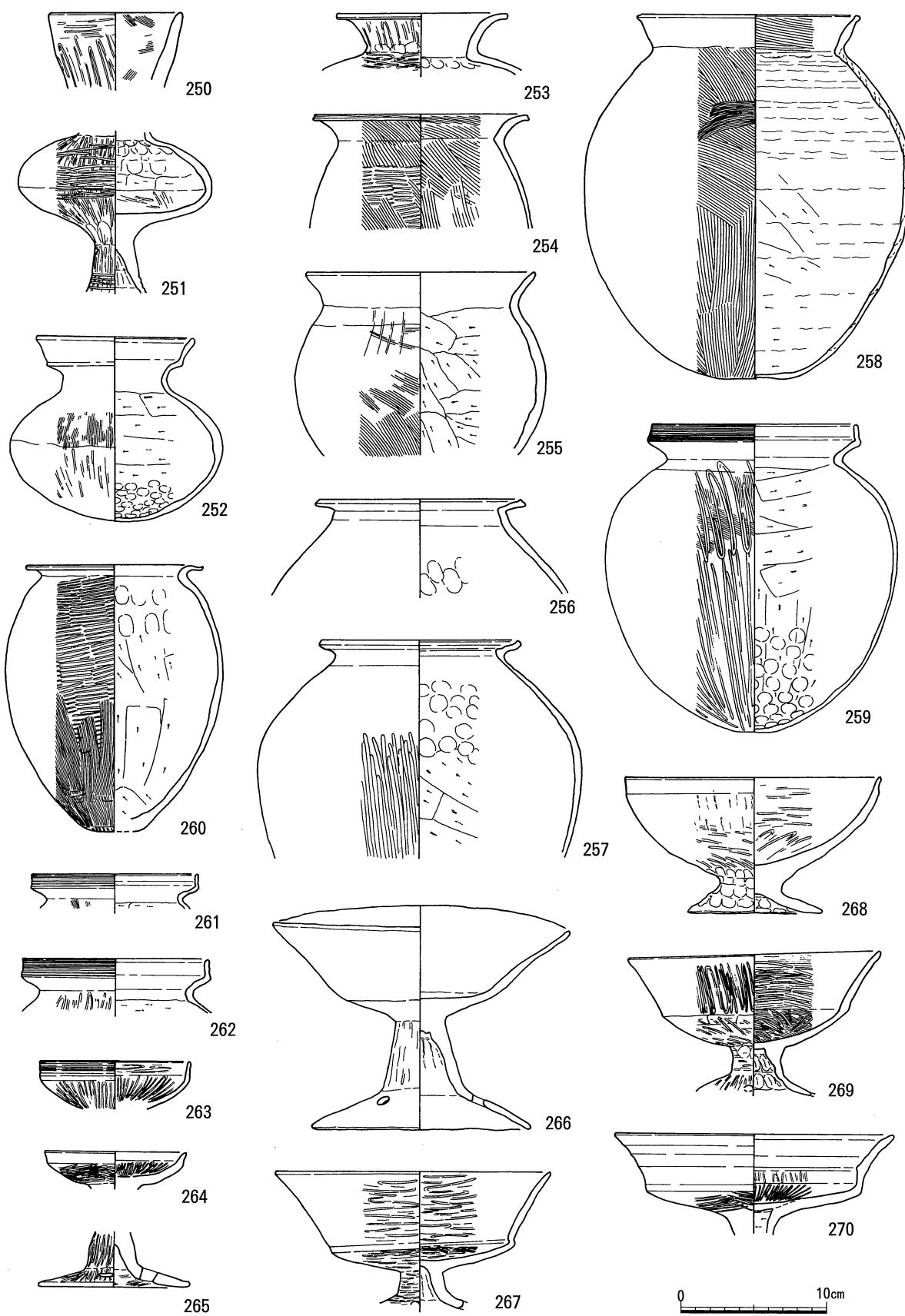


図92 溝11最上層 出土遺物2 (1/4)

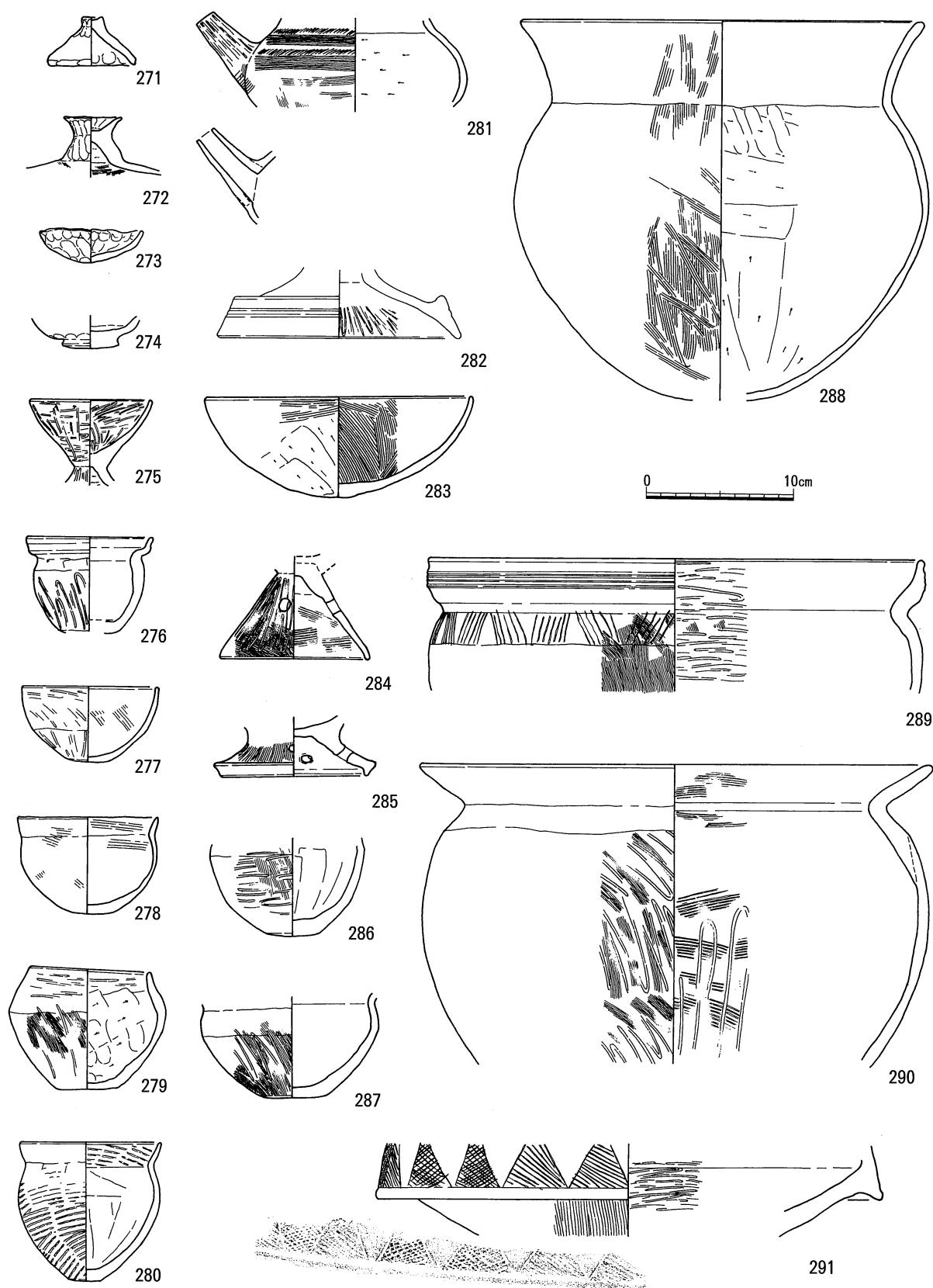


図93 溝11最上層 出土遺物3 (1/4)

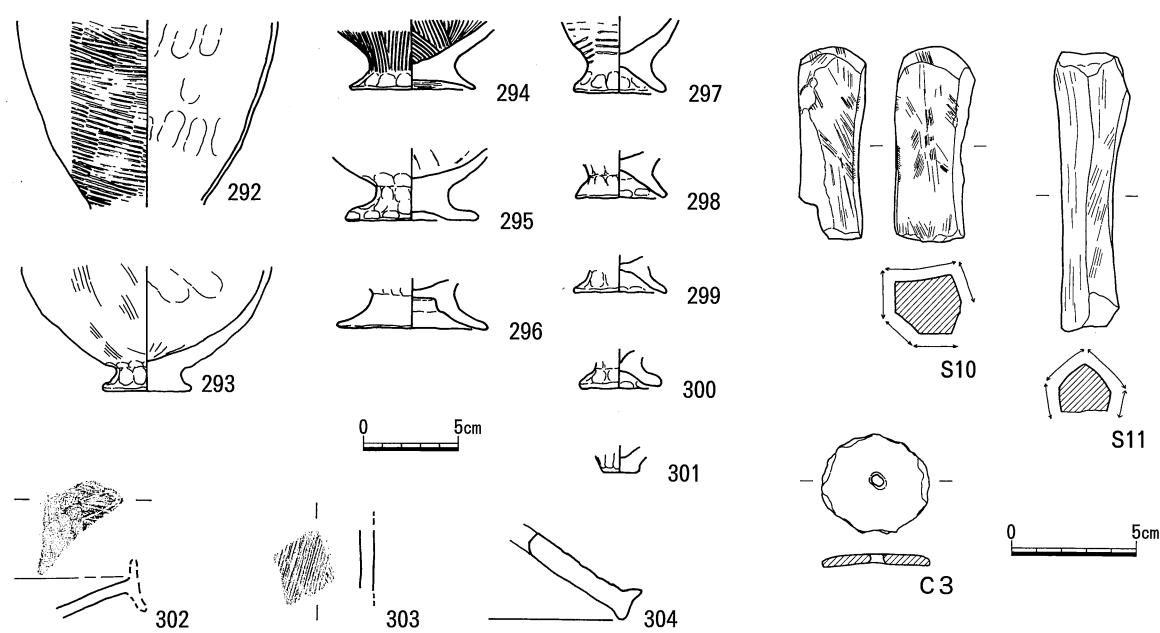


図94 溝11最上層 出土遺物4 (1/4・1/3)

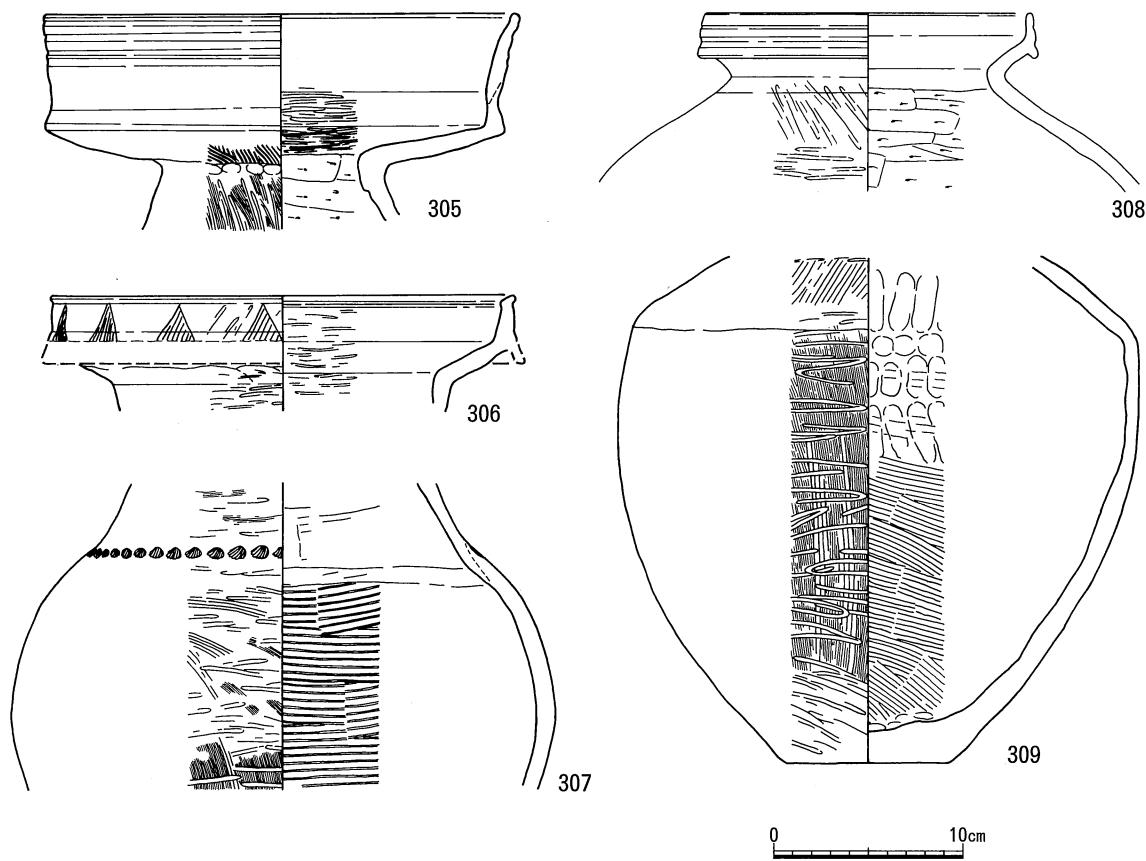


図95 溝11上層 出土遺物1 (1/4)

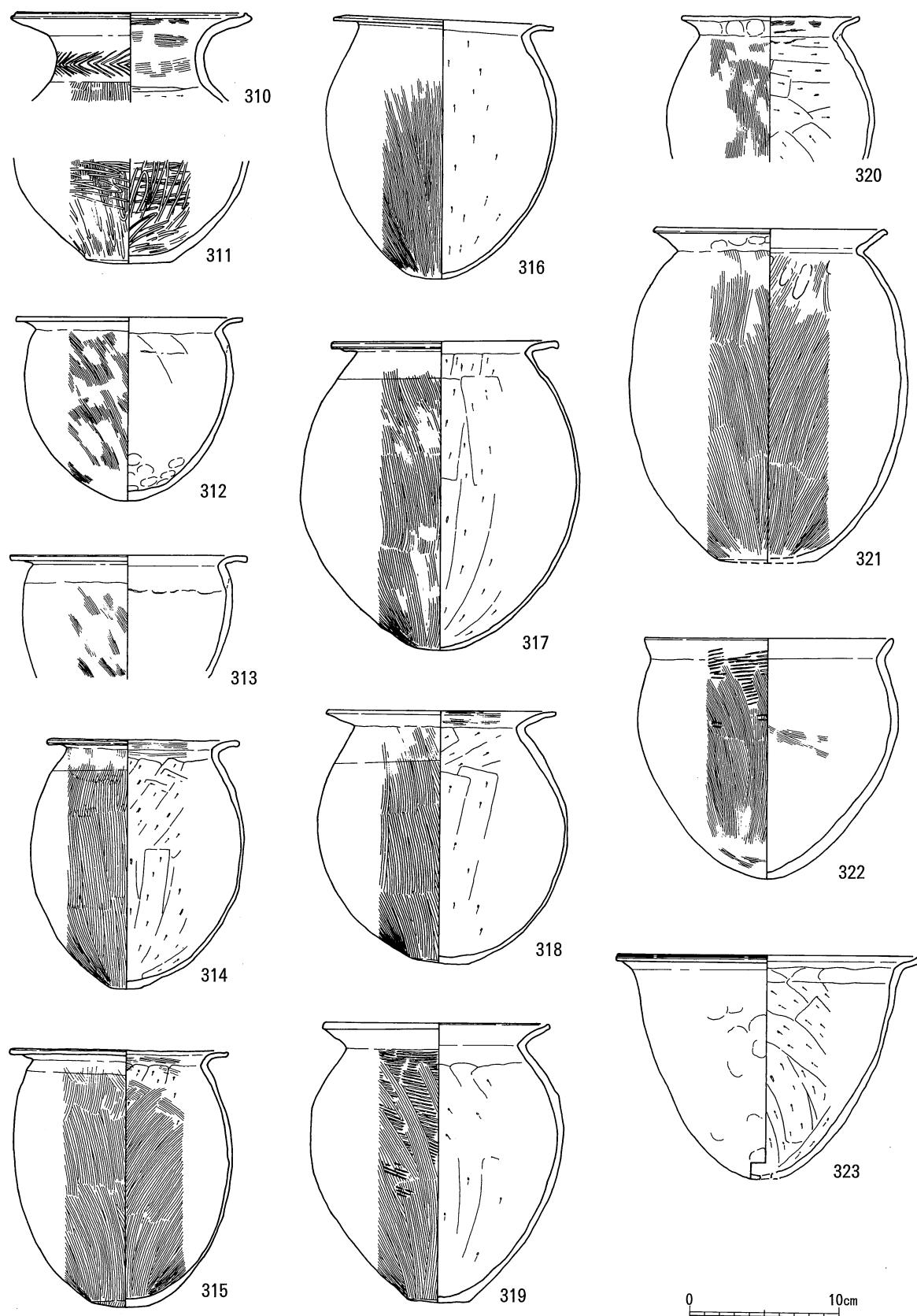


図96 溝11上層 出土遺物2 (1/4)

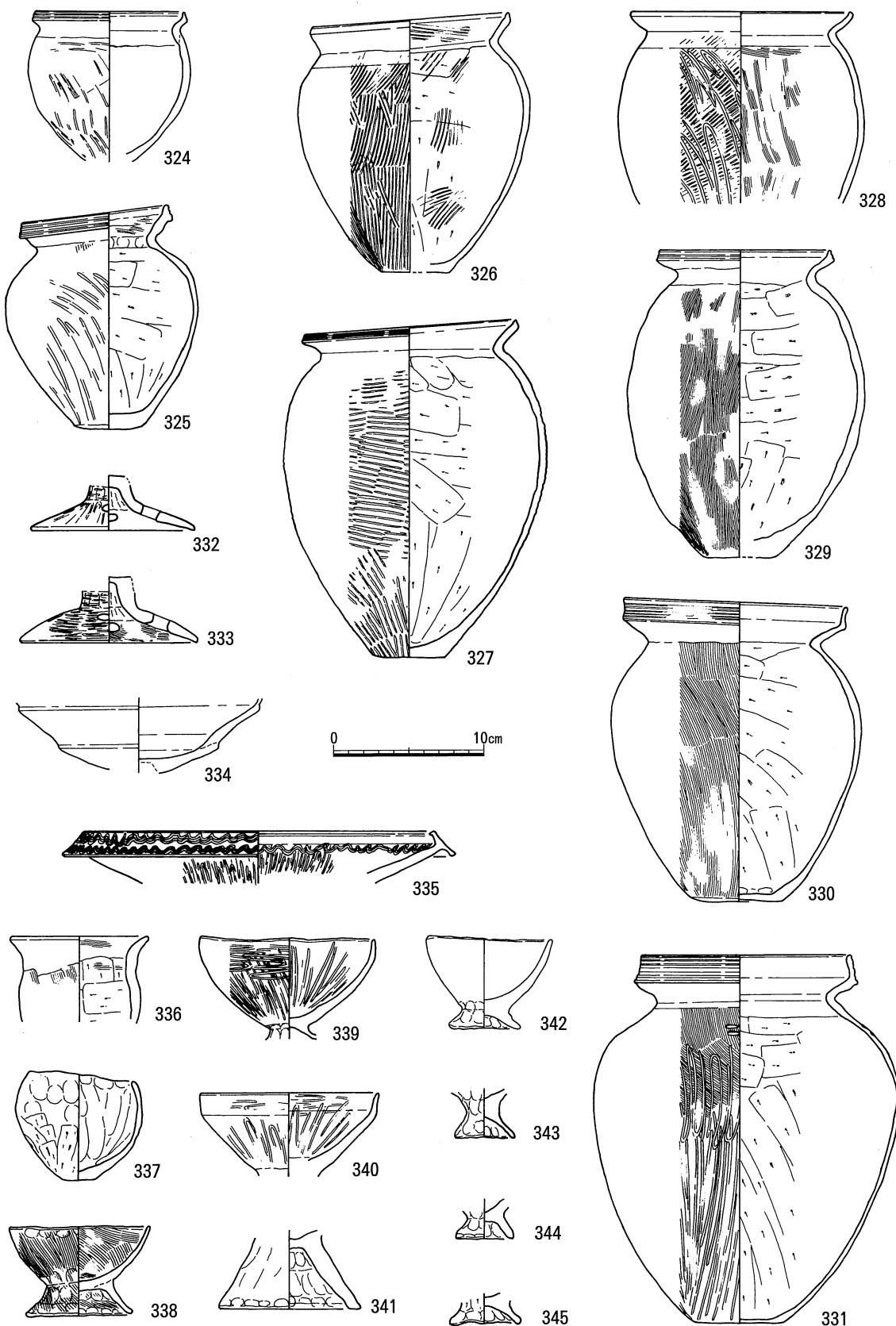


図97 溝11上層 出土遺物3 (1/4)

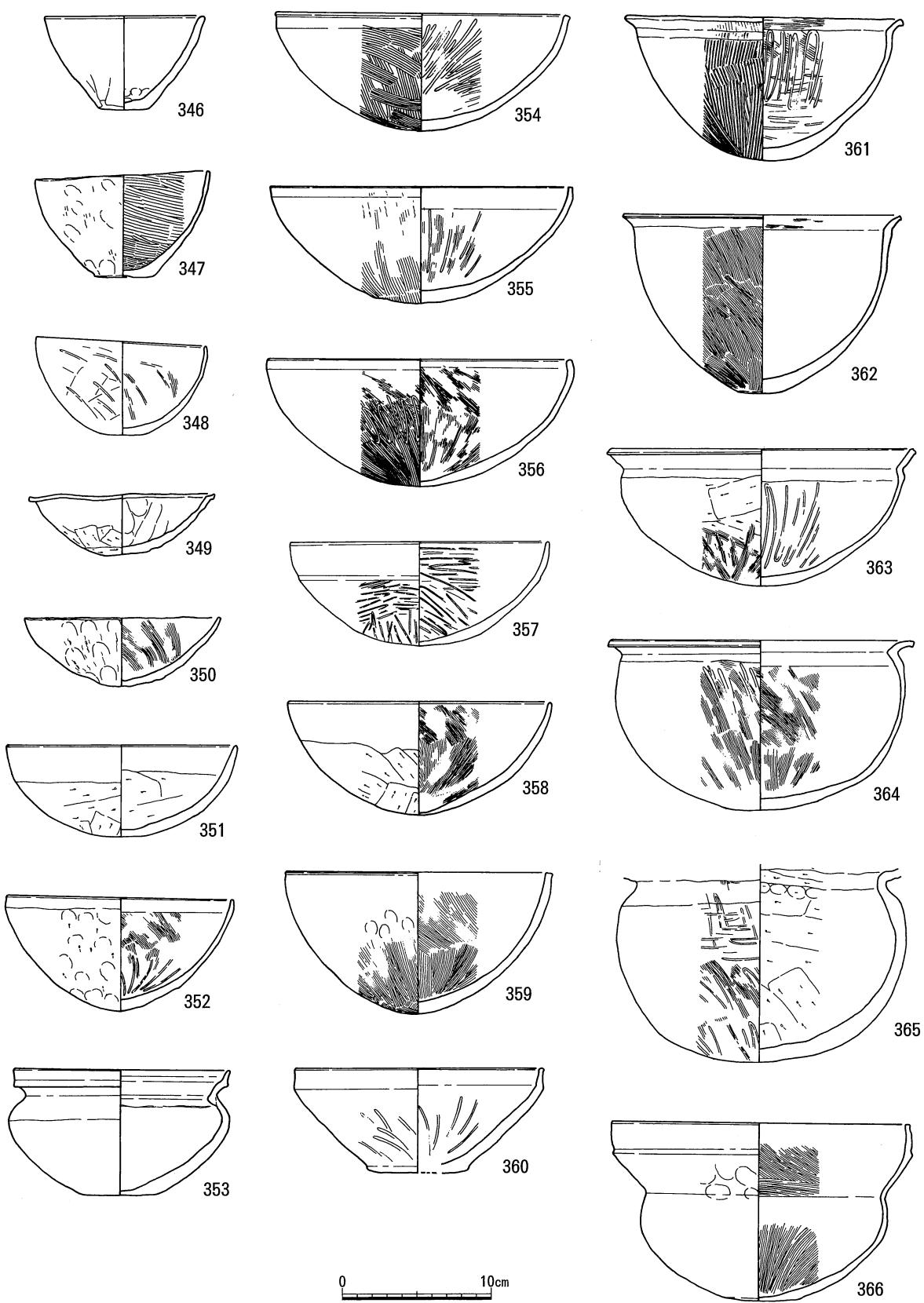


図98 溝11上層 出土遺物4 (1/4)

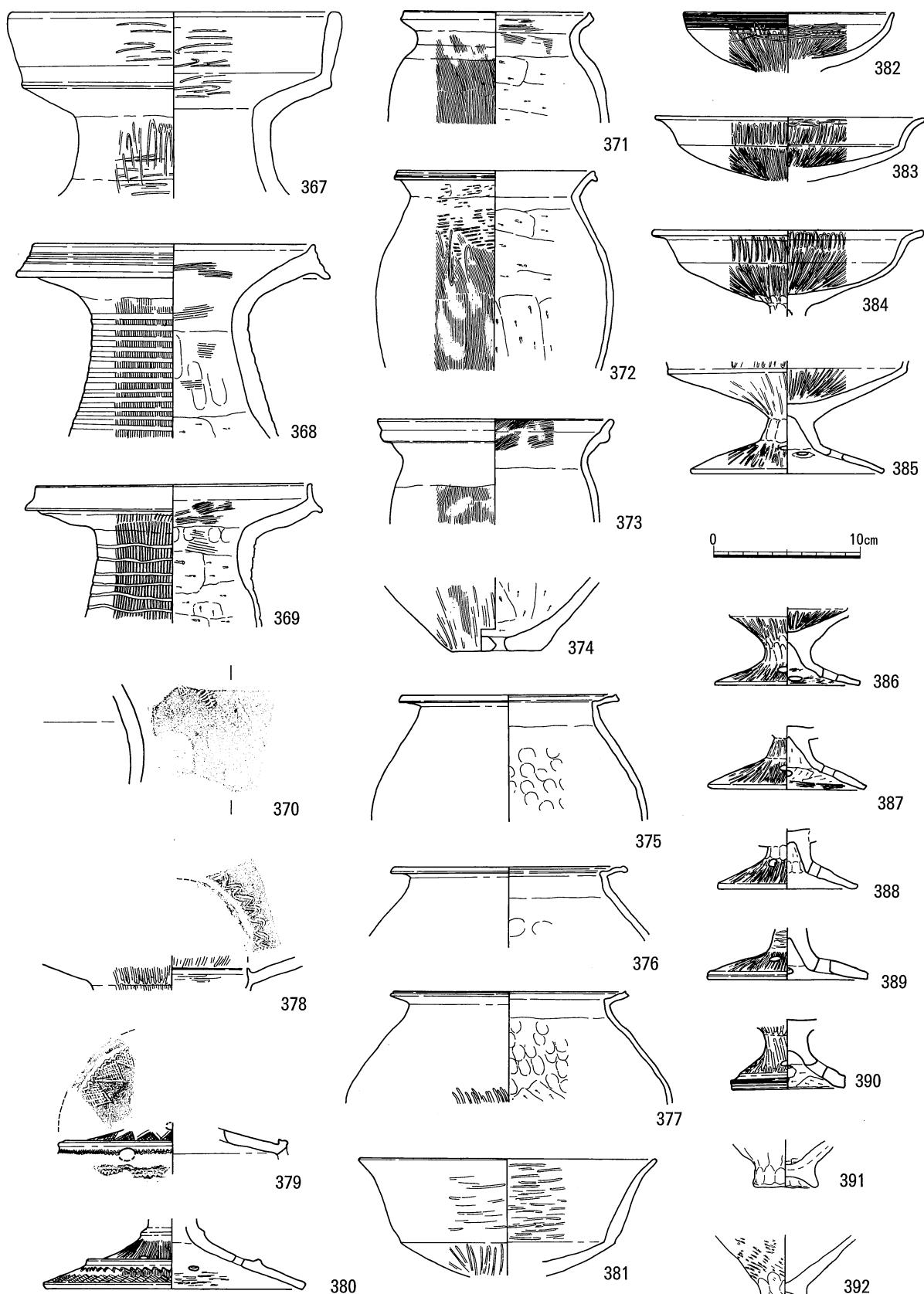


図99 溝11下層 出土遺物1 (1/4)

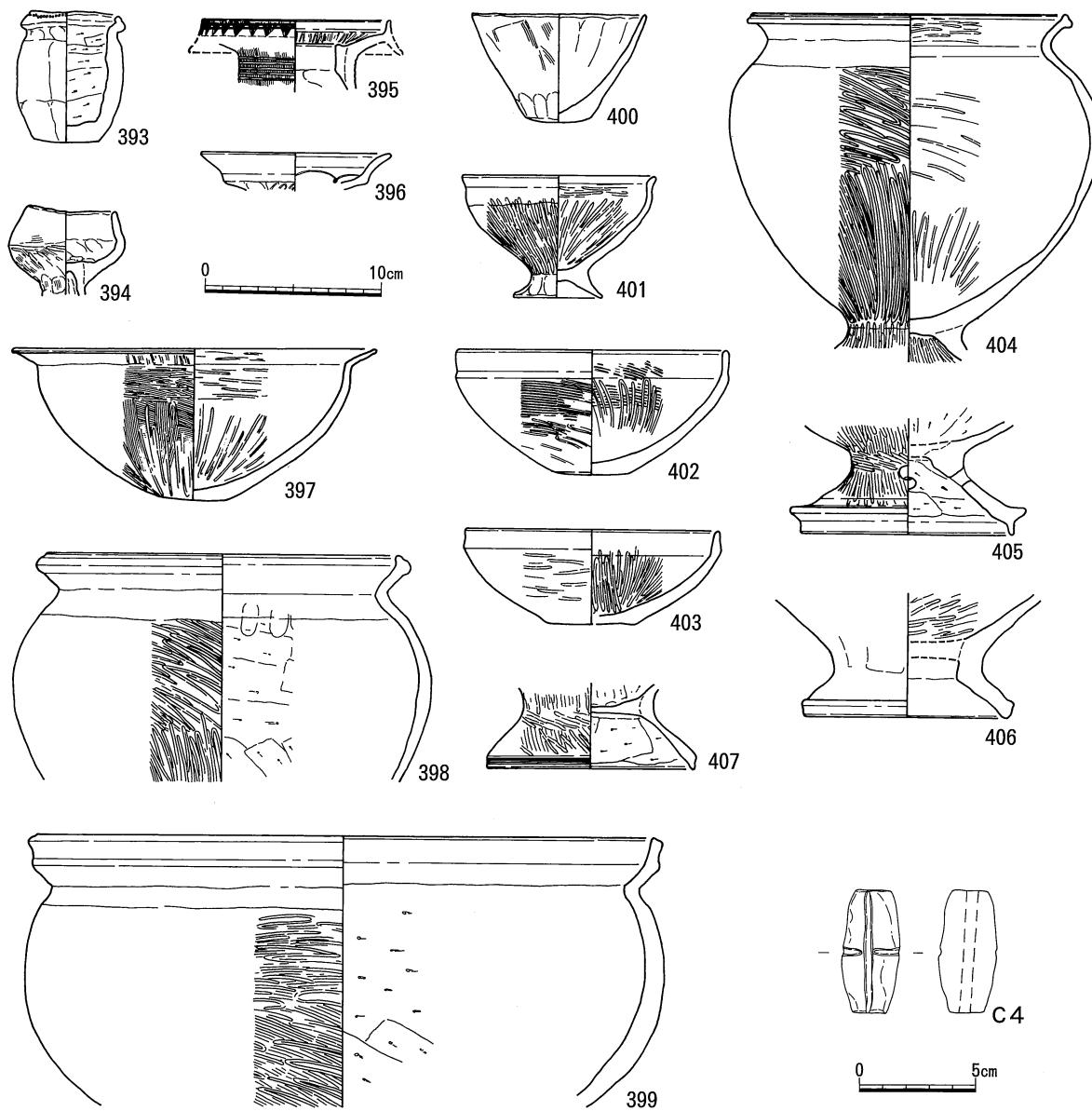


図100 溝11下層 出土遺物2 (1/4・1/3)

出土している。土器のほかに砥石(S 10・11)も出土しており、いずれも白色系の石材で、使用痕跡が明瞭である。同様の砥石が古墳時代前期の竪穴住居からも出土しており、これらの砥石も該期に属する可能性が高い。1点だけではあるが、甕の胴部片を利用した有孔円板(C 3)も出土している。

古墳時代前期に属する土器のうち、甕(258)や高杯(266)は、前期中葉から後半に属するものであり、前期の中でも時期幅が認められる。しかも各時期に完形に近い土器が含まれていることから、混入というよりも、近くで前期全般にわたって集落が営まれたことを反映していることが推測される。

㉙～㉞層から出土した土器は、下層出土土器として取り上げた。下層以上の土器が微高地端部での斜面堆積に近い埋没状況であるが、下層については溝の機能停止時点での堆積であったことがうかがわれる。全体的な時期としては、弥生時代後期中葉で、高杯形土器(381)などは後期末の時期である

が、この期に属する土器は少ない。該期の竪穴住居が形成されているのと平行して、低位部に存在すると推測される水田域への給水に用いられた用水路であったと考えられる。一般的な土器とは別に、讃岐系の壺形土器(375~377)、装飾器台(378~380)や、手づくりね土器(393・394)が含まれている。(370)は、壺形土器の肩部片であるが、外面に線刻があり鋸歯文の一部にも見えるが、「ハ」字形の開いた線に対し、直交する短線を片方に5線、反対側では2線施していることが確認できる。文様というよりも、何らかの写実的な描写の一部である可能性が推測される。ほかに外面に紐をかけるための十字方向の溝を焼成前に施した土錐(C 4)も出土している。

溝13 (図81・90・101~103)

調査区の西端で検出された南北方向の溝である。溝11と平行していることや、微高地端部に位置することから、低位部への給排水を目的とした溝と推測される。遺構検出面は2.7m付近である。幅は3.0m前後で、深さは検出面から0.8mである。断面形も溝11と共通して逆台形である。埋土には砂質土やシルト質土が認められることからも、通水がおこなわれたことがうかがえれる。

遺物は、各層から出土したが、最下層となる⑨層からが最も多い。溝廃絶に伴って投棄されたと考えられる。時期としては、弥生時代中期中葉(410・427)に属するものや、中期後半(411・412・439~443・446・449)に属するものや、後期前半(434)に属するものがあるが、最も多いのは後期中葉の時期である。下限となるのも同時期であることから、当溝の時期は後期中葉の時期といえる。中期中葉の時期の遺構や遺物については、今回の調査区でも、北側にある校舎調査区でも確認されていない。ただし、出土した土器は表面がそれ程摩滅していないことから、付近に該期の小規模な集落が存在している可能性はある。中期後半の遺構については、校舎調査区で大規模な溝と住居跡が検出されている。今回の調査区における微高地部からは、該期に属する遺構は検出していないが、より北側にはまとまった集落が存在していることは確実であり、今回出土した遺物についても、北側からの流れ込みである可能性が高い。後期中葉に属する土器については、特定の器種に偏る傾向は認められないが、赤色顔料を塗布した土器(435)や、いわゆる装飾高杯と称される小型器台形土器(430~433)が出土している。さらに手づくりね土器(452・453)も出土している。出土している土器は、単に廃棄された結果というのではなく、祭祀的な行為の結果であることも推測される。同様に廃絶後に多くの土器が投棄されている溝11から特殊器台が出土していることは示唆的である。

同じ後期中葉の時期である溝11の下層から出土した土器と比較すると、高杯形土器の脚部が溝13の方が長脚傾向であることや他の器種についても古相を示す傾向が認められることから、溝13→溝11の順に埋没したと考えられる。さらに、溝11からは讃岐系の土器が出土していたり、校舎調査区では土偶も出土している。溝11と溝13における、こういった出土遺物の差が普遍的であるかどうかについては、より多くの事例から検証する必要があるが、後期中葉の後半において巨大な墳丘墓が当地において突然出現していることからすると、両溝の差も偶然ではないようにも思われる。つまり、後期中葉の前半では外来系の土器の流入や土偶を用いた独特的の祭祀、さらには特殊器台などはなかったが、後期中葉の後半においてそれらが突然開始されるようになったという見方である。後期中葉は、当地において、かなり画期的な変化がおこった時期であったことが推測されるのである。

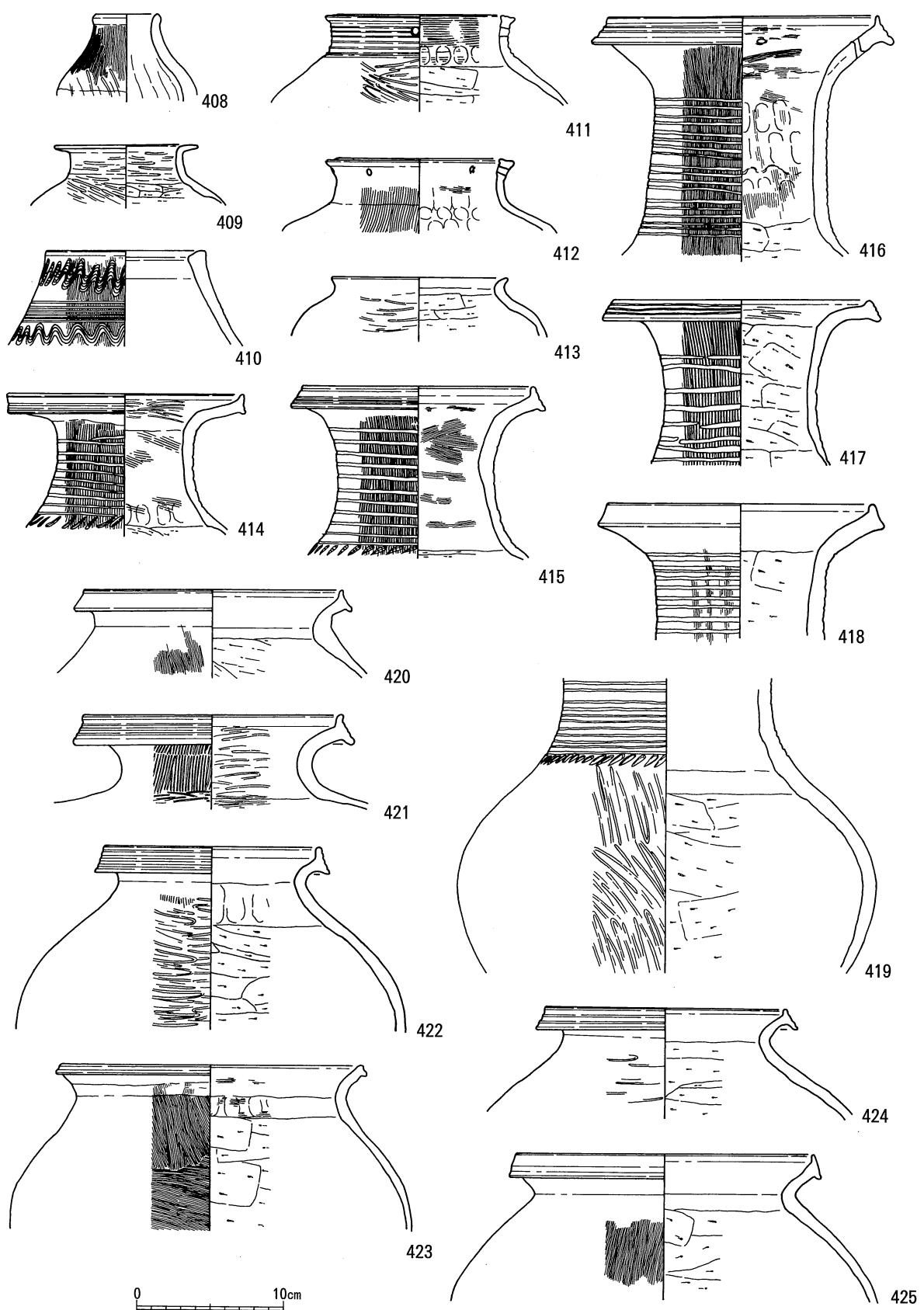


図101 溝13 出土遺物1 (1/4)

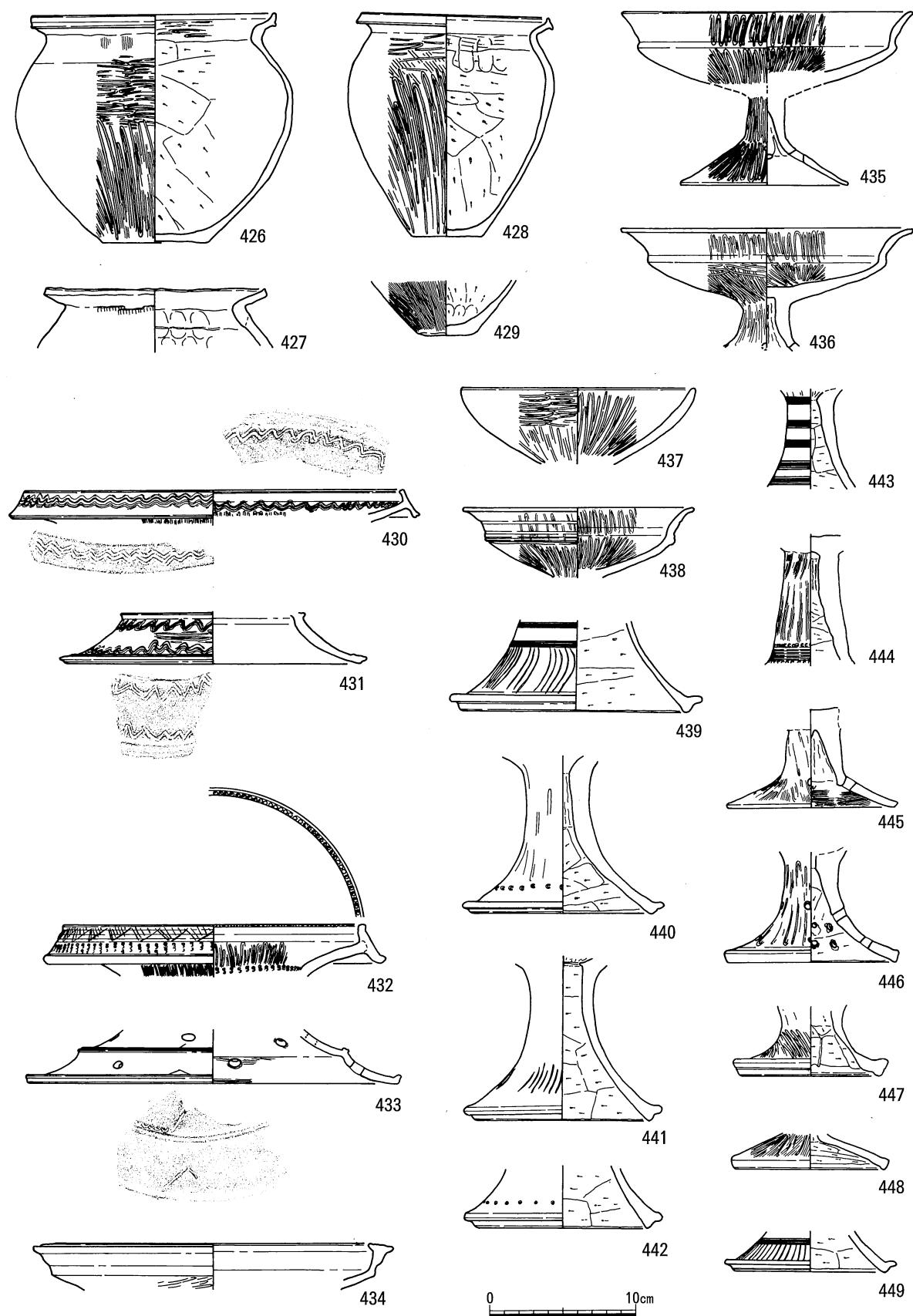


図102 溝13 出土遺物2 (1/4)

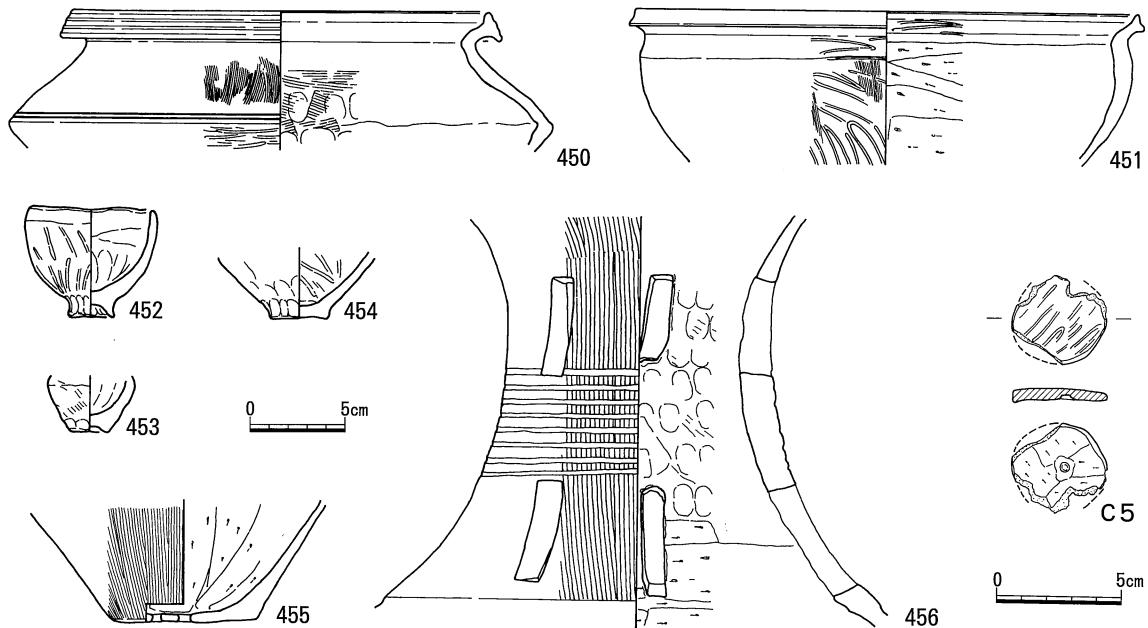


図103 溝13 出土遺物3 (1/4 · 1/3)

P 133 (図104)

調査区北東コーナー付近で検出された土壤で、断面形が逆台形となることから、貯蔵穴と考えられる。遺構検出面は3.5m付近で、深さは検出面から0.4mである。検出面では長径0.8m、短径0.6m、底面では長径1.5m、短径0.8mである。埋土は5層が確認されているが、全体としてブロック状に堆積しており、埋められた結果の埋没過程が推測される。下層である②～⑤層には遺物が含まれておら

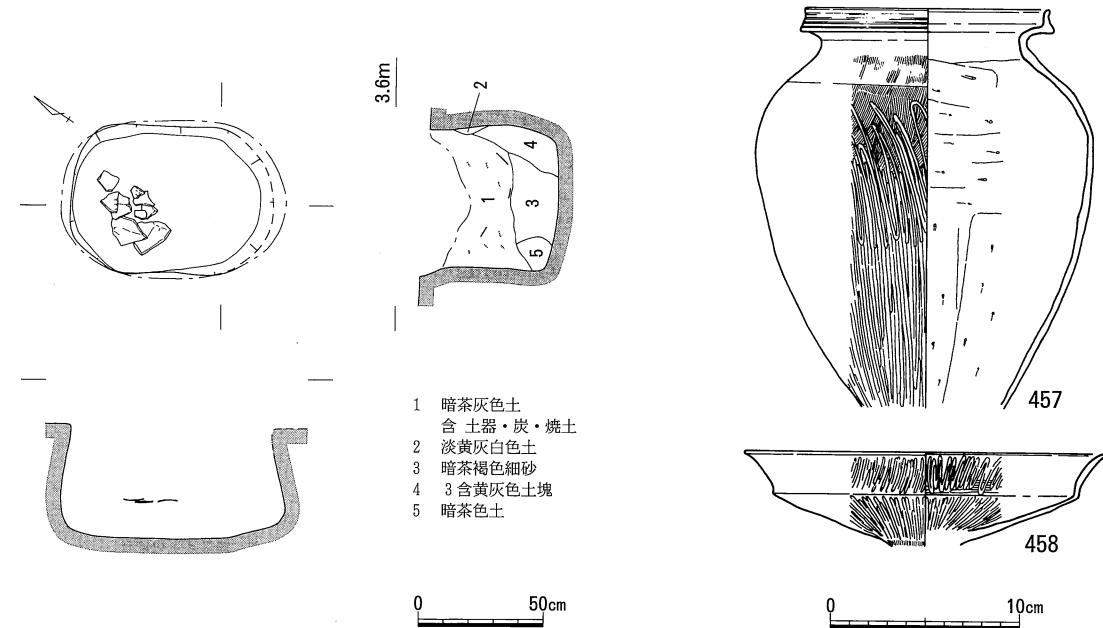


図104 P 133 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ず、中間層である①層でまとまった土器が出土した。ある程度埋めた段階で土器を投棄したといえる。

出土遺物は、土器のみであるが、比較的破片が大きいことから、完形に近い土器を投棄したものと考えられる。土器を出土した①層には炭や焼土が含まれていることから、焼失家屋等の後かたづけの結果であることも想像される。出土したのは甕形土器(457)と高杯形土器(458)で、いずれも弥生時代後期中葉の時期である。

P 234 (図105)

調査区南端で検出された土壌である。竪穴住居9に近接した位置にある。遺構検出面は、3.5m付近で、深さは検出面から0.1mである。長径0.5m、短径0.4mの長楕円形の平面形で、断面形は台形である。それ程大きな土壌ではないが、土壌の東よりに高杯形土器を伏せた状態で検出された。検出当初は、下部に土

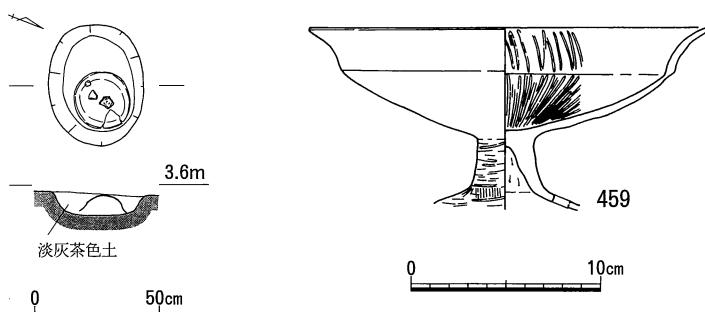


図105 P 234 (1/30)・出土遺物 (1/4)

器棺等があり、その蓋である可能性を意識して掘り下がったが、土器棺等は検出されず、土壌の底面に伏せていたと考えられる。杯部は完形であり、脚部については上面が後に削平された結果で残存状態が悪くなっていると考えられるが、意識的に打ち欠いている可能性もある。埋土は1層である。

出土遺物は高杯形土器(459)が1点のみで、埋土中からも遺物は出土しなかった。

P 235 (図106)

調査区南端で検出された土壌で、南半は調査区外に出るため全形は不明である。長径1.0m前後、短径0.3m以上の規模としか計測できない。遺構検出面は3.8m付近で、深さは検出面から0.5mである。埋土には炭等が比較的多く含まれている。壁面の傾斜はかなり急であり、台形の特徴的な断面形は呈していないが、P 133と同様に貯蔵穴である可能性も推測される。そうすると、貯蔵穴が散在的に分布し、しかも竪穴住居についても同様の分布状況であることから、竪穴住居1と貯蔵穴1がセット関係になることも推測される。貯蔵穴のみがまとまる集落景観ではないことが、当集落の景観的な特徴といえる。

出土遺物は、土器の小片のみで、図化できるものではなく、甕形土器の胴部の小片である。

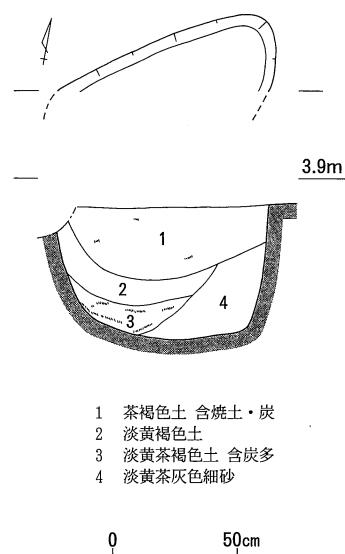


図106 P 235 (1/30)

P 254 (図107)

調査区東南部で検出された土壙で、長径1.8m、短径1.1mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は、3.7m付近で、深さは検出面から0.3mである。断面形は傾斜の緩やかな逆台形、もしくはU字形である。埋土は2層である。土壙の南東付近では径0.2mや径0.1mほどの柱穴状の窪みが検出されている。深さは、検出面から0.1m前後である。埋土は②層と極めて似ていることから、P 254に伴う窪みとした。

出土遺物は、中央北寄りでまとまって検出されているが、いずれも土壙底面から0.1mほど浮いた位置である。したがって若干埋没した段階で投棄されたのか、もしくは、遺構の形状から、土壙墓であると考えてよいとすると、埋葬後に供献された土器が、土壙墓内部に落ち込んでいる可能性もある。高杯形土器(461)は完形で、鉢形土器(462)も比較的大きな破片である。甕形土器(460)は小片であるが、時期は弥生時代後期中葉にまとまる。

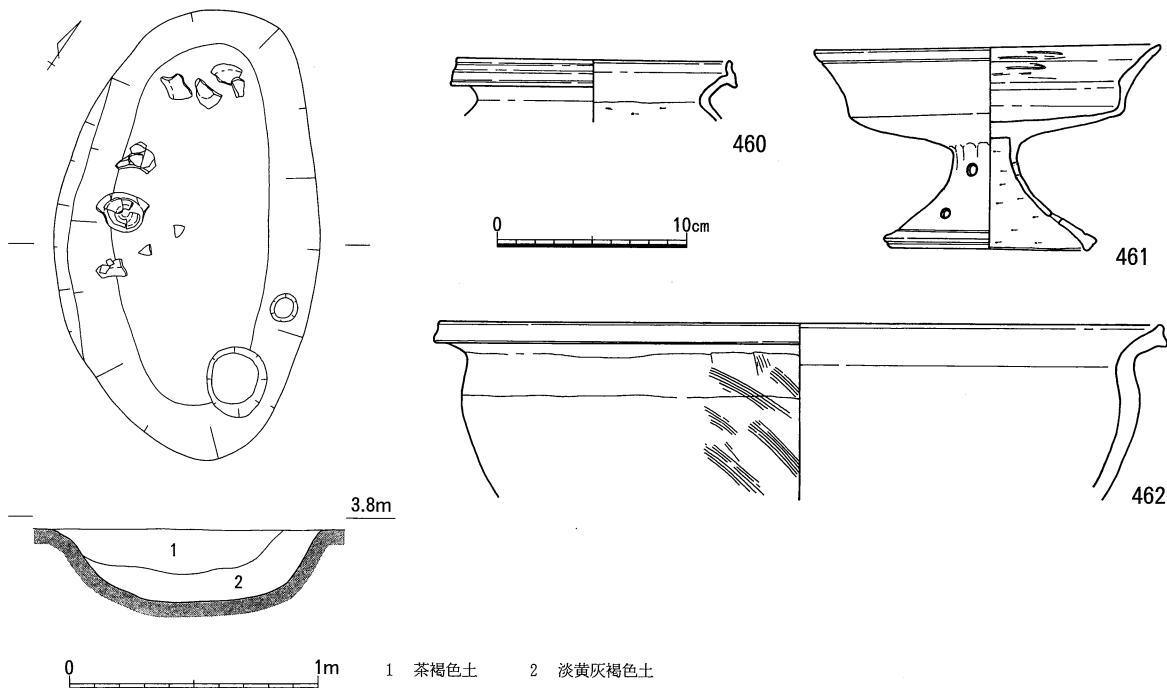


図107 P 254 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P 255 (図108)

調査区中央南半付近で検出された土壙で、径0.5mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5mで、深さは0.25mである。断面形は逆三角形である。埋土は2層であるが、遺物は②層から出土した。完形の土器が2点あり、いずれも底面や壁面に接して出土しており、土壙を掘り下げてそれほど時を置かずして土器を投棄した、あるいは納めたといえる。P 254が土壙墓であるとすると、本遺構についても同様に土壙墓である可能性が強いと推測される。出土した土器は供献的な意味を持つと考えられるものである。東側には土壙がまとまっており、それらからは人骨等の物的確証は検出されていないが、土壙墓であり、土壙墓群を形成していた可能性も推測される。竪穴住居9の南側に一群があり、その北東に5.0mほど離れて一群があり、さらに東に5.0mほど離れて一群がある。土壙群がある程度等間

隔であることから、規則性を有する土壙墓群である可能性がある。

出土遺物は土器のみで、完形の甕形土器が2点(463・464)、口縁部付近のみの甕形土器(465)が1点である。完形の土器(463・464)は横置していた。甕形土器(465)は、いわゆる吉備型甕であり、ほかの2点とは異なる。この比率については、当時の墓制に連なる意味も内包している可能性も推測される。時期は弥生時代後期中葉である。

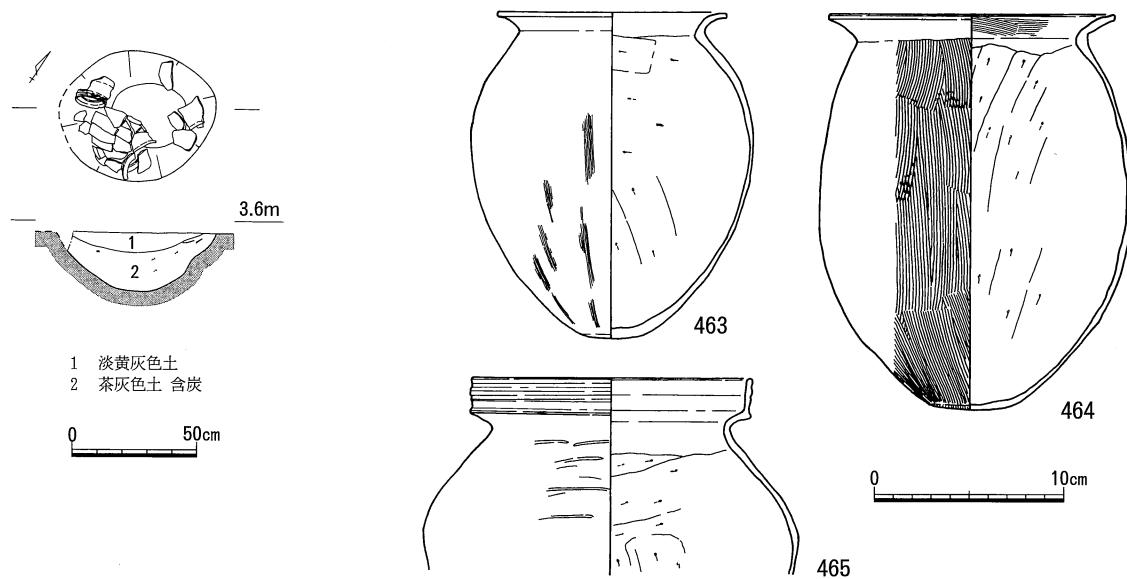


図108 P255 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P260 (図109)

調査区南東部で検出した土壙である。長さ0.8m、幅0.6mの隅丸長方形平面形を呈する。遺構検出面は、3.5m付近で、深さは検出面から0.3mである。断面形は台形であるが、東端が僅かに外開きになる。埋土は1層で、遺物は埋土中で検出されたが、平面的には東西方向に並んでいるようにみえるが、レベル的には、散在的であり、規則性は認められない。いずれも土器片であり、埋没過程で混じったものと推測される。図化できたのは甕形土器1点(466)だけである。弥生時代後期前半の時期である。該期の遺構や遺物は極めて少ない。

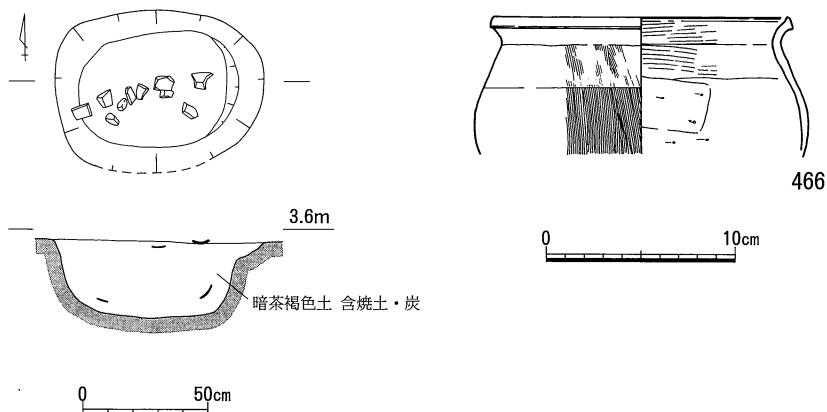


図109 P260 (1/60)・出土遺物 (1/4)

P274 (図110)

調査区中央東側で検出された土壙である。遺構中央南寄り部分は古墳時代前期の掘立柱建物の柱穴によって削平されている。削平されている部分を中心に土器が出土しており、一部古墳時代前期の掘立柱建物の遺物が混じっている。遺構検出面は3.5m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は皿状を呈する。埋土は3層、ブロック状の堆積であり、人為的に埋められたと推測される。長さ1.5m、幅0.9mの長楕円形の平面形を呈する。

出土した遺物は土器片のみであり、時期は2時期に分けられる。古墳時代前期は、甕(467)と高杯(468)で、弥生時代後期末は高杯形土器(469)である。前者は古墳時代前期の掘立柱建物に帰属すると考えられ、当遺構の時期は弥生時代後期末と考えられる。

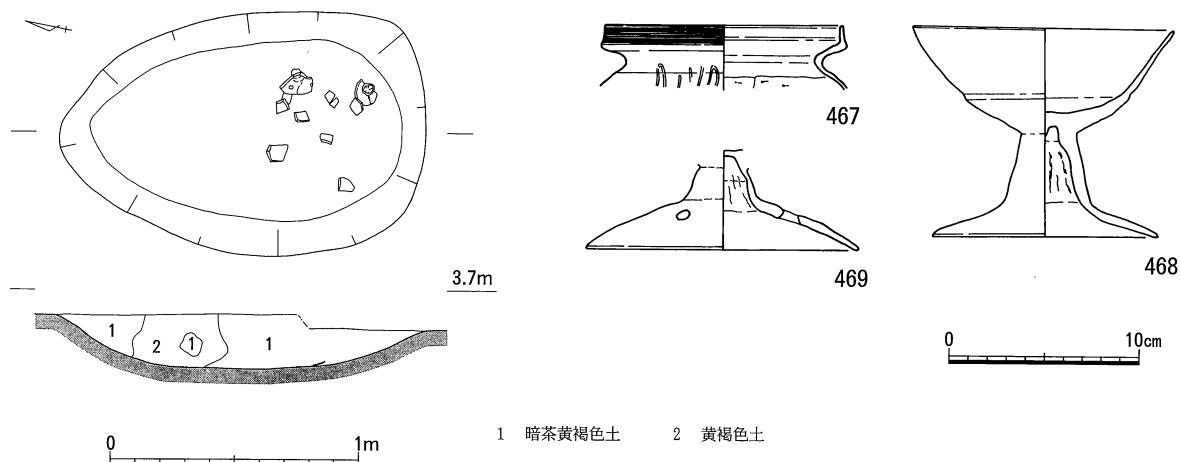


図110 P274 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P275 (図111・112)

調査区東端で検出された土壙である。東側は調査区外へ出るため全形は不明である。検出部のみで計測すると、幅0.9m、長さ0.6m以上の長楕円形に近い平面形と推測される。遺構検出面は3.3m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は逆台形であるが、南側の壁面の傾斜が北側と比べると緩やかである。埋土は1層であるが、検出面の上面で遺物がまとまって検出されたことから、遺構内埋土の最下層である可能性も高い。つまり、遺構底面から0.1mほど埋没した時点で遺物が投棄されたと推測できる。

出土遺物は土器のみで、完形や完形に近い個体も含まれており、廃棄的な意味で投棄されたのではないのかかもしれない。甕形土器(471～475)、高杯形土器(476～479)、壺形土器(470・480)で、いずれも弥生時代後期中葉の時期である。

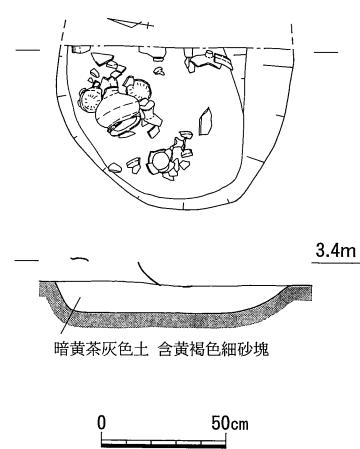


図111 P275 (1/30)

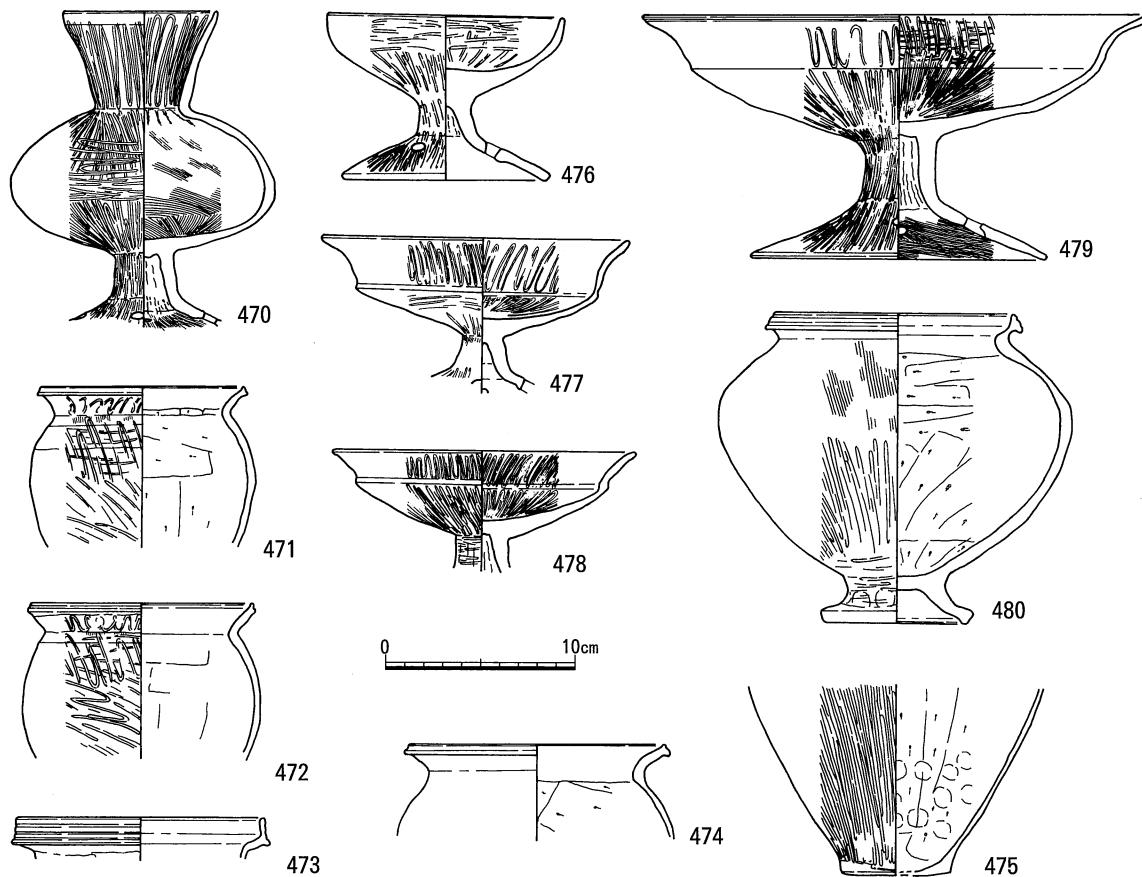


図112 P275 出土遺物 (1/4)

P276 (図113)

調査区中央付近で検出された土壤である。柱穴状の形状であるが、これとセット関係になる柱穴は見あたらないことから、一応土壤としてとらえた。長さ0.75m、幅0.6mの長楕円形の平面形を呈する。東側が径0.3mの範囲で深くなっており、その部分の埋土途中で土器がまとまって検出された。

遺構検出面は3.3m付近で、西側の浅い部分までは検出面から0.3m、深い部分は0.66mである。埋土からは柱痕跡等は認められな

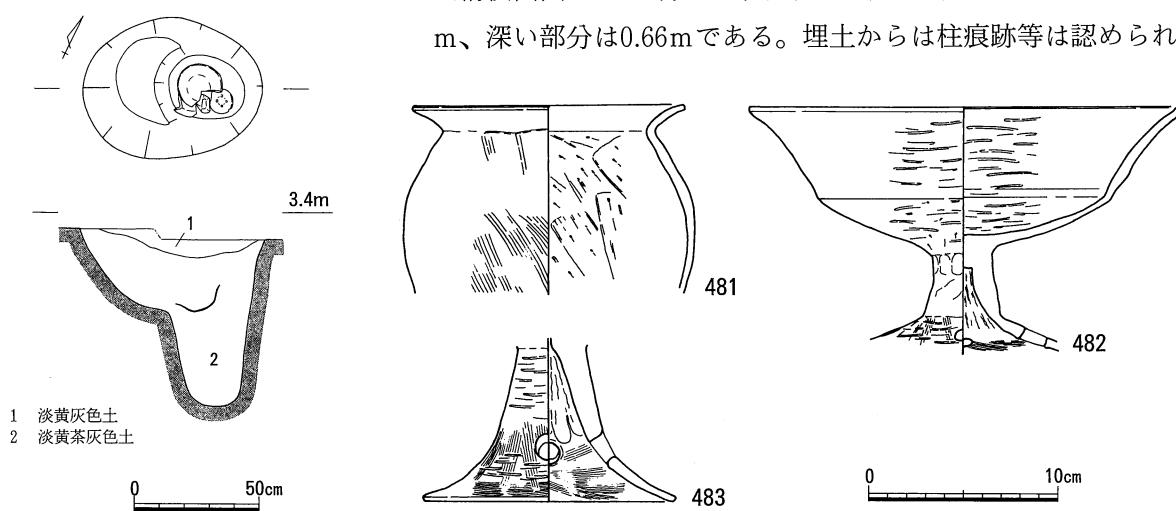


図113 P276 (1/30)・出土遺物 (1/4)

かったが、遺物の出土状況から類推すると、柱を抜いて埋める途中に土器を埋納したのではないかと考えられる。セット関係になる柱穴が認められないことから、何らかの意味を持たせて単独で立柱されていた可能性も考えられよう。

出土した土器は、高杯形土器(482・483)、甕形土器(481)である。弥生時代後期中葉の時期である。

P 278 (図114)

調査区中央東端で検出された土壌である。北半は削平されており、全形は不明である。残存部から計測すると、長さ0.9m、幅0.3m以上の長楕円形の平面形と推測される。遺構検出面は3.3m付近で、深さは検出面から0.5mである。東側には検出面から0.24mのところで段があり、さらに西側に深くなっている。P 276と同様である可能性もある。埋土は2層で、下層となる②層のみから遺物が出土した。②層は、一段深くなっている部分であり、この点もP 276と共通する。

出土遺物は土器のみで、甕形土器(484・485)、高杯形土器(486)、鉢形土器(487)である。弥生時代後期前半の時期と後期中葉の時期の土器が混在している。

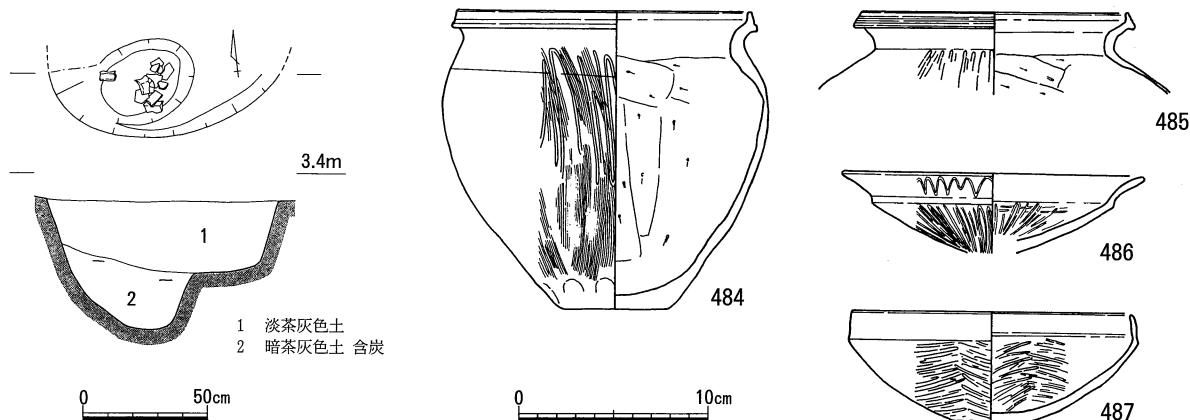


図114 P 278 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P 301 (図115)

調査区中央付近で検出された土壌である。上面は竪穴住居21によって削平されている。長さ0.5m、幅0.4mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は、2.9m付近である。深さは検出面から0.2mで、台形の断面形である。底面は平坦で、完形の甕形土器(488)が横置されており、埋納されたものと推測される。弥生時代後期中葉の時期である。

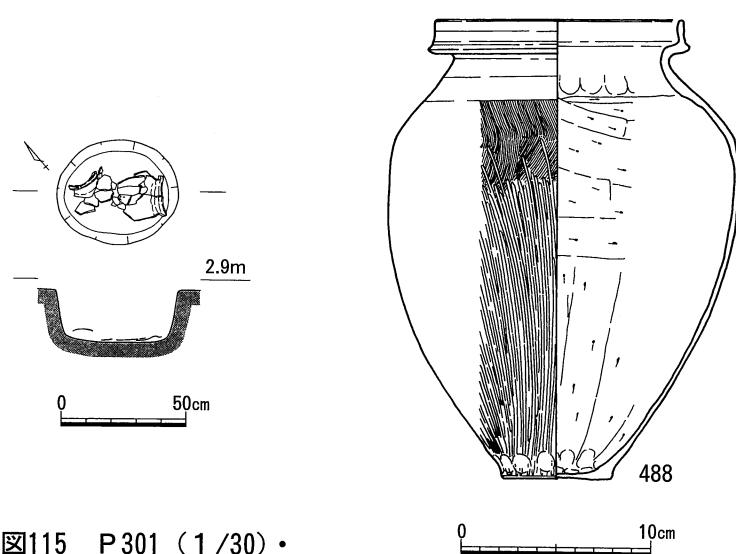


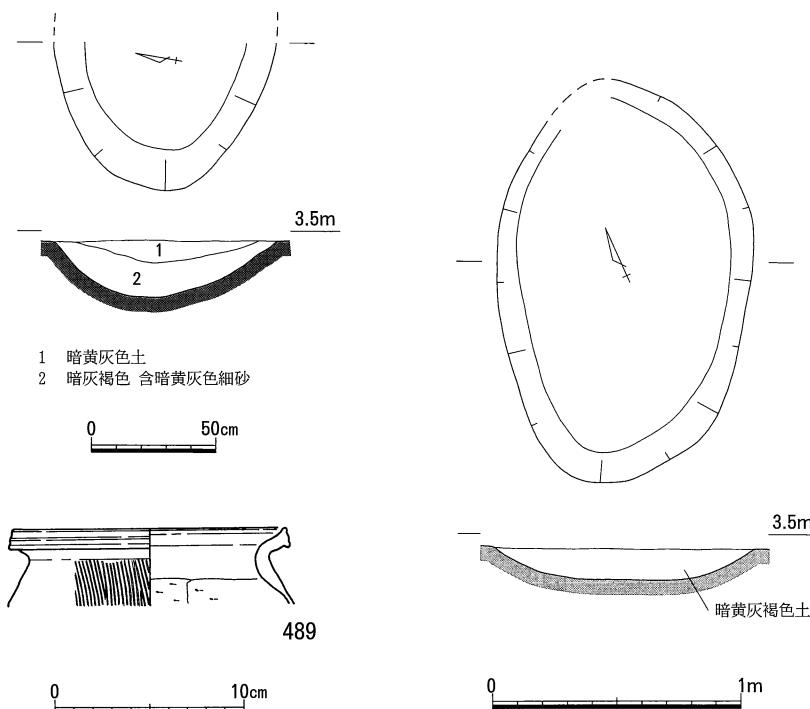
図115 P 301 (1/30)・出土遺物 (1/4)

P313 (図116)

調査区南東コーナー付近で検出された土壙で、東半は調査区外に出るため全形は不明である。幅0.9m、長さ0.6m以上の長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.4m付近で、深さは検出面から0.24mである。断面形は逆三角形で、埋土は2層で、②層から土器の小片が出土した。甕形土器(489)の時期は弥生時代後期前半である。

P314 (図117)

調査区南東コーナー付近で検出された土壙である。長さ1.6m、幅1.0mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5m付近で、深さは検出面から0.12mである。断面形は皿状を呈する。埋土からは弥生時代後期中葉の時期と推測される甕形土器の胴部小片が出土した。



弥生時代後期中葉

包含層 (図118)

包含層から土錐が2点(C 6・7)、大型蛤刃石斧(S 12)が1点出土している。大型蛤刃石斧(S 12)は緑色片岩系の石材である。

図116 P313 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

図117 P314 (1/30)

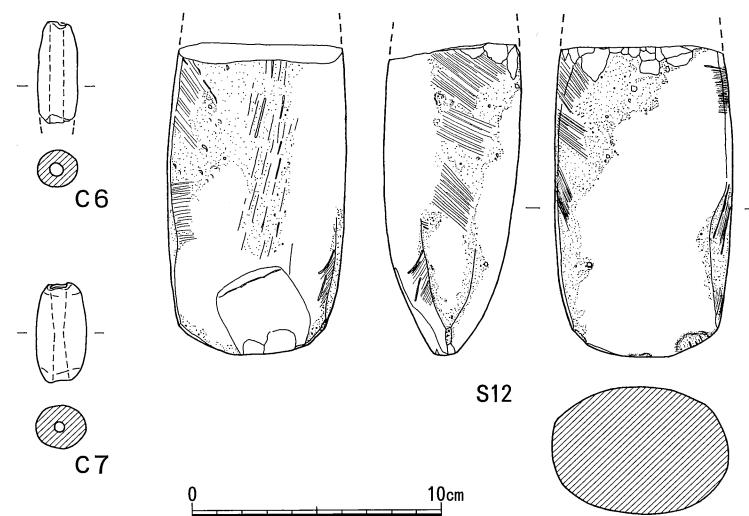


図118 弥生時代後期中葉包含層 出土遺物 (1/3)

VIII 出土遺物観察表

土器

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
1	建物1	小皿	8.1	6.1	1.15	口縁部内外面ヨコナデ、内面内側ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	浅黄橙
2	建物1	亀山焼甌	-	-	-	外面格子目タキ、内面ナデ。	含長石・石英	灰白色
3	建物2	土師質土器椀	11.3	5.15	4.7	口縁部及び内面ナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
4	建物2	土師器鉢	17.9	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、内面内側ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色
5	建物3	土師質土器椀	11.3	4.7	3.4	口縁部内外面及び内面ヨコナデ、高台内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
6	建物3	土師質土器椀	-	5.1	-	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
7	建物6	土師質土器小皿	7.9	5.5	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色
8	建物6	土師質土器鍋	-	-	-	外面タテハケ後ユビ押さえ、内面ヨコハケ。	含長石・石英・金雲母	灰褐色
9	建物9	土師質土器鍋	20.0	-	-	外面タテハケ、口縁部ヨコハケ後口縁部内外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。	含長石・石英	灰褐色
10	建物9	土師質土器鍋	33.0	-	-	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰黄褐色
11	建物9	土師質土器椀	-	5.5	-	高台部内外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英	灰白色
12	建物9	土師質土器椀	-	5.7	-	高台部内外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英	灰白色
13	建物9	須恵質土器こね鉢	30.0	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
14	溝8	土師質土器椀	12.6	4.4	4.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
15	溝8	土師質土器椀	-	5.8	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
16	溝8	土師質土器椀	-	5.6	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
17	溝8	土師質土器鍋	17.3	-	-	口縁部内外面ヨコナデ後、外面タテハケ後ナデ、内面ヨコハケ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
18	P116	土師質土器椀	14.5	6.0	5.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
19	P116	土師質土器椀	14.2	5.8	5.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
20	P116	土師質土器椀	14.9	6.0	5.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
21	P116	土師質土器小皿	8.2	6.8	1.2	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
22	P116	土師質土器小皿	8.4	6.9	1.1	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
23	P116	土師質土器小皿	8.8	6.6	1.2	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
24	P116	土師質土器小皿	8.6	7.3	1.1	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
25	P116	土師質土器小皿	8.1	6.2	1.5	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
26	P116	土師質土器小皿	7.9	6.1	1.3	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
27	P116	土師質土器小皿	8.4	5.7	1.3	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
28	P116	土師質土器小皿	8.1	6.0	1.3	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
29	P116	土師質土器小皿	8.4	5.9	1.3	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
30	P116	土師質土器小皿	8.5	5.9	1.0	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
31	P116	土師質土器小皿	8.1	6.6	1.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
32	P116	土師質土器小皿	8.6	6.1	1.5	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
33	P116	土師質土器小皿	8.2	6.7	1.2	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
34	P116	土師質土器小皿	8.0	6.4	1.1	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
35	P116	土師質土器小皿	8.8	6.4	1.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
36	P116	土師質土器小皿	8.4	6.2	1.5	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
37	P116	土師質土器小皿	8.0	5.8	1.1	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
38	P116	土師質土器小皿	8.1	6.1	1.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
39	P116	土師質土器小皿	8.1	6.1	1.2	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英・金雲母	灰白色
40	P163	土師質土器椀	13.8	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰白色
41	P163	土師質土器椀	15.8	-	-	内外面ヨコナデ一部ヘラミガキ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰白色
42	P163	土師質土器小皿	7.6	5.9	1.35	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
43	P163	土師質土器小皿	8.45	6.35	1.4	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙灰色
44	P163	土師質土器椀	-	6.05	-	高台部内外面ヨコナデ、内面ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
45	P170	土師質土器椀	-	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰白色
46	P195	土師質土器椀	14.6	5.8	5.4	口縁部内外面及び内面ヨコナデ、高台内外面ヨコナデ、見込みに重ね焼き痕。	含長石・石英・赤色砂粒	灰白色
47	P195	土師質土器椀	14.8	6.0	5.5	口縁部内外面及び内面ヨコナデ、高台内外面ヨコナデ、内面にシダ類の圧痕をヘラ工具でなぞっている。	含長石・石英・赤色砂粒	灰白色
48	P198	土師質土器椀	12.7	-	-	口縁部内外面及び内面ヨコナデ、高台内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
49	P198	土師質土器椀	14.0	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰白色
50	P198	土師質土器皿	13.6	9.25	2.9	口縁部内外面及び内面ヨコナデ、後内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
51	P198	土師質土器小皿	7.8	5.0	1.0	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
52	P198	土師質土器小皿	7.8	5.7	1.3	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
53	P198	土師質土器小皿	7.8	5.7	1.3	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
54	P198	土師質土器小皿	8.8	6.5	1.2	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色
55	P198	土師質土器小皿	7.9	6.0	1.45	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色
56	P198	土師質土器椀	-	6.0	-	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ。	含長石・石英	灰白色
57	P198	土師質土器椀	-	6.1	-	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ。	含長石・石英	灰白色
58	P198	土師質土器鍋	-	-	-	体部外面ハケ、脚部はナデ、内面ハケ。	含長石・石英	黄橙色
59	P198	土師質土器鍋	27.2	-	-	外面タテハケ後ユビ押さえ、内面ヨコハケ後口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
60	P198	土師質土器鍋	29.0	-	-	外面タテハケ後ユビ押さえ、内面ヨコハケ後口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
61	P233	土師質土器椀	11.5	4.4	3.4	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	灰白色
62	P233	土師質土器椀	11.0	4.6	3.1	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ、底部内外面に黒斑、見込み部分には重ね焼き痕。	含長石・石英・金雲母・赤色砂粒	灰白色
63	P233	土師質土器皿	12.4	9.4	2.7	内外面ヨコナデ後内面見込み不整方向のナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英・金雲母・赤色砂粒	灰白色
64	P237	土師質土器椀	11.6	4.6	4.0	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ、内面に黒斑。	含長石・石英	灰白色
65	P237	土師質土器椀	11.3	4.7	3.7	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ、内面に黒斑。	含長石・石英・赤色砂粒	灰白色
66	P258	土師質土器椀	14.8	5.7	5.4	外面上面ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ、高台内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
67	包含層	東播系こね鉢	-	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰色
68	包含層	白磁合子	6.0	-	-	内外面白色胎土の施釉。		
69	包含層	白磁碗	-	-	6.8	内面は白色胎土の施釉、外面ケズリ。		
70	溝2	須恵器高杯	15.4	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
71	溝2	須恵器壺	-	8.8	-	内外面ヨコナデ、内面見込み部は不整方向ナデ。	含長石・石英	灰白色
72	溝2	皿	19.0	16.2	2.2	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母・赤色砂粒	橙灰色
73	溝2	須恵器高杯	-	-	-	内外面ヨコナデ、内面見込み部は不整方向ナデ。	含長石・石英	灰白色
74	溝2	須恵器杯	-	10.8	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
75	溝2	須恵器甕	19.6	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面平行タタキ、内面指押さえ。	含長石・石英	灰色
76	溝2	平瓦	-	-	-	凹面には比較的の細かい布目(1cm幅に9本)、凸面平行タタキ	含長石・石英	灰白色
77	溝2	搏	-	-	-	長さ22.4cm、幅9.1cm、厚さ6.1cmの長方形の形状で、上面にはナナメ方向に板状工具によるナデが認められる。	含長石・石英	灰色
78	溝3	須恵器短頸壺蓋	10.9	-	3.0	内外面ヨコナデ、天井部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰色
79	溝3	須恵器壺	-	11.0	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色
80	溝3	須恵器杯身	-	10.6	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色
81	豎穴住居2	須恵器杯蓋	14.6	-	4.4	内外面ヨコナデ、天井部外面1/2ヘラ切り。	含長石・石英	灰色
82	豎穴住居2	須恵器有蓋高杯	12.5	10.8	8.85	内外面ヨコナデ、杯部底外面1/2ヘラ切り、外面自然釉が顕著。	含長石・石英	灰白色
83	豎穴住居2	須恵器高杯	15.0	11.5	11.3	内外面ヨコナデ、天井部外面1/2ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
84	豎穴住居2	須恵器高杯	-	-	-	内外面ヨコナデ、杯部底外面1/2(残存部)ヘラ切り、外面自然釉が顕著。	含長石・石英	灰色
85	豎穴住居11	須恵器高杯	13.8	9.2	9.0	内外面ヨコナデ、杯部底外面1/2ヘラ切り、内面見込み部指押さえ。	含長石・石英	灰色
86	豎穴住居17	須恵器杯蓋	-	-	-	内外面ヨコナデ、天井部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色
87	豎穴住居17	甑	-	-	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
88	豎穴住居17	甑	-	15.6	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
89	豎穴住居20	須恵器杯蓋	-	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
90	豎穴住居20	須恵器杯身	-	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
91	豎穴住居20	壺形土器	-	-	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
92	溝4・5	須恵器杯蓋	9.6	-	3.05	内面ナデ、外面天井部ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色
93	溝4・5	須恵器高杯	-	9.95	-	内外面ナデ。	含長石・石英	灰色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
94	溝4・5	須恵器縫	-	-	-	内外面ナデ、下半ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色
95	溝4・5	須恵器壺	-	-	-	外面ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ後下半ナデ。	含長石・石英	灰色
96	溝4・5	高杯形土器	22.0	-	-	内外面ヨコヘラミガキ、下半ナデ。	含長石・石英	橙色
97	溝4・5	高杯形土器	-	15.2	-	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、下半ナデ。	含長石・石英	橙色
98	溝4・5	高杯	-	-	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
99	溝4・5	甕形土器	13.5	-	-	外面口縁部内外面ヨコナデ、頸部以下ヘラミガキ後ナデ、内面頸部以下ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
100	溝4・5	甕	25.2	-	-	口縁部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヨコナデ、胴部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
101	溝4・5	甕	26.3	-	-	口縁部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヨコナデ、胴部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
102	溝4・5	甕	24.3	-	-	口縁部外面タテハケ、同内面ヨコハケ、胴部内面ヘラケズリ、後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
103	溝4・5	甕	21.8	-	-	口縁部外面ハケ、内面ヨコハケ、胴部内面ヘラケズリ、後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
104	溝4・5	底部	-	7.6	-	外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
105	溝4・5	把手	-	-	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
106	溝4・5	製塩土器	-	4.7	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
107	P124	甕	15.9	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	黄橙色
108	P124	高杯	-	-	-	口縁部内外面ヨコミガキ、受け部外面タテハケ。	含長石・石英	黄橙色
109	P140	壺	-	-	-	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面工具ナデ。	含長石・石英	橙色
110	P140	甕	-	-	-	外面ナデ。	含長石・石英	橙色
111	P147	鉢	14.8	-	4.8	内外面タテハケ。	含長石・石英・黒雲母	灰黄色
112	P147	鉢	11.9	-	-	外面ナデ、内面ナデ後一部ヨコハケ。	含長石・石英	黄橙色
113	P147	甕	12.3	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
114	P147	甕	14.6	-	-	内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面タテヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
115	P147	甕	14.9	-	-	内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面タテハケ。	含長石・石英	橙色
116	P147	甕	13.5	-	-	内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面タテヘラミガキ。	含長石・石英	橙色
117	P147	甕	15.5	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ。	含長石・石英	橙色
118	P147	甕	22.0	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、内面一部ヨコハケ、胴部外面ハケ、内面下半ヘラケズリ。	含長石・石英・黒雲母	灰黄色
119	P147	壺	27.4	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部下半ヘラケズリ、胴部外面ハケ後ナデ。	含長石・石英・黒雲母	灰黄色
120	P150	須恵器杯蓋	11.2	-	3.8	外面天井部ヘラ切り後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
121	堅穴住居12	手すくね土器	3.5	-	3.5	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
122	堅穴住居12	手すくね土器	3.75	-	2.43	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
123	堅穴住居12	手すくね土器	3.8	-	2.7	内外面ユビオサエ。	含長石・石英・金雲母	橙色
124	堅穴住居12	手すくね土器	4.0	-	-	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	灰褐色
125	堅穴住居12	手すくね土器	3.6	-	-	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	灰褐色
126	堅穴住居12	手すくね土器	-	5.6	-	外面ハケ後ユビオサエ、内面ヘラケズリ後ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
127	堅穴住居12	椀	8.7	3.6	5.05	外面ヨコ及びタテハケ後ナデ、内面ヘラナデ後ナデ。	含長石・石英	橙色
128	堅穴住居12	壺	8.6	6.95	10.3	内外面ナデ、底部外面棒状工具による圧痕。粘土紐による巻き上げ痕跡が明瞭に観察される。	含長石・石英	橙色
129	堅穴住居12	甕	-	-	-	外面タテヘラミガキ後ナデ、内面ヘラケズリ後一部ナデ、底部内面付近ユビオサエ。底部は焼成後穿孔あり。下半は被熱により赤化。	含長石・石英	橙色
130	堅穴住居12	高杯	13.9	9.85	10.7	杯部内外面ヘラミガキ後ナデ、脚部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
131	堅穴住居12	高杯	14.4	-	-	杯部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
132	堅穴住居12	高杯	15.1	-	-	杯部外面ナデ、内面板状工具によるナデ。	含長石・石英	橙色
133	堅穴住居12	高杯	-	8.2	-	外面調整不明だが一部に赤色顔料が認められ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
134	堅穴住居12	高杯形土器	-	13.4	-	外面緻密なヘラミガキ後一部ナデ、内面削り後蜘蛛の巣状のハケ。	含長石・石英	橙色
135	堅穴住居12	高杯	-	13.4	-	外面調整不明、内面上半ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
136	堅穴住居12	壺	10.0	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ後ヨコヘラミガキ、内面口縁部ヨコハケ、胴部ヨコハケ後ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
137	堅穴住居12	甕	18.2	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	黄橙色
138	堅穴住居12	甕	17.4	-	-	口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ハケ後ナデ、内面口縁部ヨコハケ、胴部内面ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
139	堅穴住居12	甕	17.6	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
140	堅穴住居12	高杯	25.5	-	-	外面調整不明、内面ハケ後ヘラミガキ。	含長石・石英	橙色
141	堅穴住居12	壺形土器	26.7	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
142	堅穴住居12	甕	24.7	-	-	外面タテハケ、内面口縁部ヨコハケ、以下ナデ。	含長石・石英	橙色
143	堅穴住居12	須恵器壺	17.1	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面平行タタキ後カキメ、胴部内面同心円タタキ。	含長石・石英	灰白色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
144	竪穴住居12	須恵器杯蓋	13.0	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、天井部外面1/2ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色
145	竪穴住居12	須恵器杯身	12.9	5.05	-	口縁部内外面ヨコナデ、底部外面1/2ヘラケズリ。	含長石・石英	灰色
146	竪穴住居12	須恵器杯身	9.6	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色
147	竪穴住居12	須恵器甕	24.4	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色
148	竪穴住居12	須恵器甕	23.0	-	-	内外面ヨコナデ、胴部外面平行タキ、胴部内面ナデ。	含長石・石英	灰色
149	竪穴住居13	高杯	17.5	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
150	竪穴住居13	高杯	25.7	-	-	外面ヘラミガキか。他は調整不明。	含長石・石英	赤褐色
151	竪穴住居14	高杯	12.6	10.2	8.5	杯部内外面ヨコミガキ、脚部外面タテミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	赤褐色
152	竪穴住居14	高杯	-	-	12.5	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
153	竪穴住居14	甕	14.7	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ後ナデ、内面胴部ヘラケズリ、口縁部ハケ。	含長石・石英	褐色
154	竪穴住居14	甕	16.5	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
155	竪穴住居14	土師器把手付鉢	18	-	-	外面ハケ後口縁部ヨコナデ後把手を付着、内面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
156	竪穴住居16	高杯	14.1	-	-	杯部外面タテミガキ、杯部内面ヨコミガキ後ナデ、脚部ナデ。黒斑あり。	含長石・石英	橙色
157	竪穴住居16	高杯	-	-	9.3	外面ハケ後ナデ、端部ヨコナデ、内面ケズリ。	含長石・石英	橙色
158	竪穴住居3	甕形土器	13.9	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテハケ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
159	竪穴住居3	甕形土器	14.7	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテハケ後ナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
160	竪穴住居4	鉢	12.8	5.8	-	口縁部内外面ナデか。	含長石・石英・墨母・赤色砂粒	橙色
161	竪穴住居4	鉢	12.9	2.4	8.7	口縁部内外面ヨコナデ、ほかはナデ。	含長石・石英・墨母	橙色
162	竪穴住居4	甕	12.8	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ内面ヘラケズリ、口縁部外端部クシ沈線。	含長石・石英・墨母・赤色砂粒	淡茶灰色
163	竪穴住居4	甕	16.0	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ内面ヘラケズリ、口縁部外端部クシ沈線。	含長石・石英・墨母・赤色砂粒	淡茶灰色
164	竪穴住居4	高杯	21.0	-	-	調整不明。	含長石・石英	橙色
165	竪穴住居6	鉢形土器	14.4	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラミガキ後ナデ、胴部内面ナデ。	含長石・石英	橙色
166	竪穴住居6	鉢形土器底部	-	-	5.2	調整不明。	含長石・石英	橙色
167	竪穴住居6	壺形土器底部	-	-	10.0	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
168	竪穴住居10	壺形土器	5.9	-	-	外面調整は不明、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
169	竪穴住居10	壺形土器底部	-	5.3	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内目ヘラミガキ。	含長石・石英	灰白色
170	竪穴住居10	高杯	-	13.7	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内目ヘラミガキ。	含長石・石英	灰白色
171	竪穴住居15	甕	14.8	-	-	外面平行タキ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
172	竪穴住居15	壺形土器	-	-	-	内外面ハケ後ナデ、口縁端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
173	竪穴住居19	高杯形土器	20.8	15.5	13.5	杯部内外面ヨコナデ、見込み部付近ナデ、脚部外面ヨコミガキ、内面ケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙色
174	竪穴住居22	甕	16.4	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、端部外面クシ沈線、胴部内面ヘラケズリ、外面ハケ後ヘラミガキ。	含長石・石英・角閃石	黄橙色
175	竪穴住居22	甕	14.9	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、端部外面クシ沈線、胴部内面ヘラケズリ。外面ハケ。	含長石・石英	橙色
176	竪穴住居22	製塙土器	-	4.9	-	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	赤褐色
177	竪穴住居22	製塙土器	-	4.8	-	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	赤褐色
178	竪穴住居22	短頸壺	12.8	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内面ハケ後ヘラミガキ、胴部内面ヨコミガキ。外面赤色顔料塗布。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
179	竪穴住居22	鼓形器台	12.7	-	-	内外面ヨコミガキ、内外面赤色顔料塗布。	含長石・石英	橙色
180	溝12	手づくね土器	9.1	-	4.2	内外面ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
181	溝12	鉢	12.1	-	7.6	外面ヘラケズリ後口縁部付近ハケ後内外面ヨコナデ、内面下半ナデ。	含長石・石英	橙色
182	溝12	鉢	-	-	2.8	内外面ナデ。	含長石・石英	灰白色
183	溝12	鉢	-	-	5.85	外面ヘラナデ後ナデ、内面ヘラミガキ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
184	溝12	壺	18.9	-	-	内外面ヘラミガキ。	含長石・石英	褐灰色
185	溝12	鉢形土器	29.5	10.1	18.6	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
186	溝15	壺	15.2	-	-	外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ後頸部付近ナデ。	含長石・石英	灰白色
187	溝15	壺	15.4	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
188	溝15	壺	15.1	-	-	外面胴部ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
189	溝15	底部	-	7.4	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
190	溝15	高杯	18.5	-	-	内外面ヘラミガキ、赤色顔料を塗布。	含長石・石英	橙色
191	溝15	高杯	-	14.6	-	外面中部タテナデ、脚端部ヘラミガキ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
192	溝15	鉢	14.2	-	-	調整は不明。黒斑あり。	含長石・石英	黄橙色
193	溝15	長頸甕	17.8	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	含長石・石英	橙色
194	溝15	長頸壺	19.1	-	-	外面ヘラミガキ、内面頸部ナデ、胴部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
195	溝15	甕	14.0	-	-	外面胴部へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ後刺突文。	含長石・石英	橙色
196	溝15	甕	13.6	-	-	胴部外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	橙色
197	溝15	甕	15.0	-	-	胴部外面はヘラミガキが認められ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	橙色
198	井戸1	甕	14.0	-	-	外面ハケ、内面へラケズリ、口縁部内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	灰黄褐色
199	井戸1	甕	14.5	-	-	胴部外面へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	黄橙色
200	井戸1	甕	14.4	-	-	胴部外面へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	黄橙色
201	井戸1	甕	13.9	-	-	胴部外面ハケ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	黄橙色
202	井戸1	甕	14.3	-	-	胴部外面ハケ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英・角閃石	黄橙色
203	井戸1	甕	15.4	-	-	胴部内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英	黄橙色
204	井戸1	甕	15.5	-	-	胴部内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁端部クシ描文。	含長石・石英・金雲母	灰白色
205	井戸1	底部	-	5.9	-	外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ。	含長石・石英	灰白色
206	井戸1	甕形土器	17.1	-	-	胴部外面ハケ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨココナデ。	含長石・石英	橙色
207	井戸1	甕形土器	13.9	-	-	胴部外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨココナデ。	含長石・石英	橙色
208	井戸1	壺形土器	20.3	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
209	堅穴住居5	高杯形土器	-	10.4	-	外面ヨコヘラミガキ、端部内外面及び内面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
210	堅穴住居5	鉢形土器	-	-	-	外面ヨコヘラミガキ後下半タテヘラミガキ、内面へラケズリ後上半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
211	堅穴住居9	鉢形土器	6.3	2.1	3.5	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
212	堅穴住居9	高杯形土器	13.4	-	-	外面ハケ後へラミガキ、内面タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ。外面に黒斑。	含長石・石英	橙色
213	堅穴住居9	底部	-	5.3	-	外面へラミガキ、内面へラケズリ。	含長石・石英	黄褐色
214	堅穴住居9	壺形土器	-	-	-	内外面ヨコナデ、鋸歯文が認められる。	含長石・石英	橙色
215	堅穴住居9	甕形土器	29.4	-	-	外面胴部へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
216	堅穴住居9	甕形土器	14.7	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
217	堅穴住居9	壺形土器	15.0	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
218	堅穴住居9	装飾高杯形土器	-	17.7	-	外面タテヘラミガキ、突帯部ヨコナデ、内面へラケズリ、端部ヨコナデ。円孔は上下互い違いに4孔あり。	含長石・石英	橙色
219	堅穴住居9	壺形土器	10.0	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ後へラミガキ。	含長石・石英	橙色
220	堅穴住居9	壺形土器	-	-	-	外面ハケ後へラミガキ後沈線、内面頸部ハケ後ナデ、胴部内面下半へラケズリ。	含長石・石英	橙色
221	堅穴住居9	鉢形土器	33.5	-	-	外面ハケ後口縁部内外面ヨコナデ。内面不明。	含長石・石英	橙色
222	堅穴住居9	甕形土器底部	-	5.0	-	外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
223	堅穴住居21	甕形土器	15.2	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英・黒雲母	橙色
224	堅穴住居21	甕形土器	14.6	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英・金雲母	橙色
225	堅穴住居21	甕形土器	15.4	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
226	堅穴住居21	甕	13.7	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ、口縁部外端部クシ描文。	含長石・石英	橙色
227	堅穴住居21	甕形土器	18.2	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	赤褐色
228	堅穴住居21	底部	-	2.6	-	外面ハケ後タテミガキ、内面へラケズリ後へラミガキ。	含長石・石英	赤褐色
229	堅穴住居21	高杯形土器	-	10.6	-	外面へラミガキ、内面ハケ、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
230	堅穴住居21	高杯形土器	-	9.6	-	外面へラミガキ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
231	堅穴住居21	高杯形土器	-	11.3	-	外面ハケ後へラミガキ後ナデ、内面ナデ、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
232	堅穴住居21	高杯形土器	-	11.1	-	外面へラミガキ、内面ナデ、端部外面に2条の沈線。	含長石・石英	橙色
233	堅穴住居21	壺形土器	12.9	-	-	外面へラミガキ、内面ハケ後へラミガキ、赤色顔料の塗布。	含長石・石英・金雲母	橙色
234	堅穴住居21	壺	12.3	-	-	外面へラミガキ、内面ハケ後へラミガキ、赤色顔料の塗布。	含長石・石英・金雲母	橙色
235	堅穴住居21	甕形土器	13.2	-	-	外面へラミガキ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
236	堅穴住居21	壺形土器	18.1	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面タテハケ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
237	堅穴住居21	壺形土器	-	-	-	外面タテハケ後下半へラミガキ、内面へラケズリ、頸部沈線と刺突文をめぐらす。	含長石・石英	橙色
238	堅穴住居25	甕形土器	15.6	-	-	内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
239	堅穴住居25	鉢形土器	14.8	-	-	外面へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
240	堅穴住居25	甕形土器	17.0	-	-	外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内面ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄褐色
241	溝11最上層	壺形土器	21.4	-	-	外面へラミガキ、内面口縁部へラミガキ、頸部ハケ後ナデ、胴部下半へラケズリ、口縁端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
242	溝11最上層	壺形土器	10.9	-	-	外面ハケ、内面ハケ後へラミガキ、貝殻圧痕がめぐる。	含長石・石英	橙色
243	溝11最上層	壺形土器	16.3	-	-	外面タテハケ後一部タテへラミガキ、口縁部内面ヨコミガキ、頸部ハケ、胴部タテケズリ、肩部ヨコケズリ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	橙色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
244	溝11最上層	壺形土器	-	-	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ハケ後ナデ、胴部下半ヘラケズリ。外面には線刻文様が認められる。	含長石・石英	橙色
245	溝11最上層	壺形土器	-	4.0	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ナナメハケ後ユビオサエ。	含長石・石英	黄橙色
246	溝11最上層	壺形土器	27.8	12.8	35.4	外面タテハケ後下半ヘラミガキ、頸部下には刺突文、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。讀岐系。	含長石・石英	黄橙色
247	溝11最上層	壺	-	-	32.5	外面平行タタキ後下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ上半ヨコケズリ、頸部内面ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
248	溝11最上層	壺	-	-	-	外面タタキ後頸部ヨコナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
249	溝11最上層	底部	-	6.0	-	外面ハケ、内面ナデ。	含長石・石英	黄褐色
250	溝11最上層	壺形土器	8.9	-	-	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
251	溝11最上層	壺形土器	-	-	-	外面ヘラミガキ、脚部外面沈線、内面上半ヨコケズリ、下半ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石・石英	橙色
252	溝11最上層	壺	10.6	-	12.6	外面ハケ後下半ヘラミガキ、内面ヨコケズリ底部ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・ 金雲母	橙色
253	溝11最上層	壺	11.3	-	-	外面ヘラミガキ、後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
254	溝11最上層	甕	14.6	-	-	胴部外面平行タタキ後ハケ、内面ハケ。	含長石・石英・ 雲母	黄橙色
255	溝11最上層	甕	15.6	-	-	外面ハケ後ナデ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
256	溝11最上層	甕	14.0	-	-	外面ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。讀岐系。	含長石・石英	黄橙色
257	溝11最上層	甕	13.4	-	-	外面下半タテヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ上半ユビナデ、口縁部内外面ヨコナデ。讀岐系。	含長石・石英・ 雲母・赤色砂粒	黄褐色
258	溝11最上層	甕	14.8	-	25.1	外面ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ、口縁部内面ヨコハケ、外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡黄色
259	溝11最上層	甕	13.9	-	21.2	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ下半ユビオサエ、口縁部外面クシ描沈線、内外面ヨコナデ。	含長石・石英・ 黒雲母	橙色
260	溝11最上層	甕	12.1	4.2	18.4	外面平行タタキ後下半ハケ、内面ヘラケズリ上半ナデ、口縁部ヨコナデ。	含長石・石英・ 黒雲母	黄橙色
261	溝11最上層	甕	11.3	-	-	胴部外面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	黄橙色
262	溝11最上層	甕	12.7	-	-	胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、外端部クシ描き沈線。	含長石・石英	橙色
263	溝11最上層	高杯形土器	10.2	-	-	内外面ヘラミガキ、口縁端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
264	溝11最上層	高杯形土器	9.7	-	-	内外面ヘラミガキ、口縁端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
265	溝11最上層	高杯形土器	-	10.4	-	外面ヘラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英	黄褐色
266	溝11最上層	高杯形土器	20.2	14.7	15.5	内外面ナデ。外面及び杯部内側の一部に赤色顔料が認められる。	含長石・石英	橙色
267	溝11最上層	高杯形土器	18.8	-	-	外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石・石英	橙色
268	溝11最上層	高杯形土器	17.4	9.0	9.4	内外面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ、脚部ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
269	溝11最上層	高杯形土器	17.2	-	-	外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石・石英・ 赤色砂粒	橙色
270	溝11最上層	高杯形土器	19	-	-	杯部外面下半ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
271	溝11最上層	手づくりね土器	1.5	5.65	3.3	内外面ナデ、高杯形土器の模倣。	含長石・石英	黄橙色
272	溝11最上層	手づくりね土器	3.6	-	-	内外面ヨコナデ、脚部内面ハケ。	含長石・石英	橙色
273	溝11最上層	手づくりね土器	6.9	-	2.35	内外面ユビオサエ。	含長石・石英・ 黒雲母	黄灰色
274	溝11最上層	底部	4.8	-	-	内外面ナデ。	含長石・石英	黄褐色
275	溝11最上層	鉢形土器	8.0	-	-	内外面ヘラミガキ、脚部内面ケズリ。	含長石・石英	橙色
276	溝11最上層	鉢形土器 (ミニチュア)	8.4	4.1	5.6	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・ 黒雲母	褐灰色
277	溝11最上層	鉢	9.05	-	5.2	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
278	溝11最上層	鉢	9.45	-	6.7	内外面ハケ後ナデ。水漉し粘土。	含長石・石英	橙色
279	溝11最上層	鉢	7.95	4.05	8.4	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部付近ヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
280	溝11最上層	甕	9.5	2.1	9.55	外面平行タタキ、内面ヘラケズリ後ナデ、口縁部外面ヨコナデ、内面平行タタキ。	含長石・石英	黄橙色
281	溝11最上層	注口土器	-	-	-	注口部ヘラミガキ、外面刺突文とクシ描き沈線。内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。山陰系。	含長石・石英・ 金雲母・黒雲母	淡橙色
282	溝11最上層	器台	-	16.3	-	内外面ヨコナデ内面ヘラミガキ。山陰系。	含長石・石英	黄橙色
283	溝11最上層	鉢	18.0	-	5.9	外面ハケ後下半ヘラケズリ、内面ハケ、口縁部内面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
284	溝11最上層	脚部	-	10.0	-	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英・ 黒雲母	橙色
285	溝11最上層	脚部	-	9.86	-	外面タテハケ、内面ナデ。台付鉢もしくは台付壺の脚部。	含長石・石英・ 黒雲母	橙色
286	溝11最上層	鉢	-	2.0	-	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	灰白色
287	溝11最上層	鉢	-	3.5	-	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
288	溝11最上層	鉢	26.9	-	-	口縁部ハケ後ナデ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
289	溝11最上層	鉢形土器	33.4	-	-	外面タテハケ後頸部羽状ヘラ描き沈線、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
290	溝11最上層	鉢もしくは甕	34.7	-	-	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ヨコハケ後胴部ヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
291	溝11最上層	器台	-	-	-	外面ハケ後ヨコナデ、内面ヘラミガキ後ナデ。	含長石・石英	橙色
292	溝11最上層	製塩土器	-	-	-	外面平行タタキ、内面ナデ。	含長石・石英	黄褐色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
293	溝11最上層	鉢	-	4.65	-	外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ、脚部ナデ。	含長石・石英・黒雲母	橙色
294	溝11最上層	脚部	-	6.3	-	内外面ハケ、端部内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
295	溝11最上層	製塙土器	-	7.0	-	外面平行タタキ、内面板ナデ他はナデ。	含長石・石英	橙色
296	溝11最上層	製塙土器	-	7.95	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
297	溝11最上層	製塙土器	-	4.5	-	外面平行タタキ、他はナデ。	含長石・石英	灰白色
298	溝11最上層	製塙土器	-	4.55	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
299	溝11最上層	製塙土器	-	4.6	-	内外面ナデ。	含長石・石英	淡赤褐色
300	溝11最上層	製塙土器	-	4.1	-	内外面ナデ。	含長石・石英	黄橙色
301	溝11最上層	手づくりね土器	-	2.0	-	内外面ナデ。	含長石・石英	黄灰色
302	溝11最上層	器台	-	-	-	外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ。内面鋸歯文。	含長石・石英	橙色
303	溝11最上層	特殊器台	-	-	-	外面綾杉文、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・角閃石	黄橙色
304	溝11最上層	器台	-	-	-	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ後ヨコナデ、赤色顔料の塗布。円孔。	含長石・石英	橙色
305	溝11上層	壺形土器	15.2	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ頸部以下ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
306	溝11上層	壺形土器	24.3	-	-	内外面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
307	溝11上層	壺形土器	-	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
308	溝11上層	壺形土器	17.0	-	-	外面ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
309	溝11上層	甕形土器	-	8.55	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後上半ナデ。	含長石・石英	黄橙色
310	溝11上層	壺形土器	15.3	-	-	外面ハケ、内面ハケ、胴部下半ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
311	溝11上層	壺形土器	-	5.4	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	含長石・石英	褐灰色
312	溝11上層	甕形土器	15.1	1.9	12.4	外面ハケ、内面ナデ、底部付近ユビオサエ。	含長石・石英・金雲母	灰黄色
313	溝11上層	甕形土器	15.7	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	黄橙色
314	溝11上層	甕形土器	12.4	2.0	16.8	外面タテハケ、内面ヘラケズリ、胴部ヘラケズリ、後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
315	溝11上層	甕形土器	14.7	4.5	17.3	外面ハケ、胴部内面ヘラケズリ後ハケ、口縁部内面ハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
316	溝11上層	甕形土器	14.7	1.0	17.4	外面タテハケ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・雲母	橙色
317	溝11上層	甕形土器	15.0	1.5	20.7	外面タテハケ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
318	溝11上層	甕形土器	15.1	3.8	17.1	外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
319	溝11上層	甕形土器	15.0	4.1	20.9	外面平行タタキ後タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
320	溝11上層	甕形土器	11.9	-	-	外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内面ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
321	溝11上層	甕形土器	15.2	6.5	22.6	外面タテハケ、内面タテハケ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母・赤色砂粒	黄橙色
322	溝11上層	甕	16.5	-	16.3	外面平行タタキ後タテハケ後下半ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
323	溝11上層	鉢(甌)	20.2	-	15.1	外面ナデ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	橙色
324	溝11上層	甕形土器	9.8	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
325	溝11上層	甕形土器	9.55	4.6	14.4	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
326	溝11上層	甕形土器	12.9	4.6	17.5	外面ハケ内面ヘラケズリ後一部ハケ、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	橙色
327	溝11上層	甕形土器	14.0	4.8	22.2	外面平行タタキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	黄橙色
328	溝11上層	甕形土器	14.5	-	-	外面平行タタキ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ、口縁部内面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	黄褐色
329	溝11上層	甕形土器	11.3	4.85	20.5	外面タテハケ後ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	黄橙色
330	溝11上層	甕形土器	14.7	6.2	20.4	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外端部凹線。	含長石・石英	赤褐色
331	溝11上層	甕形土器	13.8	7.85	20.4	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外端部凹線。	含長石・石英・黒雲母	黄橙色
332	溝11上層	高杯形土器	-	10.7	-	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
333	溝11上層	高杯形土器	-	11.5	-	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
334	溝11上層	高杯	-	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
335	溝11上層	器台	13.4	-	-	内外面ヘラミガキ、口縁部外端クシ描波状文2条、内面クシ描波状文1条、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
336	溝11上層	手づくりね土器	9.0	-	-	外面ナデ、内面ヘラケズリ一部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
337	溝11上層	手づくりね土器	6.9	2.0	7.2	外面ヘラケズリ他はナデ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	黄褐色
338	溝11上層	手づくりね土器	9.15	6.9	5.95	内外面ハケ。	含長石・石英	橙色
339	溝11上層	鉢形土器	11.5	-	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
340	溝11上層	鉢形土器	11.8	-	-	内外面ヘラミガキ、後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
341	溝11上層	脚台	-	7.4	-	内外面ナデ。	含長石・石英・黒雲母	黄橙色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
342	溝11上層	鉢形土器	8.2	4.85	6.2	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
343	溝11上層	手づくりね土器	-	4.0	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
344	溝11上層	製塙土器	-	3.6	-	内外面ユビナデ。	含長石・石英	橙色
345	溝11上層	製塙土器	-	4.5	-	内外面ユビナデ。	含長石・石英	灰白色
346	溝11上層	鉢形土器	10.6	3.3	6.35	調整不明。	含長石・石英・赤色砂粒	黄橙色
347	溝11上層	鉢形土器	11.6	3.9	7.2	外面ハケ後ナデ、内面ハケ。	含長石・石英	灰黄色
348	溝11上層	鉢形土器	11.4	3.1	6.35	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
349	溝11上層	手づくりね土器	12.4	-	4.0	外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	橙色
350	溝11上層	鉢	13.0	-	4.6	外面ナデ、内面ハケ。	含長石・石英	黄橙色
351	溝11上層	鉢	15.4	-	6.2	内外面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	黄橙色
352	溝11上層	鉢	15.1	-	7.65	外面ヘラケズリ、内面ハケ後ヘラミガキ。	含長石・石英	橙色
353	溝11上層	鉢形土器	14.4	5.0	8.5	内外面ヨコナデもしくはナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
354	溝11上層	鉢	19.4	-	7.95	外面ハケ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
355	溝11上層	鉢	10.2	-	8.0	外面ハケ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
356	溝11上層	鉢	20.4	-	8.6	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
357	溝11上層	鉢	17.3	-	7.1	内外面ヘラミガキ、外面口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
358	溝11上層	鉢	17.5	-	7.65	外面ヘラケズリ、内面ハケ後口縁部ナデ。	含長石・石英	橙色
359	溝11上層	鉢	17.9	-	9.6	内外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	橙色
360	溝11上層	鉢形土器	16.6	6.8	7.2	内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
361	溝11上層	鉢	18.5	-	9.7	外面ヘラケズリ後ハケ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	黄橙色
362	溝11上層	鉢	18.6	-	12.1	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
363	溝11上層	鉢	20.3	-	9.3	外面ヘラケズリ後ハケ、内面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
364	溝11上層	鉢	10.1	-	11.5	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄褐色
365	溝11上層	鉢	-	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	黄橙色
366	溝11上層	鉢	20.0	-	12.1	外面下半ヘラケズリ他はナデ、内面ハケ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	橙茶色
367	溝11下層	壺形土器	12.5	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ頸部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
368	溝11下層	壺形土器	19.1	-	-	外面ハケ後凹線12条、内面ハケ後ナデ、胴部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁外端部凹線4条。	含長石・石英	橙色
369	溝11下層	壺形土器	18.7	-	-	外面ハケ後凹線、内面ハケ後ナデ、胴部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
370	溝11下層	壺形土器	-	-	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内面上半ナデ下半ヘラケズリ。線刻文もしくは絵画あり。	含長石・石英	黄橙色
371	溝11下層	甕形土器	16.6	-	-	外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
372	溝11下層	甕形土器	13.3	-	-	外面平行タタキ後ハケ後一部ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色
373	溝11下層	甕形土器	15.9	-	-	外面胴部ハケ、内面ナデ、口縁部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	褐橙色
374	溝11下層	底部	-	6.1	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙色
375	溝11下層	甕形土器	14.6	-	-	内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ユビオサエ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	茶橙色
376	溝11下層	甕形土器	15.6	-	-	内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ユビオサエ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	茶橙色
377	溝11下層	甕形土器	15.8	-	-	内外面ナデ胴部ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ユビオサエ後下半ヘラケズリ。	含長石・石英・雲母・赤色砂粒	茶橙色
378	溝11下層	小型器台形土器	-	-	-	内外面ヘラミガキ、内面突堤部のみヨコナデ。内面にクシ描き波状文。	含長石・石英	赤褐色
379	溝11下層	小型器台形土器	-	-	-	外面ヘラミガキ、端部ヨコナデ、内面ナデ。クシ描き鋸歯文、波状文。	含長石・石英	橙色
380	溝11下層	小型器台形土器 (装飾高杯形土器)	-	17.6	-	外面ハケ後突堤部ヨコナデ後施文、内面ハケ後ヘラミガキ。クシ描き波状文、鋸歯文。	含長石・石英	橙色
381	溝11下層	高杯形土器	20.1	-	-	外面ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキ、受部ナデ。	含長石・石英	黄橙色
382	溝11下層	高杯形土器	14.3	-	-	口縁部外面クシ描き文後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰黄褐色
383	溝11下層	高杯形土器	14.2	-	-	内外面ナデ後ヘラミガキ。	含長石・石英	橙色
384	溝11下層	高杯形土器	18.3	-	-	内外面ナデ後ヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
385	溝11下層	高杯形土器	-	12.9	-	外面杯部ヘラミガキ、脚部ハケ後ヘラミガキ、内面杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙色
386	溝11下層	高杯形土器	-	9.9	-	外面ヘラミガキ、内面杯部ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ後ハケ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色
387	溝11下層	高杯形土器	-	10.6	-	外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙色
388	溝11下層	高杯形土器	-	9.4	-	外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙色
389	溝11下層	高杯形土器	-	10.8	-	外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
390	溝11下層	脚台部	-	7.7	-	外面ヘラミガキ、端部クシ描き文、内面ヘラケズリ、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
391	溝11下層	底部	-	4.2	-	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色
392	溝11下層	底部	-	2.8	-	外面平行タタキ、内面ナデ。	含長石・石英	黄橙色
393	溝11下層	手づくりね土器(ミニチュア)	5.0	3.6	7.4	外面ナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・靈母・赤色砂粒	橙色
394	溝11下層	手づくりね土器(ミニチュア)	4.8	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
395	溝11下層	壺形土器	10.6	-	-	外面ハケ後凹線、内面口縁部ヘラミガキ、頸部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外端部鋸歯文。	含長石・石英	橙色
396	溝11下層	小型器台形土器	10.7	-	-	外面下半ヘラミガキ、内面下半ヘラミガキ後ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
397	溝11下層	鉢形土器	20.4	3.8	8.75	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	含長石・石英	黄橙色
398	溝11下層	鉢形土器	19.9	-	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
399	溝11下層	鉢形土器	35.2	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰黄褐色
400	溝11下層	鉢形土器	9.8	3.7	6.2	外面ハケ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
401	溝11下層	鉢形土器	10.8	4.9	7.0	内外面ヘラミガキ、脚部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	黄橙色
402	溝11下層	鉢形土器	15.2	4.3	7.2	外面ハケ後ヘラミガキ後ナデ、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	灰褐色
403	溝11下層	鉢形土器	14.3	4.8	5.4	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
404	溝11下層	鉢形土器	17.6	-	-	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
405	溝11下層	脚台部	-	12	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後端部内外面ヨコナデ、胸部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
406	溝11下層	脚台部	-	11.3	-	外面ハケ後ナデ、内面ヘラミガキ後ナデ、脚部内面ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
407	溝11	脚台部	-	11.6	-	外面ハケ後ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ、胸部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・金雲母	褐色
408	溝13	壺形土器	4.2	-	-	外面ハケ後下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
409	溝13	壺形土器	9.85	-	-	外面ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキ、胸部ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
410	溝13	壺形土器	10.6	-	-	外面ハケ後施文(クシ描き波状文、直線文)、内面ナデ。	含長石・石英	灰白色
411	溝13	壺形土器	11.3	-	-	外面ヘラミガキ、内面口縁部ハケ、胸部ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。口縁部及び端部凹線文。	含長石・石英	橙色
412	溝13	壺形土器	11.0	-	-	外面ハケ、胸部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
413	溝13	壺形土器	11.8	-	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
414	溝13	壺形土器	16.0	-	-	外面ハケ後凹線文、刺突文、内面ハケ後ヘラミガキ胸部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
415	溝13	壺形土器	15.6	-	-	外面ハケ後凹線文、刺突文、内面ハケ後ヘラミガキ胸部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
416	溝13	壺形土器	18.2	-	-	外面ハケ後凹線文、内面ハケ胴部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成前穿孔1。	含長石・石英	褐灰色
417	溝13	壺形土器	17.3	-	-	外面ハケ後凹線文、内面ヘラミガキ後頸部胸部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	赤褐色
418	溝13	壺形土器	18.0	-	-	外面ハケ後凹線文、内面ヘラミガキ後頸部胸部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
419	溝13	壺形土器	-	-	-	胸部外ヘラミガキ後他ナデ、内面胸部ヘラケズリ、頸部ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
420	溝13	壺形土器	17.7	-	-	外面ハケ内面ヘラケズリ口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	褐灰色
421	溝13	壺形土器	17.5	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後胸部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
422	溝13	壺形土器	14.5	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ後ナデ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
423	溝13	甕形土器	20.4	-	-	外面ハケ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	橙色
424	溝13	壺形土器	16.3	-	-	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
425	溝13	壺形土器	20.2	-	-	外面ハケ、内面ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
426	溝13	甕形土器	16.6	7.2	15.9	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後ヘラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。口縁部に赤色顔料塗布。	含長石・石英	橙色
427	溝13	甕形土器	15.0	-	-	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙色
428	溝13	甕形土器	12.8	4.9	15.6	外面ハケ後ヘラミガキ、胸部内面ヘラケズリ頸部ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
429	溝13	底部	-	3.95	-	外面ハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	灰褐色
430	溝13	小型器台形土器	26.0	-	-	内外面ヘラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ後施文(クシ描き波状文)。	含長石・石英	黄褐色
431	溝13	小型器台形土器	-	20.2	-	外面ナデ後ヘラミガキ後施文(波状文)、内面ヨコナデ。	含長石・石英	赤褐色
432	溝13	小型器台形土器	20.5	-	-	内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ後施文(貝殻圧痕、鋸歯文、竹管文)。	含長石・石英	橙色
433	溝13	小型器台形土器	25.6	-	-	外面ヘラミガキ、内面ハケ後内外面ヨコナデ後施文(鋸歯文)。	含長石・石英	橙色
434	溝13	高杯形土器	24.8	-	-	内外面ヘラミガキ後ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
435	溝13	高杯形土器	19.8	11.45	-	内外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。赤色顔料塗布。	含長石・石英	赤褐色
436	溝13	高杯形土器	19.8	-	-	内外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石・石英	橙色
437	溝13	高杯形土器	15.8	-	-	内外面ヘラミガキ後ナデ。	含長石・石英	橙色
438	溝13	高杯形土器	15.8	-	-	内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
439	溝13	高杯形土器	-	15.3	-	外面ナデ後施文(クシ描き文)、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙色
440	溝13	高杯形土器	-	12.1	-	外面ヘラミガキ後ナデ後竹管文、内面ヘラミガキ後端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色

掲載番号	遺構	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高			
441	溝13	高杯形土器	-	11.9	-	外面へラミガキ後ナデ後施文(クシ描き文)、内面へラケズリ。端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	黄橙色
442	溝13	高杯形土器	-	11.6	-	外面へラミガキ後ナデ、内面ハケ後へラケズリ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
443	溝13	高杯形土器	-	-	-	外面へラミガキ後ナデ後施文(クシ描き文)、内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
444	溝13	高杯形土器	-	-	-	外面ハケ後ナデ後施文(クシ描き文、竹管文)、内面へラケズリ。	含長石・石英	灰白色
445	溝13	高杯形土器	-	11.5	-	外面ハケ後へラミガキ後ナデ、内面ハケ後ナデ。	含長石・石英	橙色
446	溝13	高杯形土器	-	11.4	-	外面へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ、端部内外面ヨコナデ。円孔には貫通と未貫通がある。貫通は規則的。	含長石・石英	橙色
447	溝13	高杯形土器	-	9.3	-	外面へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ後端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
448	溝13	高杯形土器	-	10.1	-	外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ、端部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
449	溝13	高杯形土器	-	5.2	-	外面ナデ後施文(クシ描き文)、内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
450	溝13	鉢形土器	12.0	-	-	外面上半ハケ下半へラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
451	溝13	鉢形土器	26.5	-	-	外面ハケ後へラミガキ、内面口縁部ハケ、胴部へラケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
452	溝13	手づくりね土器	6.3	2.4	5.85	外面へラミガキ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英・黒雲母	褐色
453	溝13	手づくりね土器	-	2.2	-	外面ハケ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英	黄褐色
454	溝13	底部	-	3.2	-	外面ナデ、内面へラミガキ後ナデ。	含長石・石英	橙色
455	溝13	底部(瓶)	-	7.8	-	外面ハケ、内面へラケズリ。底部に焼成前穿孔4。	含長石・石英	褐色
456	溝13	器台形土器	-	-	-	外面ハケ後凹線文、内面下半へラケズリ、上半ハケ後ユビオサエ。	含長石・石英	橙色
457	P 133	甕形土器	12.65	-	-	外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ後ナデ、口縁部外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	橙色
458	P 133	高杯形土器	19.1	-	-	外面へラミガキ、内面へラミガキ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
459	P 234	高杯形土器	21.0	-	-	杯部外面調整不明、杯部内面へラミガキ、脚部外面ハケ後へラミガキ、内面へラケズリ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
460	P 254	甕形土器	14.4	-	-	内外面へラミガキ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	赤褐色
461	P 254	高杯形土器	18.0	10.2	10.9	杯部外面調整不明、杯部内面一部へラミガキ、脚部外面ナデ、内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
462	P 254	鉢形土器	38.0	-	-	胴部外面ハケ、胴部内面調整不明、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
463	P 255	甕形土器	12.0	3.25	17.3	胴部外面タテハケ、胴部内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
464	P 255	甕形土器	14.9	4.3	20.8	胴部外面タテハケ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ後内面ヨコハケ。	含長石・石英	浅黄色
465	P 255	甕形土器	14.6	-	-	胴部外面へラミガキ後ナデ、胴部内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	黄橙色
466	P 260	甕形土器	15.5	-	-	胴部外面タテハケ、内面へラケズリ、口縁部内面ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	橙色
467	P 274	甕	12.5	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外端部クシ描文、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
468	P 274	高杯	13.6	11.8	11.1	調整不明。	含長石・石英	橙色
469	P 274	高杯形土器	-	14.3	-	調整不明。	含長石・石英	橙色
470	P 275	壺形土器	8.0	-	-	外面へラミガキ、胴部内面ハケ、口縁部内面へラミガキ、脚部内面ハケ。	含長石	橙色
471	P 275	甕形土器	10.65	-	-	胴部外面ハケ後へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	黄橙色
472	P 275	甕形土器	11.7	-	-	胴部外面ハケ後へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	浅黄色
473	P 275	甕形土器	12.9	-	-	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色
474	P 275	甕形土器	13.4	-	-	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へラケズリ。	含長石・石英	橙色
475	P 275	甕形土器	-	5.7	-	外面へラミガキ、内面へラケズリ後ユビオサエ。	含長石・石英	黄橙色
476	P 275	高杯形土器	12.2	10.6	8.8	外面へラミガキ後一部ナデ、杯部内面へラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石	橙色
477	P 275	高杯形土器	16.0	-	-	杯部内面ハケ後へラミガキ、外面へラミガキ、脚部外面ハケ、へラミガキ後ナデ。	含長石・石英	橙色
478	P 275	高杯形土器	15.8	-	-	杯部内外面へラミガキ、脚部外面へラミガキ。	含長石・石英	橙色
479	P 275	高杯形土器	26.5	15.4	13.1	外面および杯部内面へラミガキ、脚部内面ハケ。	含長石	橙色
480	P 275	壺形土器	12.5	7.5	16.5	胴部外面タテハケ後下半へラミガキ、内面へラケズリ、脚部端部・口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
481	P 276	甕形土器	14.1	-	-	胴部外面ハケ後ナデ、胴部内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
482	P 276	高杯形土器	22.6	-	-	杯部下半へラケズリ後外面ヨコナデ、脚部外面ハケ後へラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英	橙色
483	P 276	高杯形土器	-	13.25	-	外面ハケ後へラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英・黒雲母	橙色
484	P 278	甕形土器	15.4	5.6	15.9	胴部外面ハケ後内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色砂粒	橙色
485	P 278	甕形土器	15.9	-	-	胴部外面へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
486	P 278	高杯形土器	15.7	-	-	外面へラミガキ、内面へラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒雲母	橙色
487	P 278	鉢形土器	14.6	3.9	5.8	内外面へラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
488	P 301	甕形土器	12.9	5.8	24.3	胴部外面タテハケ後下半へラミガキ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色
489	P 314	甕形土器	14.4	-	-	胴部外面へラミガキ後ナデ、内面へラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	橙色

金属製品 : M

掲載番号	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 1	P 170	鎌	刃 176.0 茎 107.0	刃 32.0 茎 14.5	刃 3.0 茎 3.5	129.0	鉄	
M 2	豎穴住居17	鉄斧	83.0	42.0	先端 1.5 根元 22.0	119.42	鉄	
M 3	豎穴住居17	鉄鎌	刃 59.0 茎 19.0	刃 20.0 茎 10.0	刃 2.5 茎 6.0	16.08	鉄	
M 4	溝4・5	鉄鎌	41.0	24.3	5.0	10.32	鉄	
M 5	溝4・5	鉄鎌	刃 34.0 茎 15.5	刃 8.0 茎 55.0	刃 3.0 茎 45.0	4.06	鉄	
M 6	溝4・6	鉄鎌?	茎 36.5	茎 6.0	茎 6.0	4.35	鉄	
M 7	古墳時代後期包含層	刀子	刃 62.5	刃 12.5	刃 3.5	3.64	鉄	
M 8	豎穴住居21	鉈?	刃 42.3	刃 5.8	刃 3.5	1.95	鉄	
M 9	豎穴住居21	鉈?	刃 23.0 茎 18.5	刃 10.5 茎 7.0	刃 4.3 茎 6.0	4.63	鉄	
M10	豎穴住居21	鉈?	刃 48.0	刃 6.5	刃 5.0	5.0	鉄	

石製品 : S

掲載番号	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
S 1	豎穴住居13	砥石	147.0	75.0	24.0	469.7	砂岩	
S 2	豎穴住居15	砥石	98.0	32.0	25.0	96.3	砂岩	
S 3	豎穴住居15	砥石	88.5	48.0	22.0	123.5	砂岩	
S 4	豎穴住居22	砥石	110.0	55.0	37.5	314.2	凝灰岩	
S 5	豎穴住居22	砥石	84.0	37.0	21.0	138.7	凝灰岩	
S 6	豎穴住居22	砥石	85.0	50.0	20.0	164.2	不明	
S 7	豎穴住居22	砥石	71.0	71.5	42.0	444.2	凝灰岩	
S 8	溝15	砥石	37.5	48.0	41.0	103.0	砂岩	
S 9	豎穴住居21	砥石	56.5	22.0	15.5	27.4	不明	
S 10	溝11	砥石	79.0	31.0	21.0	60.4	凝灰岩	
S 11	溝11	砥石	113.0	24.5	18.9	70.26	凝灰岩	
S 12	弥生時代後期中葉包含層	大型蛤刃石斧	現存長 125.5	71.5	55.0	800.0	ヒン岩	

土製品 : C

掲載番号	遺構	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	胎土
			最大長	最大幅	最大厚			
C 1	P 147	土錐	55.0	25.0	26.5	32.88	橙色(7.5YR7/6)	0.5~1 mmの長石・石英
C 2	住12カマド内	土錐	38.0	39.0	28.5	37.15	鈍い黄橙色(10YR7/3)	0.5~1 mmの長石・石英
C 3	溝11	有孔円板	39.8	43.5	4.2	9.6	灰白色(10YR8/1)	0.5 mm前後の長石・石英・金雲母
C 4	溝11	土錐	52.5	24.5	23.5	34.1	橙色(7.5YR6/6)	0.5 mm前後の長石・石英
C 5	溝13	有孔円板	(36.2)	37.5	4.3	(5.9)	灰褐色(5Y4/2)	0.5 mm前後の長石・石英
C 6	弥生時代後期中葉包含層	土錐	4.0	2.0	1.73	14.1	淡黄色(2.5Y8/3)	0.5~1 mmの長石・石英
C 7	弥生時代後期中葉包含層	土錐	4.1	1.6	1.5	9.3	灰白色(2.5Y8/2)	0.5~1 mmの長石・石英

第IV章 結語

今回の調査によって、津寺(加茂小)遺跡の内容がある程度明らかとなつた。北側に隣接する別の微高地に広がる津寺遺跡との関係を合わせて整理することにより、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて、極めて突出する遺跡密度と墳丘墓の発達がなされた足守川中流域の地域社会を解明するための手掛かりを得ることができる。ここでは、その前操作業として、津寺(加茂小)遺跡の時期ごとにみる遺構の変遷を、かつて調査した校舎部分の成果を加味して概観する。さらに、当該地では高速道路等の建設に伴った膨大な発掘調査の成果や学術調査成果の蓄積もあることから、それらと今回の調査成果をあわせて、当該地における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての地域社会の変遷を若干追求してみたいと思う。

1. 津寺(加茂小)遺跡の遺構の変遷

体育館建設に伴い発掘調査した調査区(以下体育館調査区)と校舎建設に伴い発掘調査した調査区(以下校舎調査区)の遺構の変遷について整理する。なお、校舎調査区については、詳細な整理内容後に修正する内容を多く含んでいる。

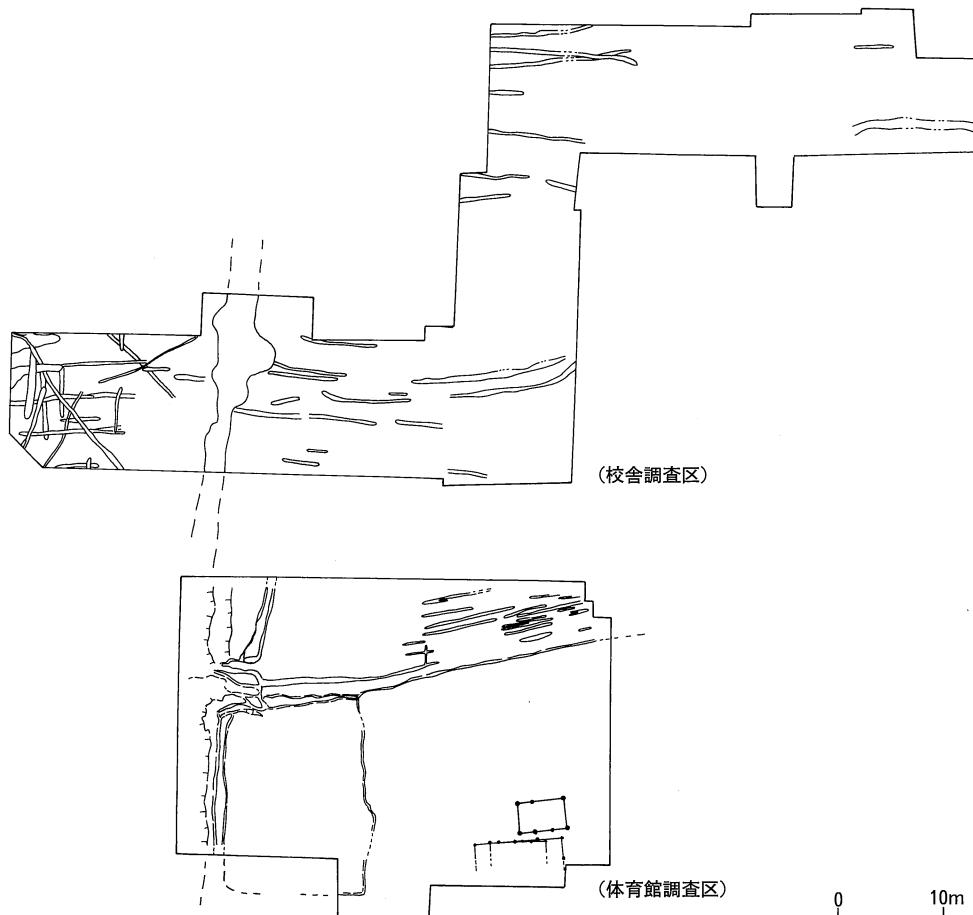


図119 中世後半(15世紀前後) 遺構配置図

(1) 中世後半：15世紀前後（図119）

15世紀を中心とした中世後半において、校舎調査区では耕作に関係する素掘溝のみが検出されており、集落地からは距離を有していたと考えられる状況である。素掘溝は、断面U字形で、それ程深くないことから、鋤痕跡である可能性が考えられる。校舎調査区の南西部、調査範囲のなかでは最も地形的に低い部分では、素堀溝が錯綜しているが、ほかについては東西方向のみとなる。校舎調査区の北東部分では、幅20m前後の素掘溝の検出されない空白部分がある。この空白部分には、水田畦畔もしくは通路等が存在していた可能性がある。

一方、体育館調査区では、東西方向の素堀溝と畦畔、掘立柱建物が検出された。畦畔は基盤層を削り出して整形している。集落域となる微高地についても端部が直線的に削られており、削られた部分については水田耕土が認められることから、水田区画を反映させてているといえる。そうすると、調査区南西部付近では東西12m、南北20mほどの方形の水田区画が認められる。津寺遺跡周辺の平野部は、条里地割が認められない地域であり、不整形な水田区画が連続する。ただし、それらを個別的にみると、微高地及び微高地間を流れた幾筋もの河道によって形成された微地形に規定されているが、小区画水田というわけではなく、微地形に即した大区画の内部は比較的大きく直線的に区画している様相がみられる。大区画内の直線的区画という点だけを取り上げてみると、該期の水田畦畔と共に通する。すなわち、現在の水田景観は、少なくとも15世紀には形成されていた可能性がある。

体育館調査区の南端では、掘立柱建物が3棟検出されている。そのうち1棟については、同じ位置で、しかも同じ方向性を有している。遺構数は多くないが、安定的な集落であったことがうかがわれる。さらに、この建物の棟方向と北側で検出されている素掘溝の方向性は一致している。周辺における近世以降の集落の屋敷地と建物の関係をみてみると、屋敷地は直線的な水田畦畔の一部をなすものであり、建物もその方向性に即して建てられている。該期における集落も基本的には同様の景観であったことが推測される。

以上のことから、15世紀における景観は、基本的には現代にまで踏襲されてきたものといえる。

(2) 中世前半：13世紀前後（図120）

体育館調査区で水田層は検出されず、全面微高地となる。調査区西端については、弥生時代から低位部であり、当該期でも水田域である可能性は高い。校舎調査区では、掘立柱建物が、調査区中央附近に南北方向の帶状にまとまって検出されている。これらは調査区北側にまとまるということから、北群とする。北群の南端は体育館調査区北端で検出された建物群である。建物の配置は、体育館調査区では比較的規則性がうかがわれるが、校舎調査区ではそれ程認められない。建物がある程度まとまる塊村的な景観ではあるが、その方向性までも規定するような景観ではなかったようである。

掘立柱建物以外では土器埋納遺構と土壙墓がある。それらの配置をみてみると、土器埋納遺構は、体育館調査区の中央北側、北群の南端やや西よりに位置することになる。北群の南端を画しているように思われる。ただし、その北側には南北の棟方向である掘立柱建物があり、その東側の側柱の方向の延長線上に位置することから、建物に付随する可能性も否定できない。ただし、同様の土器埋納遺構がほかに見られないことから、前者である可能性が高いと考えられる。土壙墓については、校舎調査区で2基検出されている。土壙墓は単独で存在しており、しかも北群の西側と東側に位置している。土器埋納遺構が北群の南端を画するとすると、2つの土壙墓は、北群の東西を画する位置関係になる。

中世前半における土壙墓は、まだ宅地への所有権が未成熟な段階で出現したもので、宅地の所有権を主張するための役割を有していた(橋田1991)とされる。当調査区での土壙墓の分布についても、単なる墓としてではなく、北群建物の範囲を意識した占地をしているといえることから、北群の屋敷地群の存在のために設定されたと考えることが妥当であろう。あるいは、2つの屋敷墓ととらえると、少なくとも北群の建物群は2単位以上の屋敷地で構成されていたということになろうか。

体育館調査区では、北群の南端から南に約15mの空間地においてその南に掘立柱建物が検出されている。これを南群と呼称する。南群については、大半が調査区外へ出ることから、北群ほどは実態が明らかではないが、北群とは異なる点が幾つか認められる。まず建物の北西を画するための目隠し塀があり、さらに建物の北東コーナー付近には雨落ち溝がある。北群の建物には、目隠し塀や雨落ち溝を伴う建物は認められない。その一方で、土壙墓と推測される土壙が数基認められる。それぞれ、主軸方向が平行かもしくは直交する関係になり、規則的である。土壙墓群を形成している。出土遺物からすると、北群と南群には時期差がほとんど認められない。北群の建物は重複していることから、ある程度の存続幅を想定することも可能であり、その内で南群と同時期に存在していた時期もあったと考えてよい。そうすると、単数の屋敷墓を伴う屋敷地と土壙群を形成しつつある屋敷地が併存していた景観となる。14世紀になると、当地においては、丘陵部に墓域を形成する。それらは、ある程度規則的な区画や単位が抽出できることから、惣墓と考えられる(草原1998)。したがって、南群の土壙墓

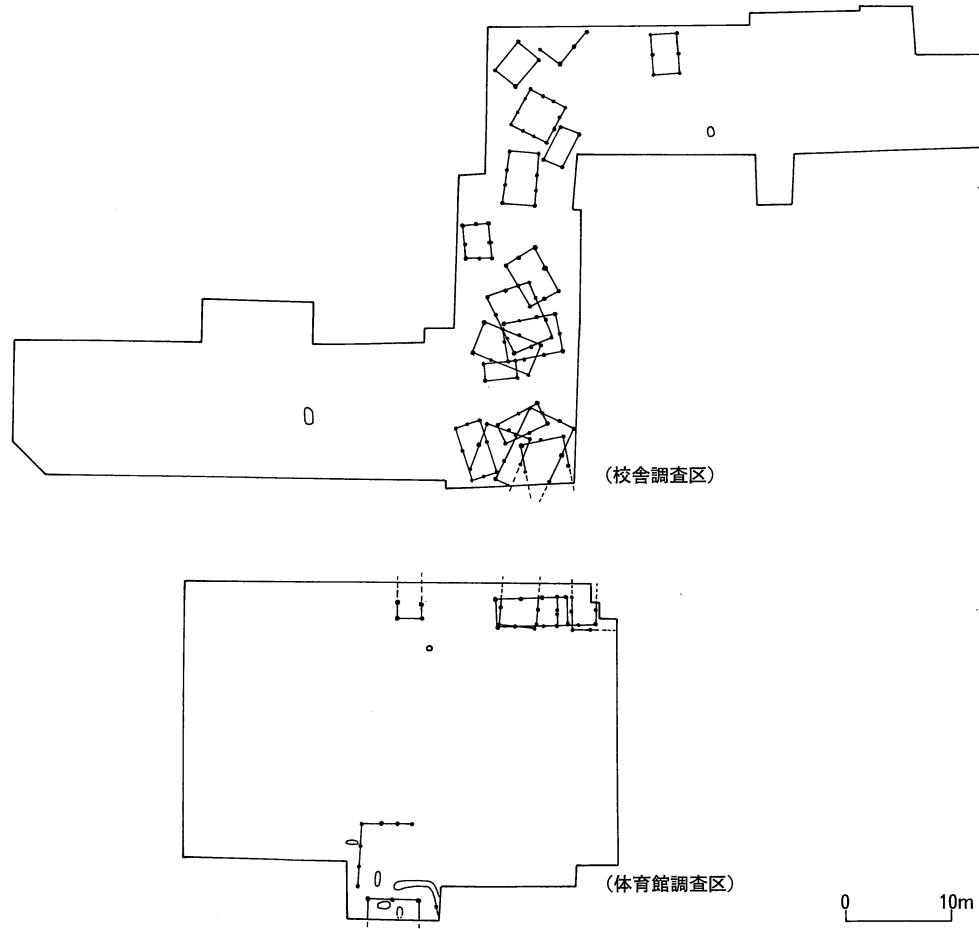


図120 中世前半(13世紀前後) 遺構配置図

群については、北群と比べると惣墓の景観に近く、先進性がうかがわれる。また、建物に関して、塀や雨落ち溝などが装備されており、北群よりも階層的に上位の居住者であったと考えることが妥当であろう。つまり、北群は一般的な屋敷地、南群はより上位階層の屋敷地であるが、南群の周囲には堀割り等の明確な区画が備わっていないことから、その差はあまりなかったものと考えてよい。しかしながら、当該期の集落の様相は、次の時期に生じてくる変化、惣墓の出現等がどのような過程であらわれてくるのかを追求する上では極めて興味深い資料といえるであろう。

(3) 7・8世紀 (図121)

校舎調査区の東側では、掘立柱建物がまとまって検出された。多くの柱穴が検出されており、その方向に規則性はあまり認められないが、柱穴掘り方の平面形は方形である。周辺から銅製帶金具や土馬も出土している。遺構の様相からは、遺跡の明確な位置づけは難しいが、出土している遺物からは官衙関連の遺跡であることも推測される。さらに、遺構の広がりという点でみてみると、柱穴の分布が限定的であることから、建物配置などは不明ではあるが、独立した居住区のようなものが設定されていたと考えることは可能であろう。調査区西端では南北方向の直線的な溝が検出されている。最終埋土から出土した土器は、古代の中頃の時期ではあった。体育馆調査区では、この溝と関係すると推測される溝が検出されている。それは調査区の北側で東側に方向を変えて、あるいは直角に分岐して

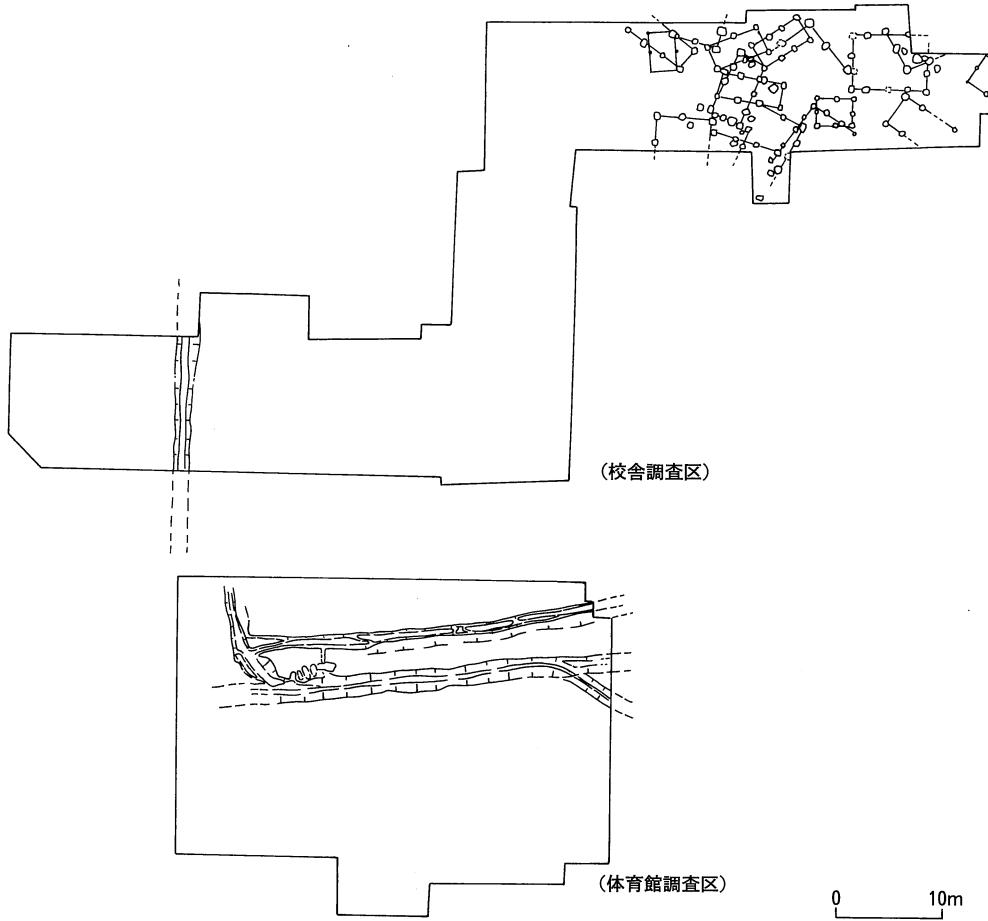


図121 7・8世紀 遺構配置図

いる溝であり、さらに2本平行している。北側の溝は規模も小さく浅い。溝底面も凹凸があり、検出面での溝の平面形も幾つかの単位が認められる。底面の凹凸と検出面の単位とは一致することから、幾つかの小規模な溝が連結して溝になっているといえる。このような溝のあり方は、津寺遺跡(高畠ほか1998)で検出されている官衙建物を方形に取り囲む2重溝と共通するものである。外側の溝はかなり規模が大きく、底面も通水が可能なように平坦となっている。調査区の西端では直角に北側へ曲がっており、枝溝で内側の溝と接続する。校舎調査区の溝のように最上層には遺物が含まれておらず、埋土全体からも遺物の出土量は極めて少ない。したがって、校舎調査区と体育館調査区とで検出された溝が整合する可能性は詰めきれないが、方向性からは極めて可能性が高いと考えられる。さらに、外側の溝からは埠が1点出土しており、含まれる遺物が極めて少ないとからも、一般的な水路とはいえないようと思われる。区画を目的とした溝と考えられる。

この時期の遺跡の性格を推測すると、規則的な性格を有する溝によって区画されていることと、建物空間が限定的であること、銅製帶金具も出土していることから、官衙的性格が強いと考えられる。しかしながら、建物の方向性や配置に規則性が少ないと勘案すると、官衙の中心部とはいえない。また建物周辺からは土器も少なからず出土しており、居住域の性格が強いようと思われる。津寺遺跡は、区画溝の規則性や内部の建物の方向性が規則的であることから、官衙の中心、もしくは中心施設の一部と考えてよい。そうすると、津寺(加茂小)遺跡については、官衙周辺部に展開していた官人等の居住域の一部であった可能性が推測される。そうすると、津寺遺跡の周辺は、少なくとも径1kmのかなり広域にわたって関係官衙域が形成されていたということになる。下野国府域や筑後国府域のような景観が展開していたと推測されるのである。これは、単に付近を古代山陽道が通っていたことに起因するのではない。また、古代的な景観を整理すると、足守川流域の平野の中央部に津寺遺跡は位置し、足守川河口部には古代の港湾施設と考えられる川入遺跡(草原2006)が存在する。川入遺跡は、寺院施設を伴い、しかも2つの郡域にまたがっている。寺院施設を伴う官衙は、県下での例では郡衙であることから、川入遺跡は郡衙クラスといえる。さらに郡域をまたいでいることから、郡以上の官衙に通じる港湾施設、国府津であると考えられる。

足守川流域平野の北端の山稜上には、古代山城である鬼ノ城山城がある。つまり、港湾施設と平野背後の古代山城のちょうど中間に、あるいは中央に津寺遺跡が存在するということになる。言い換えれば、古代山城と港湾施設の中核機能を有する官衙が津寺遺跡周辺には存在していた可能性があるのである。古代前半期における備中国府の存在を想定したい。

(4) 古墳時代中・後期（図122）

古墳時代後期(6世紀後半～7世紀初頭)と古墳時代中期(5世紀末～6世紀初頭)の2時期の遺構が重複する。校舎調査区では、6世紀後半の遺構面では、極めて多くの竪穴住居が検出され、重複も著しい。実年代は50年に満たないと考えられ、その短期間の間に多くの竪穴住居が建て替えられたことになる。津寺遺跡での該期の様相は、集積した竪穴住居とそれらを区画する小溝で構成されている。区画は、竪穴住居数棟を囲んでおり、屋敷地とでもいえる区画である。区内で竪穴住居を建て替えており、ある程度安定した屋敷地であったことがうかがわれる。しかしながら、溝を伴った屋敷地以外の場所でも竪穴住居の重複が認められ、植栽等の区画を伴った屋敷地である可能性がある。ただ、溝による区画は、区画溝を共有している場合もあるほどに隣接しており、密集した屋敷地の様相を呈

する。微高地のかなり広範囲を調査した津寺遺跡の様相をみると、安定した微高地中央部には住居が希薄で、むしろ低位部分に竪穴住居が密集する様相を呈する。地形的な見地からも当該期の集落の占地は、自然発生的な集落よりも何らかの規制を受けた集落の要素が多い。この時期の集落は、7世紀になると竪穴住居から掘立柱建物へと変化する。掘立柱建物の集落は、建物の方向性を統一するなど規則性があるが、小溝によって区画された屋敷地が密集する形態であることから、基本的には6世紀後半の集落の延長線上にある(草原2005)。掘立柱建物には、残存している柱材から針葉樹が用いられていることが多い、少なくとも、沖積地に位置する集落周辺にはそれ程存在しているものではない。寺院の造営で推測されている計画的な資材の供給システムの存在が必要である。6世紀後半の集落が出発点となる集落の帰結といえる(草原2004)。

体育館調査区では、調査区の北端に東西方向の溝があり、何度か掘り直しが認められる。津寺遺跡での様相から推測すると、屋敷地の区画溝である可能性が高い。校舎調査区の区画溝であろう。それが何度か掘り直されており、区画内の竪穴住居がかなり重複していることから、安定した屋敷地であったことがうかがわれる。その区画の南側には、やや小規模な竪穴住居が散在的に分布している景観といえる。安定した屋敷地と、ある意味で不安定な屋敷地の様相がとらえられているといえる。この相違についてはよくわからないが、出土遺物での相違はないように思われる。ただ、竪穴住居の規模がやや後者の方が小さいように見える。この点については、より多く事例から検討する必要がある。

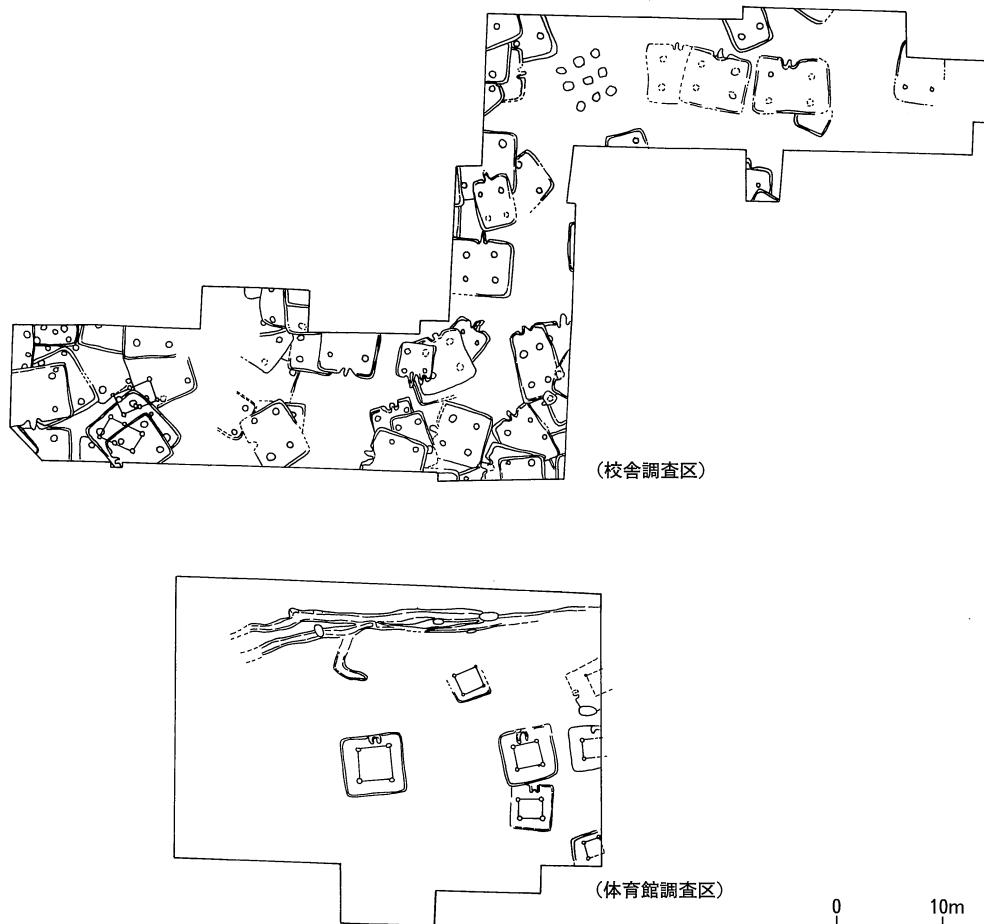


図122 古墳時代中・後期 遺構配置図

5世紀末～6世紀初頭の時期は、校舎調査区で数軒の竪穴住居が検出されただけで、しかも散在的に分布している。体育館調査区では、6世紀後半の様相とほとんど変わらないように見えるが、カマドの方向が北側に統一された竪穴住居が4軒まとまって検出されており、校舎調査区よりも安定した様相を呈する。該期における集落は、竪穴住居1軒だけで構成されるものや、あるいは1軒が1単位となって集落を構成しているものも多い(草原2005)。そのため、校舎調査区での竪穴住居のあり方は、特に弱小単位の様相を呈しているとはいえない。むしろ、体育館調査区で検出された竪穴住居の単位が、規則的で安定した単位の存在を示すものと考えることができる。竪穴住居の居住者は、血縁関係の最小単位とイコールの関係になると考えることができる。すなわち家族である。この家族は、竪穴住居が1軒で存在している例があることから、生産活動の最小単位であるともいえる。竪穴住居が複数集まつた単位は、血縁的な観点からすると、大家族の存在を示しており、一方では有る程度大規模経営をおこなった単位の存在も示している。校舎調査区と体育館調査区の様相は、この時期の集落遺跡の様相を極めて先鋭的に示している。大規模経営に成功している大家族と零細的な経営をおこなっている小家族とが1つの集落に同居しているということである。両者は、それぞれ単独の単位で1つの集落遺跡を形成していることもあることから、該期における普遍的な集落単位である。おそらく、そのことは、大規模経営に成功している大家族が、発展的に成長していくことが普遍的ではなかったことも示している。大規模経営が失敗すると、すぐに零細的な小規模経営に転落したのであり、集落内にできあがった格差が時期をおくごとに拡大するといったものではなかったのである。そのため、該期における社会の基層となる家族=農業経営の最小基本単位は、経営拡大を指向するがために不安定な状況であったといえる。それは、零細的な単位が安定して社会の基層を形成していた場合、再生産に向けられない余剰が発生しやすく、それを巨大な古墳築造に向けることによって消費していたが、該期に至ってそのメカニズムが崩壊したと考えられる。5世紀後半から末において、足守川流域での巨大古墳の築造は停止する。この現象については、一般的に『古事記』や『日本書紀』に描かれている吉備の反乱伝承に結びつけられている。畿内政権との政治的な抗争に敗れた吉備政権という構図である。

集落遺跡の動向からみると、基層となる農業経営単位が、それぞれに発展的な成長を目指すことにより、これまで生じていた余剰をすべて再生産に向かわせたことが、古墳築造の減退へと結びついたのだと考えられるのである。このことは、6世紀後半から7世紀初頭に帰結を迎える。校舎調査区や津寺遺跡に認められる溝で区画された屋敷地の中に数多くの重複する竪穴住居があり、しかもそういう単位が隣接していくつも認められることは、大規模経営が等質的で安定的に存在してきていることを示している。それは、周囲の丘陵上に数多くの横穴式石室を内包した古墳が営まれることに対応する。さらにこの後、中央にしか存在しない都城を造営した律令国家が出現するのである。安定した大規模経営をおこなう単位を基層とした社会が、古代国家出現の前提条件にあるといえるのではなかろうか。

(5) 弥生時代後期末～古墳時代前期（図123）

弥生時代後期末～古墳時代前期では、校舎調査区では竪穴住居が検出されていない。調査区の中央付近で、幅15mほどの南北方向に小判型の土壙や土器棺がまとまる。土壙は形状から土壙墓であると考えられ、まとまっていることから墓域を形成しているといえる。

これらの遺構からは、副葬品は検出されておらず、最下層の墓であるといえる。古墳に埋葬されていない人々の墓制のあり方を示す事例といえる。

体育館調査区では、竪穴住居、掘立柱建物、溝が検出されている。竪穴住居は全体的に小規模であるが、同じ地点で重複する場合も少なからず認められる。しかしながら、全体としては竪穴住居の分布は希薄な感が否めない。津寺遺跡では、該期には数多くの竪穴住居があり、地域の拠点的集落であることは疑えない状況であるのとは対照的にみえる。しかしながら、体育館調査区の東側では、区画溝と推測される矩形の溝が検出されており、区画の内部には掘立柱建物も検出されている。竪穴住居からは、大型の部類に入る鼓形器台と壺のセットが出土しており、いずれも丹塗りされている。比較的小規模な竪穴住居を周囲に配置した豪族居館の一部である可能性も推測されるのである。ただし、区画溝は、上面を削平されているとはいっても小規模であり、三ツ寺遺跡クラスの居館ではないと推測される。また、下位階層に属する墓域も付随していることも注目される。

出土する土器についても、少し組成に相違が認められる。とくに溝や弥生時代後期中葉の溝の上面に形成された斜面堆積から出土した土器をみると、いわゆる吉備型甕の比率が低い。吉備型甕以外で最も多いのは、「く」字形に外反する口縁部をもち、外面調整に粗いタテハケをおこなうものである。この種の甕は、県南西部ではある程度認められるが、当遺跡ではかなりの比率を占める。その他、讃岐系の土器と山陰系の土器が認められるが、讃岐系の方が若干古くから認められ、さらに多い。畿内

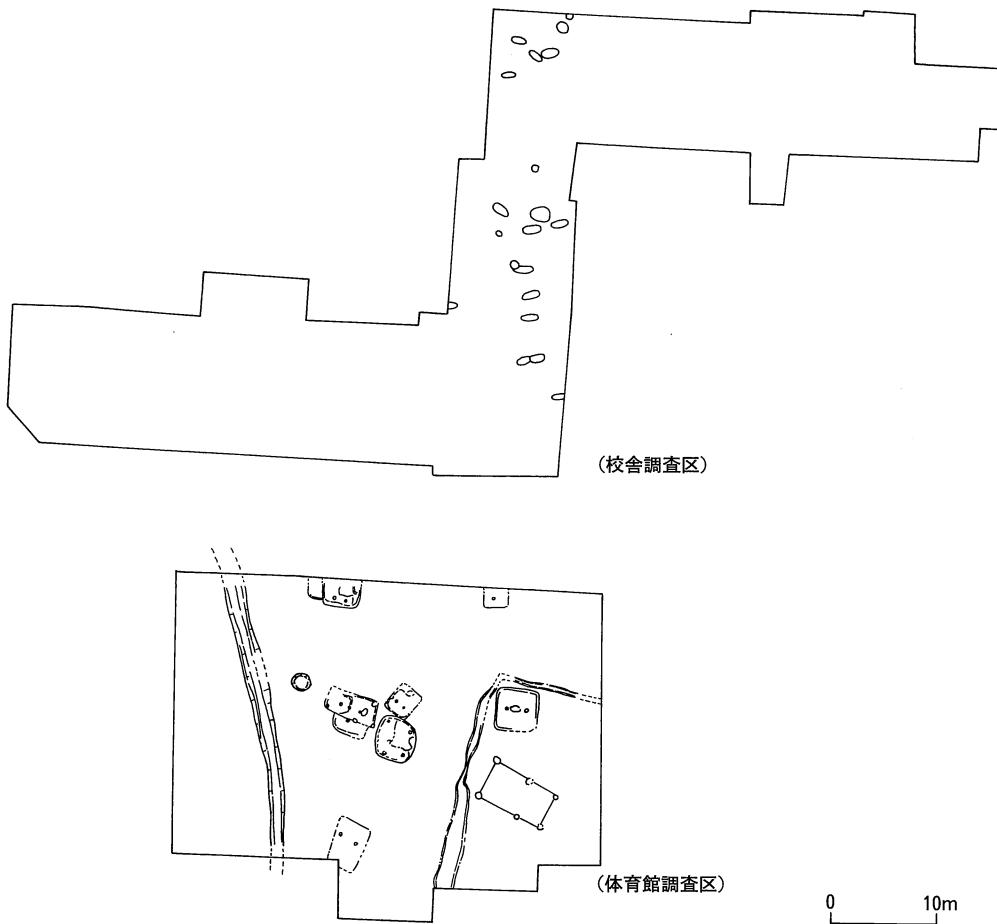


図123 弥生時代後期末～古墳時代前期 遺構配置図

系やいわゆる島嶼部の土器もそれよりも比率的には低くなるが認められる。遺跡の性格と出土土器の比率差については、厳密に追求するほどにはデータの蓄積がおこなわれていないが、おそらく、この時期の錯綜した交流関係を示している可能性が高い。奈良盆地でも山陰系の土器や庄内式土器の出土比率の異なる遺跡が認められる。将来的には、外来系土器の構成比率によって遺跡の性格までも推測できるようになるものと思われる。

(6) 弥生時代中期末～後期中葉（図124）

弥生時代中期末と後期中葉の2時期の遺構が検出されている。まず、校舎調査区では竪穴住居6軒と溝が検出された。調査区中央付近で北西から南東方向に平行する溝2本は、中期末の時期である。微高地の中央を分断するように掘削されている。幅は5m前後もあり、深さは1.7mにも達する。人為的に掘削された極めて規模の大きな溝である。推測される微高地の形状と溝の方向性から、2本の溝は微高地の中央付近を南北方向に貫通している可能性が高い。溝の北側には中期末の竪穴住居が検出されているが、南側では顕著な遺構は認められない。環濠等の集落を区画する機能を想定するよりも、微高地南側の低位部への水田開発のために掘削された溝か、もしくは微高地北側の水田の排水路として掘削された溝である可能性が高いように思われる。そうすると、溝の掘削距離は推測される微

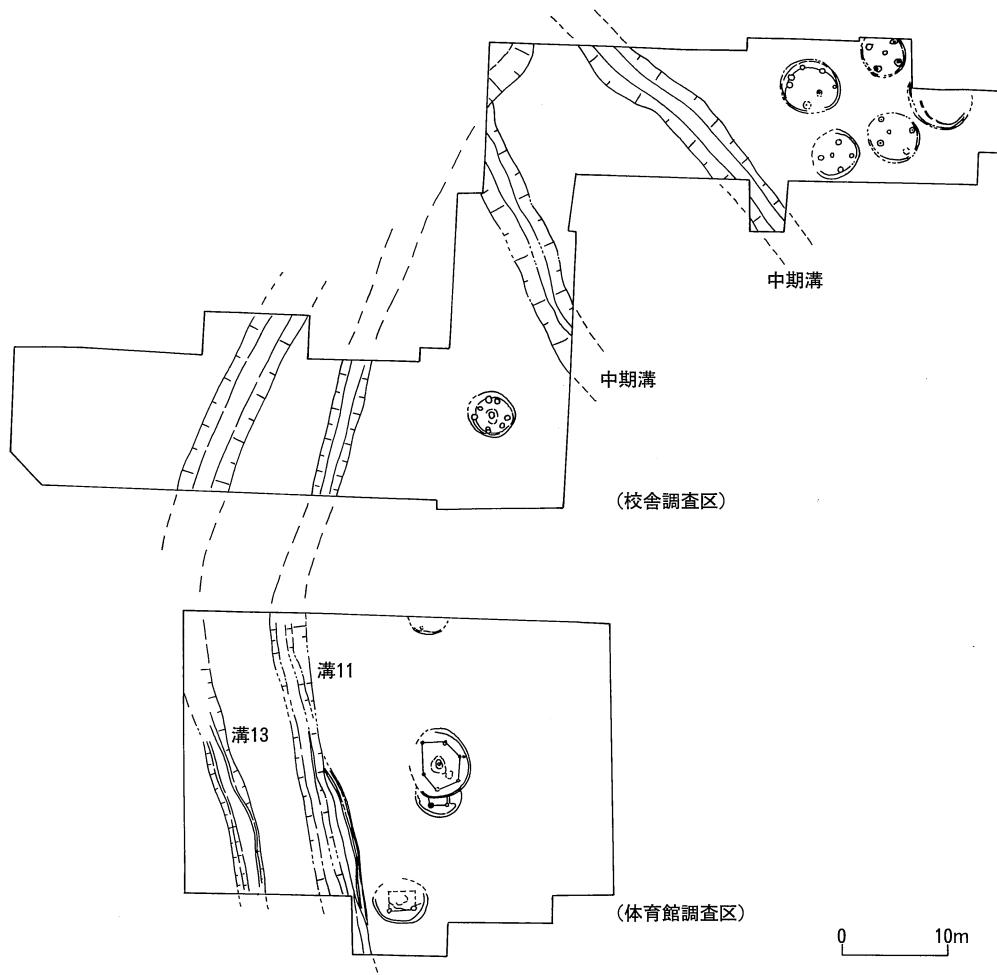


図124 弥生時代中期末～後期中葉 遺構配置図

高地の範囲を越えると予想され、長さは200mを越える。校舎調査区や体育館調査区で出土した該期の土器の大半は溝の埋土から出土したもので、とくに体育館調査区からは極めて少量しか出土しておらず遺構も検出されていない。中期末の集落は、微高地の一部に広がる程度の規模であったのであろう。検出された大規模な溝をこの集落だけで掘削したとは思われない。おそらく周辺集落との協業によって開削がおこなわれたと考えられる。

中期末の足守川流域の集落は、極めて特徴的な分布状況を呈する。それまで集落の形成が顕著ではなかったが、該期になって小規模な集落が丘陵部や丘陵裾部に爆発的ともいえる数で出現し、次の後期初頭にはそれらがなくなり、その代わりに微高地へ大規模な集落が形成される。中期末の小規模集落が結集して平野部の大規模開発をおこない、その結果、後期初頭の大規模集落が出現したと考えられる(草原2002)。校舎調査区の溝の掘削は、中期末の開発の様相を具体的に示す遺構であるといえる。

後期初頭になると、津寺遺跡では大規模な集落が形成されるが、津寺(加茂小)遺跡では認められず、津寺遺跡へ集約された結果と考えられる。遺構が認められるのは後期中葉からで、この時期の津寺遺跡は、極端に集落規模が縮小、あるいは消失する。津寺(加茂小)遺跡でも竪穴住居等は認められるが、遺構・遺物の量はそれほど多いわけではない。

まず検出された遺構は、溝と竪穴住居である。溝は微高地縁辺をめぐっており、微高地周囲の水田の給排水用いられた用水路であったと考えられる。2本平行して検出されているが、同時に存在していない可能性もあり、掘り直しの結果とも考えられる。溝の埋土からは数多くの土器が出土しており、微高地端部であることが古墳時代前期まで引き続いていることから、後期中葉～古墳時代前期の時期幅の土器が斜面堆積状で出土している。その中で特筆すべき遺物が出土している。それは土偶(溝11)と特殊器台(溝13)である。土偶は校舎調査区で出土し(図125)、頸部以下は欠損しているが、顔面部には線刻によって鯨面を表現している。両目の上下に円弧状の線刻を施すことは、各地の絵画資料で認められており、当時倭人の特徴とされた鯨面文身、いわゆる入れ墨の共通パターンの1つであることを示している。

特殊器台は、校舎調査区と体育館調査区からそれぞれ出土している。校舎調査区から出土したもの(図126)から全形をうかがうことができる。いわゆる立坂型である。津寺(加茂小)遺跡の南に位置する加茂B遺跡からも特殊器台が出土しており、足守川流域の集落遺跡では特殊器台を出土することがある。おそらくこういったことは、この地において特殊器台が出現したからで、同様に都月型特殊器台形埴輪を出現させた大和纏向遺跡で同埴輪の破片

が出土している(石野ほか1976)ことも同様に解釈できるのではなかろうか。

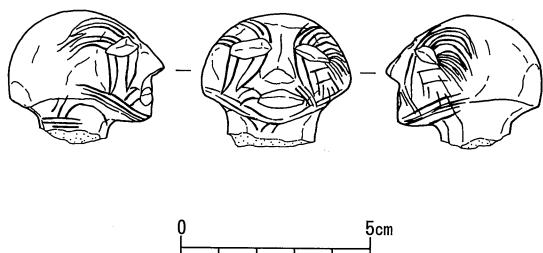


図125 校舎調査区溝11出土土偶（1/2）

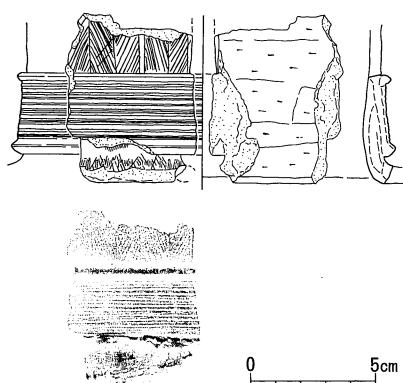


図126 校舎調査区溝13出土特殊器台（1/3）
(安川満実測)

竪穴住居は校舎調査区で1軒、体育館調査区で4軒検出されている。いずれも拡幅されているものや同じ地点で建て替えされていることから、規模はそれ程大きくないが、安定した集落であったといえる。竪穴住居は10m前後の距離をおいて分布しており、規則的でもあることから、建て替えや切り合いは別として、10mほどの距離をおいて並存していたことが想定される。

引用文献

- 石野博信・関川尚功 1976『纏向』桜井市教育委員会
橋田正徳 1991「屋敷墓試論」『中世土器の基礎研究』Ⅲ 中世土器研究会
高畠知功^{ほか} 1998『津寺遺跡』5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』127
草原孝典 1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
草原孝典 2002「集落遺跡の変遷からみた水田経営の画期」『瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
草原孝典 2004「8世紀における集落の一類型」『古代文化』
草原孝典 2005『赤田東遺跡』岡山市教育委員会
草原孝典 2006『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会

2. 弥生時代後期から古墳時代初頭の足守川流域の集団関係

岡山県から広島県東部にかけての地域は、律令制下において備前国、備中国、備後国、美作国の4国の範囲に相当する。美作国成立はその中で最も新しく、和銅6(713)年に備前国の6郡を分割して設定された。備前国から分割されて成立した美作国のあり方は、残りの3国の成立も同様であったことを推測させられる。律令制下の国が成立する以前は、同地域は吉備と称される地域であった。吉備を前・中・後に分割したのが備前国・備中国・備後国と一般的に考えられている。これは極めてシンプルな考え方で、律令制下の国とそれ以前のクニを同じ俎上で比較することは短絡的であるといえる。しかしながら大まかなイメージとして、その範囲が吉備といわれた地域に相当すると考えることは可能であろう。

吉備は、弥生時代後期になって汎列島的な動向を示す。瀬戸内海に面した沖積平野に大規模な集落遺跡がいくつも形成され、さらに後期中葉には、弥生時代においては最大規模となる特定個人墓が出現した。さらに葬送祭祀に特化された器物も創設され、個人墓と共に次の古墳時代へと続く、あるいは端緒となる地域であった。今回調査をおこなった津寺(加茂小)遺跡も吉備の一部に位置づけられる集落である。とくに津寺(加茂小)遺跡の存在する足守川下流域の平野部については、遺跡の密集度が突出しており、吉備の中枢地と考えてよい。ここでは、その足守川下流域の集落と墓の様相を整理し、吉備中枢地が弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけてどのように変遷したのかを模式的に描いてみることにする。

(1) 墓の様相

足守川下流域における弥生時代後期の集落遺跡と該期の墓の分布(図127)をみると、平野部に集落遺跡が、周囲の丘陵部に墓が分布している。墓には墳丘を有する墳丘墓と墳丘を有しない無墳丘墓がある。当地における弥生時代の墓は、弥生時代前期中葉から中期前半の時期に、堂免貝塚(馬場2006)や百間川沢田遺跡(二宮^{ほか}1985)で、中心に埋葬施設を1基ともなう径10m以下の円形周溝墓があるが、

この墓制は単発的であり、以降の時期の墓制としては引き継がれない。一般的な墓制としては土壙墓で、群を形成する場合が多い。ただ、群の形状が列状や円環状になることを指摘する考え(草原1992・小林2000)もある。しかしながら、そういう群としての形状も後の墓制に引き継がれた形跡は認められない。

では、当地における弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての墓の様相をみてみよう。各時期の変遷を整理する基本となる土器編年については、後期は後I～後IV期の4期に区分し、古墳時代前期は古I期～古III期の3期に区分する。とくに畿内地域との併行関係については、後IV期が庄内式(古)の時期、古I期が庄内式(新)の時期、古II期が布留式(古)段階、もしくは布留0式段階である。

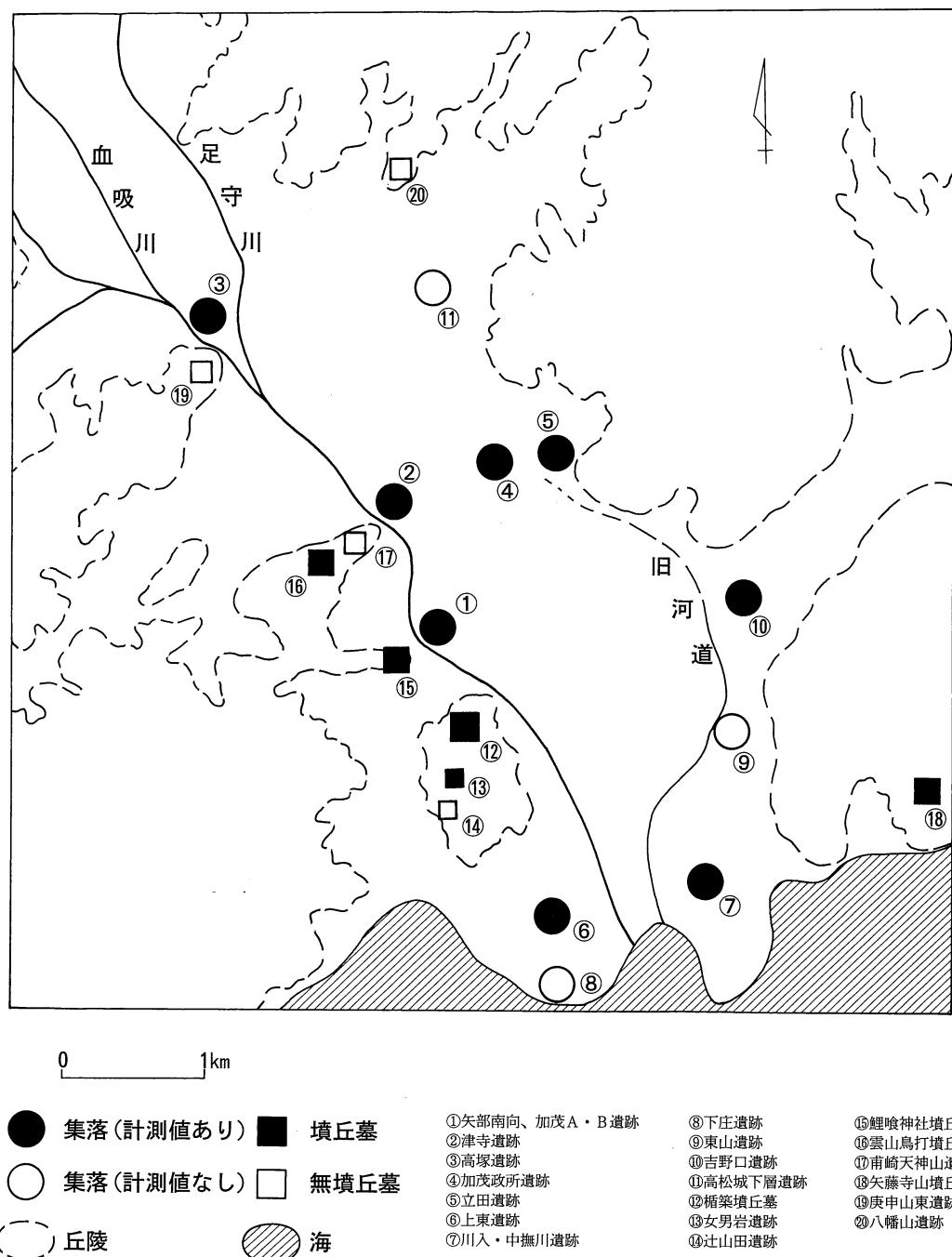


図127 足守川下流域の集落遺跡・墓 分布図

【後I・II期】

後I・II期では、甫崎天神山遺跡(宇垣ほか1994)の例がある(図128)。丘陵部の尾根部分を利用して10～20基程度でまとまる土壙墓群を形成する。同時期のみそのお遺跡(椿ほか1987)では、列石を伴う低墳丘上に土壙墓が並ぶことから、本来的には墳丘を備えていた可能性がある。しかしながら、土壙の残存状態からしてもそれ程顕著な墳丘が存在していたとはいえない。墓域を示す表示程度の意味での墳丘が存在していたのであろう。このような墳丘については、群構成をなす土壙墓が中期の南方遺跡でも認められており、後期以前から存在していた可能性は高い。つまり、後I・II期の墓制は後期以前の系譜を引く墓制の中に位置づけられるものといえる。

【後III期】

後III期になると、一変する。平野の中央部に位置する独立低丘陵上に、復元全長が80mにも達するという双方中円形の墳丘墓が出現する(図129)。楯築墳丘墓である(近藤1992)。墳丘中央には木棺とそれを囲む木槨があり、棺は長さ2m、木槨は長さ3.5m、幅1.5mで排水溝も伴う。多量の朱や硬玉製勾玉、碧玉製管玉、めのう製管玉等の装身具や鉄剣が副葬されていた。さらに、墳丘上には巨大な立石が並び、葬送儀礼専用の土器である特殊器台・特殊壺が供献されている。特殊器台・壺は、この時期以降も型式変化しながら継続し、さらに古墳の周囲をめぐる円筒埴輪へと変化する。また、山陰地方の首長墓からも出土しており、定式化した葬送儀礼の成立を示すとともに政治的な集団関係を構築するための手段として首長権力の一部に取り入れられた。

つまり、この時期において、吉備では突然特定有力個人墓である巨大な墳丘墓が出現し、その要素の大半は古墳へと続くものであった。楯築墳丘墓に埋葬された被葬者は、古墳の被葬者となるべく発展していく過程というよりも、両者は極めて類似したものであったと思われる。

楯築墳丘墓と同じ型式の特殊器台は認められないことから、微視的な観点からすると、同時期の墳丘墓は認められないということになる。しかしながら、特殊器台の型式としては次の時期、あるいは段階となる立坂型の墳丘墓が津寺遺跡の北側の丘陵上に築かれている。雲山鳥打墳丘墓群(図129)である(近藤1991)。墳長が20m前後の長方形と円形からなる墳丘墓3基によって構成される。それぞれに埋葬施設が複数あり、木棺が主体であるが木槨も認められる。3基のうち1基には特殊器台・壺が供献されていない。副葬品にしても楯築墳丘墓と比べると少ない。特殊器台以外の土器は、基本的には楯築墳丘墓と同時期である。両墳丘墓の差は時期差ではなく、階層差を反映させている可能性がある。墳丘墓のほかに従来の土壙墓群も甫崎天神山遺跡では認められ、さらに辻山田遺跡(間壁1977)ではこの時期に新たに形成される。また、それらの墓群には特殊器台が伴っている。ただし、辻山田遺跡では小型の特殊器台である。墳丘墓、土壙墓群には供獻土器の有無や種類等の差による複雑な差が生じている。しかし、それらは墳丘の有無や規模に比例しない場合もあり、単純に階層差を反映するというわけではなさそうである。

いずれにせよ、楯築墳丘墓は、規模的には他の墳丘墓と比べて隔絶しており、足守川下流域を中心とした地域の中心的、あるいは盟主的立場の首長であったと考えてよい。

【後IV期】

後IV期でも引き続き隔絶的な規模の墳丘墓が築かれる(図129)。鯉喰神社墳丘墓である(近藤1991・平野ほか2000)。楯築墳丘墓の後継者の墓と考えられる。長さ40m、幅30m前後の長方形の墳形である。楯築墳丘墓のように突出部の存在を指摘する見方もあるが、現況では確認できない。基本的には向木

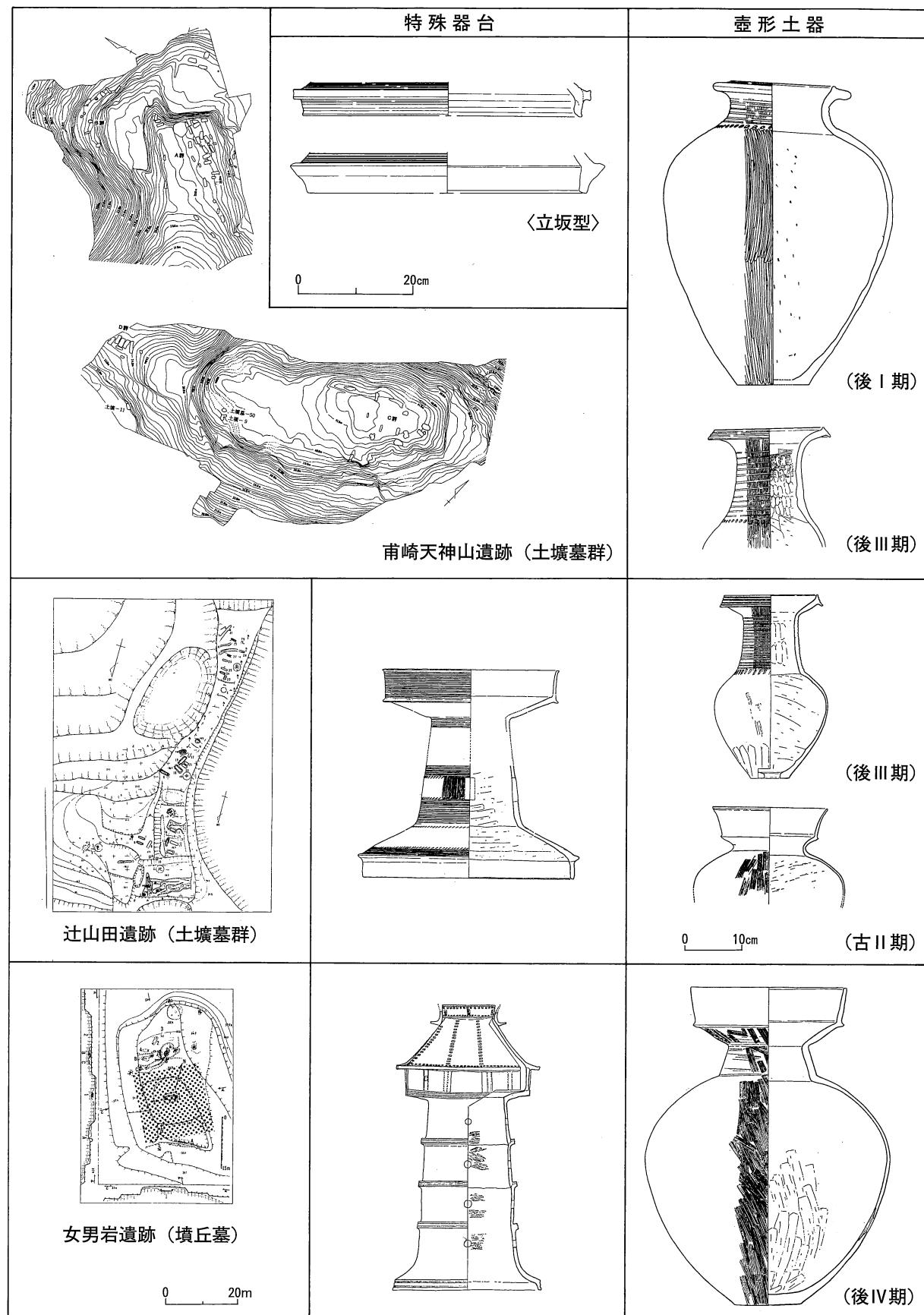


図128 足守川流域の弥生墓

見型の特殊器台を伴うが、立坂型の特殊器台の特徴を有する破片も採集されている(草原1999)。

ほかに同時期の墳丘墓である女男岩墳丘墓(間壁1977)があり、墳丘の残存状態が良好でないが、周囲で検出された溝との関係から、一辺が20m弱の方形もしくは長方形の墳丘墓と推測される。この墳丘墓は特殊壺は伴っているが、向木見型の特殊器台は伴っていない。家形を載せた器台が伴っている。一方、津寺遺跡を挟んでちょうど北側に位置する八幡遺跡では向木見型の特殊器台が採集されている(第Ⅰ章)。八幡遺跡は、天正10(1582)年におこなわれた「高松城水攻め」の際に、陣城として利用されており、その時の地形改変を受けている。しかしながら、現況の地形からは墳丘墓の存在は確認できない。同様に墳丘墓の存在は確認できない庚申山東遺跡でも装飾器台等の該期の供献土器と推測される土器が採集されている。辻山田遺跡や甫崎天神山遺跡のような土墳墓群である可能性が高い。

以上のこととは、引き続き足守川の下流域では、突出した有力個人墓が認められることを示している。しかし一方で、楯築墳丘墓と比べると規模が縮小していることも指摘できる。さらに、女男岩墳丘墓の例では、特殊壺は存在しているが一貫した型式変化をする特殊器台が伴っていない。また、明確な墳丘の認められない無墳丘墓に特殊器台が伴っている場合がある。特殊器台・特殊壺の種類や量が単純に階層差を反映させているものとはいえないようである。足守川下流域の遺跡からは、女男岩墳丘墓の器台のほかに様々な形態の器台、おそらく日常的な使用のための器台ではなく、葬送儀礼に供するための特殊器台の1つと考えられる器台が出土している。それらは、亜流の特殊器台ではなく、該期における複雑な集団関係、おそらくは複雑な首長層間の関係が存在したことを示していると推測される。

【古Ⅰ期】

特殊器台の型式としては後Ⅳ期と同じ向木見型であるが、より文様が退化したものとなっている。向木見型の後出型式である宮山型と併行すると考えられる。向木見型の特殊器台は、文様のみをみると、個体差が著しいようにみえるが、外形を比較すると前段階の立坂型よりも規格性が高い(草原1999)。

この時期の墳丘墓としては、地域の東端の丘陵部上に築かれた矢藤治山古墳のみが確認されている(近藤ほか1995)(図129)。そのため、後Ⅲ期以降に築かれている盟主的首長墓の系譜につながると考えられる。しかし矢藤治山古墳の全長は36.5mであり、鯉喰神社墳丘墓と比べて規模は縮小している。楯築墳丘墓以降、同地域の盟主墳は段階的に縮小しているといえる。

ところで、この時期は大和において纏向型前方後円墳(寺澤1984)が存在しており、矢藤治山古墳もその影響のもとに築かれたと考えることが妥当であろう。当地においては前方後円形の墳丘は該期以前には存在していないからである。さらに、古Ⅱ期において副葬が開始する三角縁神獣鏡にさきだってこの時期にも畿内から漢鏡が分配され、副葬された古墳が確認されている(岡村2002)。汎列島的な墓制の出現という意味からも、この期の前方後円形の墳丘を有するものを古墳と呼称する。したがって矢藤治山古墳も古墳に位置づける。

【古Ⅱ期】

特殊器台形埴輪が出現する時期であり、大和の箸墓古墳が築造された時期である。バチ形の前方部を有し、箸墓古墳と相似形の墳丘で、三角縁神獣鏡を副葬する、いわゆる定型化した古墳の出現時期である。この時期以降を古墳時代の開始ととらえる考えが多い。この時期の前方後円墳は矢部大塙古墳(墳長50m)、真城寺裏山古墳(墳長35m)のみである。小型の円墳や方墳は認められるが、前方後円

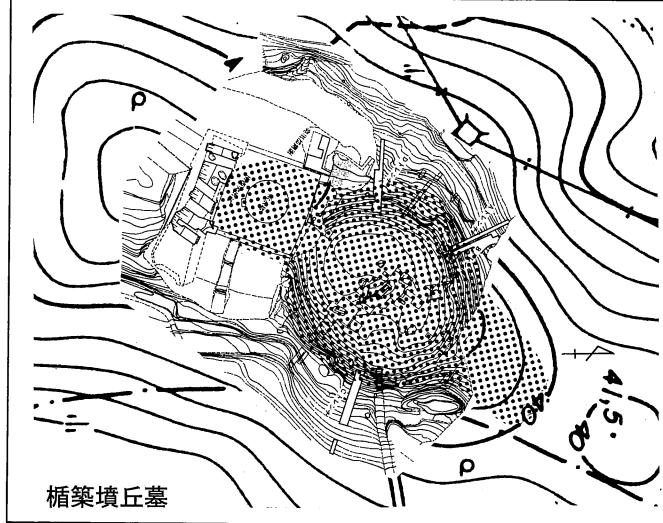
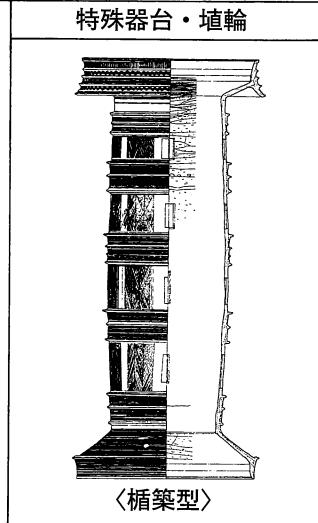
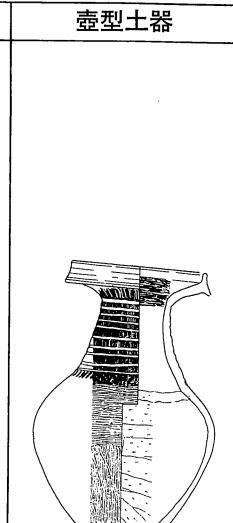
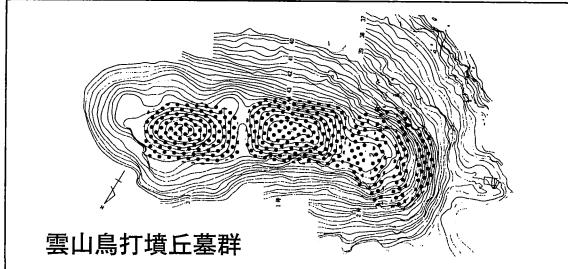
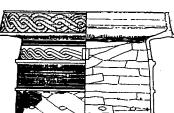
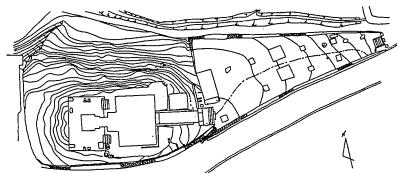
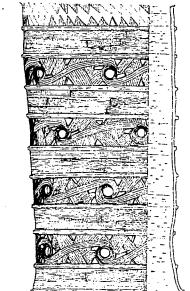
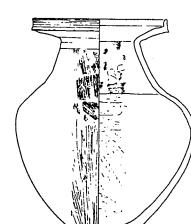
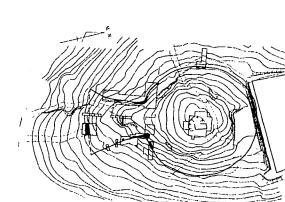
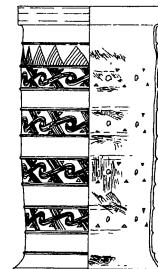
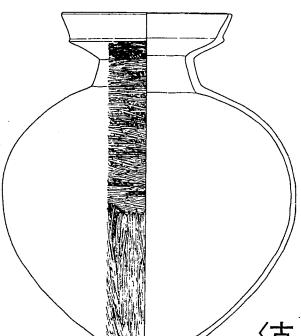
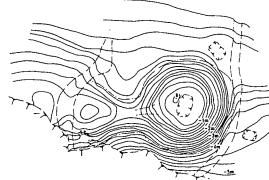
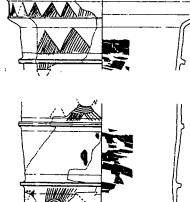
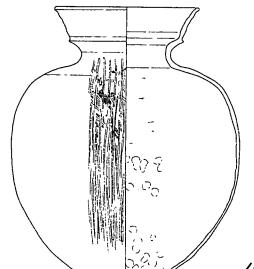
 <p>楯築墳丘墓</p>	 <p>特殊器台・埴輪 〈楯築型〉</p>	 <p>壺型土器</p>
 <p>雲山鳥打墳丘墓群</p>	 <p>〈立坂型〉</p>	 <p>〈後III期〉</p>
 <p>鯉喰神社墳丘墓</p>	 <p>0 20cm 〈向木見型〉</p>	 <p>〈後IV期〉</p>
 <p>矢藤治山墳丘墓・古墳</p>	 <p>〈向木見型〉</p>	 <p>〈古I期〉</p>
 <p>真城寺裏山古墳</p>	 <p>矢部大塙古墳</p>	 <p>〈都月型〉</p>

図129 足守川流域の墳丘墓から古墳への変遷

墳は2墳のみである(図129)。両墳が当地の盟主と考えても、前代の墳丘墓や古墳の規模を比較する限り違和感はない。

しかしながら、箸墓古墳は墳長が278mもあり、外形の企画性や規模からしてもそれまでの古墳や墳丘墓と比べると隔絶している。他の地域でもこの時期の前方後円墳が隔絶的な規模や内容を有していることが多い。吉備において、足守川同様に遺跡の密集度が高い旭川流域では、弥生時代後期の墳丘墓についてはそれほど顕著ではないものの、古II期になると、墳長が80mにも達する前方後円墳が築かれる。足守川流域のこの時期の古墳の規模は、吉備全体からみても小さい印象が強い。

さらに、弥生時代から段階的に変遷する特殊器台が、さらに仮器化した特殊器台形埴輪の出土地点は、足守川流域では極めて少ない。特殊器台形埴輪が大和で成立したことを端的に示しているともいえる。箸墓型の前方後円墳の成立が吉備の影響を受け、あるいは吉備勢力といったものが大和に東遷したという考え方もあるが、弥生時代後期において吉備中枢地であった足守川流域の墳丘墓や古墳の実態はそれほど優勢を示しているということはないのである。しかし、それはそれまでの古墳や墳丘墓がこの期になって著しく縮小したり断絶したりしたというのではなく、むしろ継続的には古墳が営まれている。そうすると、この時期における古墳の築造は汎列島規模での劇的な変化があり、それに対して対応できなかった、あるいは対応しなかったのが足守川流域であった、といったことになるのではなかろうか。

足守川流域が墳長100mを越える大型古墳を築くのは、この時期の直後で、尾上車山古墳である。同規模の中山茶臼山古墳を先行した時期に比定して、初源期の前方後円墳とする考え方もあるが、この古墳から採集されている埴輪については、特殊器台形埴輪というよりも、それとは異なる埴輪であると思われる。また墳丘形態についても、行燈山古墳(伝崇神陵古墳)と1/2相似形であることから、この時期以降と考えられる。尾上車山古墳は、表面が畑造成等で削平されている箇所もあるが、埴輪片は認められず、壺形埴輪と推測される小片が採集されている。かつて埴輪が認められるとされたのは、壺形埴輪破片であろう。さらに、墳形の特徴をみると、前方部が直線的にのびる柄鏡形であり、大和の桜井茶臼山古墳の特徴と共に通する。同時期と考えてよい。

足守川流域では弥生時代後期中葉に顕著な墳丘墓が築かれるものの、その後発展段階的に、規模を拡大することなく、古墳時代にはいっても大型古墳が出現するのは畿内中枢部や吉備の他の有力地域よりも1時期遅れるのである。

(2) 集落の様相

足守川流域の平野について地形的な観点から概略を整理すると、足守川の両岸の東西幅3km前後、南北10kmほどの南北に細長い平野が広がる。面的には一体的であるが、ちょうど中途部分で血吸川、砂川、前川などの中小河川が合流し、平野部を南北に分断するような地形を呈する(図127)。集落遺跡の分布についてもこの部分前後で空白部分があり、足守川流域は、南北に2分されると考えてよい。北部については、平野部の安定度が悪く、平野部における集落遺跡の形成は顕著でない。

一方、南部については、足守川の旧流路が複雑に入り組んではいるものの、安定した平野が広がっていることから、集落遺跡の形成は極めて活発となる。ただし、それは弥生時代後期に入ってからである。後期以前の集落遺跡の動向を概観すると、弥生時代前期から中期中頃までの集落遺跡はそれほど認められない。高松城下層遺跡(高橋2000)、加茂政所遺跡(松本ほか1999)、吉野口遺跡(草原ほか1997)で

は中期中葉の遺構がある程度まとまって検出されている。しかし、旭川流域の南方遺跡群のように、濃密な遺構や遺物があるわけではない。それほど大きくない集落が散在的に分布するといったことが、当地における中期中葉までの様相であったといえる。

中期末になると、状況が一変する。平野周囲の丘陵部及び丘陵裾部で小規模な集落が数多く出現していく。中期末の土器は、3～4時期に細分が可能であり、ある程度の存続幅が想定される。そのため、遺跡の数が多いということともいえるが、それまでの集落遺跡の数と比較しても増加している。津寺(加茂小)遺跡では、中期末の時期に大規模な開発行為があったことが想定される溝の掘削が認められる。津寺(加茂小)遺跡の中期末の時期は、出土した土器の特徴からすると、中期末でも後半に位置づけられる。丘陵部に形成された集落は、その裾部に広がる扇状地状地形の水田開発を基盤としていたと考えてよい。足守川流域の平野部において、最も安全で安定した部分は丘陵裾部の扇状地状の地形である。その部分は、水配りについても、丘陵部からの小河道を用いることから、比較的小規模な労働力での開発が可能である。そのため小規模な集落が多数出現したのであろう。津寺(加茂小)遺跡で検出された大溝は、そういった集落が結集して平野部の開発をおこなった端緒を示していると考えられるのである。後期に入ると急激に集落遺跡の規模や数は増加する。

弥生時代後期から古墳時代前期の集落

当地における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡は、極めて規模が大きい。発掘調査された遺跡数も多く、その様相がかなり明らかとなっている。ここでは、その様相を客観的に把握するために、数量化した比較を目指したい。

まず、広範囲に集落遺跡を調査した例をみると、大規模な集落遺跡は遺構密度も高い傾向がある。この点を手掛かりとする。さらに遺構密度については、報告書の内容を基本データとするが、とくに報告書に掲載される土壙の数などは報告者の恣意的な選択も反映されやすい。また、井戸のように、検出されることの多い集落と、そうでない集落と差があるものもある。そのため、最も報告に粗密の差ができるないと推測される竪穴住居の数を基本データとする。しかし、検出数のみで比較すると、調査面積の差が反映される可能性があり、さらに調査面積中の微高地の比率によっても異なってくる。

そこで、係数(n) = 竪穴住居数 / 調査面積中の微高地面積 × 100 の数値で比較することにする。竪穴住居の密度 = 集落規模という前提で集落の動向を整理してみたい(表1・2)。

後期は後Ⅰ期・後Ⅱ期・後Ⅲ期・後Ⅳ期の4小期に、古墳時代前期は古Ⅰ期・古Ⅱ期・古Ⅲ期の3小期に分ける。

【後Ⅰ期】

中期末(中Ⅲ期)において丘陵部に多数の集落遺跡が出現する一方で、津寺(加茂小)遺跡のように平野部でもある程度認められるようになる。足守川下流域の平野部において調査されている集落遺跡数の半数以上で竪穴住居跡が認められるようになるのがこの時期である。係数で比較すると、0.059の上東遺跡から0.285の加茂B遺跡までと最小と最大までの格差は4倍ほどであるが、ほかは0.1から0.2の間におさまる。全ての集落遺跡の係数の合計は0.891である。

【後Ⅱ期】

調査された集落遺跡の8割以上で竪穴住居が認められるようになる。係数で比較すると、0.043の高塚遺跡から矢部南向遺跡の0.405まであり、その格差は9倍となり、数値的には後Ⅰ期と比べると

2倍近く、格差が広がっていることになる。地域全体の竪穴住居数が増加している一方で、集落間格差が拡大していることが数値上うかがえる。全ての集落遺跡の係数の合計は1.273で、後Ⅰ期と比べると1.4倍となっている。竪穴住居の密度が増加したことの意味をこの地域における人口増の結果と考えたいが、それには各時期の絶対年代の幅が均一であることなどを検証する必要がある。しかし、後Ⅰ期から古Ⅱ期までの時間幅とそれに対応する墳丘墓や古墳の年代観からすると、各時期を均等の時間幅で考えても大きな齟齬はないと考えられる。

【後Ⅲ期】

調査された集落遺跡全てで、竪穴住居が認められるようになる。全ての集落遺跡の係数の合計は2.306で、後Ⅱ期と比べると1.8倍となっており、住居の密度が増加していることがうかがわれる。各集落遺跡ごとに係数を比較すると、0.006の津寺遺跡から0.47の加茂A遺跡があり、その格差は実に78倍となる。後Ⅱ期と比べると急激に格差が広がったことがうかがわれる。しかし、津寺遺跡の係数は極めて低い数値であり、津寺遺跡よりも次順位の下位となる数値は川入・中撫川遺跡の0.057ということになり、格差は8倍程度となる。後Ⅱ期とほとんど変わらない。むしろ、後Ⅱ期において係数0.3を越える高密度の矢部南向遺跡が出現し、それが引き続き高密度を保ちながら、隣接する微高地へも拡大して加茂A・B遺跡が出現している(図129)ことが注目される。隣接する微高地間において高密度の集落が形成されることは、この地域においては初めてのことであり、この期において弥生時代最大級の楯築墳丘墓が築かれていることと連動すると考えることが妥当であろう。後Ⅱ期において形成された足守川下流域の中心的集落が後Ⅲ期になって急激に拡大して集落群となった結果、地域の中心となる首長が出現したと考えられる。そう考えると、集落遺跡の関係も求心的な構造で理解できる。ま

$$\text{係数}(n) = \text{竪穴住居数} / \text{調査面積中の微高地面積} \times 100$$

 係数0.3以上

A: 津寺遺跡		B: 加茂A遺跡		C: 加茂B遺跡		D: 矢部南向遺跡		E: 川入・中撫川遺跡	
竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)
中Ⅱ	3	0.01	中Ⅱ	0	0	中Ⅱ	0	0	中Ⅱ
中Ⅲ	18	0.061	中Ⅲ	0	0	中Ⅲ	4	0.108	中Ⅲ
後Ⅰ	31	0.105	後Ⅰ	0	0	後Ⅰ	5	0.135	後Ⅰ
後Ⅱ	15	0.051	後Ⅱ	1	0.117	後Ⅱ	6	0.214	後Ⅱ
後Ⅲ	2	0.006	後Ⅲ	4	0.47	後Ⅲ	10	0.357	後Ⅲ
後Ⅳ	17	0.058	後Ⅳ	7	0.823	後Ⅳ	14	0.5	後Ⅳ
古Ⅰ	126	0.43	古Ⅰ	9	1.058	古Ⅰ	54	1.928	古Ⅰ
古Ⅱ	90	0.307	古Ⅱ	5	0.588	古Ⅱ	9	0.321	古Ⅱ
計	302		計	26		計	103		計

F: 高塚遺跡		G: 加茂政所遺跡		H: 立田遺跡		I: 上東遺跡		J: 吉野口遺跡	
竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)	竪穴住居	係数(n)
中Ⅱ	0	0	中Ⅰ	0	0	中Ⅱ	1	0.09	中Ⅱ
中Ⅲ	0	0	中Ⅱ	10	0.192	中Ⅲ	0	0	中Ⅲ
後Ⅰ	24	0.173	中Ⅲ	1	0.019	後Ⅰ	0	0	後Ⅰ
後Ⅱ	6	0.043	後Ⅰ	7	0.134	後Ⅱ	1	0.09	後Ⅱ
後Ⅲ	22	0.159	後Ⅱ	3	0.057	後Ⅲ	5	0.453	後Ⅲ
後Ⅳ	29	0.058	後Ⅲ	6	0.115	後Ⅳ	2	0.181	後Ⅳ
古Ⅰ	8	0.058	後Ⅳ	18	0.347	古Ⅰ	0	0	古Ⅰ
古Ⅱ	2	0.014	古Ⅰ	11	0.212	古Ⅱ	0	0	古Ⅱ
計	91		古Ⅱ	6	0.115	計	9		計
			計	62					

表1 足守川下流域における集落遺跡の竪穴住居数

す矢部南向遺跡・加茂A・B遺跡の高密度集落群(A類)があり、その下位に高密度ではあるが単発的に存在する立田遺跡があり(B類)、さらにその下位に係数が0.3に満たない密度の集落遺跡(C類)がある。C類が最も多い。A類については同じ集落が継続するが、B類については各時期において異なる集落があてはまる。

【後IV期】

後III期と同様に集落遺跡の全てで竪穴住居が認められる。全ての集落遺跡の係数の合計は2.312で、後III期とほぼ同じである。各集落遺跡ごとの係数を比較すると、川入・中撫川遺跡の0.014から加茂A遺跡の0.823があり、格差は58倍となる。後III期の最小と最大の係数との比較と比べると後III期よりも格差が縮小したようにもみえるが、全体的には後III期よりも格差自体は開いている。最大密度の加茂A遺跡の係数と後III期での最大係数の加茂A遺跡と比較すると、1.8倍近い差がでてくる。一方、A類、B類、C類と分類した構成は基本的には変わらない。ただ、A類の矢部南向遺跡の密度が低下する傾向があり、その反面で加茂A・B遺跡の密度が増加する。この時期において、A類の中で再編成が進行した可能性がある。

【古I期】

竪穴住居の認められる集落遺跡が6割となり、後IV期と比べると減少する。しかしながら、全体の係数は2.983となり後IV期と比べると増加する。弥生時代後期から古墳時代前期前半において、この古I期の密度が最も高い。それは、A類の加茂A・B遺跡の密度が高くなったことに起因する。矢部南向遺跡の密度は加茂A・B遺跡と比べると低く、後IV期以来A類の中で格差が生じてきた。その一

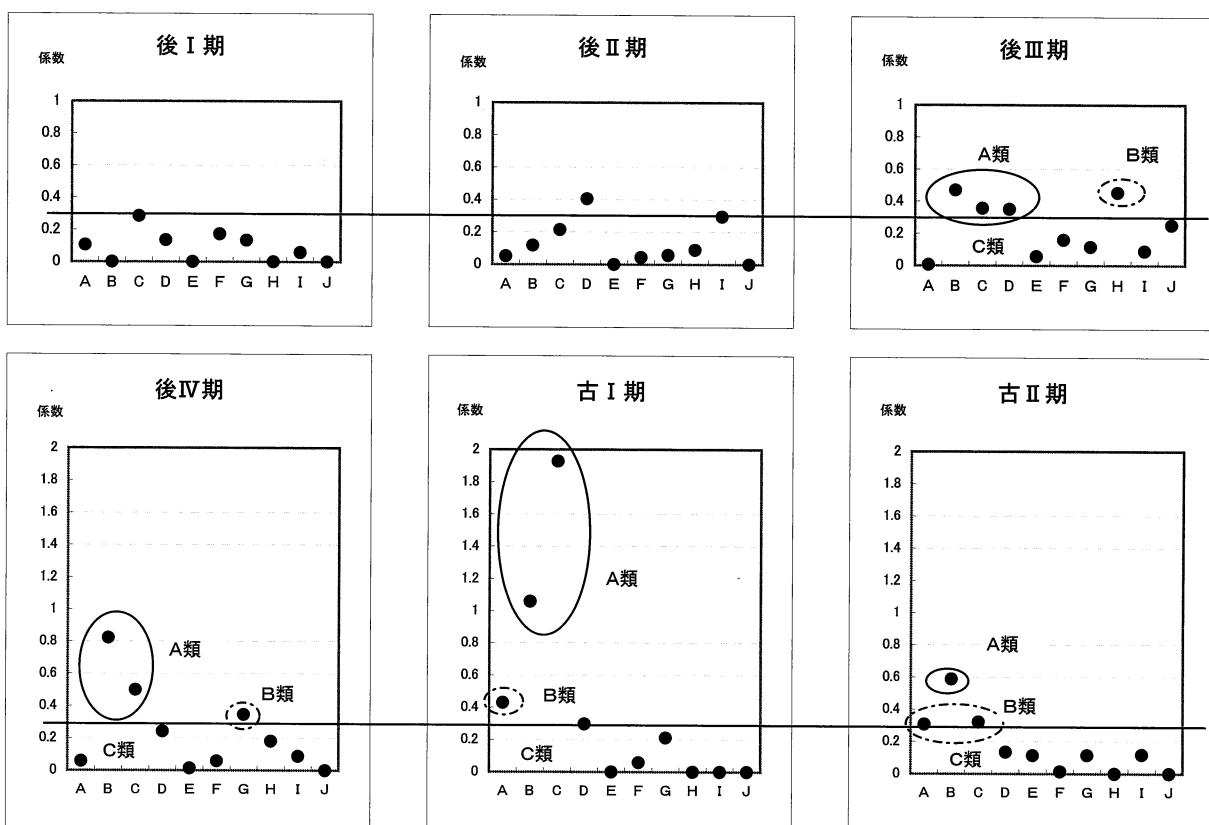


表2 竪穴住居の密度時期別推移

方で、B類は存在する。この時期は津寺遺跡である。A類が固定的であるのとは対照的で、B類は時期によって入れ替わる。

【古II期】

古II期になると、全体の密度が1.712と極端に低下する。集落が一斉に未調査部分に移動したか、もしくは地域全体の密度が低下したことを示している。おそらく後者と考えられる。A類の密度も低下する。A類の加茂B遺跡とB類の津寺遺跡の差はほとんどなくなる。全体的な構成としては、後II期に近い感じを受けるが、数値の分布をみると、係数0.6の加茂A遺跡を頂点に、係数0.3前後の津寺遺跡、加茂B遺跡、その下位には係数0.1前後の集落といった極めて整然とした階層構成をなしているようにもみえる。頂点となる集落は後期から一貫してはいるものの、その下部構成まで整然とした配列をなすようになったのは、この時期になってからである。ピラミッド的な階層構造は、後II期に萌芽があり、後III期において頂点となる集落が確定し、古II期で下部単位となる集落の規模が均一化することによって完成したといえる。

(3) 墓と集落からみた地域構造

弥生時代後期から古墳時代前期前半における足守川下流域における墓と集落の動向を整理してみた。墓については、後III期において突然ピークを迎える。楯築墳丘墓の出現である。集落遺跡では、隣接する複数の微高地上に密度の高い集落遺跡が成立する。矢部南向遺跡、加茂A・B遺跡である。後II期においても矢部南向遺跡は密度が高く、同遺跡が核となって後III期の様相となったのであろう。

後III期以降、集落遺跡は地域の核となる集落遺跡が段階的に拡大し、さらに求心性を強めるが、特定個人墓については楯築墳丘墓以降縮小する。この乖離現象を説明することは現況では難しい。後VI期以降の未知の大規模墳丘墓や古墳が存在している可能性が低いと思われるからである。

とくに古I期の集落遺跡のピークを矢藤治山古墳だけでは理解できない。この時期において、奈良盆地東南部では纏向形前方後円墳が築かれていくことと関連させてみるのも1つの考え方ではあると思われる。しかしながら、古墳時代前・中期において、『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、本貫地以外の場所に墓地を営むことは、考古学的な手法で見る限り検証されているわけではない。むしろ本貫地と墓地を分離する考え方には、そういった文献史料に引っ張られる理解であるように思われる。古墳そのものと地域性の関係を見る限り、地域の首長は地域に墓を築いている、と考えられることの方が圧倒的に多い。

そうすると、足守川流域において後II期から後III期にかけて特定個人墓が突出することが必要な状況が生じたが、その後収束し、そのため序々に個人墓の突出は押さえられたのではないかと考えることが妥当のように思われる。津寺遺跡をみると、後III期にほとんど0に近い密度となるが、後IV期から古I期にかけて密度が急速に増加する。これは、地域の核となる矢部南向遺跡や加茂A・B遺跡へ求心的な動きをしたもの、その後もとの集落に回帰し、さらにその集落が発展していることを意味している。一方、核となる集落の密度も増している。そうすると、地域の核となる集落内部における特定個人(首長)とその周辺の関係が相対的な隔離が少なくなったものになっていたのではないかと推測されてくるのである。特定個人(首長)への求心力が薄れてきたことを示しているように思われる。そのため、後II期において、箸墓古墳の出現を契機として、各地で大規模な前方後円墳が築かれ、吉備においても、それまで墳丘墓の築造が活発ではなかった吉井川流域や旭川流域に大規模な前方後円

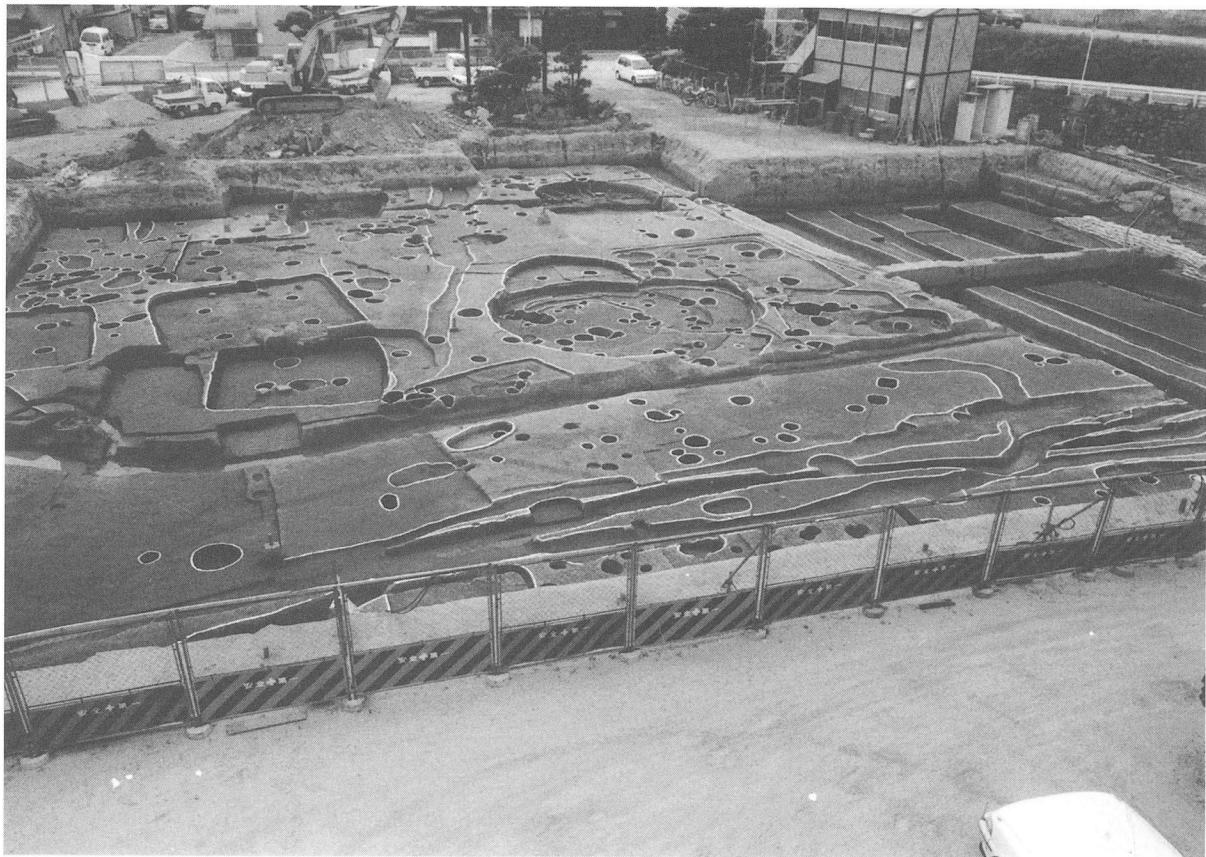
墳が築かれるにも関わらず、足守川下流域ではそれまでの墳丘墓や古墳とほとんど大差のない規模の古墳しか築いていないのではなかろうか。ただし、集落遺跡の配列や係数を見る限り、後Ⅲ期以降、足守川下流域の集落は求心的な結合をしており、そのため一歩遅れることにはなったが、全長が135m前後にもなる大型前期古墳である尾上車山古墳が築かれるのである。尾上車山古墳は、桜井茶臼山古墳と相似形墳である。その後、続いて墳長が120m前後で行燈山古墳(伝崇神陵古墳)と相似形である中山茶臼山古墳が築かれる。大型古墳が継起的に築かれるのは、求心的な集団関係が後Ⅲ期以来できあがっていたことに起因すると考えてよいであろう。しかしながら、求心的な集落結合とそれに反比例する形で特定個人(首長)の埋没する状況が、どのように社会的関係を反映したかについては、より多角的な視点からの分析をおこなって解析していく必要がある。方法論も含めて今後の課題としている。

引用文献

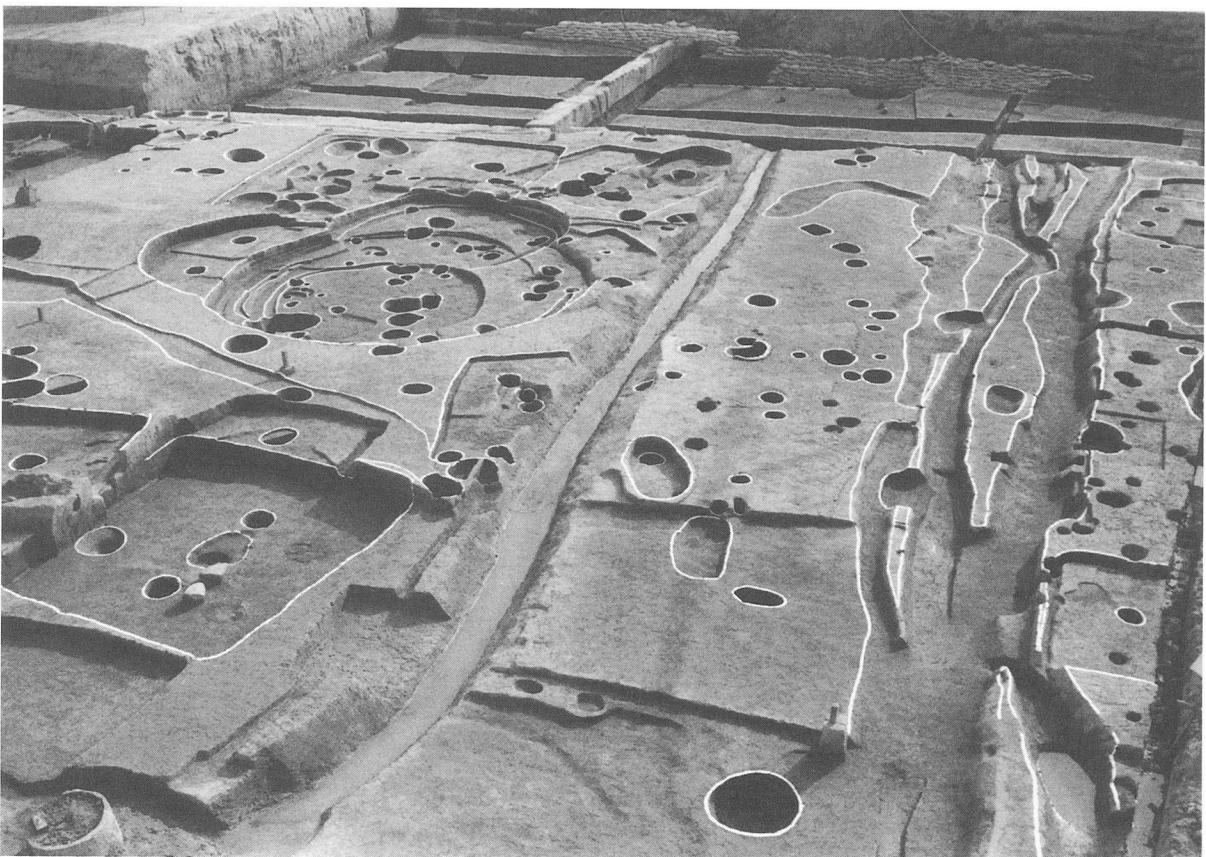
- 宇垣匡雅ほか 1994「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89
- 江見正己ほか 1995「足守川加茂A・足守川加茂B・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- 江見正己ほか 2000「高塚遺跡・三手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- 岡田 博ほか 2004「川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182
- 岡村秀典 2002「考古学からみた漢と倭」『日本の時代史1倭国誕生』吉川弘文館
- 草原孝典 1992『百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告書』岡山市教育委員会
- 草原孝典 1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会
- 草原孝典・河田健司 1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- 草原孝典 2006『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会
- 小林青樹 2000「中四国における初期弥生墓制の受容」『古代吉備』第22集
- 小林利晴ほか 2001「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158
- 近藤義郎 1991「第四章弥生墳丘墓の成立と展開」『岡山県史第二巻原始・古代I』
- 近藤義郎 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 近藤義郎ほか 1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 高橋伸二 2000『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 高畠知功ほか 2001「下庄遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』
- 椿 真二ほか 1987「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87
- 寺澤 薫 1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『樋原考古学研究所論集』六 吉川弘文館
- 二宮治夫ほか 1985「百間川沢田2・百間川長谷2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59
- 馬場昌一 2006「堂免遺跡」『邑久町史考古編』瀬戸内市
- 平野泰司・岸本道昭 2000「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帶石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集
- 正岡睦夫ほか 1974「川入遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- 間壁忠彦・間壁葭子 1977『倉敷考古館研究集報』第10号
- 松本和雄ほか 1999「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- 柳瀬昭彦ほか 1977「川入遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16

図版

図版1



掘り上がり（北から）

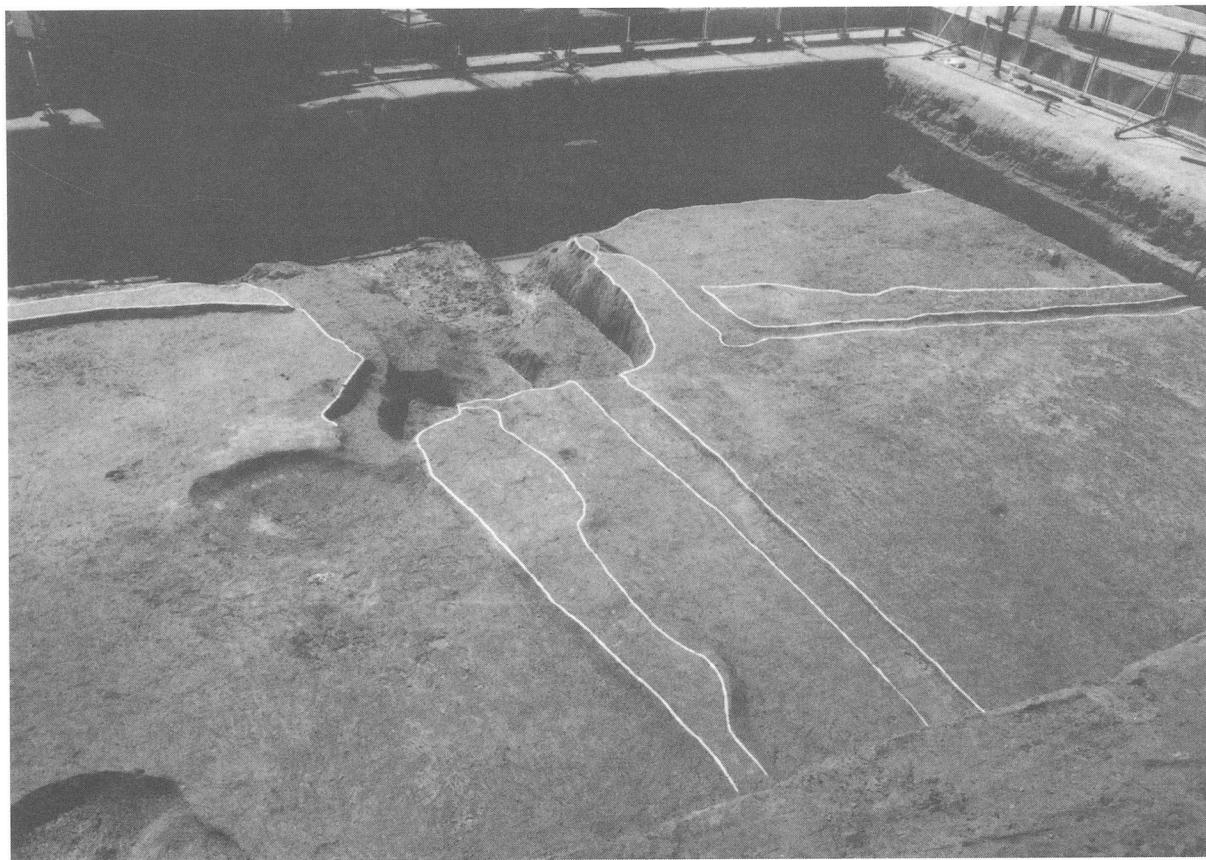


掘り上がり（東から）

図版2

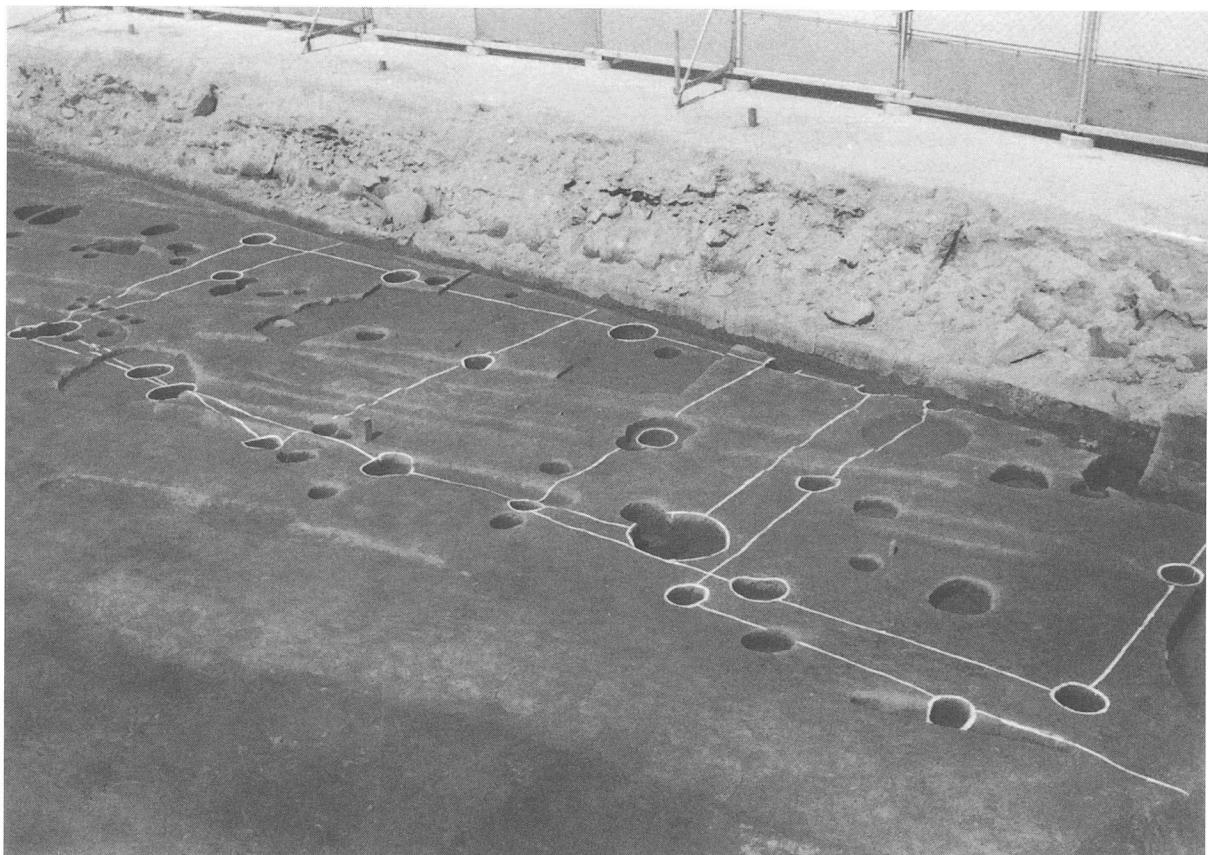


北壁断面



14～15世紀 水田畦畔

図版3



12～13世紀　掘立柱建物（北群）

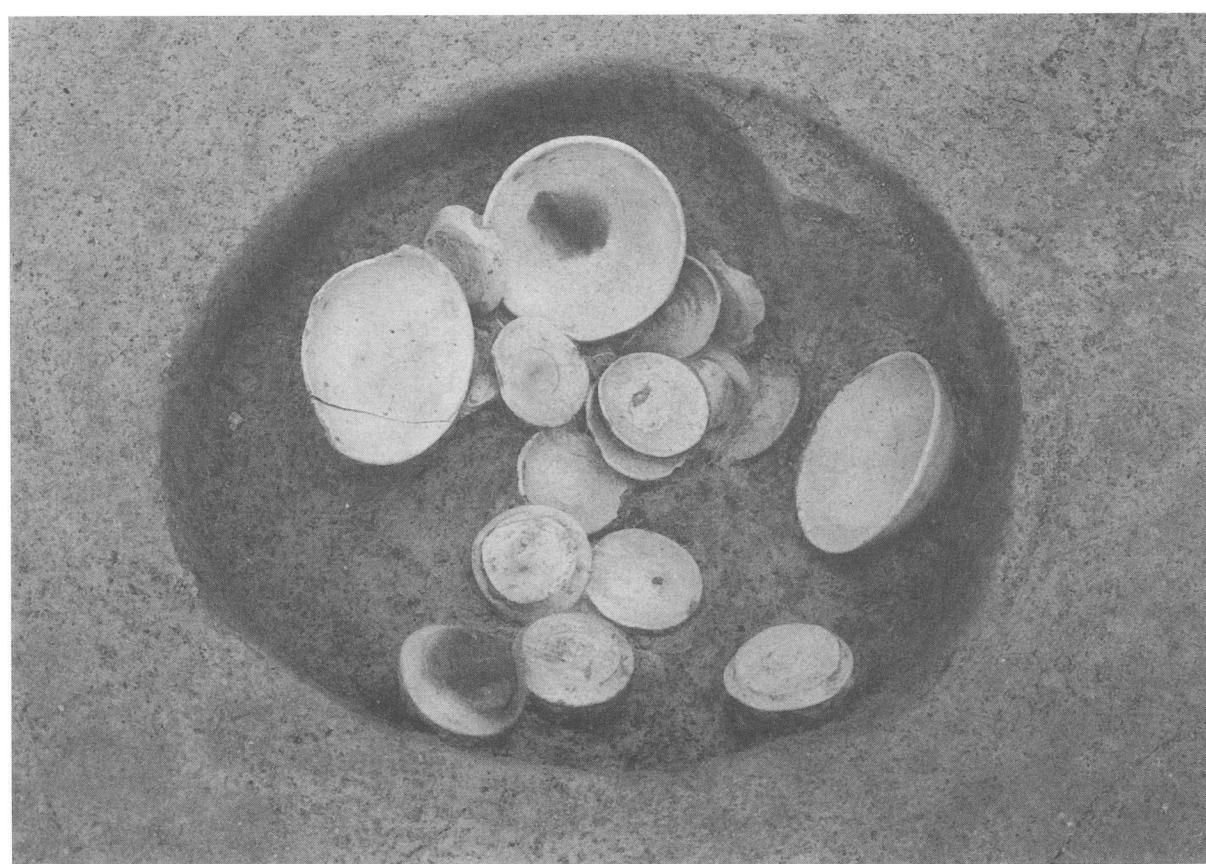


12～13世紀　掘立柱建物（南群）

図版4



P163 遺物出土状況



P116 遺物出土状況

図版5



P195 遺物出土状況



P237 人骨出土状況